
ファンタシースター【それゆけ機械人形】

雑炊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタシースター【それゆけ機械人形】

【Nコード】

N0374R

【作者名】

雑炊

【あらすじ】

その限りなく人間に近い『ココロ』を持つて目覚めた『ロボット』は、たった一人で見知らぬセカイに放り出される。そこでロボットが出会う様々な『ココロ』を持った人たちと、巻き込まれたそのセカイの命運を左右する大騒動。このお話はそんな人や出来事の中で自分なりに生きて(?)いく一体の『機械：人』のお話である。

プロローグ

何が起きている

最初に頭の中で浮かんだのはそんな言葉だった。

顔を上げてみれば目に映っているのは、薄暗く、左右に大量の水が流れている通路のような光景だった。

下を見れば何かの溶液のような緑色の液体と、ガラスのような破片。後ろを見ると、このガラスの破片の元であろう一人一人は入れるような大きなカプセルのような物体が床に一部分が割れた状態で転がっていた。

「……………？」「一人一人は入れるような大きさ」？

此处に来て『ソレ』は、はっと自分の体を見下ろした。

基本的に青をベースにしたボディスーツ……………というよりも何かの『ロボットの装甲』といったほうがしっくりくる様な体に、どころどろに赤をちりばめた、鎧武者を模ったかのようなアーマー。

「……………少なくともコレだけ見れば何かの特殊スーツを着込んだ『人間』に見えなくもない。

しかし次の瞬間、カプセルの残骸に移りこんだ自分の顔を見たとき、『ソレ』は自分がどんなものかを、おぼろげながらに悟ることになった。

……………！！

移りこんだ自分の顔　　ソレは、龍を模して作られたかのようなヘルメットを被り、口元には銀色のマスク。眼もまるで何かのアニメに出てくるヒーローロボのように、緑色に二つ光っていた。

・・・いや、二つ光っていた、という表現は少し間違っていた。
厳密に言くと緑色に光っていたのは右目だけで、残った左目にはカメラのレンズのような物が周りの光を反射して緑色に光っているように見えていただけだった。

・カメラのレンズ？

おかしい、と『ソレ』は思った。普通『人間であれば』そんなものは本来眼球があるべき場所にそんなものは無い筈だ、と。

・・・義眼か？・・・

もしそうだとしても普通此処までメカメカしい物にはならないだろう。不意に其処に手を突っ込んで弄って見たが、別段痛くもなんともなく、むしろ其処にあるのが当然といわんばかりにしっかりと自分の頭と一体化していた。

ふと、自分の頭に覆い被さっていたヘルメットに目がいった。

そういえばさつきからずっと被っているが、別に頭が痒くなったりしてこないのが『ソレ』は少し気になった。取れないのかと色々と触っていると、不意にスイッチのようなものが裏側にあった。

押してみると案の定【プシュツ】という音と共に、ヘルメットがずれた。

やれやれとメットを外して、今まで鏡代わりに使っていたカプセルの残骸に目を移す。

・・・その直後に『ソレ』はヘルメットを外したことを後悔した。

.....?

残骸に移りこんだ自分の頭。

.....?

其処には、

.....!

頑丈な鉄の頭蓋の隙間から見える、

.....!!

透明なカプセルに包まれた人間の脳と、その周りにまとわり付くコードが見えた。

!!!!!!!!!!!!!!

そして『ソレ』は文字どおりに『音にすらならない叫び』をあげた。

プロローグ（後書き）

はじめまして雑炊と申します。

今回初めて小説を作って投稿させていただきましたが、まずはことなくだらない小説に目を通していただきありがとうございます。

普段私は高専に通っているのですが、その高専が春休みに入ったので投稿させて頂きました。

で、今思うに、今年で4年生にもなってそろそろ進路でドタバタしてくる時に、なにやっとなのじゃコラと。こんな書いてる暇あったら来年度のロボットの設計図や回路を作れと、自分を叱り付けてみたり、しましたが、やはり素人とはいえ物書きとして、少しでも面白いと思って頂けたならこれ以上の幸せはございません！春休みに入っても色々と回路製作や設計図を3DCADで書いていたりとかで忙しかったり、4年生になってからは、レポートや進路でどたばたしてくるので、投稿のペースも1月に一度とかになるかもしれません、どうぞよろしく願います。

出会いと始まりと【此処はどこ?】（前書き）

とりあえず今回から本編に入っていきます。

主人公の思考が妙に口ポツトっぽくないのはスルーしてください。

後此処はこうじゃないだろ、ということもありますでしょうが今回だけはスルーしてください。感想に書いてくれるのでしたら次回

から出来る範囲で直していいこうと思います。

それでは第一話をどうぞ

出会いと始まりと【此処はどこ?】

あの後散々現実逃避をしてやっとこさ冷静になってきた『ソレ』は、此処でやっと自分がさつきから声を出せていないことに気付いた。そういえばあれだけ叫んだはずなのに少しも何の音も響いてないのはおかしい。

自分をロボットと考えて、耳に値する部分が壊れているのかも思ったが、自分の声が聞こえないだけで、流れている水の音や自分の足音などは聞こえている為、どうやら本当に声が出ないだけらしい。

とりあえず此処まで分かった事をいったん整理すると、

- ・今の自分は人間の脳みそが入ったロボット（脊髄まで入っているかは不明）
- ・声は何故か出ない（声帯に値する部分が壊れているか、発声する為の機能が初めから入っていない）
- ・今自分が一体どこにいるのか分からない（最重要）
- ・自分の名前が分からない（最重要その2）

となる。

はじめの二つはどつとでもなるが、問題はあとの二つだ。

ともかくこんな薄暗くて今にも何か出てきそうな感じがする場所からは、さっさと離れたいと思っていた『ソレ』は、周囲を散策しながらそのことを考えようと決めて歩き出した。

・・・しばらく歩くと目の前に緑色の光を放つ扉のような物体が見えてきた。

さらにその奥からは少なくとも10人以上の人間が雑談していたり、何らかの作業をしているような音と気配が感じられた。

………どうする？

『ソレ』は少し考えることにした。

少なくとも今の自分はロボットだ。だとすると、もしこの中に入っていけば危険な存在として攻撃される恐れがある。もしくは興味をもたれて、なんかの実験サンプルにされるか見世物か……何れにせよこの奥にいる連中と顔を合わせて情報を得なければ、下手をすればずっとこんなダンジョンの中をウロウロしかねない。結局迷いに迷って『ソレ』が導き出した結果は、

シユイイイイン……

とりあえず手近な棒を引っつかんで、身構えながら中に入る事だった。

ちなみに棒とは近くの壁にあったパイプの様なものを引っpegがして、それを真っ直ぐにしたものだ。

とりあえず中に入ってその光景を見た瞬間に『ソレ』の中にあつた懸念は全て霧散した。

何故か？

それは入った扉の中にいた人々が原因だった。

扉を入つてまず『ソレ』の目に飛び込んできたのは開けた場所と何人かの人影だった。

最初に感じた通りにざっと10人以上はいるだろうか。まあここまででは『ソレ』も許容できた。

問題はその中央、何人かで固まっている連中を目にしたときに起こ

った。

・・・あれ？人間ってあんなに耳が長かったっけ？

そう、固まって談笑している人たちの中に、2、3人ほど耳の長い、まるで物語の中に出てくるエルフみたいなのが見えたのだ。そして『ソレ』の驚愕はまだ終わらない。

・・・あれ？人間って鼻があんな動物みたいな形してたっけ？耳って獣耳だっけ？

その他の所にもちらちら見える、鼻が犬や猫のような形の人や、耳が俗に言う『ケモノ耳』な人が見え、極めつけは

「……………これだけの人数が集まってるってことは、大手のスポンサーがついてるようだな。」

「久々に儲けられそうだな。」

・・・ッ！！

自分と同じようなもろにロボットにしか見えない男(?)に話しかけられたことだった。

?????SLIDE

いつもの通りに依頼を受け、海底レリクスに足を運んだ俺は、指定された集合場所に到着したときにしめた、と心の中でつぶやいた。

なかなか大勢の傭兵が集まっていることや、少し見渡すと最近話題になっていた民間軍事会社『リトルウイング』のマークが見えたということは今回の依頼は、それなりに大手のスポンサーがついているという事だろう。

久々に儲けられそうだな。

そう思い、ふと先ほど自分が入ってきた扉に目をやると、ちょうど誰かが入ってきたところだった。

いつもならば、そのままスルーするところだったが、中に入ってきたやつを見た瞬間、思考が停止した。何故ならばそいつは、

全身水に濡れてびしょびしょの状態で、

手にはパイプを持ち、

入ってきた瞬間に身構えたからだ。

暫くすると構えを解いてどこか呆然としていたようだったが。

面白いやつだ

だからだろうか？脚は自然とそいつの近くによって行き、

「……これだけの人数が集まってるってことは、大手のスポンサーがついてるようだな。

久々に儲けられそうだ。」

こう話しかけていた。

それに対してそいつが行ったことは

「!!!!!!!!!!!!!!」

とんでもなく驚いたように変な体制になり、そのまま俺が話しかけてきたのは逆方向に大体1 2Mくらいジャンプすることだった。

??? SIDE OUT

『ソレ』は男(?)に話しかけられた瞬間に、所謂『シェー』のような体制で後ろに跳んでいた。
と同時にその行動を後悔していた。

おそらく今ので少しばかり警戒されてしまったことだろう。そうすると折角情報源が向こうから来てくれたのに、このままでは欲しい情報を上手く聞き出せなくなってしまう
と思っていたのだが、

「・・・話しかけていきなりそんな体制で後ろに跳ばれたのは初めてだな・・・まあいい。

・・・ふむ、お前も傭兵か？」

そういう風にまた話しかけて来てくれたのだった。

・・・な、なんていい人(?)なんだ!!

そう思い、返そうと思っていたのだが・・・

・・・!?

そう、『ソレ』は声が出ないのだ。声が出ない以上喋れないのであって・・・

「?どうした？」

こう返されるのである。

コレは不味いと考えた『ソレ』は、何とかジエスチャーで声が出ないことを伝えようと、あれこれ動いてみた。最初は相手も突如として此方が変な動きを شدしたのに対して、???という感じだったが、やがて此方が言いたいことがわかったようで、

「……………もしかして喋られないのか？」

どうやら伝わってくれたらしい。この男『バスク』から名前を覚えてもらった後「大変だな」と、労りの声を掛けてもらったくらいで、

「帰ろ、帰ろうつて！」

そんな声が聞こえた。

どうやら声の主は、14、5歳程度の金髪でピンクの服を着た少女の物の様だった。

その少女は必死に帰りたいことを自分の保護者である、ピンクのコートに顔に大量のひげを蓄えた男に話しているようだったが、結局相手にされず「お前の分の仕事をもらってくるからここで待ってろ」と言われてしまった。

「……………なんだ、あの子供は？腕ききの傭兵のようにはとても見えな
いが……………」

隣の男が何か言っているが、『ソレ』はそんな男の声など聞こえて

いないかのように、その少女を見ていた。

・・・？なんだ？何であの子が気になるんだ？

自分はロリコンではないはずだが？と、そんなふざけた事を考えているときだった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

傭兵「っ！なんだ！？地震か？！」

傭兵「オイ見ろ！扉が！」

そんな声に振り返ってみると、先ほど自分が入ってきた扉がどんどんと閉まってきている光景が目飛び込んできた。

「ちいつ！なんとということだ！おい、逃げるぞ！閉じ込められてはかなわん！！」

バスクの言う通りだ、と『ソレ』は考え、いざ脱出と動こうとしたところに

ッ！何であの子あんな所で蹲ってるんだ！？

さっきの少女が部屋の真ん中で蹲っているのが見えた。見えてしまった。

『ソレ』は頭で考えるよりも先に、少女を救出しようと体を動かしてしまっていた。

後ろからバスクの「おいつ！」という声が聞こえるが、ジエスチャ―で『先に行け』と示した後、すぐにまた顔を少女のほうに戻した。幸いというべきか、寸での所で少女は事態に気付き、すぐに扉のほ

うへ走り始めたが、あれでは間に合わないだろう。
後で文句を言われること覚悟で彼女を抱きかかえてすぐに扉に向かう。

後ちよつと……！

もう少し……！

そして『ソレ』は、

抜けた！

と思つた瞬間に、

ガキイツ！！

！？

自分の頭を扉に挟まれてしまった。

?????SIDE

気が付いたらそいつに、所謂『お姫様抱っこ』で抱えられていた。
突然抱えられたことに關して、不快感はあつたけど、状況が状況だけに脱出できたら文句を言つてやろうと思つた。
だってそいつに抱きかかえられた瞬間に、あれだけ遠くにあつた閉まりかけの扉が一気に近づいてきたのだから。

いける！助かる！

そう思つた。　実際もう扉は目の前だつたし、隙間も一人、無理

をすれば二人は通れそうだった。

だから次の瞬間、

ガキィッ！

ッという音になって、

ポーンと放り出された後地面に落ちてから見た光景は、あまりにもあんまりな光景だった。

だって今まであたしを担ぎ上げて、すごい速さで扉に向かっていたそいつの頭が、ちょうどよく扉と扉の間に挟まって取れなくなっていたのだから。

え、えええ〜？

そう心の中でつぶやいてから、落胆したあたしの目に次に飛び込んできたのは、

ズボッ！

という音を鳴らしてやっと扉から頭を引っ張り出したそいつの目の前で、無情にも扉が完全に閉まっていく光景だった。

????? SIDE OUT

出会いと始まりと【此処はどこ?】(後書き)

とりあえず現在の主人公の見た目を詳しく書いてみようと思います。

腕：ムサガンテ・アーム

胴：グラナダス・トルソCV

脚：ムサガンテ・レッグ

ヘッドタイプ：12

フェイスタイプ：29

目の色：明るい翠(簡単に言うとガムカラーのアイグリーン)

といったところでしょうか。

それでは今回はこの辺で。たぶん次回は今回より短い・・・はず
です

ロボと少女と【名前決め】（前書き）

まさか主人公の名前を決めるだけで1話丸々使うとは自分でも思いませんでした。

とりあえず本編をどうぞ

ロボと少女と【名前決め】

少女「開け！開きなさいよ！！この・・・開けええええ！！！」

目の前のピッチリと閉まってしまった扉に対して、蹴りを入れたり、拳を叩きつけるなどしながら喚く少女を前にして、『ソレ』はこの状況の打開策を考えていた。

・・・目の前の扉をこじ開ける・・・却下、というよりも機構からして自動ドアのうえに、原理は不明だが、頑丈なロック機構を備えていることが伺える・・・この事からおそらく無理矢理にでも押し開けようとすれば、こっちの腕がイカれる。

・・・では、此処で救援を待つか？・・・その方が生存率も高いと思うが・・・これも却下。

何故ならば、あまり確認したくはないが、奥の方から何やら物騒な鳴き声が聞こえてきている・・・そして、先程のバスクや他の連中が、話を聞いていた限り傭兵という職業に就いていたことから、此処で何かと戦おうとしていたと推測できる・・・もしくはそういった職業に就いている人が護衛をしなければならなかったとも考察できるのだが。

・・・とりあえずこれ等の事から察するに、どうやらここは本当にゲームなどに出てくるようなダンジョンの中で、ということは無論その中に生息している『モンスター』もいる、ということになる。

つまり此処にずっといると、運が悪ければそいつらに囲まれてフルボッコ・・・ゲームオーバーとなる。

・・・と、なると取れる行動は1つか。 我ながら安直過ぎるかもしれないが、とりあえず今は・・・

そう考えながら『ソレ』は先程少女を助けるときにそこら辺にブン投げた自作の棒を拾って、少し振ってみた。

とりあえず強度は気になるが武器としてはまあ使える方だろう。

………何か妙に手に馴染むが、気のせいだと思うことにした。

とりあえず武器^棒も手に入ったので、先に進もうとしたところで、少女が『ソレ』の様子に気づいたらしい。

なんだかすごく慌てた様子で此方に向かってきたのを見て、『ソレ』は足を止めて、少女を見た。

少女「ちょ、ちょっと待ってよ何処行こうとしてんの!？」

????「……………」(足踏みをしながら、前方を指差している)

少女「へ…………先に進むの?…………無理、無理無理無理!危ないって!ゼツタイ止めた方が良くってツ!だってここ、未発掘のレリクスなんだよ!?危ないよ!!」

そう言われても此処に居たって、いつ助けが来るのか分からないし、もしモンスターが来ればどうせ戦うしなあ…………と、そんなことを考えつつ声が出ないから応答することも出来ないの、少女を置いて『ソレ』は再び歩き出した。

ガシッ!!

っと棒を持ってないほうの腕を少女が掴んだと思えば、

少女「ま、待ってよ!行く!あたしも一緒に行くからあ!!」

と言ってきた。

これには『ソレ』も少し面食らったが、少し少女を観察してみると、妙に一人にされることを怖がりすぎているような様子が見受けられた。

・・・昔一人にされることに関してトラウマでもあったのか？

そう思案して、ふむ、と『ソレ』は考えた。

そのまま暫くの間、何かを考えていた後、手で『一緒に来い』という風なジェスチャーをした後、踵を返して『ソレ』は再び歩き出した。

少女は一瞬呆然としていたが、そのうちジェスチャーの意味を理解したのか、少し駆け足でその後を追っていった。

歩き始めてから暫くして、少女は、

少女「あ、そういえば名前教えてなかったよね？」

と言ってきた。

『ソレ』が首を少し動かして肯定すると。

少女「あ、じゃあこれから救出されるまでの間一緒になるから、一応教えておくね。」

あたしの名前はエミリア、『エミリア・パーシバル』。

とりあえず少しの間だけけど・・・よろしくね？」

『ソレ』はエミリアの名前を聞いた後、首肯して、今度は自分の名前を言おうとしたが、

「……つてそもそも猫型じゃないか。」
「……………」

「……オイ……なんで君は10万馬力で原子力なロボットや、簡素なレバーとかしか付いてないコントローラで動くピノキオ鼻の青い巨大ロボットや、未来からやってきただみ声の青いたぬく……ゲフンゲフン！元黄色の青い猫型ロボットの名前を知っている！？

此処つてもしかして日本なのか？！ それともたまたま同じのが此方でやっていただけなのか！？」

「ま、マズイ！このままほつといたら、この子俺にとんでもない名前をつけてしまう！著作権的な意味で！」

（この間約0.5秒）

「とりあえずこのままではいろんな意味で不味いことになると考えた『ソレ』は、どうにかしてソツチ側の思考から彼女を戻す為、とにかく手当たり次第に文字が書いてあるものを探すことにした。」

そのとき、忘れていたがさつきから右手に棒を持っていることを思い出した『ソレ』はふとそれに目を移した。

棒はもともと、このダンジョンに設置されていた物だったので、何か書いてあるかと思っただうえでの行動だったのだが……

「……………？何だ？この変な記号みたいなの？」

確かに棒には何か書いてはあったものの書いてあったものは、まるで1本の棒を無理矢理に捻じ曲げて文字のようにしたようなものだった。

「とりあえず幾つか書いてあったので、エミリアにこれを見てもらい、もし文字であるのであればそれを組み合わせる名前を作ろうと考えた『ソレ』は、棒を字の書いてある部分がエミリアに見えるように

差し出してみた。

「?なに?どうしたの?」

「.....」(ジエスチャー中)

「え?もしかして読んで欲しいの?」

「.....(コクリ)」(首肯した後、手でそれらを入れ替える動作をする)

「.....えつとこれを入れ替えて、それを名前にしたいの?」

「!!!!(コクコク)」(物凄い勢いで首を縦に振る)

「えー!!そんなんだめだって!もつとかつかいいのにしようよ!

ソルゲインとかアトアインナハトとか、Ex Sとか!」

だからそれがダメなんだって!!著作権的にも、作者の心臓的にも!!--つーか何!?もしかしてさつきから出してる俺の名前の候補って、もしかして鉄位から体の色で決めてないか?!

そんな『ソレ』のメタすぎる心の叫びも、喋れない為彼女には通じず、その後も彼女と『ソレ』の言葉(主にエミリアだけ)とジエスチャー(主に『ソレ』だけ)を交えた討論(?)は少しだけ続き、結局組み合わせはエミリアが考えるということまで話が付いた。

「ハア.....ハア.....んじゃこれで決定ね?.....特に文句無いわね?.....」

「.....(コクリ)」(物凄く疲れた様子で首を縦に振る)

「んじゃ言っわよ.....あんたの名前はNT-X.....ネティクスこれでもいいわね?」

「.....(コクリ)」

「そう.....それじゃこれからよろしくねNT-X」

「……………」

というわけで『ソレ』……いや『彼』NT-Xは名前を手に入れることとなった。

一見完全に見えるけど、それでもどこか不完全な『ココロ』を持つ

機械人形はこうして自分の存在を表し、其れを他者に知らしめるもの……『名前』を手に入れた。

……しかし未だ機械人形は自らの持つ『異常なチカラ』に気づかず。

ロボと少女と【名前決め】（後書き）

如何でしたでしょうか？

今回は初めてルビ振りと、執筆中小説から投稿するというシステムを使ったので、もしかしたら少し変な部分があるかもしれませんが、もしありましたら次回から直していきたいと思います。

あと、初めて少しネタを入れてみました。．．．たぶん次回も入ります。

どうか生暖かい目で見てくださいと個人的にはうれしいです。

初戦闘と旧文明の自律起動兵器と「最終決戦用人型戦略兵器。r不完全なココロ

いつの間にかお気に入りしてくださっている人が増えていて、大感激！！！！

あとP S p o 2 I発売日に買いました。

ワイナール面白すぎるw w w w w

初戦闘と旧文明の自律起動兵器と「最終決戦用人型戦略兵器。r不完全なココロ

「ああやっぱり原生生物がわんさかいる。見逃してはくれないよね……つてちよつと！」

その後、エミリアと暫く歩いたNT-Xは当初予感していた通り、このダンジョン内に生息しているであろうと思われるモンスター……此方と言う原生生物の一団と遭遇していた。

……とは言ってもその数は2、4匹と少なく、二人でも何とかなりそうだ。

そう考えたエミリアだったが、自分は武器は持つても戦闘経験はほとんどないことを思い出し、思わず弱音を口からこぼしてしまう。

しかしNT-Xはそんなエミリアの弱音など気にしないかのように、ズンズンと原生生物の一団の内の一匹……緑色の皮膚に鮫のような顔と蠍のような鎌を持つエビルシャークに近づいていった。エミリアがそのことに気づいたときにはすでに遅く、NT-Xはもう既にエビルシャークの眼前に居り、そのエビルシャークも、周りにいる自分の仲間達と共に、突然自分達の縄張りに入ってきた侵入者に対して敵意と警戒心をむき出しにしていた。

そしてこれはまずいと思ったエミリアが少し声を荒げて、NT-X
を注意しようとした瞬間

「戦闘開始。対象殲滅プログラム起動。以降思考回路ヲ殲滅用ニ切
リ替エマス」

と、いう声が聞こえたような気がしたかと思うと、

ドグシャアッ！

という音が鳴ったかと思えば、

エビルシャークの「グギャゲッ!?」という声が鳴り、

おそらく殴られたのであろうといつは、

凄量の血と体液を、

『棒状の何か』で殴られたかのような痕が付いた頭から噴出して、

地面に倒れていった。

エミリアSIDE

.....
.....え？

い、今何が起きたの？

確か少しあたしが目を離してるうちに、あいつがいつの間にか原生
生物のうちの一体の目の前まで歩いて行っちゃって、それから.....

「ってあれ？」

いつの間にかあいつはそこには居なかった。

何処に行ったんだろうと少しあたしが周りを見渡すと、あいつはす
ぐに見つかった。

見つかったけど.....

「え？」

見つけたそいつは、

「え、あ.....」

逃げ惑う原生生物たちを、

「あ.....あ.....」

エミリアは気が付いたら喚き散らしながら、NT-Xに抱きついていた。

原生生物が出てくるようなところで行う依頼では、最低でも一匹以上は原生生物を討伐することになるので、別に原生生物を（言い方は悪いが）殺すこと自体は、別段変わったことはない。

実際、エミリア自身も、以前に他人が原生生物を討伐するところを見たことがあるので、彼が原生生物を殺すこと自体には、あまり嫌悪感等は抱いていない。

しかしそれを差し置いても、彼の戦い方は恐過ぎた。残虐だったともいえる。

普通のヒトであれば、怯えて隠れていたり、敵意を喪失して逃げ出した奴まで全力で執拗に追いかけて、見つけ出してまで、討伐しようとはしない。（彼女が見たこと無いだけかもしれないが）

それにこのまま彼を放って置いたら、いつの間にか得体の知れない何かに変わってしまいそうだった。

彼女はそれが何故かすごく怖く思えた。

とりあえずそうやったら彼が止まると思ったからやったのだが、後から冷静になって考えてみれば、我ながら中々恥ずかしいことをやったものだと思う。

しかし、

「・・・・・・・・・・」

結果的に、

キュウウウウウウウウウン……………

彼は、^{NT-X}

プシュウウウ……………

それで止まった。

「命令コード確認。対象殲滅プログラム停止。通常運用モードへ移行シマス。」

……………ん？

『NT-X』の

……………」

『ココロ』が戻ったのは、

……………」

それから

「……………(ナデナデ) (エミリアの頭をなでている)

「……………!!!」

すぐのことだった。

……………今回のことを含めた騒動（後に彼の中ではフハーン騒動と名づけられた）の全てが最終してから、このときエミリアの頭をなでた後、上目使いにしてこちらを見てきた彼女を見て、彼が「もつと堪能しときゃよかった」とつぶやいたかどうかは定かではない。

それはともかく、あの後、エミリアはNT・Xに「今度から戦うときは緊急事態以外もつと加減して戦いなさい！あんたの戦い方怖すぎるから！」と、涙目で怒鳴ってから、少ししたら落ち着いてきたのか、しよつちゅういろいろなことを話しかけてきた。

例えば、自分の保護者 おっさんに対しての愚痴のようなものから、自分で考えたこのダンジョンのような構造物

レリクスに対しての考察などに至るまで、様々な話題を吹っかけてきた。

実はこの時点でNT・Xはエミリアの持つ知識と、その量に少し驚いていた。

最初こそその『おっさん』に対しての不満や愚痴を垂れ流すだけだったのに対し、そこからだんだんとレリクスに対する見解やら詳細やら考察やらを、訥々と口にし出したときにはびっくりして周りに原生生物が居たにもかかわらず、思わず拍手してしまったほどだ。しかし彼女曰く「これくらいは常識」だそうだ。

「……………なんだろう。遠まわしに馬鹿って言われてるような気分だ。」

勿論、道中至る所で原生生物が出てきた。

が、大抵のやつはNT-Xが手を出すより先にエミリアが、ロッドという武器から放つテクニク（要するに一見魔法のような技術）によって撃退するか、NT-Xが（エミリアに致命されて）さっきよりも威力を弱めにして、棒で引っぱたいてふつとばすなどして退場していった。

他にもポールとポールを中継したレーザーによるトラップとか、周囲の原生生物を全滅させないと開かない扉だとか、道中にあった箱をぶっ壊したら中から緑色の正八面体が出てきて、エミリア曰くそれが回復アイテムなんだとか、実際に使ってみたらホントに体の傷や体力が回復して驚いたなど、いろいろなお話が合った。

んでもって現在。

この1人と1体のコンビが何処にいるかというところ……………

「あれ？なに？此処……………」

「……………」

一段と開けた空間で巨大な機械が鎮座していた。彼らの3倍はあろうかという直立している人型兵器。

その他には何もなく、周りを水で囲まれており、光が反射して、今までよりも明るいイメージがした。

扉も自分達が入ってきた物以外には何処にも見受けられない。

つまりここが終点だった。

このときNT-Xは此処を、まるで古代ローマのコロセウムのようだと感じると共に、何か変なものを感じていた。それは人間で言う所の『嫌な予感』だったのだが、人間の脳が搭載されているとはいえ基本がロボットである彼は、その感覚を上手く捕らえることが出来ていなかった。

とりあえず一通り周囲を見渡した後、視線を正面に戻し、その中央に鎮座している巨大な機械へと近付こうとするエミリアの肩を、左手で引つ掴んで押し留めることにした。

「うわ、スッゴ……こんなおっきな人型の機械始めて見る……」

エミリアは感嘆の声を上げているが、NT-Xはこれが今にも動き出さないかと、気が気ではなかった。

おそらく、真正面から闘っても、自分だけなら負けない自信はある。そう、自分だけなら。

だが、今の自分はエミリアという……まあ、こう言っ
ては何だが、お荷物足手まといがいるのだ。

もし、もしもコイツが動き出したら、たぶんあの手に持っている……
槍？いや斧か？おそらくそのどちらかであろう物を得物に襲い

掛かってくるだろう。

そのとき自分はこの子を守りきれぬのだろうか………いや、無理だろう。

仮にもし、守りきれたとしても、そのとき自分は無事では済んでいないだろう。

などと、少し考え事をしていたからだろうか。

いつの間にか、機械の目に光が灯ともっていたことにぎりぎりになるまで気付けなかった。

相手が得物を振り上げる寸前でそのことにやっと気付いた彼は、すぐに体のスペックを全開まで引き出して、

「!?!」

エミリアを引っ張って安全圏まで退避した。

ドズウウウウン!!

(彼らは知らないが)そのスヴァルティアという名の機械の得物が、

今さっきまでエミリアがいた空間を薙ぎ払う。
もしNT-Xが引つ張ってくれなかったら、自分は今頃あそこでミンチよりも酷い事になっていただろう。

そのことにやっと頭が気付き、エミリアは心の底から震えあがった。

そんなエミリアとは対照的に、NT-Xは冷静にこの状況の打開策を考えていた。

とりあえずエミリアを離れたところに置いてから、スヴァルティアの射程範囲ギリギリまで近づき、もはやそこ等への武器よりも手に馴染んでいる、あの『棒』を持って構えた。

するとスヴァルティアの視線は自分に固定された・・・ような気がした。

しかし今のところ、エミリアのほうに目が行ってない事を見ると、エミリアの方に攻撃が行くなんて事は無さそうだ。

あくまで今のところは、だが。

「ちょ、ちょっと！もしかして戦う気?!」

エミリアが此方の意図に気付いた。

それに対して、NT-Xは首を少し縦に動かして肯定する。

「……………うう、うううーっ!!」

しかし、エミリアの不安や、戦いたくない気持ちと早く出口を探したいという気持ちが、ごちゃ混ぜになった声は止むことが無い。

そのことに対して、彼は舌打ちをしたくなった（彼に舌があるのかは不明だが）。

さっきチラッと、確認したが、さっき自分達が入ってきた扉は固く

瞬間的に彼が横に跳ぶ。

しかしデカブツはそれを予期していたかのように、得物を完全に振り下ろす前に、横に薙ぎ払う。

ズガッ！！

その一撃をモロにくらい、壁まで吹っ飛ばされるNT-X。

しかし彼は、空中で体勢を立て直し、ダンッ！！、と壁を蹴り、一気にデカブツの前まで、

いや、

一気に懐まで踏み込んだ！！

そして、右手に持っていた『棒』を全力で振りぬく！！！！

が、ここで彼には一つ誤算があった。

まず一つ、棒の耐久力が、彼が思ってたより低かったこと。

二つ、デカブツの装甲が思ってたより硬かったと共に、少し弾力があつたこと。

そして三つ目は……彼の『全力での』力が思ってたより強過ぎたことだった。

その結果、持っていた棒は、半ばからぼっきりと、折れてしまい、

肝心のスヴァ^{デカブツ}ルティアは、

その四肢だけを其処に残して、

胴体と頭だけが、キレーにぶっ飛んでいった。

・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？

エミリアSIDE

・・・・え〜、と。

あたしが覚悟を決めて、あいつがデカブツの方を向いたのとはほぼ同時に始まった戦闘は、結構すぐに終わった。

・・・・・・・・・・なんにも、本当に何にも出来なかったなー・・・

ハッキリ言って、あの二人(?)の間で、少しの間だけだったけど命のやり取りが行われたのは、ぼんやりとわかった。

けどあたしには、速過ぎて、一体どんな事をやってるのかまではわからなかった。

ほんで、ちよっとボーっとしているうちに、あいつがあのだカブツの体を天井までホームランして、それで戦闘は終わっていた。

・・・なんか自信無くすなあ・・・

でも・・・まあ・・・ともかく・・・

「倒・・・せた・・・の？」

EMIRIA SIDE OUT

とりあえずデカブツを撃退した二人（実際にはNT-Xしか戦っていないが）だったが、未だに扉は開かず、仕方が無いので、他の出口を探していた。

「・・・・・・・・ねえ、ソッチなんか見つかったー？」

エミリアが聞いてきたが、生憎と此方もまだ何も見つけていない。NT-Xは、そのことを伝える為に首を横に振った。

「そっかー・・・・・・・・あの・・・さ、こっち大変なもの見つけちゃったんだけど・・・・・・・・」

はてな？、と、NT-Xの頭の中には？マークが浮かぶ。出口でも見つけたのだろうか？

そんな軽い気持ちでエミリアのほうへ足を向ける。が、其処にあったのは・・・・・・・・

「ねえ・・・・・・・・コレ、どうするっ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

さっきまで自分が戦っていた、あのデカブーツが、およそ2 3体ほど機能停止した状態で安置されている光景だった。

とりあえず彼はそのデカブーツ達を・・・・・・・・

「・・・・・・・・（ガコツガコツ）」

そこら辺にあつた瓦礫で埋めて見なかったことにした。

エミリアが何か言いたそうだったが、無視することにした。

が、それが悪かったのだろう。

ウィーン

という音があったとき、一瞬だけ反応が遅れてしまった。

振り向けば、其処にはエミリアに向けて、その手に持った得物を振り下ろそうとしているデカブーツの姿。

エミリアが気付くがもう遅い。

エミリアに明確な『死』が迫る。

その瞬間、彼女は誰かに横から突き飛ばされた。

飛ばされた直後に、彼女自分を突き飛ばした奴を見る。

そして、突き飛ばしたエミリアの代わりに、デカブツの攻撃を受けたのは、

他ならぬNT-Xだった。

ズシャアアアッ！！

肉などを深く、抉り、切り裂く音。

派手に飛び散る、黒っぽいオイルのような血。

まるでスローモーション映像を見るかのように、彼女はその光景を
否応無しに目に焼き付けられる。

しかし、その攻撃を受けて血を撒き散らしている当の本人は、その
場で足を踏ん張り、一気に大地を蹴ってデカブツの上まで飛んだ。

そして、空中で体勢を整えた後、

体中の装甲を展開し、エネルギーを放出。

そのまま自分の背中に展開したバーニアを、一気に噴射して、

それで生まれた推進力と、重力と、自重をあわせたキックをデカブツの脳天からぶち込んだ。

ゴガガガガッ！！！！

っという音と共に、脳天から綺麗に真っ二つになってから、爆散するデカブツ。

そのデカブツをそんな目にあわせた当の本人は、

体中から黒煙を上げて、

勢い良くぶっ倒れた。

暫くボーっとしていたエミリアだったが、はっとしてNT-Xの傍に近寄った。

改めてみると、今の彼の状況は深刻だ。

切り裂かれた体は勿論、デカブツにキックを喰らわせた右足も、膨大なエネルギーに耐え切れなかったのか、ぐちゃぐちゃで、他の部

分も黒くこげて、煙を上げていた。

少しゆすってみたが、反応は、無い。

「……………うそ……………嘘、だよな……………ねえ、起きてよ、起きてったら!!」

声も掛けてみるが、目に当たる部分は、黒く光をなくし、左目の部分から見える、剥き出しのアイカメラは、レンズやフレームが罅割れていた。

「なんで?……………何で皆あたしをおいてっちゃうの?……………あたしを一人にしないでよ!!」

喚いても、目の前の彼からは、何の反応も帰ってこない。

エミリアの目からは、いつの間にか涙があふれていた。

「……………誰か……………誰でもいいから!……………」

そして、少女は、

「助けてよおおお!!!!!!」

悲痛な願いを口にした。

そして次の瞬間起こる、眩いばかりの極光。

その発生源となっているエミリアの体には、幾何学的な光の紋様が

浮かび上がり、その背にはまるで太陽を模ったかのような、巨大な光輪が現れる。

そして少女は……いや、少女の体を借りた『ナニカ』はゆっくりとその口を開いた。

『貴方を……死なせはしません!!』

とりあえず謝罪を幾つか。

とりあえず、ある程度ストックしてあった小説のデータを、身内に誤って全て消されるという大惨事に始まり、学校の委員会製作の小冊子の中身を編集するという仕事を、一手に押し付けられるという事態も重なり、結局投稿できたのが、今日になってしまいました。すみませんでした。これからもこんなことが度々あるかもしれない。

あと、この後の展開なのですが、前述の大惨事と、今考えているシナリオの関係で、PSP2iの、ストーリーモードのエピソード2をクリアしなければなくなってしまうため、たぶん第二章の終わりで、前述のシナリオをクリアするまでいったん更新止まる可能性が出てきてしまいました。まことに申し訳ありません。

その代わりなんですけど、もう一個、サブで小説書こうかな、と思っています。

勿論この小説がメインなので、途中で投げ出したりしませんよ。

で、候補としては

ロックマンゼロ (ゼロ、ほぼオリキャラ化。オメガが、ぶうるう

ああああ!!な

若本オメガ化。ZX、ZXAと

かともクロスするかも)

ガンダムSEED

(キラがオリキャラ化。アスランもしかする

と女体化。アスカ

兄妹は、確実に助けられます。

)

セキレイ (主人公性格ある程度改変。ただしヘタレは変わらず。もしかすると SDガンダムバインドとクロスするかも)

ぬらりひよんの孫 (オリキャラが主人公。ポジションは原作主人公の兄。間違 いなく、最凶で最強キャラ。

ガンダムとクロス)

舞 H I M E (憑依物確定。漫画版。仮面ライダーとクロスするかも)

このどれかを、高確率で書きます。とりあえずネタがおりて来た物から書きたいと思っています。

ちなみに二次創作物ではメジャー(?)なりリカルなのはとかは、それらが行き詰まったら書くかもしれません。要するにサブのサブ扱い

何か意見を出してくれば優先的に取り入れようかな、と思っています。

それではまた次回で。

夢と入社と【再会】（前書き）

やっと今回で、主人公がリトルウイングに入社します。
ここまでくるのに長かった……

あと、冒頭で、彼に関するちょっと重要な複線があります。

「……… や、 ？何だつて？いや、それ以前に『各部分
を私と同じ機構』？……じゃ、コイツは人間じゃないのか……
・つーか色々付けてみた！？エネルギーの利率や、各部分の強度に
問題！？何だよそれ！？ホントに大丈夫なのか！？」

「……… あー、安心しろ？少なくともお前の脳は、バイオ脳と
はいえ、中に入っている人間のデータは、私が自ら厳選したものだ
からな……… 少なくとも自我崩壊などは起こらないはずだ・
・たぶんな………」

「……… いやいやいやいや！！既に貴方の発言のおかげで、
頭がパンクしそうです！？バイオ脳つて何！？
中に入ってる人間のデータ！？自ら厳選！？自我崩壊つてどういう
ことですかあああああ？！………」

「ム、また機能停止したか……… まあいい。どうせ次目覚
めたときには向こうだし、今の会話も覚えてはいまい……… フ
ム、だがコレでまた暇になってしまったな……… またどこぞか
らデータを引つ張ってきて模擬戦でもするか？……… いや、
止めておくか……… それはコイツが、データを向こうから持って
きてくれるまで止めておこう……… ふむ、だとすると………
………」

また、暇になるな……

クラッド6・リトルウイング

「ノオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！」
「！？」

突如として、奇声を張り上げた後、受付前のベンチから飛び起きて彼は震え始めた。

……どうやらあの後、スリープモードになった眠ってしまったらしい。

……な、何だ今の光景！？夢！？……いや、夢、じゃ、ない、な。うん。まず第一に俺はロボットだから夢なんか見ない……あれ？俺って人の脳が搭載されてるんだっけ？そしたら夢も見れる

のかなあ？…………でも今は、夢だとしても、なんか妙にリアルだったな…………

「アッラー…………おっきしてたのカシラ？うなされてたみたいダケド…………ダイジョーブ？」

「……………！！……………」（首を縦に振る）

「ナラいいケド…………ホントにダイジョウブ？叫び声まであげてタケド…………」

…………？『叫び声をあげてた』？いやおかしいだろ。俺は喋れないはずだ。

そんなことを考えていた彼だったが、ホントに自分が叫び声をあげてたのなら、普通に声を出せるのではと考え、少し声を出してみようとした。すると……………

「…………ア…………ア…………」

……………！！！！喋れてる！！少しアレだけど、声を出せてる！！

すこーしではあるが、声（らしき電子音。合成音声かもしれない）が出たのである。

理由は不明だが、これは彼にとって、とても喜ばしいことだった。

しかしもう一つ気になることがある。

それは……………傷。あのレリクスとか言うところで、あのデカブツに喰らった傷が見当たらない……………というよりも最初からなかったかのように、痕すらないのだ。

「……っついていや！そんなことより！」

「アノ……」

「ン？ナーニ？」

「エミ、リア、ツテ、コ、シツ、テ、マス、カ？キン、パツ、ノ、ピン、クノ、フク、キタ、オ　　ン、ナノ、コ、ナン、デス、ケド」

「……っついてなんじゃこの喋り方あああああ！？こんなだったら、喋れないほうがまだマシじゃあああああ！！」

あまりにもあんまりな発声だったが、どうやら目の前の女性は少し考えた後、此方の考えを理解してくれたらしく、

「……オウ！エミリア、ネーダイジョーブ。今ワ、元気にお部屋でスヤスヤ寝てるわヨ」

「……と、返してくれた。

よかった、と、彼は心の中で溜息をついた。

とりあえず傷のことは放って置いて、人命の係ってる出来事だったので、そちらは心配だったのだ。

「……それにしても、えらい美人さんだな……」

改めて、目の前の女性をまじまじと見てみると、そんな感想を思い浮かべた。

黄緑色のふわっと盛った髪に、白い肌。格好もどこか扇情的で、受付嬢と言うより、キャバ嬢と言った方が、しっくり来る。

そんなことを考えていると、遠くのほうから、男の声が聞こえた。

「アラ、シャチヨサンが呼んでるネ。立テル？」

「ダイ、ジヨウ、ブ、デス」

と行って、彼は立ち上がるうとした。

ところが、床に足をつけて、立とうとした瞬間、

ガガッ！！ジジジジジジ！！

という音と共に、足が途中で動かなくなり、

「！？？」

そのままバランスを崩した彼は、前に倒れた。

「！？・・・！？？？？？」

その後も何度か動かそうとしてみたが、そこからはうんともすんとも動かず、先程の女性が肩を貸したほうが良いか聞いてきたものの、丁重に断り、結局その『シャチヨサン』のところまで、彼だけ這って行く事になった。

途中で行くまでの、周りの人の目が、可哀相なものを見る目になっていたような気がしたが、無視した。

何とかその『シャチヨサン』のところについた彼だったが、其処にいたのは、職務中にもかかわらず、グラビアを空間ディスプレイにて展開している、毛の権化ともいえるピンクのコートを羽織った男……あの『おっさん』だった。

「……………今なんか失礼なこと考えなかったか？」

「……………イエエ」

「……………その間が気になるが、まあいいか。とりあえずは元気……………そう……………か？」

「アシ、ガ、ウゴ、キマ、セン、ガ、ソレ、イガ、イハ、ダイ、ジヨウ、ブ、デス」

「……………まあ、その変な喋り方とかは置いとくとして、だ、お前さんなんで自分が此処にいるのか分かるか？」

「……………とりあえず、変な喋り方、という言葉に対しては少しムツとしたが、事実なので、受け流すことにして、今自分が置かれている状況を整理することにした。」

「……………えーと、とりあえずは、と

「サガ、シテ、クレ、タ、ウエ、ホゴ、シテ、イタ、ダキ、アリ、ガト、ウ、ゴザ、イマ、ス」

「……………お、喋り方とかに反して、頭は回るみたいだな。それなら話は早い。ウチも慈善事業やってるわけじゃないんでな」

腰に手を当てて、にこやかな顔でこちらに話しかけてくる『おっさん』。

そんな彼を見ているうちに、彼にはある一つの事柄が思い当たった。

「……………モシ、カシ、テ、ホウ、シユウ、デス、カ？」

「……………まあ、それもある訳なんだが、まあ聞け。」

レリクスに取り残された馬鹿

まあお前さんと、あと一人

のことなんだが　　がいるってんで急遽組まれたチームだったんだが、中々原生生物が強くてな。ウチにもそれなりに被害はあったわけだ」

「……………？スポ、ンサー、ガ、イタ、ハズ、デハ？」

「まあ、そのことなんだが……………連中俺達や、あそこにいる奴らに関しては『雇ってない』、の、一点張りだ」

苦々しそうな顔で、おっさんが忌々しげに言った。

……………それはつまり

「……………ナカ、ツタ、コト、ニ、サレ、タ？」

「……………まあそういうことだ。ま、そんなわけでな。リトルウィングは実入りなしで回収に乗り出したわけだ」

……………えつとお……………

「ソレ、ハ、ツマ、リ、ソノ、ブン、モ、ハラ、エ、ト？」

「まあ、できればそれが一番良いんだが……………払えんのか？」

……………

「……………ムリ、デス」

「だよなあ。だったら……………どうすりゃいいの分かるな？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・まあ、それしかないよなあ・・・

結局彼が出した、答えは・・・

「バシャ、ウマ、ノ、ゴト、ク、オツ、カイ、クダ、サイ、シャチ
ヨ、サン」

・・・所謂 D O G E Z A みたいなポーズをとって、忠誠
を誓うことだった。

「いや！其処までやんなくていいし！第一俺の名前はシャチヨサン
じゃねえし！」

「ア、ジャア、ヤツ、パリ、オツ、サン、デス、カ？」

「いや、それもちげえし！つか誰だ、お前に俺をそんな風によべ
つつたのは!？」

「エミ、リア、ガ、アナ、タヲ、ソウ、ヨン、デ、イマ、シタ」
「あんにやろう・・・・・・・・!!」

このすぐ後、この男・・・おっさんの名前はクラウチということ
を彼自身から教えてもらい、先程の女性は、チエルシーという名前だ
とも教えてもらってから、N T - X はこれからの自身の待遇を詳し
く教えてもらうことにした。

「あ？お前さんの待遇だあ？」

「ハイ」

するとクラウチは、少し考えるようなそぶりをした後、

「・・・そう、だな・・・まずその足は、こっち持ちで直してもらうとして・・・うん、マイルームも一つ必要か・・・お、そっだ」

一通りつぶやいた後、何かを思いついたのか、何処かへ連絡をしてから、こちらへ向き直った。

「まあ基本は今俺がつぶやいた感じだな。あとお前にはパートナーを一人つけることにした。」

「?・・・パー、トナー、デス、カ?」

「ああ、たぶん今く「モ」・・・おっさん、今日は勘弁してよお、私がどういう状況だったか、知ってるでしょ?」・・・来たぜ」

ふと聞きなれた声が聞こえたので、そちらを振り向くと其処には・・・

「ハア・・・て、あれ?」

金髪に、ピンクの服、と、あの時会った姿と寸分も変わらない少女が、

「あ・・・あ・・・あーーーーーー」

エミリアがそこに居た。

その少女は、こちらを見つけると、いきなり近寄ってきて、

「あんた生きてたの!?!」

こんなことを言った。

それに対して、彼は、^{N.T.X}

「カツ、テニ、コロ、スナ!!!」

そう言って、彼女を軽く小突いた。

夢と入社と【再会】（後書き）

はい、最新話でした。今回もこんな駄文を読んでいただき、ありがとうございます。

どうも、春休みだというのに、ほぼ毎日学校に行っている雑炊です。とりあえず冒頭のアレは、憶えておいても、憶えてなくても、別に問題はないので、流してくれて結構です。

一応正体はもう決まっていますし、少しネタバレすると、プラモ化もしちゃっているのですが、まあ、まだ謎の存在、ということにしておいてください。

NT-X「いや、ここまで出したら、分かる人は分かっちゃうだろうコレ」

あれ？何でお前此処にいんの？

NT-X「いや、お前が呼んだんだろ！今回試験的に、他の先生方がやつてるみたいに、作中のキャラと対談するって言って！まさか忘れたのか！？」

？・・・あー、そういえばそんな事いつたっけ。リアルがあまりに忙しすぎて忘れてたわ。ゴメン。

NT-X「いや、いいんだけどさ・・・それ以前に、こんなにべらべら喋って良いのか俺？まだ作中だと、あんな酷い片言でしか喋れてなかったじゃん。」

一応此処は、あとがきと言う、ある意味自由な空間だから、ダイジヨープだろ。

苦情がきたら、すぐにやめるし、もしくは次回から直す。

NT-X「そーゆうもんかい……………そういえばさ」

ん？どした？

NT-X「あなたの妹が言ってたけど、この小説ってヒロインとかいんのか？俺の予想だと、エミリアのような気はするけど……………」

「いや、個人ENDはこの小説にはない。勿論ハーレムにもしない。

NT-X「は？それってどういう……………」

簡単に言うと、現段階のプロットでは、最終的にお前は、18m級の巨大ロボになる。

NT-X「……………は？」

じゃ、今回はこのくらいで。また次回でお会いしましょー。(全力でダッシュ)

NT-X「……………いや、ちょっと待て！！！！18m級の巨大ロボってどういうことだ！？俺最終的にどうなるんだ！？おい！待て！頼む！！頼むから！！少しでもいいから俺どうなっちゃうのか教えてくれえええええ！！！！」

マイルームと古代人と【騒動の種】（前書き）

やっとこさ今回の話で、一章の後のインターミッション終了です。
本当に此処まで来るのに長かったなあ……………
とりあえず本編をどうぞ

あと、あとがきのところで少し主人公に関してのネタバレがあるので注意してください。

マイルームと古代人と【騒動の種】

・・・・・・・・・・その後、エミリアがクラウチに文句を言うなど、その文句をクラウチは半ば無視して、仕事の内容や、その受注方法等を説明するなど、多少ゴタゴタしたものの、とりあえず入社に関する必要なことは、ほぼ全て滞りなく終わった。

あとは、この動かない足を如何にかするだけとなったので、早速そういつた方面の医者（？）に診てもらおう事になった。（目のほうは、何故か此処に運び込まれたときには、既に治っていたそうだ。）

結果として、見てもらった後、すぐに手術（と、言うよりも修理）が行われたのだが、終わった後の担当者の顔が、何故か物凄く腑に落ちない顔をしていたのが、^{N.T.X}彼には印象に残った。

（全てが終わってからエミリアが聞いた話だが、^{N.T.X}彼を担当した人によると、当時の彼の内部構造は、外見は普通のキャストと同じなのだが、それに使われている素材や、システムなどがまったく未知のものであったこと。そして足が動かなくなった理由が、おそらく神経だと思われる部分の要所所に、かなり小さなアダプターが着いており、その内の2、4個がすっぽ抜けていただけだったため、あんな顔をしていたらしい。）

で、今現在彼が何処にいるかと言うと・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・あれ？これ、もしかして迷っちゃった？

・・・地図が映し出されている小型の機械を片手に、この『クラッド6』の居住区をウロウロしていた。
・・・どうやら、自分に割り振られた部屋へ行こうとして道が分からなくなり、地図を持っているというのに、迷子になってしまったらしい。
傍から見ていると滑稽だが、これでも本人は大真面目である。

さて、今さらながら彼が迷っている居住区も、その一部分であるコロニー『クラッド6』について、簡単に説明しようと思う。

そもそもこのクラッド6は、グラール星系にある惑星の一つ、パルムに本社を構える大手総合商社『スカイクラッド社』が、管理・運営しているリゾート型コロニーである。

そして、何よりこのコロニー自体が、スカイクラッド社の第六支社そのものであり、その中では数多くの事業が展開されている。

前回と今回に掛けて、NT-Xが入社した民間軍事会社『リトルウイング』も、実はこの第六支社の事業の一つである。

で、このクラッド6の事業として最も有名なのがリゾート事業であり、コロニー内に併設されたリゾート地区の設備は体的にも有名であり、このコロニーの中に、人工海や豪華客船など、様々なリゾート施設が用意されており、連日、多くの観光客が訪れている。

・・・が、しかし、前述したようにクラッド6の中には今

紹介したものの以外にも、数多くのスカイクラッド社関連の事業が展開されている。

・・・という事は中では様々な職業の、膨大な人数の人たちが働いていることになる。
当たり前のことだが。

無論、この広大な星系の中で、他の惑星からわざわざ始業時間までに此処へ来て、終業と同時に帰っていくなんて酔狂な人種は早々いない。

と、いう事はどういふことかというと、そこで働いている人たちのための、居住スペースが必要となる。

で、忘れてはいけないのは、この『クラッド6』は、コロニーだ、ということである。

コロニーなのだから、居住スペースは、最初からあるわけで、その広さもかなりの物になっている訳だ。

つまり、何が言いたいかというと・・・

この居住スペース、実は幾つかのブロックに分けられており、今自分があるブロックが何処なのか把握できないと、たとえ地図を持っていたとしても、結構あっさり迷子になってしまうくらいに広いのだ。

・・・しかし、だと言つてもところどころに「此処は　ブロックですよ」みたいなことが書いてあるんじゃないかと思った人もいるだろう。

そう、確かにそういうことは、ところどころに立体ディスプレイなどで映されていたりするので、そこに書いてある文字が読めれば、特に問題は無いのだ。

.....『字が読めれば』.....

さて、此処で本作品の第二話を、もう一度思い出してほしい。

このお話の中で、彼、N T - X は、手に持った棒に書いてあった文字を『変な記号みたいなの』としか認識できてはいなかった。

.....此処らへんで、聡明な読者の方々には分かってきたかもしれないが、前述の台詞の通りに、彼はこの世界の文字を読むことが出来ないのだ。

故に、たとえどれだけ分かりやすい親切な地図を持っていたって、どれだけところどころに居住区の案内書きみたいなものがあったって、読めなければ全部纏めて『変な記号』である。

.....結果だけ言おう。 前述してきた理由

の結果、彼はただいま絶賛迷子中なのだった。

.....や、やっと着いた.....長かった.....
.....

あの後、迷いに迷った挙句、いつの間にか居住区の最下層迄行った後、ぐるっと回って入り口まで戻ってきてしまった彼は、途方に暮れている所を入り口の近くにいた、『クノー』という女性に助けをもらい、なんとか自分の部屋まで到着できていた。（部屋の場所が入り口から歩いて3分経たないところにある、と知ったときに、思わず足から崩れ落ちて、所謂orzみたいな体勢になったのは、彼とクノーさんだけの秘密だ。）

因みに、最初に居住区への入り口の扉をくぐってからここに辿り着くまで、かかった時間は、約300分。
約5時間にわたる（彼にとっての）大冒険だったことをここに記しておく。

シューーン.....

ドアの隣にある、コントロールパネルを操作しようとする、ドアが勝手に横に開いた。

どうやらドアの前に誰かが立ったりすると、ロックを掛けておかないと、勝手に開く構造になっているらしい。

.....セキュリティ的にどうなのそれ？

「別に盗られるモンなんかないんだけどサ」、と、心の中でつぶやきながら、彼は部屋に入った。

部屋の内装は、なかなかシンプルだ。

入ってすぐの空間の奥には、上の方に小型のテレビが。

その反対の方にある小部屋には小さなテーブルと、椅子が二つ。

窓が無いのが残念だと思いつつ、ベッドのある奥の部屋に行くと其

処には.....

壁の上半分をくりぬいたかのような大きな窓が、広大な星の海を映し出していた。

た．．．．．

「ツテ、イウ、カ．．．．．」

「ん？」

「イツ、カラ、ハイツ、テ、キテ、タ？」

「へ？．．．ああ、ついさっき。ロツク掛かってないし、声かけても無反応だったから、勝手に入ってきちゃいました」

「．．．．．」

それって不法侵入って言うんじゃないの？、と、心なしかジト目で少女を見る。

しかし、当の少女は悪びれた様子も無く、そのままベッドの上で寝っ転がり．．．．．

それからNT-Xの行動は早かった。

おもむろに自分の左肩を掴んだかと思つたら、そこからアーマーだけを器用に引き剥がして、それを今すぐにでも投げられるorそれで相手をぶん殴れる体勢になり、勢いよく振り向こうと

すると、仄かに花のにおいのようなものが、ゆっくりと漂ってきた。

.....これは.....

「.....ゲツ、カ、ビ、ジン.....?」

.....そんな名前だったような

『.....残念ですが、そういった名前の花ではないですね.....

」

.....!?

「ダレ、ダ!..!」

もともとこの部屋には、エミリアと、^{N.T.X}彼しかいなかった筈である。しかしそれでも、何かあったらいけない、と、少し警戒して、自分の使えるセンサーの感度を上げていた彼にすら気付かれずに、いつの間にか部屋の中に入っていたとは！！……

センサー劣化したのかな？と思いつつも、いつでも攻撃できるよう身構えながら振り向いた先には

……？あれ？

金色の光をぶちまけながら、体に幾何学的な光の紋様が浮かび上がらせ、その背にまるで太陽を模ったかのような巨大な光輪を背負ったエミリアが、ベッドの上に浮かんでいた。

「……………アノ……………エミ、リア、サン？……………」

そう彼がエミリアに話しかけた瞬間、パツと光は霧散し、そのままエミリアの体は、ドサツ！とベッドの上に落ちた。

慌ててエミリアに近寄って、容態を確かめると、どうやら何とも無い様で、スヤスヤと眠っていた。

『エミリアに危害を加えるつもりなどありません』

そんな声がした。

ハツとして、後ろを振り返ると、

先程散つたはずの光が、

だんだんと固まってゆき、

最後には、

一人の女性の姿を作り出した。

それは、いつそ女神と言っても差し支えないほど、綺麗な女ひとだった。流れるような山吹色の長い髪に、美人と断言できる端正な顔。

若干露出が多いながらも、何処か神々しさを持つ服装。

そして何よりも、その背に浮かび上がる、先程までエミリアの背後に浮かんでいた光輪がこの世のものではない、と彼に知らせていた。

『ミカ、と。今は訳あってこの子に宿っている意識体です』

「・・・・・・・・・・？ワケ、ト、イウ、ノハ？」

『・・・・・・・・ごめんなさい』

「ア、イエ、ベツ、ニ、イイ、タク、ナケ、レバ、イイ、デス」

・・・・・・・・・・ふむ・・・・・・・・・・

「ソウ、イエ、バ、ナニ、カ、ゴ、ヨウ、デ、モ？サキ、ホド、ワタ、シヲ、ヨビ、トメ、マシ、タ、ケド」

おそらくそこにエミリアに宿っている（取り憑いている）理由があるのでは、と考えた彼は彼女が自分を呼び止めた理由を促すことにした。

とりあえず例え厄介事の匂いがしようがしまいが、この状況では話を聞かないことには何も変わらない。

『あ、はい。実はこの子の意識がない間に、あなたに伝えたいことがあります。・・・信じて頂けないのは当然だと思いますが、どうか、私の話を聞いて下さいませんか？』

「・・・・・・・・・・」

ふと、彼は彼女の手が少し震えていることに気がついた。
おそらく、それほど荒唐無稽な話なのだろう。
しかし……………

……………そんな事言ったら、俺自身も結構荒唐無稽な存在だよ
なあ……………

そう考えてから彼はそこら辺をスルーして、さらに話を促すことに
した。

すると……………

『貴方は一度、レリクスで死んでいます』

「ブツ?!」

『貴方にはそういった実感は無いと思いますが、私が蘇生を行った
ときには、貴方の体は既にその生命活動を停止していました』

「アー……………エー……………ウー……………
ドウ、モ、アリ、ガト、ウ、ゴザ、イマ、ス」

そんな台詞がいきなり来たので、思わず嘖いてしまった。

幸い嘖く、と言っても彼はロボットなので、特に唾なども出ず、部
屋に被害は出なかった。

……………お、おいおい。そういうことって、大体一拍置いて
から言うもんじゃないの？

実際問題死んでない、というか、ただスリープモードになっただけ
なのでそこまでショックではないものの、突然面として言われると、
流石に少しクル物がある。

とにかく、傷を治してくれたのは事実なので、御礼だけはしとかな

ければ、と考えて礼を言ったものの、礼を言われたほうは言われたほうで、

『私がおつと早く動いていれば、あなたがあのようないい思いをするとはなかったはずなのです・・・ごめんなさい・・・』

等と言つてますます恐縮してしまつた。

その後も、ある程度経つてもなんだか話が進みそうな気配もせず、なんだかどうしようもなくなってしまい、グダグダになってしまつた。

と言つても、相手が勝手に罪悪感で喋りにくいだけのようないい感じし
かしないので、どうせだから、と言つて自分で自分の秘密（と言つて
もそんな大層なものではないのだが）をばらすことにした。

・・・えつとまずは、と・・・

「アノ・・・」

『?はい・・・』

「モシ、ワタ、シガ、シン、ダ、コト、ガ、キニ、ナル、ノ、ナラ、
ソコ、マデ、シン、パイ、シナ、クテ、イイ、デス」

訝しげなミカをほつといて、彼はいきなり立ち上がると、胴体部分
のアーマーをパージする。

そしてそのまま、素体となつた体の脇腹らへんを手で探ると、案の
定かなり小さいが、ハッチのような物があった。

そこを開けて、中を探ると、ボタンのようなものがあったので、彼

は迷うことなくそれを押した。

プシュウウウウ………

ボタンを押した瞬間そんな音が聞こえた。

ミカは何事か、と辺りを見回しているが、その音の発生源であるN
T-Xは、そのまま胸の中央に両手の指をゆっくりと差し込むと、
そのまま左右に開いた。

ミカがこちらの様子に気付く。

そして驚きで目を見開く。

対する彼も、開いた自分の胸の中を覗き込む。

そこにあっただのは、空色の球体。

なんだかよく分からない機材で隠れていたり、幾つかの金属の支柱
によって支えられたりしているものの、それがどうしたと言わんば
かりに眩い空色の光を放つ球体がそこにはあった。

「マア、コン、ナ、カン、ジデ」

ややあって、彼は口を開いた。

「ワタ、シハ、コノ、トオ、リ、ロボツ、ト、ナノ、デ、アン、マ
リ、キニ、シナ、クテ、モ」

そして彼は、

「ダ、イジヨ、ウブ、デス、ヨ？」

自らの秘密を表した。

あの後、少しの間ポカンとしていたミカを現実に引き戻してから、それでもまだ納得のいってなさそうな彼女を無理矢理納得させた後、やっと本題に入ることになったが、そこから出てきた話を聞いた瞬間、彼は手を目頭（？）において、天を（厳密には天井を）仰いだ。

話の内容としては要約すると、ミカがレリクスを創造した、今より遙かに優れた技術力を持った『旧文明人』で、その旧文明人はSEEDによって汚染されて、滅亡とまでは行かずとも、肉体を捨てて眠らざるを得なくなってしまうらしい。

そこで自分達の身体のリプリカ……つまりこの世界で言うヒューマンという種族らしいのだが、それを作って、ある程度文明が発達したらその身体を乗っ取るうという計画をしていたこと。

そして、もうすぐその計画が実行に移されてしまう、と言うものだった。

どうやら彼女はその計画には反対らしく、曰く『私達は滅ぶべくしてほろんだ。世界は次の世代に任せるべきなのです』……との事。

しかし話を聞くと、そんな良識的な旧文明人は滅多にいないらしい。彼女が知る中でも、そんな良識的な考えを持っているのは、大体2〜3人くらいだったらしい。

まあ、ハッキリと言ってしまつと、そんなことを聞かされても、正直な話「へへあ、そう」「ぐらゐの感想しか浮かばないのが、彼の本音だった。

何せスケールがでかすぎて、考えが追いつかないのもあるが、何よりその話を聞いても、彼の心には波風が少しも立たなかつたのが主な理由だろう。

もし、この話を聞いていたのが、彼ではなく他の普通の人だったとしよう。

それならば、もしかしたらこの話を聞いた瞬間に「ふざけるな」、と義憤に駆られるだろう。

しかし彼は、そんな他の人とは違って、彼は『ココロ』と言うものが、他者と比べて不完全だったから、そういつた『怒り』に関係するものが、まだちゃんと理解できていなかった。

閑話休題。

とにかくこんな話を聞いてしまった以上、例えココロが何も感じなからうが、傷を治してもらつた手前、首を突つ込まないわけには行かない。

とりあえず、やるだけやってみます、と伝えてから、もう一度彼は天井を見た。

きつとこの先、今聞いたような厄介事が数多く出てくるのだろう。

そう考えると、自然と涙が出てくるような気さえした。（流れないけど）

そして、もし神様というのがいると言うのなら、その人の眼前までスタスタと歩いて行って、その鼻っ面に全力でドロップキックをぶち込んでやりたくもなった。（無理だと思っけど）

・・・・・・・・・・・・・・・・まあいいか・・・・・・・・

どうせ厄介事には慣れてる。

.....?

はて？と彼は今の自分の思考が気にかかった。

慣れてる、とは一体どういうことなのか？

自分は今日（と、言うのにはかなり語弊があるが）起動したばかりのはずだ。

なのに“慣れてる”とは、可笑しな事だ。

そう考えた彼だったが、考えても答えが出るわけではないのでこの事については保留にすることにした。

「.....う.....ム.....ん.....」

そうエミリアが声をあげた。 どうやら長く話しすぎたらしい。

『そろそろ、エミリアが起きるようです。どうか・・・私を助けて』

いや、そこは一応“私達”じゃねーの？と考えつつも、とりあえず彼は頷いておくことにした。

そのまま消えたミカと入れ替わるようにして、エミリアが目覚めます。

「ふあ.....あゝあ.....と.....よく寝た.....ってあれ？此処どこ？」

「・・・トリ、アエ、ズ、オキ、ヌケ、ニ、ソノ、セリ、フハ、ナイ、ト、オモ、ウ」

「えー!?・・・ってああ、此処あなたの部屋か。いや〜ゴメンゴメン。ちよつとあんな事の後だったから、疲れててさー・・・・・・・って!寝てるのに気がついてたんだったら起こしてよ!〜あゝ、恥ずかしい……」

「ジャア、ネル、ンジャ、ネーヨ、ボケ」

「ちよ!?!それは酷すぎない?!」

そんな声を後ろに聞きながら、NT-Xはこれから起きるであろう厄介事を思い、小さく、本当に小さく嘆息した。

「・・・でも、まあとりあえず今は・・・」

「ビジ、フォン、ノ、ツカ、イ、カタ、キキ、ニ、イカ、ナキヤ」

そう言っただけは、当初の目的を果たす為に、クラウチのところへ足を向けた。

マイルームと古代人と【騒動の種】（後書き）

今回もこのような稚拙な小説を読んただき感謝の極みです。
どうも、雑炊です。

ネタ切れ、スランプ、仕事の増加に回路製作の勉強 e t c
そんないろんなことが重なって今回はいつもより酷いかもしれませ
ん。

他の作家の先生方の作品を見て勉強してはいるのですが、こればっ
かりはどうも

エミリア「つとが言っというて、他の小説のネタはバシバシ出てきて
るんでしょ」

あれ？エミリアじゃん？どしたの？今回もNT-Xの奴を呼んだ筈
だけど？

エミリア「あんたが前回のあとがきで「お前は最終的に18M級の
巨大ロボになる」って言ったおかげで、悩みに悩んで今自室で寝込
んじゃってるのよ！だから代わりにあたしが来たの！」

マジで？何だロボットの癖に貧弱なやつだなあ。言ってくれば、
好きな形にしてやるのに。

エミリア「だからそれがダメなんだって！ あゝもう。しか
も懲りずにまた対談やるしさあ」

今のところ、苦情とかは来ていない（キリッ

エミリア「ハア・・・もういいわよ・・・で、今回はミカとの初遭遇の話だったわけね」

おっ、話し変えてきたな。まあそうだね。本当は前回でこっちのほうも終わらせるつもりだったけど、分けたほうがいいかなって思っ
て分けてみた。

エミリア「そしてNT-Xの変な台詞ね・・・結局アレってなんだ
ったの？」

一応伏線のもり。ネタバレすると、まだ投稿してないけど、今書
いてるもう一つの小説の終盤で出すキャラの台詞なんだけど、そい
つのデータを使ってるから、あの台詞が出たってだけ。今後もそう
いった感じで少しずつ伏線をおいていく感じになるかも。

エミリア「ふーん。んじゃ、そこに関してはもういいや。で、次回
は二章開始って感じ？」

いや、今回は一応PMとの初会合を、パートナーマシナリ閑話として出す。
たぶん基本はほのぼの。
それが終わってから、二章開始かな。

エミリア「で、その前に、もう一つのほうの小説を、一つぐらい投
稿する・・・なーんちゃって！」

.....

エミリア「・・・え？ちょっとまって。何で黙ってフェードアウト
するの？もしかして当たってるの！？ちょ、ちょっと待ってって！」

「.....」

番外編其の1と座敷童子と「パートナーマシナリー」(前書き)

今回は番外編なので、本編の方は一切進みません。

時系列的には、1章のインターミッションと2章の開始までの間で
す。

あと、もう一つだけお知らせしておく、今後こういった番外編は、
時系列がばらばらになると思います。

「ワタ、シノ、ヘヤ、ニ、メイ、ド、フク、ヲキ、タ、ザシ、キ、
ワラ、シガ!!!!!!!!!!!!!!」

.....?

その場にいたNT-X以外の全員
.....
『ハア?』

それは、彼がリトルウイングに入社して、2、3個程のフリーミッションをこなしてからだった。

その直前まで、彼はエミリアと一緒に、最初に自分達が閉じ込められた、あの海底レリクススワールティアの再調査を行っていた。調査の終わりのほうで、あの時のデカブツと遭遇したものの、既に倒したことのある相手だったし、その頃にはエミリアも戦いに慣れてきていたため、あまり苦勞せず倒せていた。

ただ、二人だけで同じ所を何回も調査するのは流石に堪えたのだから。

マイシップに戻ったときには、二人ともクタクタで（とはいってもNT-Xはロボットなので肉体的な疲労はあまり無く、むしろ各部分のパーツの消耗の方が堪えたらしい）、とりあえず帰りの船の操舵に関しては、来るときと同じくNT-Xが行い、提出する書類等に関しては、エミリアが請け負うということで、話をつけて、お互いそれぞれに休みを入れることにした。

まあ、そんなこんなで帰ってきたと同時に書類関係をエミリアに任せたNT-Xは、自身の体のメンテナンスと、（主に精神的な）休息を取る為、一直線に自室へと足を運んだ。

それは、彼が丁度自室のドアの前まで来たときだった。

彼は、突如として中から聞こえてくる、機械音を耳にして立ち止まった。

どうやらセンサーには引つ掛からなかったようで、ドアは開かなか

つたが、明らかに誰かが自分の部屋の中にいる、ということだけはハッキリと認識できた。

……またエミリアが勝手に中に入ったのか？……いや、エミリアはさっきクラウチさんに書類を出しに分かれたばかりだし、仮にもう提出が終わっていたとしても、早すぎる。

まさか空き巣か？、とも思ったのだが、考えてみれば別に盗まれて困るような物なんぞ一つもないわけであって、万が一でも空き巣だとしても、こないだ密かに取り付けた防犯装置が起動しているはず、と彼は考えた為、この線はない、と結論付けることにした。

では誰が？……結局彼は、もしも変質者であれば、殴り飛ばすなり何なりすればいいか、という考えを導き出して、少し身構えた状態で自室に入っていた。

すると、まず見えたのは、掃除機のような物体だった。

.....?

最初は、「あれ、この部屋に全自動で動く掃除機なんか置いてあったっけ？」等と馬鹿馬鹿しい事を考えた彼だったが、よくよくそれを見てみると、どうやら誰かが掃除機のゴミを吸い込む部分を持って、せつせと掃除をしているらしかった。

.....誰かが？

おかしいことだ、と彼は思った。

その理由としては幾つかあるが、やはり一番の理由はその小ささだろう。今彼の目の前で動いている掃除機のノズルの部分は、どう見積もっても彼の身長的一半ほどしかない。

別に他意はないが、ここで彼の身長と体重を発表しておく、きっかり170Rp(cm?)の78Kv(kg?)である。

その半分ほどという事はノズルの部分は85Rpしかないのだが、いま彼の前で動いている人影っぱい何かは、その少し小さいくらいしか身長が無いのだ。

.....別の部屋の子供が悪戯でもしに来たのか？いや、でもこれは悪戯というよりは

まるでお手伝いさんだ、と、彼が頭の中で呟こうとした丁度その瞬間だった。

こちらの気配に気付いたのだろう。今まで作業していたその手を止めて、その小さな人影がゆっくりとこちらを見る。

人影の正体は少女だった。

しかし、幼女というわけではない。

どちらかというところ、その身体つきは15〜17、8歳といったところだろう。

……その小さすぎる身長を除けば。

そして、一番彼の目を引いたのは、その服装だった。

彼女の服装は、帽子を被り、腰には光る羽を取り付けた、胸を強調するような衣服

所謂メイド服を着ていた。

そのまま、彼と彼女の目が合う。

暫くの間、どちらも黙っていたのだが、突如としてその小さな少女は満面の笑みを浮かべた後、彼に対してこんなことを言ってきた。

「おかえりなさいませ、マスター！私この度マスターの所有物となりましたPMの『パートナーマシナリGH410』です。よろしくお願いします！」

彼の時が、止まった。^{N.T.X}

そのまま、何分くらいたつたろうか。

いつまで経っても動き出さない自分の主人を見て不安になったのか、
『GH410』は、彼に「マスター？」
と声を掛けた。

彼が再起動を果たすのに、そこから時間はかからなかったが、再起動したら再起動したで、彼は今度は、次のようなことを叫んだ。

「……………ザ……………ザ……………」
「……………」
「…?」

「メイ、ド、フク、キタ、ザ、シキ、ワラ、シガ、オル……………」
「……………?!」

そんなことを叫んだ後、彼は全速力で部屋を飛び出してしまった。

「!? ちょ、ちょっと待ってくださいよ、マスター!」

続いて彼女も部屋を飛び出す。

「……」
冒頭のあのシーンへと繋がったのであった。

「……なるほど。それで今あいつはあんな事になってるってワ

ケか」

そう言つてクラウドが目をちらり、と移した先では、デスクの上に NT-X が乗り、まるで猫か何かのようにこちらを

厳密に言つと、彼の新たなパートナーの一人となつた彼女を

GH410

威嚇しており、それをエミリアが PM に関しての説
明を交えて説得しているという、あまりにもカオスな光景が映し出
されていた。

………まあ、あつちはあのままにしときゃだいじょうぶだ
ろ。

問題はこつちだ、という風にクラウドが視線を戻した先には、不安
そうな表情をして未だにこちらを威嚇している自分の主人を見つめ
ている GH410 がいた。

………まさか『ザシキワラシ』なんかと間違えられるとは
なあ………

ザシキワラシ（座敷童子）とはニューデイズに古くから伝わる『ヨ
ウカイ』って奴の一種だったか？と、彼はもはや色褪せた記憶の中
からそれについて思い出していた。

確かザシキワラシとは、家に住む神様のような存在だといわれ、家
人に悪戯を働く、見た者には幸運が訪れる、家に富をもたらすなど
の伝承があるということを、昔たまたま取れた連休を使って、家族
でニューデイズに小旅行に行った時に聞いたような覚えが

………つ！！！！

そこまで思い出したところで、クラウチはまるで悪い夢を振り払うかのように過振りを振った。

・・・・・・・・・・チツ！嫌な事思い出しちまった・・・・・・・・・・

その後2、3回ほど深呼吸をした後、クラウチは目の前の彼女に向き直った。

相変わらず不安そうな表情だが、こちらに向けられているプレッシャーが少なくなっていくにつれて、だんだんとその表情も軟化していった。

・・・・・・・・・・さて、ここからどうするか・・・・・・・・・・

そうクラウチが考えたころだった。

「おっさん。こっちは何とか終わったよー。そっちはどおー？」

そう言ってエミリアがこっちにNT-Xを連れて来た。

見れば、肝心のNT-Xは、一見堂々としているが、よく見てみると右手をコッソリとだがエミリアにつないで貰いながら引かれており、その手も、すごく小さくとだが震えている。

そんな彼を見ながら、クラウチは思った。

・・・・・・・・・・オバケを怖がるキャストって・・・・・・・・・・どうよ？、と。

なお、このことを後でNT-Xが聞いたとき、彼は、自分はロボット、つまりマシナリーだと反論したが、じゃあオバケを怖がるロボットって一体何なんだよ、と返されたそうだ。

閑話休題

「まあ、何はともあれ・・・だ。どうやら誤解も解けたらしいから、お前さん、この子に名前をつけてやんな。じゃねーと色々と不便だる?」

そうクラウチに言われたNT-Xは、確かに、と頷いた。

名前が無い、という事態の厄介なところは自分で身をもって知っているため、こればかりはちゃんとしなければ、と彼は考えた。

とりあえず先程まで自分が威嚇していた少女を改めて見ると、背がちっちゃいだけで、どこも自分が知っている座敷童子と似ていないと分かってホッとした反面、申し訳ないことをした、と思った。

なのでまずは謝ろう、と。

そうしてから、名前を送ってあげよう、と彼は考え、こつ口を開いた。

.....土下座をしながら。

「エツト・・・アノ・・・マズ、ハ・・・サツ、キ、ハ、ホン、トウ、ニ、ゴメ、ン、ナサ、イ?」

「あ、いえ、そんな、顔を上げてください!というかどうかどうして土下座なんですか!？」

「・・・?キニ、イラ、ナカ、ツタ?イチ、オウ、イン、プツ、トサ、レテ、イル、ナカ、デハ、イチ、バン、ア、イテ、ニシヤ、ザイ、ノ、イシ、ヨツ、タエ、ラレ、ル、ポー、ズ、ナン、デ、スケ、ド」

「え、あの、えと・・・と、とにかく!私はあまり気にしてませんし、怒ってもいませんから!」

「デモ……」

いつまで経っても進展しない状況に、こりゃダメだな、と考えたクラウチは、少し助け舟を出すことにした。

「……こっちだって暇じゃないが、いつまでもこんな痴話喧嘩見せられるよりかは、ここで介入して話を切り上げさせた方がいいだろ……」

「あー、この子がそこまで言ってるんだ。とりあえず謝るのはそれくらいにして、さっさと名前を付けてあげな。第一、んな痴話喧嘩いつまでも見せられてるほどこっちだって暇じゃないんだからよ」

「ち、痴話喧嘩って……」

今までのやり取りを、痴話喧嘩扱いされた彼女は少し落ち込んでしまったが、対するNT-Xはそれもそうかと考え、彼女に向き直ると、おもむろに口を開いた。

「ジャア、ナ、マエ、ヲ、オシ、エル、ネ」

「え、い、いきなりですか！？まだ心の準備が……」

突然モゴモゴし始めた、GH410を他所に、彼は言葉を紡ぎ続ける。

「ソレ、ジャア、オシ、エル、ヨ？キミ、ノ、ナ、マエ、ハ

へ
ル
」

そう、君の名前はベル。

それはかつて、聡明で、自由な考えかたを持ち、見た目に惑わされず、たった一人の心の優しい野獣を愛することが出来た、とても思いやりのある優しい少女の名前。

願わくば、君が彼女と同じように、聡明で、自由な考え方をもち、
そしてとても思いやりのある優しい子になりますように

不意に周りがシン．．．としたことに違和感を抱き、NT-Xは辺りを見渡した。

見れば、辺りの人間の視線が全部自分に集まっている。

彼は妙だな、とは思いつつも、とにかく目の前の少女がその名前を気に入ったかどうか聞いてみることにした。

「アノ．．．．．」

「ひゃ、ひゃい!?!?」

・・・・・・・・ひゃいって・・・・・・・・

「モシ、カシ、テ、キニ、イ、ラナ、カツ、タ？」

「?! いいいいいいいいいいいいいいいいいいいい!! すっごくいい名前で気に入りました! ありがとうございます!!」

「ソ、ソウ? ソレ、ナラ、イイ、ン、ダケ、ド・・・・・・・・」

そんな中、突然今まで空気と化していたエミリアが困惑した声で口を開いた。

「あ、あなた・・・・・・・・」

「? ドウ、シタ、エ、ミリ、ア？」

「あなた・・・・・・・・今・・・・・・・・普通に喋れてなかった？」

エ、と彼が声を漏らす。

確かに『頭の中』で名前の由来などをいった気はするが、ハッキリいって良く憶えてないし、第一声には出していなかったはずだ。

・・・・・・・・なのになにに何故自分の声が聞こえたというのか・・・・・・・・

そんな中、ふと、エミリアの背後に立つミカが目に入った。

どうやら自分以外は、エミリアでさえも気付いてないらしい。

なので、直接口頭で質問するわけにも行かない為、彼は『ちよつと

『・・・ええ、私もついさっき、ハッキリと聞きました。ただ、あの声が本当に貴方のものかどうかは、判断できませんでしたが・・・』

・・・そう、ですか。ありがとうございます。

そうこちらから返答した後、『ブツツ』という音がなった気がしたかと思うと、もう意思疎通は出来なくなっていた。とりあえず、この妙な雰囲気誤魔化すために、彼はとにかく何でもいいから喋ることにした。

「トリ、ア、エズ・・・」

「？」

そう言いながら、彼は右手を前に出し

「コレ、カラ、ヨ、ロシ、ク、ネ」

丁度、

「・・・ベル」

握手を待つような体勢になった。

対するベルは、少し戸惑っていたものの、

「……………はい！」

そのうち花が咲いたかのような笑顔を浮かべて、

「こちらこそよろしくお願ひします！マスター……！」

その手を握り返した。

おまけ

「そういえば……………」

「あ？どうした？エミリア」

「あたって今回、最初から最後まで空気だったような……………」
「……………」

「……………まあ、あれだ。台詞がある分マシだったと
思え……………」

おまけ2

自室にて

「そういえば、お掃除途中でほっぽって来ちゃったんです！すぐに
にやりますね！」

「・・・・・・・・ネエ、ベル」

「?どうしました?マスター」

「ベル、ツテ、ソウ、ジ、イガ、イ、ニハ、ドン、ナ、コト、ガ、
デキ、ルノ?」

「ふふん。それはですね、炊事洗濯は勿論、ミッションのお供から、果ては夜のお供まで出来ちゃいます!」

「フー、ン。ソ、カ・・・・・・・・・・エ?」

番外編其の1と座敷童子と「パートナーマシナリー」（後書き）

こんにちは、雑炊です。

今回は前回言っていた番外編として、PMと主人公の初会合を描いてみました。

実はこの小説を書き始めて、一番書きたいと思っていた話の一つです。

一応この話にも色々伏線をぶち込んでみましたが、如何だったでしょうか？

とりあえず、主人公のPMのベルの名前の由来は、分かる人には分かるであろう物にしてみましたか……大丈夫ですかね？

とりあえずヤバイと言われれば、すぐに修正しようかなと思います。

次回からはいよいよ2章に入っていきたいと思います。

……たぶん1章よりは話数少なくなると思います。

これからも、よろしくお願いします。

借金取りと少年と【カーシュ族】（前書き）

今回から二章突入。

今回辺りから、いきなりネタが入ってきますが、そこらへんの事情は次の番外編で説明したいと思います。

それでは本編をどうぞ

借金取りと少年と【カーシュ族】

惑星モトウブ クロウドッグ地方

NT-X「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

エミリア「・・・・・・・・・・ハア」

NT-X「・・アノ・・・・・・・・ナン、デ、サツ、キカ、ラ、タ、メイ、キ、バ、ツカ、リ、ツイ、テ、ルノ？」

エミリア「なんでって・・・・・・・・アンタ今回あたし達がここに来た理由分かってる？」

NT-X「・・・・・・・・マア、ソレ、ハ、ワカツ、テ、ル、ケド・・・・・・・・イ、チオ、ウ、イラ、イナ、ンダ、カラ、ス、コシ、ハ、ヤル、キ、ダサ、ナ、イト」

エミリア「それはそうだけど・・・・・・・・あゝ！それでもなんか嫌だな〜！」

NT-X「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・いきなり何がどうして二人がこんな状況になっ
ているのか分かってない読者も確実にいると思うので、ここからは少

し時間を戻して、ここまでの経緯をお見せしよう。

二人の会話から、約4時間前

クラッド6内 リトルウイングオフィス

あのいろんな意味で衝撃的な出会いから、早くも4日が経っていた。とは言っても、結構色々なハプニング（という名の厄介事）が（主に一人に關係して）起こり、その渦中に毎度毎度巻き込まれていた一人と一体にとっては、とっつっても密度の濃い4日間だったのだが、今回のことには一切關係が無い為、どんなことがあったのかは割愛させていただく。

そんなこんなで丁度4日目の今日、朝からフリーミッションに行ってきたNT-Xとエミリアとベルの三人（一人と二体）は、つい先程、本日最後の獲物であるディ・ラガンを、平原で（一体の手によつて、ほぼ一方的に）叩きのめした後、やっとこさクラッド6に帰ってきていた所だった。

とりあえず、丁度時間もお昼ちょっと手前だったという事もあり、三人はカフェでお昼でも食べようか、なんて事を話し合っていたのだが、丁度そのとき、クラウチから通信が入ったのだった。

クラウチ『お、丁度帰ってきてたか。おいお前ら、仕事が入ったぜ。後で俺のとここい』

そう言っつて、彼はさっさと通信を切ってしまった。
三人は少し顔を見合わせた後話し合った結果、とりあえずお昼優先
ということになった。

三人がクラウドのところまで来たのは、それから30分後だった。

クラウド「……………まあ、確かに俺は『後で来い』とは言った
よ……………言っただけだな……………」

三人がクラウドの所まで、お昼を食べ終わってから到着した途端、
彼は突如として頭を抱えながら机に突っ伏した。

そこから聞こえてくる声には、幾ばくかの呆れと、少しの怒りが混
じっているように感じられる。

ややあつてクラウドは顔を上げて、こう叫んだ。

クラウド「……………だからと言ってこんなに遅れた上に、そん
な状態で来る奴があるか!!!」

NT-X「ス、ク、ナ、クト、モ、ココ、ニ、サ、ソニ、ソホ、ド、
イ、マス、ガ」

クラウド「真面目に答えてんじゃね……………あ、いや、スマ
ン。俺が悪かったから、そうやって体全体で『反省してます』って
言っつのを表さないでくれ、頼むから。また周りに誤解されかねん…………
…っつて！エミリア！手前え笑つてんじゃねえ!!!」

……………まあ、クラウドがここに来た三人を見た瞬間、こう叫んで

もおかしくは無い。むしろ彼のこの反応は正しい。
何故ならば、ここに来た三人の状態はそれほどまでにふざけていたからだ。

エミリアは右手にスプーン、左手にプリンに乗った皿を持ち、いかにも『まだ私デザート食べてる途中です』、と言わんばかりの状態だし、ベルはその両手に掃除機を持って不満そうな顔をしている。

そして極めつけは彼らの中では纏め役である筈のNT-Xだ。

彼に至ってはカクワネの着ぐるみを纏い、体中から泡が立ち上り、そして両手にはカフエで売られているはずのお持ち帰り用プリンが山のように抱えられていた。

やがて一通り怒鳴って落ち着いたのか、クラウチはこんな三人に対して静かに話し始めた。

クラウチ「ハア………まあ、なんだ。お前らのその状態には色々と突っ込みたいところがあるが、今回はスルーしてやる。そんじゃ、本題に入るぞ。実はお前さんらに急いで捜してもらいたい奴がいるんだが……」

エミリア「むぐむぐ………何？なんかの重要人物とか？」

クラウチ「食うのか喋んのかどっちかに出来ねーのかお前は……まあいいや。簡単に言っと、俺が前、金を貸した奴。詰まるどころ借金の取り立てだ」

エミリア「むぐむぐ……ん。えー何それ？そんなのおっさんの私用じゃん。自分でいけ自分で」

クラウチ「何か言ったか、ごくつぶし。……つか、ホントに食うのか喋んのかどっちかにしろ」

NT-X「アノ……」

クラウチ「ん？どした？」

NT-X「サ、ガス、ニ、シ、テモ、イツ、タイ、ドコ、ヲサ、ガセ、バ、イ、イノ、デ、スカ？バ、シヨ、ガ、アル、テイ、ド、カタ、マツテ、イナ、ケ、レバ、サ、ガシ、ヨウ、ガ、ナ、イノ、デハ、ナイ、カ、ト、オ、モウ、ノ、デ、スガ」

クラウチ「ああ、そこに関しては抜かりはねえよ……つと。場所はモトウブのクロウドッグ地方。その文化保護地区付近であいつが愛用している船を見かけたって情報を手に入れてる。念の為画像を送ってもらって確認してみたが、やはり間違い無くあいつのものだった。他に質問は？」

NT-X「アト、ハ、サガ、ス、オト、コノ、カオ、ジャシ、ン、ト、ナ、マエ、ヲ」

クラウチ「おおつと、すまねえな。肝心なこと教えてなかった。ワリイワリイ。で、その男の名前は

エミリア「ワレリー・ココフ、ね・・・ま、とりあえずそのワレリーって人、さっさと探し出してさっさと帰ろっか」

そして、冒頭の会話に戻る。（あ、勿論NT-Xは元の格好に戻りました）

エミリア「っにしても、ここらへん船多いなー。この中からそのワレリーって人探せるのかな？」

クラウドッグ地方に約2時間かけて辿り着いた彼らを待っていたのは、停泊所に指定されている広場（？）の空いているスペースを占領するかのような、船、船、船。

それなりの大きさを持ち、それぞれ違う色をしている船が所狭しと並んでいるその光景はいつそ圧巻だった。

ぶつかる事で起きる事故とか考えてないのだろうか？、と想想してしまふような止め方も所々に見受けられる。

しかし、NT-Xの頭部に設置されているセンサーは、こんな状況にもかかわらず・・・否こんな状況だからこそその異常を察知していた。

・・・？ 生体反応があまりにも少なすぎる？・・・

通常、これだけの船があれば、もっと人が居てもいいようなものだが、彼のセンサーに引っ掛かった生体反応は、自分とベルの二人を除いてもエミリアを含めた三人分しかなかったのだ。

自分達と、今引っ掛かった二人以外の人間が全員この奥に行ったのだとすれば、説明はつくのだが、見渡した限り、船の数はざっと見積もっても40近くある。

1隻に一人の割合だとしても、そんなに多くの人間がこんなところの奥に一体何の用があると言うのか。

少し不安になった彼は、エミリアとベルに船の近くで待機するように行った後、彼は単身保護区域の奥へと足を運んだ。

少し進んでみると、案の定かなりの数の足跡が見つかった。

とは言っても、どうやら数人は本当に観光かなにかみたいな感じで来ているのか、途中で指定された正規ルートを通って戻っていたり、来た道を戻っているような痕跡が見られた。

問題は残った残りである。

明らかに正規ルートを外れて歩いて行っているのがそこかしこで見られた。

しかも少なくとも見積もってもその数は25〜30人近く居る。

.....やはり怪しい.....

そう考えて、彼もその後を追う。

途中、原生生物が既に倒されているのが見えたので、彼はそこで足を止めた。
見ればその殆んどが、ハンドガンなど、フォトン系統で出来た傷を負っている。

・・・・・・・・中々連携が取れているな・・・・・・・・結構手慣れなのか・・・・・・・・？

そう考えていた彼の目に、一箇所だけ妙な傷を負った原生生物が目に入った。

他の傷がフォトンによる、少し焼けたような傷なのに対し、その傷は、まるで日本刀のような洗練された物で切られたようにかなり綺麗に切られた様な物だった。

確かに普通の実体剣で切つてもフォトンのような焼け跡は残らないが、ここまで綺麗には切れない。

注意して見回してみると、他のモンスターにも幾つかこの傷はついており、そのどれもが同じ切り方で、尚且つ致命傷であることから、この傷をつけたのは同一人物で、尚且つかなりの実力者であることが伺えた。

・・・・・・・・こりゃあ、いよいよキナ臭くなってきたぞ・・・・・・・・つて、なんで借金取立てに来ただけなのにこんな厄介事に巻き込まれてるんだらう・・・・・・・・

少し溜息を吐きながらも、このまま放つては置けないと考えながら、彼は足をさらに奥へと進めようとした。

エミリア「あ、いたいた。おーい！・・・・・・・・つて何コレ!？」

少女のこんな声が聞こえてこなければ、たぶんもつと進めていた。

声が聞こえてきた方向に、NT-Xはゆっくりと振り返りながら、喋りかけた。

NT-X「エミリア。ド、ウシ……アレ？ダレ？」

喋ろうと思ったけど無理だった。

ここへ来ていたのはエミリアだけではなく、かなり背の小さい人が二人一緒に来ていた。

???「お、おいエミリア。あいつがお前が探してた奴か？」

褐色の肌を持ったほうが、エミリアに問いかける。子供のような声色ではあるものの、喋り方などからしてどうやら男のようだ。

エミリア「う、うん。そうなんだけど……」

???「にしてもこれだけの数の原生生物をたったの一人で？すこいじゃないか」

もう一つの小さい影がエミリアに喋りかけた。

声の質などからして、どうやらこちらは女の人らしい。

NT-X「アー……イツ、テオ、キマ、ス、ガ、ワタ、シ、ガ、ココ、ニ、キタ、ト、キニ、ハ、ステ、ニ、タオ、サ、レタ、ア、トデ、シ、タヨ？」

そう言つて、NT-Xは彼らに近づいた。
近づいてよく分かったのだが、よく見てみると彼らは背がかなり小さいとはいえ身体つきがかなり人間の成人男性と成人女性にそっくりである。

顔つきも、そのビースト特有の、特徴的な鼻の形を抜けばかなり大人の顔つきである。・・・どこか子供っぽいところが見受けられるものの。

そういつた風に彼らを見てみると、おそらく男性と思われるほうから声を掛けてきた。

???「・・・なんか変な喋り方すんなお前・・・」

NT-X「・・・ゲ、ンゴ、ヲセ、イギョ、スル、プロ、
グ、ラム、ニ、イク、ツ、カ、イ、ジョウ、ガ、アル、タメ、コ、
ンナ、シャ、ベリ、カタ、シカ、デ、キナ、イノ、デス。ス、キデ、
コン、ナ、シャベ、リカ、タジャ、ア、リマ、セン」

少しだけ・・・本当に少しだけ気にしていることを言われて、彼は珍しく声を荒げて訂正した。

いや、実際に声にはそこまで抑揚は無かったけれども、語感を強めたわけではなかったけれども、それでもはつきりと彼は訂正した。ただ、彼自身何故そこまでちゃんとはつきり訂正したのかは分からなかったけれども。

ただ、それを聞いた男性は、悪いことを聞いた、といった感じで謝罪してきた。

表情からして、どうやら本当に申し訳ないと思っているらしい。

……いい人だ。

そう思っていたのも束の間、次の瞬間彼の口から出てきた言葉に、
NT-Xは一瞬絶句した。

???「まあ、そこらへんは置いといて、だ……お前ら、ここに何しに来たんだ？」

……は？

NT-X「エツ……ト……エミ、リア？」

NT-Xが「お前何も言っていないの？」といったような感情を込めてエミリアを見る。

案の定エミリアは顔を逸らした。

……どうやら言っていないらしい。

この調子では、ベルが置いてきぼりにされた上にそのことに気付かれていない、という状況に置かれていることを予想することは容易だった為、事情説明の前に許可を取ってマイシップに通信を入れる。そしたら案の定通信が繋がった瞬間にベルがモニターの向こうで泣きついてきた。

「一人じゃ心細いので早く帰ってきてください」と半泣きになりながら言われたが、これまでの調べから、絶対に早くは帰れないのは容易に想像できたので、とりあえず善処するという旨を伝えてから、彼は通信を切った。

……切れる間に「遅くなったらお仕置きです！」と言われたが、これは覚悟しておくべきかどうなのか……

そんなことを考えながら、説明を待つ二人に向き直る。

さあ、説明開始だ。

事情を説明した後、二人も人探しに同行してくれることになった。

何でもこの二人、トニオ・リマとリイナ・リマは、小ビーストと言う人種の夫婦で、フリーの傭兵をやっているらしく、ここへ来たのも、その依頼の一つのようだ。

そんな感じで彼らは情報交換をしつつ、奥へ進んでいたのだが・・・

NT-X「・・・？」

何故かNT-X以外の三人は、彼の後方で立ち止まっていた。見ると三人の足元には、楔形文字のようなものが書かれている。

NT-X「・・・ナニ、ヲヤ、ツテ、イル、ン、デ、ス
カ？」

トニオ「つて、うおっ！？いきなり話しかけんな！驚くだろが！」

リイナ「と言うよりも、何をやってるって……この先にカーシユ族のトラップが仕掛けてあるんだよ。ここに来る途中で、こんな文字見なかったのかい？」

と言ってリイナは足元にあつたカーシユ族の文字をNT-Xに見せた。

しかし見せてもらった当の本人は頭部センサーや、地面の足跡を追つてここまで来ていた為、おそらくどこかで見かけてはいるのだろうが、どうせ此処の土地を所有している団体などが書いた注意書きのようなものだろうと思つて無視していた。

そのことを三人に説明すると、トニオとリイナは信じられないようなものを見る目でこちらを凝視し、エミリアは地面に向かって、深い溜息を吐いた。

………なんだ？何か俺悪い事言つたのか？

そんなことを考えているうちに、文字の解読は終わつたらしい。

最初に彼が進もうとしていた道から、またどんどん遠くへ進んでいく一行。

途中やつぱり原生生物が襲つてきたが、この4日間でレベルアップしたNT-Xとエミリア。そして彼らよりもずっと前からこの世界で生きているリマ夫妻の前では敵ではなかった。

毒のようなものを撒き散らす花型の生物 ポイズナリリーは、

NT-Xにより地面から引っこ抜かれたあと、彼によって天井付近へ投げ飛ばされ、そこをエミリアのバータで蜂の巣に。

巨大な四速歩行の背びれのあるオオトカゲ ドルア・ゴーラは

NT-Xが尻尾を持ってジャイアントスイングでブン投げた後、次の瞬間彼が手に転送した文字通り見えない剣で切り刻まれる。

空からこちらを狙撃してくる虫のような生物　　ベツガは、NT-Xが持ち出したライフルによって狙撃された後、トニオとリイナのコンビネーションで全部ボロボコに。

ところどころにあつた、爆風や毒を撒き散らす壺に関しては、NT-Xが呐喊して粉碎していった。

NT-X「ッテ、マテ」

此処でようやく彼は何かがおかしい事に気が付き、声をあげた。

トニオ「ん？何だよ？」

彼があげた声に気が付き、トニオがそれに返す。

NT-X「ヨク、カン、ガ、エテ、ミル、ト、サツ、キカ、ラ、ワタ、シ、ノ、タ、タカ、ツテ、イル、ヒ、リツ、ガ、オオ、ク、アリ、マ、セン、カ？」

トニオ「ん？……そう、いえば……そうだな。まあ、一応俺らもちゃんと戦ってるから良いんじゃないかねえか？」

NT-X「……ソウ、イウ、モン、ダイ、デハ、ナイ、デス」

そんな問答をトニオとNT-Xが繰り広げている最中だった。

リイナ「あ、ちょっと皆！次の目印を見つけたよ！」

そう言っただけで彼女が指を指した先には、成る程確かに先程見たあの楔形文字が、壁に大きく彫られている。

トニオ「お、やっと次の目印か。それじゃリイナ、解読頼む」

リイナ「あいよ！えっと、これは……」

リイナがその文字を解読しようとしたときだった。

エミリア「あ。それ、村までの残りの距離を示してあるみたい」

エミリアがそんなことを言い出した。

エミリア「ふーん。なにになに……やった！カーシュ族の村、結構近くにあるみたい！」

そんなことを言っただけで、満面の笑みで壁の文字を見つめるエミリア。しかしその後ろにいる、リマ夫妻の驚いた顔は認識できていないらしい。

やがてトニオがややあつて口を開いた。

トニオ「お、お前、カーシュ族の文字が読める、のか？」

トニオが驚いたような声でエミリアに疑問をぶつける。
続いてリイナも口を開けた。

リイナ「でも、さっきまで読めてなかったよね。一体どういこと
だい？」

エミリア「え、いや、だってさ！ほら！さっきからずっとリイナが
読んでるの後ろで見てたし、そうすれば普通読めるようになるでし
よ！？」

慌てたようにエミリアが答える。

しかし言ってることは、結構無茶苦茶だ。そんなの本当の天才くら
いしか出来そうにない。

トニオ「そういうもんか？少なくとも俺にはさっぱりだぞ？」

エミリアの無茶苦茶な理論を聞いて、トニオがそう呟いた。
それを聞いたエミリアは

エミリア「読めるのよ、普通なの！誰だって、ちゃんと見てれば読
めるようになるもんなの！ほら、分かったらさっさと行こう？カ
ーシュ族の村はすぐそこだって

そういいながら先に進もうとした。

しかし彼女はそこから進むことは出来なかった。

何故なら、

先程の会話にまったくと言って良いほど入ってこなかったNT-Xが、

突然エミリアに覆い被さって、彼女を地面に押し倒したからだ。

次の瞬間、彼の後頭部スレスレをフォトンで構成された矢が通過する。

次の瞬間NT-Xは右手に二本の双剣を出現させると、矢が飛んできた方向へと凄まじい勢いで投擲する。

ズガガッ!!

そんな音とともに、双剣が岩に突き刺さる音がする。

NT-Xはすぐに立ち上がると、自分が双剣を投げた方向に目を向けた。

そこには、黄色を基調とした民族衣装のようなものに身を包み、こちらに向かって弓を構える一人の少年がいた。

その姿を視認した途端、瞬間的にトニオは飛び出していた。

少年に飛び掛りつつ、右手にクローを呼び出して攻撃を仕掛けようとする。

しかし対する少年は落ち着いて自身の正面に召喚陣の様なものを浮かび上がらせる。

そしてその魔方阵からは、右手が大砲のようになった、二つの角を持つ炎の化身が現れた。

それを確認したトニオの体が、空中で一瞬強張る。

炎の化身は、そのまま右手から特大の火球を発射した。

しかし次の瞬間。炎の化身が右手から炎の塊を発射するよりも先に、リイナがトニオに飛びついたおかげで、二人はどうやら射線からは回避できたようだ。

二人は回避した後、NT-Xとエミリアの近くまで寄ってきて、体勢を立て直す。

NT-Xもそれを確認した後、先程投げた双剣　　干将・莫耶を手元に戻した。

少しの間、両者は睨みあったまま、沈黙する。

やがてその沈黙を破ったのは、襲撃してきた少年だった。

少年「お前達、ここから先へは行かせないぞ！！」

少年が吼える。

しかしNT-Xは少年の声を無視して、リイナに問いかける。

NT-X「リイ、ナ、サン。モシ、カシ、テ、カ、レハ……
？」

リイナ「うん。格好や、あのミラージュブラストからして、カーシユ族の人間だと思うけど……」

そう言っつて、リイナは少年を見る。

つられてNT-Xも彼を見た。

服装などは、いかにも民族特有のもので、と言ってるかのように独特のもので、持っている武器もどこか独特の雰囲気纏っている。

トニオ「……で？そのカーシュ族が、なんで俺達を襲ってきたんだよ？こっちはまだ何もしてないぞ？」

そう言つてトニオが少年に問いかける。

しかし少年はさらに表情に怒りを滲ませ、こう言った。

少年「ふぎけるな！村をあんなふうに……これ以上は絶対に許さない！村は、ぼくが守るっ！」

……？村をあんなふうに？……

この少年の叫びを聞いた瞬間に、NT-Xの頭の中で、ここまでの幾つかの出来事が繋がった。

……文化保護区入り口の、多すぎる船。規定ルートを外れた、大多数の足跡。ここに来るまでの、戦闘の痕跡。……まさか！？

そこまで考えたところで、少年が今度は槍で攻撃を仕掛けてきた。

NT-X「……チツ！」

思わず舌打ち（？）してその場を離れるNT-X。

他の面々も、散開して少年を囲むように陣形を組む。

どうやら少年は、次にエミリアを標的に決めたようだ。

一瞬で槍から弓へと武器を交換して、エミリアに向ける。

狙われたエミリアは瞬間怯むも、すぐに地面を転がって回避する。

どうやらこの所フリーミッション三昧だったのが幸いして、咄嗟に回避することが出来たようだ。

エミリアはそのままハンドガンで応戦するも、少年はそれを軽々と避けてそのまま一気に彼女に接近した。が、少年は直後に横から突っ込んできたNT-Xによって彼ごと吹っ飛んだ。

少年は即座にNT-Xを振り離すが、即座にトニオがクローを構えて突っ込んでくる。

少年は手に持っていた弓で彼と切り結ぶが、彼の背後に居たリイナが、カードによってこちらを狙っているのを見て、トニオを彼女のほうへ蹴り飛ばして上手く壁にした。

リイナは蹴っ飛ばされてきたトニオを受け止める為に攻撃を中断してしまい、そこに隙が生まれる。

それを見た少年は口許に笑みを浮かべながら、武器を槍に切り替えて二人纏めて貫こうと突っ込む。

そこへまたしても横から突っ込む影が一つ。NT-Xだ。

少年はそれを見て、今度は当たらないぞと言わんばかりに槍を地面に突き刺しながら方向転換してそれを避けようとする。

しかし突っ込んだできた影は、突然空に飛び上がったかと思うと、手に持っていた双剣を投げ捨てた。

少年が訝しげな顔でそれを見やる。

と、次の瞬間。

ブオオオン！！

そんな音と共に、飛び上がったNT-Xの正面に巨大な二つ折りの

剣だか盾だかよく分からないものが転送されてきた。次の瞬間、転送されてきたそれは、巨大なサーフボードのような物へと変形し、NT-Xを乗せて、そこ等中を縦横無尽に飛び回り始めた。

最初は何事かと思っていた少年だったが、次の瞬間自身の身に起こったことによつて、その疑問は解消された。

突然そこ等中を飛び回っていたNT-Xが、方向を変えて少年へと突撃してきたのだ！

少年は咄嗟のことで、対応が一瞬遅れてしまう。

NT-Xはその隙を見逃さずに、自身が呼び出したサーフボード

SUVウエポン【エアライドクラスタ】で少年をそれへと跳ね上げた後、そのままSUVウエポンから飛び上がり、少年を追撃。

少年と同じ位まで飛び上がった後、そのまま空中で、正拳突きや回し蹴り。アッパーカットやサマーソルトと言った、所謂『空中コンボ』を少年に決めて、最後にオルテガハンマー（！）を食らわして、彼を地面に叩き落した。

……あ、やり過ぎたかも……

因みに少年を叩き落して、自身も地面へと着地した瞬間、彼はこう思ったそうな。

借金取りと少年と【カーシュ族】（後書き）

どうも雑炊です。

まずは一言言わせてください。

……感想が来たぜヒヤッホオオオオウ！！！！
すんごく嬉しいです！

まだ一っただけしか感想貰っていませんが、それでもまさかここで来るとは思ってたので、物凄くテンション上がっています！
こんな作者ですが、これからもよろしく願います。

さて、それでは今回の対談ですが……すいません。
この期に及んで、こいつしか呼べませんでした。

NT-X「こいつってなんだよ。こっちだって仕事の最中に来てやつたんだぞ」

うるせえ。本来だったら、ここにトニオさんや、リイナさんと呼ばうと思っただけど、よく考えたら、あの二人、まだこの時点で二人ともリトルウイングに入社してなかったから、呼ぼうにも呼べなかったんだよ！

NT-X「知るか！！つーか他にも居るだろ！クラウチさんとか、チエルシーとか！」

ひろしは呼ぼうと思ったけど、どうやら仕事が溜まってたみたいでこっち来られず、チエルシーは言わずもがな、お店のことで忙しいらしい。

NT-X「ひろしって何だ！？ひろしって！？」

声優ネタだ。あまり突っ込むな。とにかく対談するぞ。

NT-X「あいよ……そういえば、このあとがきの時系列がどこら辺だか分からないって、この間お前の妹が言ってたが、実際にこの空間って何時ぐらいなんだ？」

んーそういえば言ってなかったな。まあ、大体エピソード1終了時くらいかな？

NT-X「成る程。で、今回俺が使っていたあの武器のことだが……」

実際ゲームでも序盤から使えるし、タグにも入れてあるから大丈夫……だと思っ。

あと、お前がこの武器を手に入れる事になったあの事件に関しては、次の番外編で一氣にやろうと思っ。

NT-X「ああ、あれか……今にして思えば、ある意味ではいい経験になったのかな？」

エミリアにとっては災難以外の何物でもないがな……と、言うわけで今回はここまで。

あとは次回のあとがきで一氣にするぞ。

NT-X「お、分かった。それじゃ、次までに溜まった仕事を何とかしますかね……と。んじゃ」(フェードアウト)

ん、じゃな。それでは俺もこれで。それではまた次回(フェードアウト)

炎と黒衣の剣士と【機動戦士の亡霊】（前書き）

9話目です。

今回は別名【作者大暴走回】と言います。

それでは本編をどうぞ

炎と黒衣の剣士と【機動戦士の「霊」】

前回までのあらすじ

NT-Xがカーシユ族の少年に空中コンボを決めて、ボコボコにしてしまいました。まる。

とりあえず現状を整理すると、

エミリア・・・・・・・・少し消耗しているもの無事。

トニオ・・・・・・・・先程の炎で服の先っちょが少し焦げているが無事

リイナ・・・・・・・・トニオと同じく

NT-X・・・・・・・・無事。と言うよりも無傷。消耗も一切していない。

カーシユ族の少年・・・地面に叩き落された後、リイナがチェックしたところ、ここに来る前に既に怪我を負っていた様子。そこへ激しい運動と同時に、NT-Xの空中コンボが決まったことにより、元からあった傷がさらに酷くなって重傷。

ユ、ダ、ン、ト、シテ、ノ、キノ、ウシ、カ、ナイ、ノデ、ソソ、
ナ、モノ、ハ、ナイ、デス」

トニオ「そしたら、俺達の船には置いてあるから、治療するなら俺達の船でやるしかないな。ただ・・・」

そう言つて、トニオは考え事をするように顔を伏せ、その次に目を奥に向ける。

それを見たNT-Xは、彼が何を言いたいのかを察して、一応声に出して確認を取った。

NT-X「・・・カー、シュ、ゾク、ノ、ムラ、デス、ネ？」

トニオ「・・・ああ。こいつが言っていたことも気になるし・・・」

そう言つてトニオは少年を見る。

NT-X「・・・デシ、タラ、ソツ、チハ、ワ、タシ、ニ、マカ、
セテ、ク、ダサ、イ。キ、ニナ、ル、コト、モ、ア、リマ、スシ・・・」

NT-Xがそう言つて、視線を少年から地面に移す。

先程の戦闘によって、所々途切れているものの、足跡はまだまだ先へと続いていく。

・・・もし、さっきの予想が当たっているとしたら・・・

そう考えてから、NT-Xはエミリアに向き直つてこう言った。

NT-X「・・・ト、イウ、ワケ、デ、エミ、リア。キミ、ハ、コ

ノ、ママ、フタ、リ、ト、イツ、シヨ、ニ、フネ、ニ、モド、ツテ
「嫌よ」……………」

エミリア「あのねえ。アンター一人にすると何仕出かすか分かんないし、第一あたし達はこれでも一応パートナーなのよ？それに、一人よりも二人のほうが心強いでしょ？」

そう言っつて、胸を張ってこちらを睨むエミリア。

そのまま両者は少し睨みあっていたが、やがてNT-Xが

NT-X「……………アブ、ナク、ナツ、タラ、スグ、ニ、ニ
ゲ、ル、コト。イイ、ネ？」

そう言っつて折れた。

それに対してエミリアは、

エミリア「うん!!」

と言っつて、強く頷いた。

トニオ「んじゃ、決まりだな。こいつを置いたら、俺達もすぐに追いつけるように努力する」

リイナ「二人とも、気をつけてね」

NT-X「リヨウ、カイ、シマ、シタ。オフ、タリ、モ、キヲ、ツケ、テ」

トニオ「安心しろ。お前らと同じで俺達も早々やられねーよ!」

そう言って、二人は少年を抱えて、今来た道に戻っていった。

その後、二人だけで奥へと進んでいたNT-Xとエミリアだったが、ドンケツでバグ・デツカというトリケラトプスの顔面を岩にしたような原生生物に襲われて、少し苦戦した以外は特に何事もなくカーシュ族の村へと進めていた。

そしてカーシュ族の村付近に近づいたときに、それは彼らの視界に入った。

それは炎。

それはまるで森全体を焼き尽くしてしまうのではないかと思えるほどの、大きな炎の大群。

それは、木々の間から見える、集落のような場所を全て焼き尽くし

てしまいそんな炎の渦。

・・・・・・・・ん？集落のような場所？

NT-Xは、ハツとしてエミリアを見る。エミリアのほつも気付いたようで、その目に焦りの色を浮かばせている。

・・・・・・・・火の手が上がるとしたら、そこには燃える物がなければならぬ。そして足跡はあの集落のような場所のほうへと続いている。ここから導き出される答えは

次の瞬間、NT-Xとエミリアは弾かれたように飛び出した。

NT-X「エミリア、イソ、ゲ！」

エミリア「了解！」

二人が集落の近くに辿り着いたとき、既に周囲の建物のほぼ全ては、炎によって全焼していた。

まだ僅かに原形を留めている物もあるが、どう考えても以前と同じように使えるとは思えない。

エミリア「何・・・これ・・・？酷すぎる・・・」

集落の惨状を見た瞬間、エミリアは思わず口から言葉をこぼした。しかし、一緒に居たNT-Xはまた別のことを考えていた。

「・・・センサーによると、逃げ遅れた人影は無し。けど、臭気センサーに少しの肉が焼ける匂いなどが混ざっていることから、襲撃時にやられた人たちはそのままか・・・冥福を祈りたいが、こんな状況ではやり様がないな・・・それ以外では動体反応もないし、集落の外れにさっきの楔形文字が、チラッと見えたから・・・襲撃されたのと同じくらいで、大多数はもう逃げ出していたのかな？・・・問題はあそこの・・・」

視線を正面。集落の中央に向ける。

エミリアもこちらの様子に気付いたのか、つられてそちらを見た。

「・・・見れば怪しげな一団が、集落のど真ん中でなにやら固まって黒い服を着た男の話を聞いている。」

人数はNT-Xが予想していた通り、ざっと20〜30人ちよい・・・その中には、探していたワレリーという男もいる。

エミリアがそのことに気付き、声をあげようとしたがNT-Xに手

で遮られる。

不満そうな顔でエミリアが彼を見るが、当の本人は今それ所ではない。

少しあの一団をサーチしてみたが、黒い服を着た銀髪の男を除いてほぼ全員の様子がおかしい。

まるで意識が無いかのように目は虚ろだし、男が喋っているのを聞いても、誰もそちらに反応すらない。

NT-Xが近くの小石を拾い、跳弾を利用して一団の中の一人の顔面に当ててみるも、それにすら反応しない。

・・・それを考えてみると、一人で喋っているあの男がなんだか哀れに思えてきた。

だって何喋っても、誰も一切の反応を返してくれないのだから。

せめて頷いてやるとかしてあげられないのだろうか・・・

そんなことを考えているNT-Xの肩をたたいて、エミリアがこう耳打ちしてきた。

エミリア「ねえ・・・そろそろ出て行ってあげない？ なんだか可哀相になってきちゃったんだけど・・・」

誰が、とは言っていないのは、きっと彼女の優しさだろう。

少し頭をなでて、褒めてあげることにした。

そんなことをやっている途中に、NT-Xは黒服の男が持っていた赤い下敷きのようなものに気がついた。

・・・何だろう？

頭部のカメラを望遠モードにして、よくそれを観察する。

どうやら根元の赤く光る、丸いボタンのようなものから出てくるらしいが……はつきり言って、何か地図だか座標みたいなものとかが書いてあるのが辛うじて分かるが、それ以外は何が書いてあるのかはチンプンカンプンである。

そのうちに、男の喋りは佳境に入ったようで、こんな感じで締めくくった。

男「悲願への道はこれで開かれた。貴様達にもう用はない。いずれなりとも自由に去るがいい！」

……再び言うが、それを聞いても、彼以外は何のアクションも起こさない。

ただ虚ろな目でポーッと地面を見ているだけだ。

それを見て、NT-Xは頭を抱えてうつむいた。エミリアも顔を手で覆って崩れ落ちている。

はつきり言って、可哀相でもう見ていられない。

しかし、喋っていた当の本人はすごく満足したのか、晴れ晴れとした顔でその場から離れようとしている。

……って!!

NT-X「マ「ちょ、待ちなさいよ!」テ……」

勢いよく飛び出そうとしたが、エミリアが先にハンドガンで男に発砲してしまった、

撃たれた男は、身を翻して弾を避けると、怪訝そうな顔でこちらを向いた。

男「・・・何者だ？」

振り向いた姿をまじまじとよく見てみると、男は結構特徴的な格好をしていた。

黒いコートに黒いズボンに黒いガントレット。

コートの下は裸で何もつけてはおらず、コートのボタンは前全開。

羽織っている服には、全体的に赤い色の光るラインが奔っている。

髪は銀色で、赤い瞳。

肌の色も白く、一瞬アルビノかと思ってしまうほどだ。

さて、ここまで説明しても、よく分からない人もいるかもしれないので簡単に説明するとこんな感じだ。

・・・・・・中二病の末期患者。

そんな感じだった。

エミリア「それよりも、これ、全部あんた達がやったの！？一体なんでこんなこと・・・」

エミリアが男に対してそんなことを叫ぶ。

しかしよく見てみれば、その口許はヒクついており、明らかに男に引いているのが分かる。

どうやら湧き上がってきた感情を誤魔化すために叫んだらしい。

しかし対する男は、そんなこと気にも留めず、その顔に嘲笑を浮かべてエミリアの問いに答えた。

男「ふん、消え行く存在に何を言ったところで、無駄にしかならんな」

それを聴いた瞬間。思わずNT-Xはエミリアに目を向ける。(とは言ってもカメラを少しずらしたただけだが)

ミカはまだ出て来てはいないようだが、あの男の口ぶりから察するに、推測ではあるものの、彼女と間接的にでもなんらかの関係はあるものと思われる。

エミリア「ちょ、ちょっと何よ！その『消え行く存在』って!?!」

エミリアが男の言葉が理解できず、再び男に問いかける。

しかし男はその顔に嘲笑を浮かべたまま答えようとはしない。

それどころか

男「文句を唱えるというのなら、その脆弱な力で遠慮なく刃向かってみるが良い。それとも」

そう言つて、右手に赤い日本刀のような武器を出現させて

男「文句など考えられぬようにしてやろうかッ!」

エミリアに襲い掛かった!!

そのスピードは尋常ではない。

故にエミリア一人だけであれば、彼女は今頃物言わぬ死体と化していただろう。

・・・しかしここにいたのは、彼女だけではない。

突っ込んで切りかかってきた男の横から、青い影が突っ込む。

男はそれを確認した瞬間、余裕でそれをかわす。

しかし次の瞬間、男は得体の知れない悪寒を感じ、反射的に剣を構える。

ガキイン！！

何かが剣に当たった。

しかし突っ込んできた影　　NT-Xはその手に何も持っていない。
　　NT-Xはその手に何も持っていない。

どういうことなのか　　男は一瞬思索するが、次の瞬間突っ込んできたNT-Xと切り結んだ瞬間、その疑問は晴れることになった。

男と切り結んでいる機械人形がその手に持っているもの　　それは何かに包まれた文字通りの見えない剣であった。

男はそれを認識した瞬間、背部に多数の剣を出現させ、その衝撃波でNT-Xを吹き飛ばす。

だが吹き飛ばされたほうも負けてはいない。

吹き飛ばされた瞬間に、頭部から二門の小さな銃口を出現させ、そ

これから多数の実弾を発射した。

それを見た男は、瞬間怯むも、すぐに体勢を立て直して、飛んできた銃弾を切り捨てながらNT-Xに迫る。

負けじと彼も、頭部のバルカンを発射しながら、男に突っ込む。

両者の剣が交錯し、再び拮抗する。

が、次の瞬間男はNT-Xの腹に蹴りを入れる。

NT-Xも少し吹き飛びながら、男の顔面に回し蹴りを打ち込む。

吹き飛ぶ両者。しかし先に動いたのは男のほうだった。

空中で体勢を整えた男は、そのまま両手に二振りのダガーを出現させると、NT-Xに投げつけた。

投げられた鋭利な刃物は、着地して体勢を整え終えたNT-Xの右腕と左足を貫通し、背後にある岩に彼を縫い付けた。

男はそのままもう二本、剣を出現させ、残った左腕と右足に、それを突き刺す。

岩に縫い付けられて身動きが取れなくなったNT-Xを忌々しげに睨みながら、男は剣を一本出現させ、止めを刺さんと彼に近づいていく。

その途中、男の足元に、ゾンデが飛んでくる。

煩わしげに男がそちらを向くと、エミリアがロッドを振り下ろした状態で固まっていた。

それを見た男は、目の前の機械人形はもういつでも壊せると考え、そちらに向かった。

一瞬でエミリアの前まで移動する男。

そのまま手をエミリアに向けて、そこから変な光を放つ。

エミリアは恐怖からか、体が震えて動けそうも無い。

エミリア「や、ヤダ……嫌……」

男「まずは……貴様からだ」

男がそう呟くと、手の光がいつそう強くなる。

エミリア「イヤアアアアアアアアア！」

エミリアが叫んだ。しかしもう助けしてくれるのは誰もいない。

そう彼女が思い、目を閉じた瞬間だった。

金色の光が彼女を覆うと同時に、

目の前の男が吹っ飛んだ。

横に。

小さなものに突っ込まれて。

エミリア（いや、今はエミリアの体を借りたミカか）と、吹っ飛ばされた男は揃って男の体に突っ込んだものを見る。

それは腕だった。

青と赤の、キャストの腕が男の脇腹に突き刺さっていた。

男が忌々しげにそれを手にとって投げると、腕はまるで磁石に引き付けられるかのようにある一点へと戻っていく。

二人がその先に目を向けると、

そこには、

さっきまで岩に磔にされていた筈のNT-Xが、

肘から先が無くなった右腕をこちらに向けて、

こちらへ歩いてきていた。

男は何が起きているのか分からなかった。
先程まで、この仮初めの体ではあるものの、強大な力を持っている自身と、ほぼ互角に戦っていた忌々しい機械人形は、先程自身があの岩へと礫にした筈だった。

それが今はどうだ？

いつの間にかあの戒めを脱出し、自身に向かって一撃を入れているではないか！

男の心に激しい怒りが生じる。

生まれたそのときから、弱者を従えるものとして育ってきた男にとって、たった一撃とはいえ入れられた拳句、そのまま地面に倒されたという事実は、男のプライドをいたく傷つけるものだった。

……破壊せねば……！

男はそう心に決めた。

この機械人形を完膚なきまでに破壊した上で、その亡骸の前でこの小娘を殺さねば、この腹の虫は治まることを知らぬ……と。

男が剣を構える。

対する機械人形は、飛ばした右手を元に戻した後も、フラフラとこちらへと近づいてきている。

その姿には警戒心のかけらも無い。

それを見た男は、手に持った剣を構えて、一気に突っ込む！

……貫った！

そう男が確信した瞬間、男の視界は真っ黒に染まった。

男が自身に起きたことを理解する暇も無く、男の頭部に激痛が走る。その瞬間男は自身の頭が掴まれていることを理解した。

しかし男がそれを理解して間もなく、男は投げ飛ばされた。

地面に着地した男が、怒りを全開にした鬼の形相で、自身を投げ飛ばしたであろう機械人形を見る。

その瞬間、男の思考は一瞬停止した。

男とエミリアがそれを目にした瞬間に頭に浮かんだのは、奇しくも

それはまるで、自身を閉じ込めていた袋を吹き飛ばすかのようにして出てきた。

それが出てきた余波で、先程までNT-Xを構築していた様々なものが、吹き飛んで木っ端微塵になる。

それは白と黒を基調とした体を持っていた。

額の黒い水晶体から生えている4本の角は、外側の二本は白く、内側の二本は黄色い。

その目は、元の姿と同じく緑色に二つ光り、その背には機械的な羽と共に、4つの白いキャノン砲と二振りの大剣を携えていた。

しかし、その顔の左側には、まるで何かで切られたような裂傷があり、左目からは、カメラのレンズが剥き出しになっている。

体の所々は、壊れて砕けて、その傷を鈍色の装甲板で無理矢理塞がれている。

その両手と、背中にマウントされている大剣にいたっては、まるで人でも切ったかのように赤黒い何かがベツタリとこびり付いている。

例えるならばその姿は、地獄から甦って来た悪鬼といったところだろう。

鬼は少しの間周囲を見回していたが、やがて標的を見つけたのか、少しはなれたところにたっていた男に体を向けると、背中のバーニアを全開にして男に突撃して行った。

それを見た男はすぐさま横っ飛びで退避する。

しかし、鬼は直角に方向転換すると、一瞬で男の前に飛び出してくる。

そしてそのまま背中の大剣を一本取り出すと、そこにビームの刃を奔らせて、男に振り下ろした。

男はそれを見た瞬間、先程NT-Xを吹き飛ばした波動で、鬼を吹き飛ばそうとした。

しかしそれで吹き飛んだのは、大剣に奔っていたビーム刃のみで、ビームの消えた大剣は、そのまま男に振り落とされた。

激痛が男を襲う。

鬼はそのまま大剣を振り回し、男を彼方へと吹っ飛ばした。

……そのまま何分が経ったのだろうか。

周りの集落は、全て焼け落ち、所々もう鎮火して、黒煙を上げていくだけになっている所もある。

エミリアの体を借りたミカは、そのままずっとNT-Xの中から現れた鬼を見つめていた。

今のところ彼女達に敵意は向けていないものの、何時こちらに向かってくるのかは分からない。

……故に警戒するに越したことは無いと彼女は考えていた。

対する鬼は、男を投げ飛ばしてから、ずっと空を見上げていた。

1分か5分か、それとももっと長い時間か……

・

そのうち鬼の体に一瞬だけノイズのようなものが奔る。

次の瞬間、鬼は一瞬で元のNT-Xへと戻った。

NT-Xはそのまま空を見上げて微動だにしない。

と、次の瞬間、

ズシャア……

と、そんな音を立てて彼は倒れた。

同時に後方から、

「おーいい！！大丈夫かー!?」

という声も聞こえてきている。

ああ、これなら大丈夫だ。

そう考えたミカは、後のことをトニオたちに任せて、眠りについた。

トニオたちが、カーシュ族の村に辿り着いたとき、そこは予想以上に凄惨な状態になっていた。

周囲の建造物は、殆んどが焼け落ち、カーシュ族らしき人影はまるで見えない。

その代わりに、集落の中央の少し開けたところに、エミリアが。その少し離れた所にNT-Xが気を失って、倒れているのが見え、さらに離れたところには、この惨状を作り出したのであろう集団が呆然とした表情でそこに佇んでいた。

トニオ「こりゃ一体……おい！エミリア！どうした一体何があつた！？」

そう問いかけるが、エミリアは依然として、少し呻き声を上げるだけで目を覚まそうとはしない。

リイナ「トニオ！こつちもやばいよ！」

そんなリイナの声が聞こえ、トニオはそちらに目をやる。

そこには体中から火花を散らして倒れているNT-Xが見えた。
トニオはエミリアをリィナに任せて、すぐにNT-Xの近くに寄った。

トニオ「おい！大丈夫か！？俺の声が聞こえるか！？おい！」

トニオが声を掛ける。

すると、NT-Xの目が、少し光を持った。

NT-X「ギ……ト……ギガ……ト……ザザ……ギ……ニ……ギ……」

NT-Xからノイズのような、機械がきしむような声上がる。

トニオ「おう、分かるみてえだな。とりあえずここで何があったのか「トニオ！あいつらが！」……ってあ、おい、お前から待て！」

見れば先程まで呆然としていた集団が、クモの子を散らすように慌てて走り去っていくのが見えた。

トニオ「逃がすか！」

そういつて追いかけようとしたトニオを、上手く動かない体を何とか動かしてNT-Xは引き止めた。

トニオ「おい！なにするんだ！？」

NT-X「ギ……カ……レ……ギキ……ラ……オウ……ヨ……ギ……モ……オウ……エ……ギギガ……ヨ……ギ

ギ・・ブ・・．．．．．ザザ・．．．．．ベ・．．．．．ザー・．．．．．」

トニオは一瞬訝しげな顔をするも、NT-Xの指が周囲を指しているのを見て、彼が何を言いたいのか汲み取ったようである。

トニオ「ちつ．．．まあ、何人かの顔は覚えたし、後で手配書でも回しておくか」

彼はそう言っつて、今度はエミリアのほうへ向かう。どうやらこっちは大丈夫と判断されたらしい。

NT-Xも、自己修復機能が効いてきたのか、やっと立ち上がれるくらいまで回復し、ゆっくりとではあるが、エミリアのほうへ近づいていった。

そのときである。

ピピピッ。ピピピッ。ピピピッ。

そんな音と共に、自身の携帯端末に通信が入ってきた。出てみると、案の定クラウドからの通信だった。

クラウド『おいおいおい！ワレリーの船の反応が遠去かってんじやねエか！逃がしてんじやねエ！きっちり取り立て．．．．．っておい！一体どうした!?!』

最初の方はただ文句を言うだけだったクラウドが、こちらの状態を確認した途端に困惑した声をあげる。

無理も無い。なぜなら今のNT-Xの見た目は、自己修復機能が働いているとはいえ、体中から火花が上がり、アーマーには亀裂が入

り、人工皮膚には切られた様な痕が多数あるからである。

NT-Xはとりあえず現状を伝える為、ノイズ交じりの声でクラウチと会話を試みた。

しかし寸前で、トニオに通信機をひったくられた。

トニオ「悪いが、今コイツはまともに喋れない状態なんだ。代わりに俺が受け答えさせてもらうぜ」

クラウチ「ああ？手前一体誰だ？」

トニオ「まあ、ちよつとの間こいつらに同行した、フリーの傭兵だよ。それよりも、こっちは今不味いことになってるんだ。御宅のエミリアが氣イ失って倒れている上に、NT-Xの奴は全身ボロボロで、今にもぶつ壊れそうな感じなんだ」

クラウチ「なんだと！？つたく・・・おいNT-X！ホントに一体何がありやがった！」

トニオ「まあ待てつて。とりあえず二人はこんな感じだから、今からそっちに急いで返す。探し人に関しては、そっちで何とかできねえか？」

そう、トニオに言われたクラウチは、少し考えた後、

クラウチ「・・・分かった。そしたらNT-X。お前さんはエミリアとベルを連れて、急いでこっちに戻って来い。詳しい事情はこっちで聞く。ワレリーの奴に関してはこっちで捕まえておくから心配すんな。「あ、あともう一つ」・・・なんだ」

トニオ「実はここまで来る途中で、怪我をしたカーシュ族のガキを

見つけてな。ついでなんだが、そいつもそつちで預かっといてくれねえか？」

クラウチ『ハア？何でそんなことまで』こいつらがこうなったことに、かなり関係していることだ。頼む』……………はあ、分かったよ。そんじゃそいつも一緒に連れて来い』

トニオ「すまねえ」

そう言つて、クラウチとトニオはお互いに通信を切った。

トニオ「……………よし。そんじゃ船に戻るか。エミリアの奴は俺達で連れて行くからお前は「マアアスウウタアアアア！！！！！」……………あいつに手伝ってもらいながら帰れ」

そんな叫び声が聞こえたほうへ、NT-Xが目を向けると、そこにはベルが半泣きになりながらこちらへ全力疾走しているのが見えた。

トニオとリイナに助けを求めるように目を向けると、二人とも苦笑いをしながら、目で「がんばれ」と言いつつ、エミリアを担ぎ上げていた。

……………どうしたもんかなー！

そう思いながら、再びベルを見る。

……………でも、こんな厄介事だったら、まだ可愛いもんか。

そう思いながら、彼はこれからどうやって、この小さな女の子の機嫌を直そうか、と考えていた。

さっきまでの張り詰めたような空気と、何かが焼けるようなにおいは、もうしていなかった。

炎と黒衣の剣士と【機動戦士の亡霊】（後書き）

どうも雑炊です。

9話目です。

作者大暴走です。

………マジごめんなさい。

いえ、前々からこいつは出そうと思っていましたよ。

ただ、出し方はこんなじゃなくて、ターミネーターシリーズのT-1000とか、T-Xみたいな感じに変わらせようと思っていたんですよ。

ところが作業中に聞いていたある曲が、私の頭に影響してしまいこんなことに………本当にすいません。

と、言うわけで、今回のゲストはエミリアと、毎度おなじみNT-Xです。

エミリア「うーっす！」

NT-X「どうも………」

はい今回も来てくれてありがとう二人とも。

NT-X「いや、それはいいんだけどさ……トニオさんと、リイナさんはどうしたよ？まさか………」

うん。前回と同じ理由。

NT-X「やっぱり……………」

まあ、そこらへんは無視して、解説いきましょう。

エミリア「んじゃ、まずはあたしからね。とりあえず前回のことがらなんだけど、コイツが着てたカクワネの気ぐるみって何時手に入れてたの？」

それに関しても、次の番外編で一気に。こんな感じですね。

NT-X「じゃあ、次は俺だな。SUVウエポンが前回出てきたけど、あれは何であれにしたんだ？」

当時俺のマイキャラが使っていたのがあれだったから。以上！

エミリア「じゃあ次は、今回コイツが変わったアレについて。アレって何だったの？傍から見ると、結構やばいでしょ。アレ」

一応あれが最大の伏線。本作の最強キャラと言ってもいい存在。もう一つのほうの小説で、終盤に出そうと思ってた奴。

NT-X「あれ？お前向こうでは、『その機体がまだこっちのほうでちゃんと出てきてないから、書こうにもかけない』って言ったみたいけど……………」

向こうでその原型になった機体が出てきたからもういいかなって。つかたぶん話数的にも、更新速度的にも、あっちよりもこっちのほうが早く出そうな感じだったから、仕方なく……………」

エミリア「……………出すことになったのね」

でも見た目は、向こうで出そうと思っている奴よりもかなり変えてあるから、こっちのは、向こうのとは別物として考えちゃっていいかも。

NT・X「いいのかよ、それ・・・下手したらこっちよりも、向こうの小説をメインにしたほうがいいんじゃないのか？」

不謹慎なことを言うな主人公！！とりあえず、こっちもだんだんと構想固まってきたから、たぶん三章くらいまでは大丈夫だと思
う。

エミリア「それ以降は？」

・・・・・・
ウト

エミリア「あ！！逃げた！！」

NT・X「逃がすなエミリア！！追っぞ！！」 (フェードアウト)

エミリア「うん！！」 (フェードアウト)

事後報告と新入社員な先輩と【メモリーその1】（前書き）

遅れてしまいました。最新話でございます。
今回からちよっと書き方が変わります。
では本編をどうぞ。

事後報告と新入社員な先輩と【メモリーその1】

グラール星系より遙かに離れたとある銀河。

そこに在るとある星の傍のコロニーで、“それ”は戦っていた。

四方八方から襲い掛かる剣、銃弾、ビームetc.....

.....

一斉にこちらへと向かってくる攻撃を“それ”は全て軽くないなした上で、その攻撃を出所を背中から抜き放った光の剣　　ビームサ
ーベルで全て薙ぎ払った。

ビー！

終了を告げるアラーム音が鳴り、“それ”の視界に『状況終了』の文字と共に、全ての模擬戦が終了したことを告げるメッセージが表示される。

.....これで今のコースのクリア数は、78096回目だな。
流石にここまでになると飽きが来るか.....

そんなことを考えながら、“それ”はコロニーのメインシステムにアクセスする。

もともとこのコロニーの支配者である彼にとって、これ位の事は造作も無いことだ。

メインシステムにアクセスし、その膨大なデータを閲覧し始めた彼は、とあるデータが更新されていることに気付いた。

.....これは少し前に放出した“あれ”のデータか。更新されているという事は、どうやら起動したらしいな.....

そう考えて、更新されたデータを閲覧していく“それ”。
少し見ていると、どうやら目当ての物を見つけたようだ。

．．．．．フム。スヴァルティアにデイ・ラガン。バグ・
デッカにスヴァルタス．．．．それ以外にも、中々興味深いデー
タが集まっているな．．．．ム？リミッターが一部解除されてい
る？あれは確か、戦闘中に各部の損傷が一定を超えると外れるよう
に設定しておいた筈だ．．．．それにリミッターが掛かっ
ても、それなりに強く改良したつもりだったが．．．．

面白い。

そう考えた“それ”は、メインシステムを経由して、そのデータを
収集してきた個体の中に在るコンピュータにとある指示を出した。
その内容は『段階的にリミッターを解除せよ』、と言うもの。
モニターに『Approva1』という文字が表示され、命令が実
行されたことが確認されると、“それ”は今開いている所のデータ
を使って、新たな模擬戦コースのデータを組み始めた。

データ構築が終了し、早速メインシステムに新たな模擬戦コースの
データを実行させる。

すると、模擬戦開始を知らせるブザーが鳴ると共に、先程まで何も
無かった空間に、突如としてバグ・デッカ二体と、デイ・ラガンが
一体出現する。

それらを見た“それ”は、満足そうに頷くと、手元に巨大なギター
ケースのようなシールドと、エレキギターを模ったような大型のラ
イフルを出現させて、それらに突っ込んでいく。

デイ・ラガンにライフルから放ったビームを直撃させながら、“そ
れ”は思った。

「ね、でもまた当分は遠征にはならなくて済みそつだ。」

と。

「……………!!……………!!……………」

……………誰だろう……………誰かの声がする……………

「……………きなさい!!……………!!……………よ……………!!……………」

……………懐かしい……………誰だっけ?……………

「……………もう!こうなったら……………!!……………」

……………聞いたことがある。確かこの人は……………

「……………起きなさい……………!!早く起きないと……………おじさんにごぶつ飛ばされるわよ!!……………」バサツ!!……………」

……………!?!?布団がベッドごとひっくり返った!?!?

「うええええ!?!?!?(ドガッ!)……………痛っ!……………」

……………いつてえ……………

「何するんだよ母さん!!今日は休みだろ!よりもよって日曜!……………」OK!……………」

・・・・・・・・・・そう、そうだ。この人は母さんだ。懐かしい
・・・・・・・・・・?

「何が『よりもよって日曜！OK!?』よ!?馬鹿言ってるじゃないの！例え休みだからって、こんな時間まで寝てて如何すんの！
?時計見てみなさい!！」

・・・・・・・・懐かしい?おかしいな?いつも会っている筈なのに、
なんか今日はとても長い間会ってなかった気がする・・・・・・・・

「んだよチクシヨー・・・・・・・・って、もう12時だと!?うおおお
おおおお!?やっべえええ!!もうすぐおじさん来るじゃん!!な
んで起こしてくれなかったのさ母さん!？」

・・・・・・・・あれ、おじさん?おじさんって誰だ?いるのは分かる
けど、名前が思い浮かばない・・・

「何度も起こしたわよ!それこそ7時から30分ごと!ほらほら
さっさと着替えなさい!!着替えたら下に朝ご飯置いてあるか
ら軽く食べちゃいなさい。そしたらすぐにお昼ご飯だからね」

・・・・・・・・あれ?今母さんは俺のことをなんて呼んだ?上手く聞
こえなかったけど・・・・・・・・

「ねえ母さん」「? どうしたの?」

・・・・・・・・まただ。また上手く聞こえなかった・・・・・・・・

「……………なんでもない」

「……………変な子ね『ピンポン』って、おじさん来ちゃったわ。しようがないわね。あなたお昼と朝ご飯一緒に取っちゃいなさい。いいわね？」

「あ、うん。分かった」

そう言っつて、俺は自分の部屋を出て、下のリビングへと降りようとした。

すると……………

ポタッ

……………？あれ？涙？

「？ 何で俺泣いて……………!?」

そう思っつた瞬間、周りの景色がひび割れて、黒い何かで塗りつぶされていく。

いつの間にか自分の体もだんだんと輪郭がぼやけていく。

……………なんだこれは！？何が起こっているんだ！？

あれよあれよと思っつているうちに、いつの間にか俺の体は人ではない何かに変わつていた。

白を基調とした腕と足。黒を基調とした体。
ふと顔を正面に向ける。

そこには廊下に飾ってあった鏡だけが残っていた。
でも、

そこに映っていたのは、

人間である筈の　　ではなく、

額から4本の角を生やした、

白と黒を基調としたロボットが、

こちらを見つめていた。

・・・・・・・・・・なんだこれは？何だこれは！？

そう思いながら俺は頭を抱えて蹲る。

もう何が何なのだか分からない。

もういつそのままこの闇の中に溶けていきたくなる。

『・・・・・・・・・・スター。マスター！』

突然声が聞こえてきた。

でも誰の声だか分からない。

一体誰の声だろう・・・・・・・・・・

『マスター！起きてください！クラッド6に着きましたよ！ほら起きてー！』

・・・マスター？一体誰のことさ？それにクラッド6？それって一体？・・・

そう思った瞬間。

俺の周りがぐるりと回転し、俺はそのまま下へと落ちていった。

ハ・・・メモリーの再生を確認・・・記憶領域及び各部リミッターを、ファーストフェイズまで解除します・・・

「……………スター！マスター！！起きて下さい、マスター！！」

……………ん？むう……………んん？

「ムニョ……………?」

「ああ、やっと起きてくれました。大丈夫ですかマスター？クラッ
ド6に着きましたよ」

どうやらいつの間にか眠っていたらしい。変な夢を見たような気が
したが、今はあまり関係ない、と割り切ったNT-Xは、自分を起
こしてくれた少女に顔を向けた。

「……………ベル？」

「ああもうビックリしました。マスターったらマイシップに着いた
途端に倒れて眠っちゃうんですもん。魔うまされていたみたいですけど、
大丈夫ですか？」

……………そう言われたら、だんだんと頭がハッキリしてきたな。
確か、ワレリーはこっちで何とかするってクラウチさんに言われ
てから、途中までトニオさん達と一緒に戻ってきて、マイシップに
着いたときに分かれたんだよな……………って！

「エミリア！ブジブエツ！？」

NT-Xがエミリアに駆け寄ろうとするが、彼女は右足を前に出してNT-Xの顔を蹴り飛ばした。

そのまま横向きに飛んで行き、近くの椅子にあたって止まるNT-X。

そのときの当たり所が悪かったのか、彼はそのまま悶絶しながら床を転がり始めた。

「…………ナ…………ナニヲ、スルノ、デスカ？エミリア、サン？……………」

まさか心配していた人間に、出会い頭で蹴りを打ち込まれるとは思っても見なかったNT-Xは、暫く地面を転がっていた後、やっと痛みが引いてきたのかうつ伏せの状態にエミリアに非難の声をあげる。

しかし対するエミリアは、無然とした表情でこう言った。

「あのねえ。心配してくれるのは嬉しいけど、それでテンパッて周りの人に迷惑掛けられたら流石にこつもなるっーの……………」
「つと、ベル。大丈夫？」

そう言いながら、先程NT-Xに揺さぶられすぎて目を回したベルを気遣うエミリア。

ベルはそんなエミリアに対して、「らいじょぶれえええす」と言いながら何とか立ち上がるうと奮闘している……………あ、今よろけてこけた。

直後にエミリアが視線だけで「アンタも何とかしろ」と言ってきたのを察知したNT-Xも、慌ててベルの傍に近寄って声を掛ける。

「エト……ベル。ゴメンネ？ダイジョウ、ブ？」

「あ、ますた〜。らいじょぶれすよ〜。こうみえてもわたしたちPMってがんじょーにできてますから〜」

そう言いながらガッツポーズをとるベル。しかし彼女が顔を向けているのは、NT-Xとエミリアとは反対方向にあるマイシップの壁である。

……どうやら本格的にダメらしい。

そう認識して、NT-Xは頭を抱え、そんな彼をエミリアは横目で睨んだ。

その時である。

ピピピピピピピピピピピ

通信だ。これ幸いとばかりに、NT-Xは通信を開く。すると相手は案の定クラウチだった。

『おう。お前ら戻ってきてたか。具合はどうだ？』

「あ、おっさん。珍しいね。おっさんがあたし達のこと心配するだなんて」

エミリアがいつもは見ない、クラウチがこちらを心配すると言った動を見て少し驚く。

それを聞いたクラウチは少し顔を皮肉げに歪めて、こう言った。

『馬鹿野郎。誰もお前の心配なんぞしてねえよ。ただな、優秀な稼ぎ頭の一人があそこまでポロポロになってたんだ。流石の俺でもそいつの心配くらいはするさ』

それに対してエミリアが不満の声をあげる。

クラウチはそれを軽く流した後、いきなりまじめな顔になって、NT-Xに向き直った。

『まあ、そこらへんはいいとして・・・だ。NT-X。お前さん今すぐカフェに来れるか？とりあえずあの時何があったのか、詳しい話が聞きたい。ワレリーの奴に関しても、そこで一緒に話す』

それを聞いたNT-Xは、少し何かを考えるような素振りをした後、ゆっくりと頷いた。

それを見たクラウチは、『それじゃ、また後でな』と言って通信を切った。

「・・・トイウワ、ケデ、エミリア。チョット、イマカラ、ホウコク、ニ、イツテ、クルカラ、ベルノ、コト、タノメル？」

ゆっくりとエミリアのほうを向いて、彼女に問いかけるNT-X。エミリアは再びジト目になってNT-Xを横目で睨むが、少しの間そうしていた後、溜息を吐いてこう言った。

「・・・まあ、あたしはあの時気絶してたから、何があったかちゃんと説明できるのはアンタだけだしね・・・よし、それじゃベルのことは任せてよ。代わりにアンタの部屋、勝手に使わせてもらうからね」

「ワカッタ」

そう返してから、NT-Xはカフェに向かった。

その後姿を見ながら、エミリアはあることに気が付いた。

「…………あれ？アイツ、今あたしの名前途中で区切らずに言えてた？……………」

クラッド6内・カフェ

「おう。来たな」

NT-Xがカフェに到着したときには、クラウチは既にカフェに来ていたようで、カウンター正面の席を占領していた。

「オソク、ナリマシ、タ」

クラウチの席の正面について、NT-Xは開口一番に謝罪を口にした。

実際彼はあのマイシップでの出来事の後、手持ちの道具の整理や、足りなくなつた消耗品の補充のために、クラッド6内のバトルシヨップによつて、10分ほど時間をくつている

「いや、あんだだけボロボロになつて帰ってきたんだろ？少しくらい遅れても何も言わねえよ」

クラウチはそう言つて、NT-Xの謝罪をにこやかに流した。

「……それに前みたいなカツコで来なくて、内心ホツとしてるしな……」

そう、最後にボソツと付け加えたが。

それを聞いたNT-Xは少し首を傾げたが、あまり気にする事ではないと判断して、すぐに首を元に戻した。

それを見たクラウチは、次の瞬間真面目な顔になつて、

「……んじゃ、説明してもらおうか？あの時、あの場所で、一体何があつたのか？ピンからキリまで詳しくな」

そう言つて来た。

それを聞いたNT-Xも少し考えるような素振りをした後、静かに話し始めた。

文化保護区に着いたときには、既に船が大量にあつた事。

その中の殆どの人間は、真つ当な目的で来ていた訳ではなかった事。

その連中によって、カーシュ族の集落が焼かれ、幾人かの犠牲者も出ていること。

しかしその中の大半は、常時虚ろな目をして、自身を喪失していたこと。

その村の人間であるあの少年が、自分達を連中の仲間だと勘違いして襲ってきたこと。（自身が大怪我を負わせたことは流石に誤魔化して、連中に罪を擦り付けた）

そして

「　　そしてその連中に指示を出していた黒服の男と、そいつが持っていた赤い何か・・・ねえ」

クラウチがそう言いながら、椅子の背もたれに身を投げ出す。

その顔には、NT-Xのいる所からは見え難いが、困惑と疲労がありありと出ていた。

・・・まあそれも仕方ないのかもしれない。

最近入ってきた新入社員と、今まで一切働こうとしなかった穀潰しの少女。

その二人に簡単だからと言って任せた借金取りの真似事で、まさかこんな厄介事に巻き込まれるとは、彼も思わなかったのだろう。しかも話を聞く限りでは、男の言動などから明らかに尋常な事ではない事が伺える。

少しの間その体制で天井を見ていたクラウチだったが、やがてゆっくりと口を開いた。

「……………で？お前さんはどうするんだ？」

それを言われたNT-Xは、言われた言葉の意味がよく分からず首を傾げる。

それを見たクラウチは、溜息を吐きながらNT-Xに向き直った。

「……………あのな。詳しく、とは言ってもただ単に報告するだけならその黒い服の男の言った言葉や、他の連中の状態なんかも事細かく説明する必要は無い。だと言うのに、お前さんはその男の言動や、持っていた武器の特徴。拳銃の果てには戦い方まで細かく説明したじゃねーか。そしたら何か考えがあるんじゃないかと思うだろうが」

そう言われてNT-Xは、自分がどれだけ事細かに説明していたのかを思い出した。

そう言われて見れば結構そんな事まで言っていたような気がする。しかし……………

「……………ワカリマ、セン」

「……………ああん？」

そう言われても分からなかったのだ。何故自分があそこまで細かく説明したのか。

「……………ナゼカ、ト、イワレテ、モ、スベテ、セツメイ、シロト、イワレタ、カラ、ト、イウシカ、アリマセ、ン」

「おいおい。そりゃあ」デモ……………「……………でも、何だよ？」

「デモ……ナゼダカ、アノ、オトコ、トハ、マタアウ、キガ、シマス」

「……………」

「カクシヨウ、ハ、アリマ、セン、ガ」

そうやってジッと自分の右手を見るNT-X。

そのまま彼は黙ってしまう。それを見たクラウチも何も言わずに彼を見る。

……………5分か、10分か……………それだけの時間、二人はずっと黙っていた。

やがて、NT-Xが思い出したかのように口を開く。

「ソウイエ、バ……………」

「ん？どした？」

「…………ワレリー、トイウ、ヒトハ、ドウナリ、マシタカ？」

そうやってクラウチを見るNT-X。

対するクラウチは、少し苦々しげな顔になった後、ゆっくりと口を開いた。

「…………ああ、ワレリーの野郎な……………とりあえず借金の取り立てはしといたんだが……………あの野郎、カーシュ族の集落の件について聞いたしたら、気が付いたら周囲が燃えてた、とか言いやがったよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

NT-Xはそれを聞いて、内心で『やはり』、と思っていた。

何せ、あの時カーシユ族の集落で見た彼は、一団と同じく、目が虚ろになっており、明らかに自己を喪失しているのが分かったからだ。おそらくこの感じでは、他の連中も同じ様な感じだろう。

何にせよ、これでフレリーを含めたあの一団の人間からは、あの黒服の中二病末期患者の情報は何一つとして期待できないという事が分かり、NT-Xは小さく溜息を吐いた。

「・・・・・・・・まあ、その“黒服の男”が何を考えているかは分からねえが・・・・現状、リトルウイングでははつきり言^うって何も出来んもしその男が何かデカイ事起こしても、その時は“ガーディアンズ”か“同盟軍”、“太陽系警察”辺りがどうにかしちまうだろう」

そう言^って、クラウチは顔をNT-Xの方に向けた。

「とりあえずは依頼ご苦労さん。達成したとは言い難いが、不測の事態が重なって起きたことだ。俺にも責任の一端はあるし、今回の件については全面的にお咎め無しって事にしとく。書類とかもこっちで何とかしておく。で、また当分の間はこれまでと同じくフリーミッションとか、好きな仕事をしてきてくれ。何かあったらまたこっちから呼ぶからよ」

そう言いながら席を立つクラウチ。一瞬遅れてNT-Xも席を立つ。

そのまま二人はカフェから出ようとしたが、

「ア」「いつっ」

NT-Xが入れ替わりで入ってきた誰かとぶつかってしまった。
相手の背が小さかったため、NT-Xはそこまでではなかったのだが、相手は転んでしまったようだ。

NT-Xは慌てて相手を助け起こそうとした。

「すみませ、ン。ダイジヨ……アレ？」

「いててて……あ、いや、大丈夫……ってお前は」

「トニオ、サン？ナンデ、ココニ、イルンデ、スカ？」

「そういうお前さんは……確かNT-X、だったか？」

NT-Xが助け起こそうとした相手。それは先日（と言っても数時間前のことだが）お世話になったトニオだった。

何かの用でクラウド6に来ていたようだ。野暮だとは思ったが、一応理由を聞いておくNT-X。

しかしその質問に返したのは、トニオではなくクラウドだった。

「ああ、そいつともう一人、確かリイナって言ったか？その二人はさっきリトルウイングリトルに正式に入社したからな」

そう言いながら、リトルウイングのオフィスに入っていくクラウド。そんな彼を横目で見ながら、トニオが話しかけてきた。

「……ま、そういうことだ。と、いう訳でこれからは一緒の仕事をすることも増えてくるだろうと思うから、一応こいつを渡しておくぜ。リイナには俺から言っとくから、後であいつからも貰ったときな」

そう言つて、彼は一枚のカードをNT-Xに差し出した。

NT-Xはそれを受け取ると、予め渡されていた自身のカードを彼に渡した。

と、ここでNT-Xは、ちょうどいいのでこのカードに関して分からないことを聞いてみることにした。

「アノ、トニオ、サン」

「ん？なんだ？」

「コノ……パートナー、カード、トハ、ドウヤツ、テ、ツカウ、ノ、デスカ？」

「……………」
「……………は？」

あのと、呆れた様な口調で、トニオから“パートナーカード”の

使用方法等を教えてもらったNT-Xは、少し遅れてしまったお詫びとして、ベルとエミリアにクッキーを買ってからマイルームに向かっていた。

因みに教えてもらおうときのトニオとNT-Xの会話としては、全部書くとし少し長くなってしまふので簡単に要約すると、こんな感じである。

“今まで使った事は無かったのか？” “呼ぶときは本人を直接探していた”

“渡されたときに何も教えてもらえなかったのか？” “YES”

“今までこれは何だと思っていた？” “名刺のようなもの”

全部説明し終わった時のトニオの表情は、何処となく疲れていたそうなの。

因みに、一見して子供のようにしか見えない小ビーストの男性に、正座でパートナーカードの説明を受けているキャスト（正確には違うものだが）と言う光景は、事情を知らないものから見れば、奇妙な光景であり、ある種シュールな光景であったと言うこともここに記しておく。

閑話休題

そんなこんなでやっとこさ自分の部屋に着いたNT-X。
色々とアレで入り辛かったが、とにかくエミリアにはさっきの報告

の結果を伝えなければならぬので、意を決して入ることにした。

で、入ってみると……

………？

おかしい。例えエミリアが自分の部屋に戻っていたとしても、確実にベルは居る筈である。

だと言うのに部屋の中は物音一つしない。

その事を疑問に思いつつも、部屋の奥へ進んでいくNT-X。するとそこには………

………あ、いた。

………そこにはベッドの上で、二人仲良く一緒に毛布に包まって寝ている、エミリアとベルの姿があった。

………なんだかなあ………

さっきまで悩んでいたことが急に馬鹿馬鹿しくなり、NT-Xは内心苦笑しながら、お土産をビジフォン近くのテーブルの上に置く。彼はそのままベッドの前の床に腰を下ろした。

どうやら待っているうちに眠ってしまったらしい。

まあ、あんなことがあった後だし、肉体的な物だけではなく精神的な疲れもあったのだろう。

………？

偶々こちらに顔を向けていたエミリアの頬が濡れているのに気付いた。

寝る前に少し泣いたのだろうか。

『あの・・・』

どうしたのかな？、とNT-Xが考えるよりも早く、ミカが声を掛けて来た。

その顔には薄っすらと申し訳なさが浮かんでいる。

NT-Xは咄嗟にベルを見るが、完璧に寝入ってるようで、ミカに気付いた様子は無い。

それを見たミカが、NT-Xに自身の姿が普通の人には見えないし、声も聞こえないと言ったことを教えてくれた。

「ソレヨリ、モ」

『はい？何でしょう？』

「イマ、サツキ、ミカサン、ハ、ナニ、ヲ、イオウト、シテイタ、ノ、デスカ？」

そうNT-Xが問いかけると、ミカはさっきの表情になって、こんなことを言ってきた。

『実は・・・その・・・先程エミリアが私にやっと気付いてくれたときに、つい貴方があの海底レリクスで、一度死んでしまったことを言ってしまったのです』

「イヤ、シンデナ、イシ」

思わずミカの発言に突っ込みを入れるNT-X。

実際スリープモードになっただけなので、そこまで深刻なことには

なっていないのだが……
と言うよりも前にこんなことを言ったような気がする。

とりあえず、それを聞けばエミリアが何で泣いていたのかは、大体予想がついた。

「……ヨウスル、ニ、ソレヲ、キイタ、エミリア、ハ……
・ソノ……ザイアク、カン、ミタイナ、モノヲ、カンジ
テ、ソレデ、ナキダシ、テ、シマツタ、ト？」

『そのようです……この子は、いつもはあんなことをいう子ですが、本当は凄く優しく、それでいて寂しがり屋なのです……』

そう言って、実体の無い手でエミリアの頭をそつとなでるミカ。傍から見ると、本当に母子おぼこにしか見えない。

……というか、本当は血の繋がった親子だったりして……
……髪の色とか同じだし……

そんなアホな事を考えていると、いつの間にかミカがこちらを見つめていた。

どうやらNT-Xが二人を見ていたことに気付いたらしい。

『あの……何か？』

「……ナンデモ、ナイデス」

そう言って立ち上がったNT-Xは、この間の出来事のように、気分転換でリフォームしたマイルームに設置されていたキッチンへと

足を運んだ。

………起きたときに、また泣き出されたら敵わないから、買ってきたクッキー以外に何か作ろう……

そう考えながら。

因みに肝心のエミリアは、それから30分位後で目を覚まし、案の定こちらを見つけて泣き出してしまったので、NT-Xは彼女を泣き止ますのに、起き抜けて事態をよく理解できていないベル共々、物凄く苦労した事を、ここに記しておこう。

事後報告と新入社員な先輩と【メモリーその1】（後書き）

最新話です。

どうも、雑炊です。

ちよつとリアルでごたごたしていて、次話の投稿が遅れてしまいました。

今後こんなことがあるかもしれません。

で、今回から少し話の書き方が、ちよつとだけ、本当にちよつとだけ変わりました。

理由としては、この間久々に会った友人に、色々指摘されてしまったので、変えさせていただきました。

たぶん今後はこんな感じで行くと思います。

で、あとがきに関しても指摘を受けたので、今後は対談ではなく、話の解説などをメインにしていこうと思います。

え？今までもそうだった？ナンノコトカナア？

と、言うわけで、今回の話の解説モトキを。

冒頭の二箇所は、ハッキリ言って無視していただいて構いません（キリッ

今後の話に直接関わってくるのは、たぶん少しだけでしょうし・・・
・・・
まあ、でもあれで、少しネタバレにはなってしまった
ような気も・・・

パートナーカードのくだりは、少し作者の妄想入ってます。

実際にはたぶん説明とかされるとは思いますが、一応ここではNT
- Xはされておらず、ほぼ全部エミリアやベルがやっていたということになっていきます。

因みにクッキーに関しては、プリンも売ってたのだからたぶんあるのでは、という作者の妄想その2です。

次回は番外編その2となりますので、本編は進みません。

一応NT-Xがどうやってあの武器を手に入れたか、という話になると思います。

それではまた次回。

今回は長くなってしまったので前、後編に分けて投稿します。
学校が始まったり、先日の地震でまたしてもデータが一部吹っ飛んだりといういろいろなことがあって書き直した結果、投稿が遅れた上、内容もグダグダになってしまいました。
もしかしたらこれまで以上に駄文になってしまっているかもしれない
せん。
とりあえず本編をどうぞ。

あの二人ですか？いまだによくフリーミッションとかでお会いしますよ。結構良い人たちですよ。

NT-X

あたしはあの二人の働いてる部署には二度と近寄りたくないけどね。二人は良い人たちなんだけど・・・

エミリア

カーシュ族の騒動が終わって、リマ夫妻がリトルウイングに入社してから、丸二日経っていた。

その日はトニオとリイナも含めて丁度四人いた為、その四人でパーティーを組んで、モトウブのガレニガレ溪谷に大量発生した、“ヴァンダ・オルガ”を纏めて駆除しに行っていた。その帰りに、夕飯を食べる為にカフェに寄ったときだった。

「そういえば、一つ気になったんだけどさ」

始まりは、リイナが席に座ったときに発したこの一言だった。

「?どうした?リィナ」

「いやね……」

トニオに問いかけられ、少し声を発した後NT-Xを見るリィナ。

NT-Xが何かなと思っていると、彼女はこんなことを言い出した。

「……NT-Xが持つてる、見えないソードと、呼んだら手元に戻ってくるツインセイバーって、何処で手に入れたものなのかな……ってさ」

次の瞬間、

エミリアとNT-Xの時間が止まった。

最初に動き出したのはエミリアだった。

両手で耳を塞いで震えだし、そのまま丸まってしまった。

耳を澄ませると、微かにだが何かを呟いているのが分かる。

そんな彼女をNT-Xとベルが必死になって宥めるが、どうやら自分分は直りそうも無い。

「あの……言いたくなかったら言わなくてもいいよ?」

リィナがそう言つと、NT-Xは一度宥めるのを止めてこついった。

「ベツニ、イイデス、ヨ。ドウセ、トラウマ、ニ、ナツテ、イルノ
ハ、エミリア、ダケ、デスシ」

それを聞いたエミリアが、凄く小さな声で「裏切り者〜」と言っているが、NT-Xはそれを無視して喋りだした。

それはベルと会って、丁度二日目くらいのこと。
クラウチが二人にワレリーを探しに行かせる二日前のことである。
この日もクラウチが朝から二人を呼び出していた。

「おっさーん。来たよー」

そう言っつてオフィスに入っていくエミリア。

二、三步遅れてNT-Xとベルも入ってきた。

「おう、来たか」

そう言いながら目の前に投影していたグラビアを消して、こちらに
向き直るクラウチ。

どうでもいいが、彼は今勤務中なので、グラビアを見ている場合で

まさか自分の体が完全なロボットであるとはれたか？、などとも考えてみたものの、よく考えてみればこのことを知っている人間は、ミカや、たまたま修理に立ち会ったクラウチを含めても僅か5人以下しかいない。(エミリアは彼のことを少し特殊なキャストとしか認識していないので、除外される)

その5人が漏らすとも考えにくいし……

「アノ……」

「ん？なんだ？」

「トリ、アエ、ズ、イラ、イヲ、シテ、キタ、ノハ、ダレ、ナノ、デス、カ？」

とにかく行動しなければ始まらない。そう考えたNT-Xは依頼人の素性を聞いておくことにした。するとそれを聞いたクラウチはニヤリと笑って彼を見ながらこう言った。

「おう、聞いて驚けよ？……依頼をしてきたのは……」

「それは私達のことかね？」

そんな声が聞こえてエミリアとNT-Xは背後にあるオフィスの入り口に目を向けた。そこには……

「それにしても事前に貰っていた情報通りの喋り方とは……あ、いや、別に悪く言った訳ではないのだ。気分を悪くしたのなら謝るからそんな目で見ないでくれ……」

赤い外套の下に鎧を着込んだ白い髪の男と、

「……今のは全面的にシロウの言い方が悪かったのでは？」

青いドレスの上から、銀色の甲冑を着込んだ見た目中学生くらいの金髪の少女という、

「……ゲイ、ニン、サン？」「かなあ……」

「断じて違う（違います）……」

……異色のコンビがいた。

「……先程は失礼した。改めて挨拶させていただこう。私はク
バラシテイに本社を構えるSE・RA・PH社の武装試験部門に所
属しているシロウ・エミヤという。で、こちらが……」

「同じくSE・RA・PH社武装試験部門所属のアルト・エミヤと
申します。先程は私の夫が失礼を致しました」

そう言つて頭を下げる少女。慌ててエミリアが「いえいえこちらこ
そ」と言つて頭を下げ返した。
が、次の瞬間変な顔をして顔を上げた。

「……つて、ん？夫？」

そう言いながら二人を見るエミリア。

つられてNT・Xも二人を見やる。

見たところ、少女　アルトはどんなに多く見積もつても14〜
5歳くらいだろう。

それに対して、男　シロウは、反対にどんなに少なく見積もつ
ても23〜5歳はある様に見えない。

何度か二人を交互に見るエミリアとNT・X。

その後二人は気まずそうにはあるがこう言つてのけた。

「……あの、シロウさんってもしかして……」「……
ロリ、コン、デス、カ？」

「何故にそうなる!!!??？」

「と言うよりもお二人はどうしてそんな結論に至ったのですか!？」

そう言われて二人は目を合わせながら

「イヤ・・・」 「だって、ねえ？」

と呟く。

そのまま数分間（NT-Xを除いた三人で）ギヤアギヤアやっていったのだが、流石に業を煮やしたのか、先程から会話に入っていないかったクラウチがデスクを叩きながら吼えた。

「てめえらいい加減にしろ!! 依頼人にこんなことを言いたかねえが、あんたら一体何しに来やがった!?! つーかエミリアは悪乗りしてんじゃねえ!! NT-Xにジャイアントスイングでリゾート地区の果てまで飛ばさせるぞ!?! それと、NT-Xも気に食わなかったからって何時までも食ってかかるん・・・あ、いや、だからっていきなり土下座するな。地面にでこを擦り付けるな。お前にはプライドは無いのか? しかもするんだったらせめて俺のほうを向くんじゃなくてあの二人のほうを向け・・・とまあ、例えロリコンだろうが何だろうが依頼人は俺達にとっては客なんだ。客には失礼の無い様に振舞え」

「・・・アマ、リ、イイ、タク、ナイ、ノデ、スガ、クラ、ウチ、サン、ガ、イチ、バン、ヒド、イ、コト、イ、ツテ、マセ、ン、カ?」

例えロリコンだろうがって・・・、と心なしかジト目でクラウチを見る一同。

それを聞いたクラウチは「うるせえ! 言葉のあやだ! あや!」と云って話を切り上げる。

彼はそのままシロウに依頼の内容を促した。

「……で、こつちも暇じゃないからな。これ以上漫才すんのも
疲れるから、さっさと依頼の内容を言ってくれ」

「……まあいいだろう。確かにこちらとしても、これ以上こんな
漫才で時間は取られたくないのね」

「マン、ザイ、ヲ、シタ、オボ、エ、ハナ、イノ、デス、ガ」

「NT-X、少し黙ってる。話が進まん。と、言うわけで依頼の内
容の説明頼むぜ」

クラウチがそう言うと、シロウは少し頷いてから喋りだした。

「……先程言った通り、私達はSE・RA・PH社の武装試験部
門というところに所属しているのだが……」

それを聞いたエミリアが、首を傾げながらこんなことを言った。

「SE・RA・PHの武装試験部門？……聞いたこと無いけど、
それって一体どんな所「オイ」……ですか？」

途中でクラウチに睨まれて、慌てて敬語になるエミリア。
それを聞いたアルトが説明を入れる。

「武装試験部門とは、簡単に言ってしまうと、新しく開発された武
器のプロトタイプや、他の会社の製品を実際に使用して、そのデー
タを取ってその後の製品に反映したりする所ですね。もっと分かり
やすく言うなら、武器のテスターをする部署、と言ったところでし

ようか。主な仕事としてはそれがメインになりますね」

「ふーん……ん？ “主な仕事としては” って、他にはどんなことやってるの？」

「うーん、そうですね……」

そこまで言った所で、シロウが彼女を止めた。

「アル。それ以上は船の中で説明してあげてくれ。これ以上時間をかけてしまうと、向こうにも迷惑が掛かってしまう」

そう言っつてシロウはクラウチとNT-Xに向き直った。

「話を戻すが、私達はそこで主にデータ収集等の役に就いているのだが、今回は上層部うえんぶからの命令で私達以外の人間にとある仕事を頼むになったのだ」

「……つまりそのお前さんら以外の人間ツツ一訳で、NT-Xコイツが選ばれたってことか」

「そういうことだ」

クラウチの言葉を聞いて、満足そうに頷くシロウ。

しかしそれを聞いてもNT-Xにはまだ納得できない部分があった。

「アノ……」

「ん？何かね？」

「イエ。ソモ、ソモ、ナゼ、ワタ、シガ、エラ、バ、レタ、ノ、デ、スカ？タダ、キヤス、ト、ノセ、ント、ウ、デー、タガ、ホシ、ケレ、バ、ワタ、シ、イ、ガイ、ノ、モ、ット、ベテ、ラン、ノヒト、ニ、タノ、メバ、イイ、ノ、デハ、ナイ、デ、シヨ、ウカ？」

それを聞いたクラウチは、確かに、と心の中で同意した。

確かにNT-Xはそれなりに実力はある。だが、いまだ駆け出しの無名である筈だ。

「……あの変な喋り方のせいか？」

そんな考えも浮かんだが、それは無いだろうと思ひ、クラウチは頭を振ってシロウを見る。

すると質問されたシロウは、まるで苦虫を噛み潰したような顔で、そこに佇んでいた。

どうしたのかと二人が思っていると、シロウが静かに口を開いた。

「……………それが私達にも分からないのだ……………」

「……………八？」「」

出てきた答えがあまりにも意外すぎて、思わずエミリアまでも呆然となる。

それはそうだろう。まさか依頼してきたほうがこんなことを言い出したのだから。

しかしシロウはそんな様子の彼らを無視して話を続ける。

「と言うのも、今回我々はNT-Xかれが最初に言った通り、それなりに経験を積んだベテランに仕事を頼もうと思っていた。しかし、丁

度昨日の昼ぐらいか？突如上層部から『リトルウイングに所属している、ヘンな喋り方をする駆け出しのキャストに仕事をさせる』というメールが届いてな。色々と妙だとは思いながらも、上層部直々の命令という事でここに来たわけなのだ」

そう言いながら気まずそうに目を逸らすシロウ。

その隣にいるアルトも視線を下に落としている。

……確かに色々と妙だな……

奇しくもNT-Xとクラウドは同時に同じ事を考えていた。

普通、データが欲しいのであれば、彼らも言っていた通りに経験を積んでいるベテランに使わせれば、より良いデータが取れる筈である。

だと言うのに、まったく無名で、まだ駆け出しである素人にわざわざ仕事をやらせようとするのはどういう事なのだろうか？

それに、今シロウが話した上層部からの通信の内容も気になる。

『リトルウイングに所属しているヘンな喋り方をする駆け出しのキャスト』とは、どう考えてもNT-Xを表しているとは思えない。

『リトルウイングに所属しているキャスト』とか『ヘンな喋り方のキャスト』等であれば、まだ他の奴を考えることも出来るが、前述のように明らかにピンポイントで来ているとなると話は別である。

まさか自分かなり特殊な存在であるという情報が漏れたのかとNT-Xは視線をクラウドに向けて。

が、どうやらクラウドも分からないらしく、視線に気付いた途端に首だけで“分からない”とジェスチャーしてきた。

ではエミリアか？とも思ったが、そもそもこの子は、前述の通りNT-Xがロボットであると言うことを知らない。

……嫌な予感しかしないなあ……厄介事の匂いがぶんぶんするんだけど……

あまりにも怪しすぎるその内容に、NT-Xは内心溜息を吐く。が、向こうもそんな理不尽な命令の為に、わざわざこちらまで出向いてくれているのだから、そう安々と無下には出来ない。

……しかたない、か。

そう思つてNT-Xはクラウドに目を向ける。対するクラウドもこちらの意を汲み取ったようで、少し頷くと、こつ話を切り出した。

「ま、いろいろと気になる所はあるが、まだ肝心の仕事についての説明をちゃんとしてもらつてねえ。まずそこを聞かせてくれ」

話はそれからだ、とクラウドは締めくくつた。

それを聞いたシロウは、ハツとしてすぐに喋り始めた。

「すまなかつた。まずそのNT-Xには、我々が働いている武装試験部門も入っている、クバラ本社の研究所まで来て貰いたい。そこで新型武器の試作機のテストをしてもらつ」

そう言つてシロウは一息ついた。

それを見たクラウドが「どうする？」という意味を込めてこちらを見ってくる。

エミリアも何処と無く不安そうにこちらを見ってくる。

それらを見たNT-Xは少し考え込んだ。

メールを送つてきた上司の正体が気になるものの、そこらへんを除

けば結構まともな内容の依頼だ。
もしかしたら報酬としてその試作品が貰えるかも……それ
はないか。
だとしても……等と彼が悩みに悩んで出した
答えは

SE・RA・PH社本社別館・研究所

「んあ……っあ！ やつとついた」

その声をあげたのはエミリアだ。

これを見た読者ならもう分かっているかもしれないが、NT-Xの
答えは、条件付ではあるものの、二人の依頼を受ける、というもの
だった。

その条件の一つが、彼女、エミリアを連れてこさせることと言う内
容だった。（ただし本当はまた別の条件にしようとしたのだが、彼

女の強い要望によって半ば無理矢理連れて来させられている、という感じだが)

「エミ、リア。アマ、リ、ハ、シャ、ガナ、イ、ヨ、ウニ」

「分かってるわよ。子供じゃあるまいし。でもやっぱりずっと船に乗ってる疲れるわ」

そういつて肩を回すエミリア。

何しろクラッド6からここまで船に乗ってから3時間掛かっている。しかも乗ってきた船も、いつものマイシップではなく、シロウとアルトが乗ってきたSE・RA・PH社所有の船だったので、いつもよりも緊張していたのだろう。

「二人とも。早くしないと置いて行ってしまいますよ」

そう言われて二人が研究所のほうを見ると、既にシロウとアルトの二人は入り口のほうに歩いて行ってしまっていた。

それを見たエミリアとNT・Xは、慌てて二人を追っかけながら、研究所の中へ入っていった。

研究所の中は、正しく“研究所！”みたいなところだった。

一見何に使うのか分からない機械や、数々のモニター。

なんだかよく分からない鉱物等が機械に接続されていたりと、中々興味深いものも多く、この時点までは一見違和感は無い様に見えた。……しかしNT・Xの頭部センサーは、この時点で様々な違和感を感じ取っていた。

例えばとある部屋を通り掛ったときである。

そこはガラス張りの部屋で、中央のテーブルにはモニターが付いており、そこに数人の男が集まって何かを話しているのが見えた。一見すると研究などについての話し合いでもしているのだろうか、と思うのが普通である。

しかしNT-Xのセンサーは、こんな会話を聞き取っていた。

「おい……これを見てくれ……」

「ああ？……こ、これは!？」

ここまではまともな会話だったのだが、次の言葉を聞いた瞬間、NT-Xは一瞬だけ固まった。

「ミ……ミレイ・ミクナ18分の1フィギュア発売……
だと……?」

……は？

「それだけじゃねえ……こいつも見てみる……」

「フルエン・カーツの18分の1サイズのフル可動フィギュアまで……これについてミレ×カツがフィギュアで……!」

「馬鹿野郎!! 幻視の巫女はイーサンとの絡み以外認めねえ!! ミレ×カツなど邪道! 外道!!」

「馬鹿いつてんじゃないわよ!! イーサンこそカーツ指令と絡ませるべきでしょうが!! 個人的にはタイラーも良いと思うけどな!!」

「!」
「どっから出てきた腐女子?! つーか薔薇展開など興味ないわ!! ミレ×カツこそ至高だって言ってるんだろが!!」

「ほざきやがれこの…… 野郎が！！！！つーかキャストと女の絡みなんぞ一体誰得だと言うんだ！？キャストのほうも女なら俺は別に文句無いがな！！むしろカモーーーーーン！！！！」
「うるっさいわ変態共が！！！！つーか百合なぞ……百合なぞ……
……最高じゃないの！！！！」

「……………？どうかしたのかね？」

「……………イ、エ。セン、サー、ニ、ナニ、カ、ヘン、ナ、デ
ン、パガ……カー、ツシ、レイ、ノ、ファイ、ギユア、トカ……
ナン、トカ……」

そう言つて頭を抑えるNT-X。

無理も無い。一見真面目そうに見える研究所の中では、実はこんな会話が繰り広げられているなどとは思っていなかったのだから、部外者とは言つても、実際に聞いたら頭の一つくらい抱えなくなる。ただ、その様子を見たシロウとアルトは何かを悟ったのか、お互いに目を合わせて頷くと、

「シロウ。私たった今用事を思い出したので先に行つていて下さい」と言つて、まずアルトが何処かへスタスタと歩いていった。

その背にシロウは「わかった」とだけ声を掛けてから、NT-Xと

エミリアに向き直ってこう言った。

「・・・と、いう訳で、ここからは私達だけで奥に向かうとしよう。ああ、彼女の事は心配しなくていい。すぐに合流できるだろう」

そう言うてから、何となく歩調をさつきよりも早くして奥へ進んでいくシロウ。

その後を遅れてはいけない、と、急いで追いかけるエミリアとNT
- X。

しばらくしてから、後ろのほうで、

“貴方達は・・・！！いい加減にしなさい！！今日はいつもとは違ってお客様がいるのですよ！！”

“な！？アルト姫！？”

“馬鹿な！？この防音設備は完璧の筈だ！何故俺達の会話が漏れたのだ？！”

“アルト姫と呼ぶんじゃないやありません！次呼んだらふっ飛ばしますよ！？・・・それと、本当に防音設備が完璧なら、お客様の一人が貴方達の会話に気付く筈が無いのですが？”

“その客が嘘をついているという可能性は考えてくれないのか？！”

“・・・フルエン・カーツ指令のフィギュア・・・でし
たっけ？”

“！！なぜそれを・・・？”

“馬鹿！！漏らすんじゃないやねえ！？”

“やっぱりふざけていたんじゃないですか！！！！少し反省しなさい
！！エクス・・・”

“え！？ちょ、ちょっと待ってください姫！？そんなモンここでブ
つ放したら、ここにある研究材料とかいろいろな物が一瞬で消し炭

になります!?”

“勘弁してください!!次からもうあまりふざけませんから!!”

“……………ほう。では何故先程コッソリ調べたら、その研究材料とかいろいろな物ではなく、美少女系のフィギュアやら、18禁の同人誌とかBL系の同人誌とか、手を付けたであろうエロゲなどがたんまりと置いてあったのですか?”

“し、調べたんですか!?プライベートの侵害ですよ!?.
つてBL系!?”

“おい誰だここにBL系なんぞ置いたの!?”

“あ、それあたしだわ”

“腐女子てめえええええええ!!”

“……………もう漫才は聞き飽きました。今度こそ諸共に吹き飛ばします。エクス”

“ま、待つてください姫!!”

“そうですよ!”

“せめてあたしの秘蔵のBL本だけでも勘弁してくださいアルト姫
!!”

“……………だから姫と呼ぶなど言ってるでしょうがあああああ
あ!!!!エクスカリバー!!!!!!”

ズドドドドオオオオオオオン!!!!!!

“アツーーーーー!!!!!!”

……………なんて会話と音がNT-Xには聞こえたが、彼は華麗にスルーした。

「ここが我々が働いている“武装試験部門”のブースだ」

………気にしない。気にしないったら気にしない!!

そう言われてNT-X達が連れてこられた所は、物凄く広い殺風景な所だった。

判り難い人のために物凄く簡単に言うと、幕張 ツセ等のイベントをするホールの中の物を全部撤去した後みたいな感じの所だった。

・・・もつと簡単に言うと『何も無いだっ広いホール』という感じだった。

・・・こんなところで一体何をするのだろうか・・・？

「何を立ち止まっているのかね？早くしないと置いていくぞ」

NT-Xが一人物思いに耽っていると、シロウから声を掛けられた。声の方へ顔を向けると、いつの間にかシロウとエミリアは、壁の所にあつたエレベーターに乗るところだった。

NT-Xは慌てて二人を追いかける。

やっと追いついて二人を見れば、エミリアとシロウは笑っていた。

そんなに彼の走る姿が面白かったのだろうか？

何となく釈然としないながらも、NT-Xは二人と一緒にエレベーターに乗り込んだ。

エレベーターから降りると、そこには様々な形の武器が置いてあるテーブルを中心に、その周りで研究員と思われる人たちがドタバタと動き回っている部屋に着いた。

どうやらテーブルの上にある武器が、ここで試験する武器なのだろう。

・・・何故かケチャップの容器や、マスタードの容器を無理矢理銃にしたような物品も見えたが。

「あ！主任！」

NT-Xとエミリアがテーブルの上の武器に目をとられていると、研究員の内の一人の女性がこちらに（と、言うよりもシロウに）気付けて声を掛けてきた。

………つて、主任？

研究員が言った言葉を聞いて、首を傾げるNT-X。彼がシロウに質問しようとする、彼の心を代弁する様にエミリアがシロウに質問した。

「あの、シロウさん」

「ん、何かね？」

「今、あたしの聞き間違いじゃなかったら、あの人、今あなたの事を“主任”って言ってませんでしたか？」

「ああ、言っていたな。言い忘れていたが、私はこの部署の主任も勤めている。因みにアルは私の補佐だ」

「………は、ははははは………」

今まで話していた人達が、それなりに偉い人だと分かり、乾いた笑いを漏らすエミリア。

そんなエミリアを見て、少し口元を綻ばせつつ、シロウは自分に話しかけてきた研究員に向き直った。

「で、どうかしたのかね？」

「どうかしたのかね？じゃないですよ！何も言わずにいなくなるなんて！おかげでこっちはてんでこ舞いですよ！？」

「ははは、すまんすまん。お客様を迎えに行っていたのでね。・・・
・・・で？例のアレは？」

そう言っただけで急に真面目な顔になるシロウ。

それを見た研究員も、さっきまでの興奮した顔から、一気に真面目な顔になって話し始めた。

「上層部から、パーツは届きました。しかし武器のほうが・・・」

「それに関しては、この前此方に廻されたあれを使い、と先程報告が入った」

「・・・え？あれを？・・・大丈夫なんですか？そもそも使えるんですか？」

そう言いながらNT-Xに疑わしげな視線を送る研究員。

そんな彼女にシロウはこう言った。

「それに関しては此方では此方では対策をとるつもりだ。・・・それに、何時までもあれを倉庫の肥やしにしておく訳にはいくまい？」

そう言っただけで、うっすらと笑うシロウ。

それを見た彼女は溜息を一つ吐いて、苦笑いを一つこぼした。

「……分かりました。それじゃこっちは準備し始めますね。そ
ちの準備が出来たら呼んでください」

「ああ、わかった」

そう言って、準備の為その場を離れていく研究員。

それを見届けたシロウは、NT-Xの方を向いて、こう言った。

「それでは依頼の内容を詳しく話そう。クラッド6でも話した通り
に、今から新型武器の試作機のテストをしてみよう。ただ、テスト
してもらうのは武器だけではなく、此方で独自に開発された、キャ
スト用の新型パーツも平行してテストしてもらいたい。……ど
うだろうか？」

「……………」

………実際アーマーを装備してテストするだけなら特に
異論は無い。問題は……………

「アノ……ソノ、パー、ツ、トハ、ドン、ナ、モノ、ナノ、デス、
カ？」

そう言って手を挙げるNT-X。

それを聞いたシロウは、少し険しい顔になった。……この反
応から察するに、どうやら少し面倒な事情がありそうだ。

暫らく黙っていたシロウだったが、少し経つとゆっくりと話し始め
た。

「……………このSE・RA・PH社が……………いや、クバラシティにある殆どの中小企業が、武装以外にも、服や玩具などを販売しているのは知っているかね？」

「へ？」

そうなの？と言う意味を込めてエミリアを見る。

その視線に気付いたエミリアは、こう返してきた。

「うん。クバラシティにある会社って、武器以外にも結構いろんな物売ってるんだよ。服だったら……………例えば、今あたしが着てるこの服とかもそう」

そう言っただけの着ている服を指さす。

それを見たNT-Xは、心の中で「ほほう」と呟いた。

「……………話を戻すぞ。まあ、今彼女が言った通り、SE・RA・PH社も含めて、此処クバラシティにある殆どの会社は様々な方面に手を出している。自慢ではないが、同盟軍やガーディアンズ等からも発注があるほどだ。で、今回君にテストしてもらいたいのは、今度同盟軍に納品する、最新型のパーツなのだが……………」

そこまで言っただけ言葉を濁すシロウ。

それを訝しんだエミリアが、彼に質問する。

「もしかして……………何か問題でもあるの？」

「……………いや、問題は特に無いのだ。ただ、幾つかバリエーションがあって、その内の一つが物凄くとんでもない設定になっていて……………その……………」

そこまで言っただけでも彼は言葉を濁した。
それを見たNT-Xは何となく彼が言おうとしていることが分かってしまった。

心のどこかで諦めつつも、最後の希望に望みをかけて、NT-Xはシロウに質問した。

「・・・モシ、カシ、テ、ソノ、テス、ト、シテ、モラ、イ、タイ、モノ、ツテ・・・」

「・・・・・・・・・・そう。その物凄くとんでもない設定のパーツなのだ・・・」

しかし希望は木っ端微塵に砕け散った。

結局あの後色々諦めたNT-Xは、その“物凄くとんでもない設定のパーツ”を装着する為に、そのパーツの保管庫まで足を運んでいた。（エミリアはさっきの所で待機することになった）

因みに今彼を此処まで案内してきているのは、シロウではなく先程彼と話していた研究員の人だ。

「着きましたよ。此処がその保管庫です」

そう言っただけ、ある扉の前で立ち止まる研究員の人。

その表情は、どこか疲れているようにも見える。

しかしNT-Xは、今彼女のそんな表情に構っていられる状態ではなかった。

「アノ・・・ココ、ガ、ソウ、ナン、デ、スカ？」

「？はい。そうですけど・・・？？」

「あの・・・」

「はい？」

「・・・ナン、デ、オフ、ダ、ガ、コン、ナニ、イツ、パイ、ハラ、レテ、イル、ン、デ、ス、カ？」

「・・・そう、彼らの目の前にある扉。そこにはもういつそギャグなんじゃないかと思うくらい、大量のお札が貼られていたのだ。」

こんなもの見れば、誰でも驚く。

しかし研究員は慣れているのか、「ああ、成る程」といった感じで頷き、NT-Xに理由を教えた。

「ああ、これは一応盗まれないよう、こつやって物々しさをかもし出す為にこんなにベタベタ貼っているだけで、特に意味は無いんですよ。」

つまりはハツタリ。見せ掛けだけ。

なーんだ、という感じでホツとするNT-X。

しかし次の瞬間研究員が言ったことに、再び身を硬直させることとなったが。

「あ、でもたまたまに本当にヤバイから封印も兼ねて貼っている所もあ

ります。例えば……あ、あそこには、昔非戦闘員や民間人、ほか軍人などを合わせて千人以上を惨殺した殺人鬼が実際に使用していたという、曰く付きのセイバーが置いてあります」

ほら、あそこ、と言ってある一点を指差す研究員。

ハア！？と思ひながらNT-Xが目を向けると、そこには

扉に今さっき見た扉の数倍の量貼られているお札。

そこから2〜3Mほどの範囲でこれでもかという位に張り巡らされた『KEEP OUT』の文字が書かれた黄色いビニールのテープ。

そして先程からNT-Xのセンサーに聞こえてくる『痛い』やら『苦しい』やら『憎い』やらという音。

……どう考えてもやば過ぎる扉がそこにあった。

……あ、今少し扉の隙間から何か見えた……

「……ハヤ、ク、ヤル、コト、ヤ、ツテ、カエ、リ、タイ、デス」

「あ、はい。それじゃ扉を開けますね」

そうやって目的のものが扉を開け始める研究員。

NT-Xはそれを内心ガタガタ震えながら見つめていた。

どうも雑炊です。

一応前編ということですが、解説という名の言い訳を。

今回の話で出てきたあの二人は、本人ではなく、あくまでも同姓同名の別人です。

元の人達とは、一切関係ありませんのでどこか喋り方などがおかしくてもスルーしてくれるとありがたいです。

元ネタは、ゲーム中で実際にあの人達の服や武器が出てくるので、そこからです。

クバラ社に関しては、妄想かなり入っています。

レプリカなどを作っていたりすることから、そういう部署があるんじゃないかな？という作者の考えからあの部署は出来ました。

色々と変なあの研究員達は、メイド服とかを作っているんだから、あんな連中が居てもおかしくないだろう、という妄想からあの連中は生まれました。

後編にもあいつ等みたいな奴らが出てきますが、スルーして下さいでも大丈夫です。

その他の部分は、次回の後書きで出来るだけ書きたいと思っています。す。

それでは次回の後編で。

番外編其の2とクバラと【伝説の武器】

後編（前書き）

やっと書き終わったー！ー！ー！
と、言っわけで後編をどうぞー！

前回までのあらすじ

NT-Xとエミリアがクバラの研究所へログインしました。

NT-Xが呪われた倉庫を発見しました。

以上

「はい。これでロックは解除されました」

そう言っただけで目の前の扉を開ける研究員の女性。

ロック解除に掛かった時間は、実際には1分も掛かってはいなかったが、さっきからずっとセンサーに不可思議な音や声が感知され、挙句の果てには何も無いところで動体反応が検出されたりして、表情等には出していなかったものの、内心ガタガタ震えていたNT-Xにとっては5分も10分も掛かっているように感じられた。

そのせいか、NT-Xはドアが開いた瞬間に、そのドアの中へ入っていた。

「……もうこれ以上こんな厄介事が今にも起きそうなどころにいるのはゴメンだ！」

そんなことを心の中で呟きながらドアの中に入ったNT-Xの目に、次の瞬間映ったものは

一方先程の場所で待つように言われたエミリアは、一人黄昏たそがれでいた。最近は色々な人達と、ちゃんとコミュニケーション出来ているので忘れられがちではあるが、元々彼女は少し人見知りをする性格である。

先程こそ堂々とシロウに質問など出来てはいたものの、それは近くに自分が信頼できる人　　今回の場合はNT-X　　が居たからであって、もし彼が居なければ彼女はあそこまで質問したりは出来なかつただろう。

で、今話に出てきたシロウはというと、先程分かれたアルトが中々戻ってこないことを少々疑問に思って、様子を見に行ってしまった。そんな理由もあり、今彼女は誰かに話しかけるといふ事も出来ず、ただボーっと用意された椅子に座っているといふことしかしていなかった。

・・・・・・NT-X。まだかな・・・早く戻ってこないかな・・・

そんなことを考えても待ち人が帰ってくるわけではない。エミリアは先程から数えても、何度目になるか分からないため息をまた一つ吐くと、再びボーっとし始めた。

「……そんな彼女を物影から見つめる人影があった。それも一人や二人ではない。」

ざっと数えても5〜6人程の人影が、ブレイメンの音楽隊のように重なってエミリアを物陰から見つめていた。

「……なんだか元気がないなあの子」

物陰から見つめていた内の一人が呟いた。その言葉に賛同するように頷く残りの人影。

どうやら彼らは、先程からたった一人で黄昏ていたエミリアを気にかけてこんなことをしている様だった。

先程（前回）の変態達とは違って、彼らは中々心優しい人達らしい。

「……にしても金髪赤目で、ピンク色の改造制服風コスチュームとは……中々センス有るなあの子」

「ああ。それに羽を模ったヘッドホンを常にぶら下げているとか……

……かわいいじゃねえかチクショウ」

「さつきコツソリ覗いてみたんだが、あの子縞パンだったぞ？」

「お前何犯罪行為やってんの!？」

「……訂正。やっぱりこいつらも変態でした。」

しかも一人は犯罪者（一応予備軍）。

「……にしてもこれはやっぱり“アレ”だろうか……？」

「?アレ?なんだそれ？」

「いや……もしかしたらあのキャストの男(?)と、あの子はデキているんじゃないか?……という、な」

人影の内の一人がそんなことを言った瞬間、残りの人影の脳裏に電

流のような衝撃が走った。

「そ……それはつまり、あの金髪の子×あのキャストの男（？）という図式が既に完成しているということか!？」

「馬鹿な! あんなへんな喋り方をする奴とあの可憐な少女が、もう既にやることやっているとのか!? 認めん! 認めんぞ! 例えガーディアンズや同盟軍や世の中が許しても、この“クバラ少女を愛でる会”ゴールドナンバーズである“シュウジ・シマ”が許さん!……!」

「黙れこの糞ロリコン! 犯罪者予備軍!!! ばれるだろーが!?!? つかお前らマジでんなこと言ってるのか!? あるわきゃねーだろそんなこと! 個人的にはそれでもありだけどな!」

「うるっせーぞお前ら!!! こちとら今次のコミケに向けてヒュー×カツの同人誌作つとるんじゃ静かにしろおおおお!!! ！もしくは他所で騒げ!!!」

「……いや仕事中に何やってんだお前は!?!?!?」

ギャーギャーギャーと、にわか騒がしくなる武装試験部門の一角。しかしそんな醜い大人の争いなど気にも留めずにエミリアはボーっとし続けていた。

「お待たせしました〜!」

彼女がそれから数分間ほどボーっとしていると、その内奥からそんな声が聞こえてきた。

ハツとして声がしたほうを振り返る。

其処には少々来たときと着ている物が変わっていたが、彼女が待っていた人がそこに居た。

NT-Xは、保管庫から先程の部屋に戻ってきた事で、やっと一息つけた。

何せ今さっきまで、ズーッと頭部のセンサーに不可思議な音や声が聞こえていたし、酷いときには見えない何かに行動を阻害されたりしていたのだから、そりゃあ気も休まらないってもんである。

一息つけたことで、精神的に余裕が持てたのか、NT-Xは今自分が着ているパーツをもう一度確認してみた。

膝と肘、そして肩の部分にハードポイントが取り付けられた、黒を基調として所々が青いアーマー。

腕、腹や足といったスーツになっている部分は、原色の赤一色で染められている。

「ほう・・・中々似合っているじゃないか」

そうやってきたのは、アルトを連れたシロウだ。

どうやら自分が保管庫に行っている間に、自分の妻を迎えに行っていたらしい。

・・・何故かアルトの服が最初会った時とは違い、何処かの学校の制服みたいな物を着ていることが疑問だったが。

「あの・・・なんでそんな服着てるんですか？さっきまではドレスの上から甲冑着てましたよね？」

敢えてスルーしようとしたNT-Xの考えなど露知らず、エミリアがアルトに質問する。

「・・・ああああああ。なんで質問しちゃうんだよエミリア

ア！気付いてたけど、気付いていたからこそ敢えて触れないで置いたのに！！

そのままアルトの顔を見てみれば、羞恥か怒りかもしくはその両方で顔を真っ赤に染めていた。
若干目が潤んでいるのも分かる。

あ、ヤバイ。

そうNT-Xが思い、エミリアもその様子に気付き、思いつきり顔を引きつらせた、次の瞬間、

「・・・きで・・・もの・・・るわけ、では・・・」

そんなか細い声が聞こえ、

「す・・・なもの・・・ているわけでは・・・」

段々と声は大きくなっていき、

「好きでこんなものを着ているわけではありません！！！」

三度目にして、その可愛らしい獅子が吼えた。

「・・・・・・・・・・さて、アルも落ち着いたところで、今君が着ている物について説明しよう」

あの方向の後、羞恥や怒りで我を忘れたアルトが、突如エクスカリ

バーを持ち出して暴れ始めた為、その場にいた全員で彼女を取り押さえ、何とか宥め終わった後、シロウが先程からNT-Xが着ているパーツについての説明を始めた。

「・・・その姿は、服の所々が少し焦げていたりしたのであまり締まらないものではあったが。」

「・・・今何か変な事を考えなかったかね？」

「？ イエ・・・」

「フム・・・まあ良からう。話を戻すが、今君が着ているパーツは同盟軍次期主力装備の内の一つ、指揮官用装備のプロトタイプに当たる物だ。その特徴は、衛星軌道上にある、専用の観測衛星とシステムの一部をリンクすることで得られる高い索敵能力だ」

そう言つて、目の前にある空間モニターにNT-Xが着ているパーツの詳細な仕様を映し出すシロウ。

其処にはご丁寧にパーツの中身、つまり内部構造までしっかりと映し出されていた。

「ただ、これの特徴はそれだけではない。これには両肘、両肩、そして両膝に共通のハードポイントが内蔵されている。そのため、そのときの状況に応じて各種様々な追加装備を装着することが可能だ」

その言葉と共に、モニターに映るグラフィックの右腕に、おそらく追加装備の一種であろうガトリング砲がくつつく。

そのままグラフィックはガトリングを前に向けて構える動作を取る。

「今ここに映っている物は、参考の為の一例だ。詳しい事はアルカ

ら説明してもらおう。アル、頼む」

そう言っただけでアルトを見やるシロウ。
対するアルトは少し頷くと、(さっきの格好のまま)NT-Xと
エミリアに向き直った。

「それでは、追加装備に関する説明を始めさせていただきます」

そう言っただけで彼女が手元の機械を操作すると、モニターの映像が切り
替わり、四角い箱が映し出された。

「……………これは？」

流石に箱が一個映されただけでは、なんだか分からなかったようで、
エミリアが質問した。

それを聞いたアルトは再び何か操作する。

すると画面に映っていた箱の上部が、中央から観音開きになって開
いたかと思うと、其処から赤い筒型の何かが多数顔を覗かせた。

と、次の瞬間映像の中の箱からその赤い筒型の何か ミサイ
ルが一気に発射された。

「……………とまあ、これが追加装備の一つ、“ミサイルコンテナ”
”です。映っているのは膝に付ける用の物ですが、これ以外にも腕
と肩に付ける為の物も存在しています。因みに膝用に片方32発。
肩用に片方100発。腕用に18発。両方合わせて一斉に発射する
と、計300発のミサイルを同時に打ち出すことが可能です。次に・
……………」

そう言っただけで次の装備を映し出すアルト。

次に映ったのは、中央に緑色の宝玉がはめ込まれた、円形の機械だった。

「えっと・・・これってナノトランサー？」

映像を見ながら呟くエミリア。

それを聞いたアルトはニツコリと笑いながら彼女に対して「正解です」と言った。

「このナノトランサーも、先程のミサイルコンテナと同じ様に、各部のハードポイントに装備できます。性能は通常の物と比べて、武器以外のストックしか無いという欠点がありますが、唯一の特徴としてストックしてある武器を一斉に展開し、攻撃することが可能です」

そう言いながらアルトが端末を操作すると、モニターには先程とは少し装備の違う人型のグラフィックが映し出された。

次の瞬間グラフィックの周囲に、計36本のソードが展開される。展開された36本の剣は、その切っ先を前方へ向けたかと思うと、そのまま前に向けて飛んでいった。

それを見ていたエミリアと、(さっきの説明からある程度は予想できていたとはいえ)NT-Xは啞然とする。

それを見たアルトは『してやったり』といった顔で説明を続ける。

「今のが6つのハードポイント全てに先のナノトランサーを装着し、尚且つ中のストック全てをソード系統の武器にして展開した際のシミュレーション映像です。この他にも、全てのストックをツインハンドガンにして展開したり、もしくはそれ以外の武器にしたり、或いは全て別種の武器にして展開することも可能です。このシステムの発動には、SUVウエポンを使用する時と全く同じ方式を取る事

が決定しています」

「……ツマ、リ、SU、V、ウエ、ポン、ノ、カワ、リ、トイ、ウ、コ、トデ、スカ？」

「そうなりますね。現時点では、SUUVエボンと平行して使用することは不可能ですが、もう少し技術が進歩したら併用する事も可能になるかもしれません」

アルトがNT-Xの質問に答えた後、彼女はシロウにちらと目配せをした。

それを見たシロウが再び前に出てきて口を開く。

「……とまあ、今の所此方で開発できているのは、恥ずかしながら今彼女が説明してくれた2種類だけだ。先程の映像で出てきたガトリング砲や、それ以外の武器は未だ製作途中でね……」

そう言いながら、彼はNT-Xに顔を向ける。

「とりあえず今回君にテストしてもらいたい装備というのは、今君が着ているそのパーツと、今紹介した追加装備。そして……」

シユウウウウ……

そんな音と共に彼の手の中に、一振りの双剣　　干将・莫耶が転送されてくる。

更に彼の後ろにいたアルトの手にも同じように見えない大剣
エクスカリバーが転送されてくる。

何事かと困惑しているNT-Xとエミリア。

そんな二人を見ながら、彼はこう言った。

「……この三つの武器、干将・莫耶とエクスカリバーのレプリカのテストを兼ねて、私達と模擬戦をしてもらおう。異論は無いな？」

武装試験部門 試験ホール

「それでは模擬戦の段取りから説明しよう。まずそのパーツと、追加装備のミサイルコンテナのテストをする為、私と戦ってもらおう。ある程度戦った所で、今度は追加装備をナノトランサーに変更し、アルと戦ってもらおう。その後は干将・莫耶のレプリカのデータ取りの為にまた私と。その次はエクスカリバーのレプリカのデータ取りの為にまたアルと。最後はそれら全てを使った状態で何処まで暴れられるか確かめるために、私とアルとのコンビと2対1で戦ってもらう」

「よろしいかな?、と言ってきたシロウに対して、NT-Xは首を縦に振ることで肯定の意を表す。」

「・・・よし。それでは始めよう。模擬戦の開始の合図は、頭上に設置されたブザーとランプが教えてくれる。あれが全て青く光ると同時にブザーが鳴ったら模擬戦開始だ」

そう言ったシロウは次の瞬間、NT-Xと距離を取る。

対するNT-Xも足裏のスラスターを使い、彼とは反対方向にステップを踏む要領で移動する。

ビッ

頭上のランプの内の一つが赤く光る。

と同時にNT-Xは、既にミサイルコンテナの内二つを何時でも起動できるようにセットしておく。

ビッ

ランプの内二つが赤く光る。

アイカメラの望遠システムでシロウを見ると、向こうもどつやら何か準備した様だ。

この距離だとライフルかロングボウだろうか？

ビッ

三つが赤く光った。

この時にはもうお互いに相手を見つめて、何時でも動ける状態になっている。

そして・・・

ビー！

全てのランプが青く光った。

同時に両者は動き出す。

先手を取ったのはNT-Xだ。

セットしておいた両肩のミサイルコンテナから、片方25発ずつミサイルを発射する。

そのまま彼はミサイルに追い縋る様にして正面に突っ込んだ。

対するシロウはロングボウをその手に顕現させると、2〜3発ほど矢を放ってミサイルを迎撃する。

が、流石に向こうの方が手数は上だと判断したのか、直ぐに迎撃するのを止めて、その場から離れる。

同時にその手に干将と莫耶を顕現させ、周囲を警戒する。

すると、次の瞬間ミサイルが着弾した時に出来た爆風の中からNT

-Xが飛び出してきた。

それを見たシロウは瞬間怯むものの、直ぐに立て直し、NT-Xに切りかかる。

対するNT-Xはそれをバク転の要領で避けた後、右膝蹴りのモーションに入る。

シロウはそれを後ろに跳躍することで避ける。が、次の瞬間その目が驚愕で見開かれる。

何故か？

それは簡単な事である。

右膝蹴りのモーションに入ったNT-Xは、あの直後に膝のミサイルコンテナを展開。

其処から32発のミサイルを全て発射したのだ。

……流石にこれは避けられまい！

そう思ったNT-Xだったが、次の瞬間彼の顔も驚愕で強張る（実際には強張らないが）。

シロウはあの直後、倒れるようにしてスライディングし、自身に当たりそうな物だけを正確に両手に持った双剣で切り払ったのだ。

彼はそのまま再びNT-Xへと切りかかる。

だがNT-Xも負けてはいない。

彼は切りかかれた瞬間、一気にシロウの懐へと飛び込み、相手の腕を掴んだかと思うと、そのままシロウの顎へと頭突きをかましたのだ。

因みにシロウの身長は大体約180Rpちょっと。

対するNT-Xは170Rp位の身長しかない。

その結果、NT-Xはおそらく相手の顔面に頭突きをしようとしたのだろうが、相手は自分よりも頭一つ分以上背の高い相手だ。

結果的に頭突きはシロウの顔面ではなく顎に当たってしまったのだが……まあ、ここでは関係ないだろう。

さて、頭突きを受けてふらついたシロウだったが、食らう瞬間にNT-Xの腹に蹴りを入れていた。

その蹴りは丁度NT-Xの鳩尾に入り、食らったNT-Xはシロウと同じようにふらつきながらシロウから離れる。

両者が再び距離を取った。

お互いがお互いを再び見据える。

仕切り直した。

「ツ……ツカ、レタ……」

あの後、約5分ほどシロウと模擬戦した後、装備をナノトランサーに変えてアルトと10分ほど模擬戦し、今度は武器を干将・莫耶のレプリカへと固定して再びシロウと20分ほど戦ってから、その次はエクスカリバーのレプリカへと武器を固定。そのまま再びアルトと20分ほど戦って、今は次の思いつきり暴れる為の準備に入っていた。

ここに至るまでに費やされた戦闘時間はざっと数えて約60分。つまり一時間ぶっ続けでNT-Xは戦闘している事になる。

ロボットである彼に肉体的な疲労は無いものの、中身は普通の人間とは変わらない為、ここまでぶっ続けで模擬戦していた彼には精神的な疲れが溜まっていた。

故に……

「……」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・故に例えエミリアが先程自分達が待機していた部屋
の一角に、身体をできるだけ小さく丸めてガタガタ震えていたと
しても、その横でミカが頑張つて彼女を慰めていたとしても、その
ちよつと離れた所でさっきの女性研究員が何人かの男性研究員に対
してカミナリを落としていたとしても、何も突っ込んだりはしない
のだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・突っ込んだりしないのだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・「

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・突っ込んだりは

・・・・・・・・ああ、もう!!

「エ・・・・・・・・エミ、リア？ドウ、カ、シ、タノ？」

結局NT-Xは折れて彼女に声を掛けた。

それに反応したのか、エミリアはノロノロと此方へ顔を向ける。

そのまま彼女は数秒間ボーッと此方を見ていたが、その内段々と目が潤んできて、最終的に

ガバツ

つと、NT-Xに無言で抱きついてきて、そのまま固まってしまった。

……え？イヤホントこれどういう状況？

そう思いながらNT-Xはシロウとアルトに視線を向ける。

しかし二人も困惑した表情を此方へ向けるだけだ。

ついでにミカにも視線を向けるが、彼女は苦笑いを浮かべるだけで、特に何も教えてくれない。

その内シロウが男性研究員達にカミナリを落としていた女性研究員を捕まえて、何故エミリアがこうなっているのかを訊ねた。

で、返ってきた返事を簡潔に纏めるところという事らしい。

1・エミリア、暇になってたまたま先程の倉庫に用事があった彼女に、手伝い名目でついて行き、先程の倉庫の近くに差し掛かったとき、何かを目撃する。

2・倉庫の外へ出てきたのは良いが、怖くて其処から動けなくなる。

3・それを見た男性研究員の一人。彼女に元気を出してもらおうと、何故か裸踊りを敢行。

4・エミリア。倉庫を案内してくれた女性研究員共々ドン引く。

5・その光景を見た他の研究員が裸踊りをする男を止めようとする

が、男の妙に熱い演説を聴かされているうちに軽く洗脳され、共に裸踊りを敢行する。

6・益々二人はドン引く。

7・で、その騒ぎが捻じ曲がって他の部署に伝わったらしく、他の部署から大量のHENTAI達がやって来る。

例としては、エミリアにBL本を読ませて同士にしようとする者や、彼女にメイド服を着させてその姿をカメラに100枚くらい収めようとする者。

彼女の写真を撮って、それを元に彼女の精密なフィギュアを作ろうとするもの。

カツ×ミレの素晴らしさを必死に伝えようとする者。

それに反論して、イー×ミレの素晴らしさを熱弁する者。
ヒュー×カツの同人誌の製作を手伝わせようとする者。

18禁同人誌を彼女にお土産として持たせようとする者。

何故かNT-Xの内部構造を聞き出して、彼の18分の1モデルのプラモデルをフルスクラッチしようとする者。

「姫×金髪少女キターー!!!」等と叫びながら何かを書いている者。

突如夢色チエイサーを2〜3人で合唱し始める者共。

そいつらを横目にエロゲをプレイする者。

ブーメラパンツーチよに白衣を着て無意味にお経を唱える者。

ただ純粹にエミリアを心配して、彼女にジュースを買って来てくれた者。

特に騒ぎに関わらず、NT-Xがテストしている物品のデータ取りを続行するもの。

それが終わるのを、全裸にネクタイだけ着けて椅子の上に正座するもの。

そいつ等を少し離れた所からポテトを齧りつつ、傍観する者

e t c

で、大体そんなHENTAI達が300人位集まってきて部屋が芋洗い状態になり、エミリアがいろいろな原因で段々と涙目になった所で、

8：エミリアと一緒に居た女性研究員。HENTAI達を一喝！

9：HENTAI達。蜘蛛の子を散らすように逃げる。

10：何人が捕まって向こうで彼女の説教を受けている最中。今ここ

．．．．．ということらしい。

．．．．．そりやまた．．．．．何とも．．．．．

この研究所の人達って普段ヒマなのだろうか？まともに仕事していた人が少な過ぎる様な気がするぞ？

そうNT-Xが思ってしまう位に馬鹿馬鹿しい内容に、彼とシロウ、そしてアルトは呆れてしまった。

で、そのまま女性研究員はそのまま説教へと戻ってしまった。

彼女が説教へと戻るのを見届けてから、NT-Xは再びエミリアの方へと顔を向ける。

彼女は先程彼に抱きついた体勢のまま、ピクリとも動かない。

振り放そうと、NT-Xがゆっくりとではあるが身を擦ってみても、一向に事態は好転しそうに無い。

このままでは埒が明かない。そう考えたNT-Xは仕方が無いのでエミリアに声をかけて、離れて貰おうとした。

が、

「……………ZZZ……………」

……………ん？

声を掛けようとしたところで、彼の耳（の役目をしているセンサー）にそんな音が入ってきた。

はて？と思ったNT-Xが周囲を見回すも、周りに寝ているような人間は一人もいない。

……………まさか？……………」

そう思いながらNT-Xはエミリアの顔を見る。その顔は

「ZZZZZZZZZZ……………」

まーなんともその顔は安らかなもので、静かな寝息を立てているどころか、彼女は涎までたらして心地良さそーに寝ていた。

……………エエエエエー？

NT-Xは彼女が起きないようにその体を右手で支えつつも、残った左手で頭を抱えた。

気疲れとかもあったのだろうが、まさかこのタイミングで寝られる

とは思いもしなかったのである。

・・・・・・・・・・・・・・・・どうしようか？

この後まだもう一回模擬戦が残っているNT-Xとしては、ここで無用な体力の消費は避けたいが・・・・・・・・このまま此処（ンタイ達の集居地）に彼女を残して行ったらどうなるか分かったもんじゃない。

かといって自分達が乗ってきた船に彼女を連れて戻る、というのもあまり頂けない。

だからと言ってこのまま彼女を起こせば、どう考えても面倒臭い事にしかならないのは目に見えている。

・・・・・・・・仕方ない、か。

そう考えて、ゆっくりとエミリアの体勢を変えさせ、所謂お姫様抱っここの状態で彼女を抱き上げるNT-X。

そのまま周囲を少し見渡してから、寝かせるに丁度良いベンチを見つけ、其処にエミリアを横たえる。

ミカさん。んじゃ、後お願いします。なるべく早く戻って来ますので。

そのまま『ちよつと高度なアイコンタクト』を使って、ミカと一方的に会話(?)した後、シロウとアルトの方へ戻っていくNT-X。後ろの方でミカが『え！？ちょ、ちよつと待って下さい！？』と言っている様な気がするが、こっちだってさっさと終わらして休みたいのだ。

一応アリーナの方へ戻って行く際に、説教をしていた女性研究員にエミリアの面倒を頼んでおいたので、大体の事はこれで大丈夫だろう。

大丈夫だと、思う。

「ト、イウ、ワケ、デ、サツ、サト、ハジ、メ、チャ、イマ、シヨ、ウ」

そう言つて両手に干将と莫耶を出現させるNT-X。

因みに追加装備は、両肩と両膝にミサイルコンテナ。両肘にはナノトランサーという感じだ。

「……………そうですね。これ以上、内の恥部を晒す訳にもいきませんし……………」

そう言いながら、手に見えない大剣　　エクスカリバーを出現させるのはアルト。

その口元には笑みが浮かんでおり、そのセリフだけ見ればおどけて言つてる様にも見えるが、目がかなり本気^{マジ}なので、どうやら真面目に言つたようである。

「そうだな……………とりあえず模擬戦は先程の事もあつて、時間は10分間だけでいいかな？」

アルトの言葉に頷きながら、NT-Xと同じ様に、両手に干将と莫耶を出現させるシロウ。

一応先程の騒動がまた起きないとは限らないと考えてか、本来はもう少し長く取られていた模擬戦の時間を短くしたらしい。そんなシロウの問いかけに、NT-Xは首を縦に振りながら肯定する。

「そうか。それでは……」

そう言っただけでシロウは構える。

同時にアルトも構える。

頭上のブザーが、

鳴った。

「いくぞ！」「いきます！」

そのセリフと共に駆け出すシロウとアルト。

対するNT-Xは未だ両手にただ干将と莫耶を下げてただけの状態だ。それを訝しげに思う二人だが、先に彼を射程に捉えたシロウが、両手の双剣をNT-Xの頭部目掛けて投げつける。

と、次の瞬間NT-Xは前のめりに倒れ込む……様にしてかなり低い体勢で走り出した。

投げつけられた干将・莫耶が右肩と背中をかなり薄く切るが、彼はそれに構う事無く走る。
その狙いは……アルトだ。

対するアルトは彼が間合いに入った瞬間、エクスカリバーで下段から切り掛かる。

が、

ガキッ！

という音と共にその剣は止められた。

見れば、NT-Xが左肘のナノトランサーからシールドを呼び出して、上手くエクスカリバーを押さえ込んでいた。

そのまま拮抗するかに思われた両者だったが、両者の上空から降ってきた矢によって、二人は距離を取る。

矢の主はシロウだ。

上空に飛び上がりながらロングボウを撃つたらしい。

そのまま干将・莫耶に武器を切り替えて、NT-Xを攻めるシロウ。対するNT-Xは、武器をエクスカリバーに変更。

アルトの持つオリジナルよりも若干性能が下がっているレプリカではあるものの、フォトンアーツ時以外では、“見えない剣”となるシステムは同一の物らしい。

シロウから放たれる干将・莫耶による連撃を、剣の腹で上手く受けつつ、反撃の隙を窺う。

が、その後ろから斬撃が放たれる。
アルトだ。

どうやらNT-Xがシロウからの攻撃に集中している隙に、彼の後ろへ廻っていたらしい。

NT-Xはそれを頭部センサーの警告で確認した瞬間、シロウに対して右膝から12発のミサイルを放つ。

至近距離からの攻撃だった為、いかな彼でもいくつかは避けきれず、そのまま爆風で後方に吹き飛ばされる。

が、それは撃った本人も同じだった様で、そのまま後方に
ルトの方へと吹っ飛ぶ。 ア

．．．．．厳密に言くと、吹っ飛びながら手に持ったエクスカ
リバーを振って、アルトのエクスカリバーを迎撃した。

切り結ぶ両者。しかしNT-Xは再び、今度は左膝から22発のミ
サイルをランダムで発射する。

瞬間離れて、ミサイルを切り捨てていくアルト。

が、それを見たNT-Xは残った両膝のミサイル計30発を、アル
トに打ち込む。

対するアルトは、先に来ていた22発のミサイルを切り払い終わる
やいなや、エクスカリバーを構える。

すると、構えられたエクスカリバーへと光が収束していく。

．．．．．あれはヤバイ!!

そう考えたNT-Xは咄嗟にその場を横っ飛びに離れる。

そして次の瞬間、

「エクス．．．カリバー!!」

アルトの放った気合の籠もった咆哮と共に、エクスカリバーから光
が放たれる。

その光はNT-Xが放った30発のミサイルを全て呑み込んで、彼
方へと飛んで行った。

．．．．．あ、危ねえええええ!!!!

何とか避けれたNT-Xではあったが、彼は今放たれたエクスカリ

バーからの攻撃に、戦慄していた。
もしもあの中に呑み込まれていたら……
分かったもんじゃない。

「よそ見していいのかな？」

そんな声が聞こえてそちらを見てみれば、何時の間にかシロウが此方に弓を構えていた。
慌ててその場を離れるNT-X。そして……

……？

放たれたのは、矢ではなく剣。

しかもそれは先程までシロウが使っていた、干将であった。
それを疑問に思う間もなくもう一本の剣、莫耶が飛んでくる。
と思つたらまた、干将が飛んできた。

それを確認するのとはほぼ同時に、今度は莫耶が飛んできた！

……一体どうなってるんだ！？

そう思う間もなく、干将・莫耶が自分の目の前と背後のギリギリの部分まで来ている事に気付く。

マズイ！そう思った瞬間

ブローケンファンタズム
「壊れた幻想」

というシロウの呟きと共に、それらが爆発する！

……でええええええええ！？

咄嗟にブースターを背面に展開して、空へと飛び上がる事でそれらを回避したNT-Xだったが、どうやら膝のコンテナが損傷したらしく、火花を上げています。

それを確認したNT-Xは舌打ちもそこそこに、火花を上げていたコンテナを？ぎ取ると、シロウへと投げつける。

そのまま右手にライフルを転送し、両手で構えて今投げつけたコンテナに照準を合わせる。

バヒュッ

そんな音と共に銃口から光が放たれる。

放たれた光はコンテナを貫通し、それを爆発させる。

ついでにもう一つを、背後から迫ってきていたアルトに向かってブン投げる。

かなり勢いを付けて迫っていたのだろう。

空中に浮かんでいるNT-Xに向けて突っ込んでいたアルトは、そのままコンテナを顔面にもろに食らった。

ゴビン、という鈍い音と共に動きを止め、そのまま床へと落ちていくアルト。

……なんか、結構あっさりと決まったけど、とりあえずこれで残りは……

そう思いながらNT-Xはシロウのほうへと振り向きつつとするが、突如背筋に悪寒を感じ、反射的に身体をそらす。

と、今さっきまで彼の頭があった所に、またしても剣が飛んできた。

しかも今度は二本　干将・莫耶がいつぺんに飛んできた！
今度は冷静にそれらを捌こうとするNT-X。
とりあえずこっちも干将・莫耶を転送し、それらを別々の方向へと
弾き飛ばす。

鶴翼しんぎ、欠落むけつヲ不ラズしはんじやく

不意にそんな声が聞こえた。

何だ？、と思つて、NT-Xが弾いた剣から目を離した瞬間

ガキイーン！！

そんな音と共に両肩に衝撃が奔る。

何が？と思つ暇もなく、続けてもう一撃、今度は背中を切り付けら
れた様な衝撃が襲う。

心技泰山ちからやまをぬニ至リ

今度はそんな声が聞こえ、同時にNT-Xの頭部センサーが、此方
に向かつてくる4本の剣を捉える。

NT-Xは向かつてくる4本の剣を、武器をエクスカリバーに換え
て剣を横薙ぎに振る事で、全て弾いて床に落とすことに成功する。

心技黄河しんぎみすをわかつヲ渡ル

が、上手く落とせた事を喜ぶ暇も無く、また新たな剣が飛んでくる。

……このままではマズイ！

そう考えたNT-Xは、飛んできた剣

またしても干将と莫耶

だ　　を避けながら、ブースターを使って急降下し、床すれすれを飛びながら、剣の主であるうシロウを探す。

せいめいりきふうこうどめ
唯名別天二納メ

再びシロウの声。

同時に正面と後方から再び迫る干将と莫耶。

しかし、そう何度も見ていたら、流石に見切れるようにはなれる。

NT-Xは足の裏にバーニアを展開させ、その場で急停止。

同時に脚部スラスタと足裏のバーニアを利用して、回し蹴りの要領で前方の干将を弾き飛ばす。

そのままその時の慣性を利用して、後方の莫耶も弾き飛ばす。

………いた！

ここでやっとNT-Xはシロウを見つける事が出来た。

そのままライフルで狙いを定めようとする。

しかし、彼がスコープを通してシロウを見たとき、彼の口元がこう動いたのをNT-Xはギリギリまで気付けなかった。

もっと自分の周りをよく見るべきではないかね？

………っ!?

ハッとしてスコープから目を離し周りを見る。

………其処には干将と莫耶が各五本づつ。計十本が自分を中心に円を描くようにして刃を向けて空中に浮いていた。

われら
両雄、共二命ヲ別ツ

シロウが最後の言葉を呟く。

それを切っ掛けにして十本の干将と莫耶は、一斉にNT・X目掛けて彼を串刺しにせんと突っ込んだ！

NT・Xはそれを見て回避は不可能と判断し、武器をエクスカリバーへと交換し、回転切りの要領でその全てを薙ぎ払おうとする。

が、次の瞬間、

ドドドドドドドドドドドドオオオオン！！！！

という音と共に干将と莫耶が全て大爆発を起こし、NT・Xはそのまま爆風に吞まれてしまった。

「ブローケンファンタズム
壊れた幻想」

そう呟いてから、NT・Xが爆風に包まれたのを確認してから、シロウはふっと小さく息を吐いた。

アルが落とされたのは、想定外だったが、その後は何とか此方の策に上手く乗って来てくれたので、これで一安心だ。

「とは言え、まだ気は抜けないな」

そう言いながら、両手で干将と莫耶を構えるシロウ。

実際此方に送られてきたデータによると、彼はCランクとはいえデ
イ・ラガンをたった一人で勝れるというのだから。

．．．．．しかし、さしもの彼でも流石にアレを受けては一溜ま
りも無い、か？

爆風による粉塵が晴れていく。其処には．．．．．

．．．．．何？

．．．．．其処には何も無かった。NT-Xだろうと思われる人影
も。彼の体の一部であるパーツや、彼が使っていた武器の破片す
ら。

．．．．．どういう事だ『ボコッ』っ!!

シロウが何も無い事を訝しんで、さっきまでNT-Xが居た場所へ
と足を向けようとした時、彼の足元から、妙な音が鳴った。

同時に何かに足を掴まれた様な感覚。

バツとシロウが自身の足元を見下ろすと

其処には、

床を突き破って出て来たのであろう黒を基調としたアーマーに包ま

れた赤い手が、

彼の足を掴んでいるという光景が広がっていた。

「っつて、なんでさ！！！！！」

ホラーとしか思えない光景に、シロウは自身の口癖である言葉を無意識に叫んでしまう。

が、そんなことお構い無しに地面から飛び出た手は、シロウの足を掴んだまま彼を床の下まで引きずり込もうとする。

「ぬおおおおお！！！！？」と雄叫びを上げながら引きずり込まれまいと必死に抵抗するシロウ。

……が、この手の持ち主は相当な怪力の持ち主らしく、シロウは必死の抵抗も空しく、そのまま床下へと引きずり込まれてしまう。

そしてシロウの全身が完全に床に引き込まれてから暫らく経った後、

ポンポン

ビッ

ゴンー！

ガッゴツー！

ズガッバシツドガアー！！！！

ペシペシペシペシ・・・・・・・・・・・・・・・・ガキイ！

ズドムツー！！

ドスツ！

ボカグシヤメシドガバコバコブスブス・・・・・・・・・・プス
メキメキメキメキメキ！！

ズガッゴオツー！！

バツバツバツ

ジョインジョイントキィ!!

テーレッター

という音が鳴り、

ボコツボコツ

という音を立てて、

「・・・・・・・・・・シ、シヌ、カ、トオ、モツ、タ・・・・・・・・」

体中からスパークを出して、所々を煤や赤い液体等で汚したNT-Xが地面から這い出てきた。

どうやらあの爆発の寸前、地面に穴を掘って爆発によるダメージを回避したようだ。

さっきの音？気にはいけない。

・・・・・・・・・・やり過ぎたかな？

そう思いながら自分の這い出てきた穴を覗き込むNT-X。

穴の奥では、シロウが一見ミンチよりも酷い状態で転がっていた。

と、彼の頭部のモニターに、両肩のミサイルが無くなった事を知らせるアラートが表示される。

・・・・・・・・・・あ、弾切れちゃった・・・・・・・・まあ良いか。確か
さっきアルトさんは撃墜・・・・・・・・

NT・Xは其処まで考えたところで、突然後ろに出現したプレッシ
ヤーで動きを止める。

「…………シタ…………ハズ…………ダシ…………？」

そう言いながらゆっくりと後ろへ振り返る。

其処には顔を真っ赤にして、

結っていた髪を解いて振り乱し、

両手で聖剣を構えた金色の獅子が、

此方を鋭く見据えていた。

「……………アノ……………アル、ト……………
……………サン……………?」

「……………どうかしましたか？NT-X」

「・・・・・・・・・・・・・・・・オコ、ツテ、マス？」

「・・・・・・・・別に怒ってませんよ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・オコ、ツテ、マス、ヨ、ネ・・・・・・・・・・？」

「怒ってなどいません」

「・・・・・・・・イヤ、オコ「怒ってなどいません！！！」・・・・・・・・・・サ
イ、デス、カ」

そう言いながら、肩を落とすNT-X。

それを見ながらアルトはニイツと笑ってこう言った。

「ええ。怒ってませんとも。精々私の目の前に居る黒と青と赤の
型に全力でエクスカリバーを叩き込むという衝動が、私の中で暴れ
回っているだけです」

そう言ってますます笑みを深くするアルト。

それを見たNT-Xは、やれやれ、と手と頭を振ってから一言。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ソレ、ヤッ、パリ、オコ、ツテ、ルン、ジャナ、

イ、デ、スカ!!!!!!」

「喧しい!!!!往生しなさい!エクス……………」

そう言つてエクスカリバーへと光を収束させるアルト。

あ、これは避けられないな。

そう考えたNT-Xは、どうやってこれを凌ごうか思案する。

ふと、さっきまで自分が使っていた武器 エクスカリバーの

レプリカの事を思い出した。

確かあれはレプリカではあるものの、基本的にはオリジナルとそこまで変わってはいない筈だ。

……………だとすれば、アレでもあの技を使おうと思えば使える?

……………試してみるか。

そう考えたNT-Xは、エクスカリバーを手元に呼び出し、アルトの構えを真似して、同じ様に剣を構える。

しかし其処までやった所で、彼はある重大な事に気付いた。

……………そういえば、どうやって

あんな風にエネルギーを収束させれば良いんだ?

そう。例え構えを真似たところで、一エネルギーを収束させる方法^{アレ}が分からなければ、このまま吹き飛ばされるだけである。

……どうしよう。

N T - Xの背筋に冷たい物が流れる。このままでは八方手詰まり。如何にかこの状況を打開できなければ、あの怒りの籠もった金^{エクス}ぴか^{カリバー}波導砲で吹き飛ばされて、T H E E N Dである。

と丁度その時である。

彼の頭の中で、一つの言葉が思い出された。

『幾つかバリエーションがあつて、その内の一つが物凄くとんでもない設定になっていてな……その……』

『……そう。その物凄くとんでもない設定のパーツなのだ……』

シロウがこのパーツを取りに行く前に言っていた台詞である。

ああ言っていたわりには、このパーツ、未だその“物凄くとんでもない設定”を発現させてはいない。

……あ、いや、追加装備を全部あのナノトランサーにして、全武器を一斉展開するというのも十分とんでもない設定ではある。

しかし、あんなH E N T A I達が跳梁跋扈しているような所である。流石にそれだけでは物足りないという物だろう。

そう考えたN T - Xは直ぐに自分が今装備しているパーツを解析す

る。

チラと見ると、もう直ぐ向こうはチャージが終わりそうだ。
あ、もうヤバイかも、と彼が思った瞬間。

・・・・・・・・あ、あった。

ソレはあっさりと見つかった。

・・・・・・・・ただし使えるのは、現状一回つきり。
外せば、もう次は無い。

でも、

・・・・・・・・このまま負けるっていうのは・・・・・・・・

「シャ、ク、ダシ、ナア」

そう言って、彼はそのシステムを起動させた。

その、システムの名前は

「・・・・・・・・カリバアアアアア！！！」

アルトが、その必殺の一撃を放つ。
彼女は勝利を確信して、口元に笑みを浮かべる。
しかし次の瞬間、その顔は驚愕で彩られた。

金色の光の先。

その先にいた一人の人型は次の瞬間、

「エ、クス………」

彼女と全く同じ必殺の一撃を、

「カリ、バー！」

その鷹作エクスカリバーのレプリカの聖剣から放った。

二人の放った渾身の一撃が激突する。

そして、放たれた斬撃はお互いを相殺。

激突による衝撃は、周囲に莫大な量の粉塵を巻き上げた。

一気に両者の視界が白く染まる。

しかしNT-Xとアルトは、それを意に介さず真正面に向かって突っ込む。

まず敵を確認したのはNT-X。

彼は頭部のアイカメラをサーモセンサーへと切り替えて、アルトの姿を見つけると、身体各部のブースターやバーニアを一気に点火して、アルトへと最高速度で切りかかる。

対するアルトも空気の流れてNT-Xの動きを察知し、真正面からNT-Xへと剣を振る。

ガツキイイイーン！

互いの得物がぶつかり、両者はそのまま鏢迫り合いに入った。が、この場合単純な力勝負では、強化されているとはいえ生身の人間であるアルトよりも、ロボットであるNT-Xの方に軍配が上がる。

実際この後、アルトは鏢迫り合いに押し負けてしまい、少し後方へと吹き飛ばされる。

NT-Xはそのまま彼女を追撃し、対するアルトも体勢を立て直して、一気にNT-Xへと接近していく。

そして次の瞬間、勝負は決まった。

お互いの武器が止まる。

NT-Xの右手にあるエクスカリバーは、アルトの首筋へと。

逆にアルトの構えるエクスカリバーは、NT-Xの首筋へと添えられていた。

……相打ちだ。

しかしそんな彼らをNT-Xの後方から狙うものが一人。

シロウだ。

どうやら先程よりも、若干回復したらしい。

そんな彼の構える矢の切っ先は、正確にNT-Xの頭部を捉えていた。

・・・しかしシロウは動けない。

何故なら、何時の間にかNT・Xの左手が持っていたライフルの銃口も、正確にシロウの眉間を狙っていたのだから。

そのまま3人は少しの間膠着状態へと陥る。

そのまま1分ほど経ってからだろうか？

沈黙を破ったのは弓を構えていたシロウだった。

「・・・ふむ。これはもう続けようが無いな・・・・・・ドロー、と言った所か」

そう言っつてシロウは弓を下ろす。

同時にNT・Xもライフルを下ろす。

・・・勿論右手のエクスカリバーはそのまま。

「・・・で？アル、どうするのだ？ハッキリ言っつてそっちもどう考えても引き分けにしか見えんし、それ以上続けようも無いと思うのだが？」

弓を完全に下ろし、NT・Xもライフルを完全に下ろしたことを確認し、シロウがアルトに問い掛ける。

それを聞いたアルトは反論しようとするが、

ピーッ！！ピーッ！！ピーッ！！

という音が鳴り、その反論の言葉を掻き消してしまった。

どうやら10分過ぎたようである。

こうなっつてしまえば、続ける訳にはいかない。

それにここで我俣を言っつて延長すれば、先程のHENTAI達が今度は何をやらかすか分かつたもんじゃ無い。

アルトは渋々と剣を下ろした。

それを見たNT-Xも同じように剣を下げる。
するとアルトが恨めしそうに彼を見ながらある疑問を口にした。

「……しかし先程貴方は何故アレが出来たのですか？アレは本来
“オリジナルであるこのエクスカリバー”からしか放てない筈なの
ですが……？」

それを聞いたNT-Xは文字通り“目を丸くして”『え？知ってる
んじゃないの？』という感じで驚く。

その様子を目にしたシロウが『ああ、あれか』といった表情をする。
そんなシロウの表情を見て、アルトはシロウに問い掛けた。

「シロウ。貴方が知っているのですか？」

「うん？アルトには言ってなかったか？あれはRSだライニングシステム」

シロウの答えに対して、アルトは「らーにんぐしすてむ？」と呟く。
それを見たシロウは、あちゃ〜といった感じで額に手をやる。

「……その様子から見るに本当に言ってなかった様だな。すまな
い。私のミスだ。簡単に説明すると、RSというのは、そのシステ
ムが搭載されているパーツを装着したものが、例えばアルトのエク
スカリバーを目にすると、一時的ながらその技を使えるようになる
というシステムだ。一時的とはいえ、戦闘終了後に、専用の機
材にパーツを接続して、収集したデータを機材で解析すれば、それ
をFAディスクフォトンアーツにして、ちゃんと習得出来るようになる」

ただ、一つだけ問題があつてな、と続けてシロウが説明する。

「このシステム。実は現状キャストにしか使えないというデメリットがある。しかもラーニングする技には制限が無くてな。例えどれだけ人体構造を無視してしようと、勝手にラーニングしてしまう恐れがあるのだ。故にこれはいろんな意味で危険だと判断した上層部によって一応の完成を見た後で凍結されていたのだが………
「どうやら誰かが勝手にそのパーツに搭載してしまっただけだ」

それを聞いて、戦闘モードを解除したNT-Xが呟く。

「ジャア、ヤツ、パリ、セ、ント、ウマ、エニ、イツ、テイ、タ、
“トン、デモ、ナイ、セツ、テイ”、トハ、ヤハ、リ」

「そう。そのラーニングシステムだ。まあ今回は模擬戦の敵として私達としか戦わなかったから、その事を始めて知った時私も特に注意はしていなかったのだが、まさかあのタイミングで使われるとは思わなかったぞ」

そう言われたNT-Xは、ふふつと笑ってこう言った。

「エエ。コレ、デモ、“ロボ、ット”、デス、カラ」

武装試験部門 モニタールーム

今更の事だが、さっきまで“先程の部屋”と言われていたこの部屋が、実はモニタールームと言う名前だと知ったNT-Xは、どうりでモニターが多い筈だ、と、どこかずれた事を考えながら、先程エミリアを寝かせたベンチの方へ向かっていた。

見るとまだ彼女はスヤスヤと夢の中らしい。可愛らしい寝息が聞こえてくる。

此方に気付いたミカが、『突然人に全部丸投げしないで下さい！』と抗議の声をあげたが、NT-Xはゴメンゴメンといった風に手を振って、そのままエミリアの隣に腰を下ろした。

………本っ当に疲れた………うん。俺、よく頑張った。

そう心の中で呟きながら、NT-Xは寝ているエミリアの頭をゆくりと起こさないように撫でてから、その金髪を少し手で流す。

………エミリアも、いろいろな意味でお疲れ様。

心の中でそうも呟く。声に出しても良いが、それでは流石に起こしてしまうだろうと思って自重した。

そのまま何回か彼女の髪を手櫛で梳いていると、どうやら思っていたよりも彼自身精神的な疲れが溜まっていたようで、NT-Xは眠気に近い感覚に襲われた。

……あ、これはオチる

そう思った次の瞬間。

彼もエミリアと仲良く夢の世界へと旅立っていった。

それにアルトが気付いたのは、彼らの近くを通った時だ。

データの解析も終わったので、少し休もうとモニタールームのベンチが置いてある一角を通った時に、彼女はそれを見た。

……おやおや。これではまるで

フツツと苦笑にも似た笑みがこぼれる。

そんな彼女を見たシロウが、彼女に声を掛けようとする、彼女は指を口元に持っていて、『シー』と言うジェスチャーをした後、とある一角を指差す。

シロウは疑問に思いながらも、その指の先を見る。

其処にあったものを見たとき、シロウも思わず先程の自分の妻と同じ様なリアクションを取ってしまう。

その後、もう一度その光景を見ながらシロウは呟いた。

「……微笑ましいな。これではまるで

」

まるで兄妹のようだ

少なくとも恋人同士には見えん、と続けて呟いたシロウの視線の先ではこんな光景が繰り広げられていた。

ベンチに腰掛けたまま、頼杖をついて眠るNT-X。

その太腿の上には先程からちよつと移動して其処に頭を乗つけたエミリアが少し涎を垂らしながら、静かに寝息を立てている。
.....そんな平和な光景が其処にはあった。

少し眠ってしまった後、シロウとアルトにエミリアと二人揃って起こされたNT-Xは、簡単な説明と、模擬戦から取れたデータの解析結果を聞いた後、クラッド6に戻る為、迎えの為にベルが乗って来たマイシップの前にいた。勿論エミリアも一緒だが、まだ少し夢現なのか、少々視点が定まっていない。

「今日は本当にすまなかった。お蔭で良いデータが取れたが、私たちの少女の方には少し怖い思いをさせてしまったかな？」

見送りに来てくれたシロウがそう言うと、エミリアはあの悪夢を思い出したらしく、一瞬で目が覚め、身体が震え始めた。

それを見たベルが、事情は分からないがとりあえず宥めたほうが良いなと考え、彼女を宥めるが、この様子では当分は続きそうだなと考えたNT-Xは、特に気にしてませんよ、と返す。

「ダイ、ジヨウ、ブ、デス、ヨ。ドウ、セ、トラ、ウ、マ、ニナ、ツテ、イル、ノ、ハ、エミ、リア、ダケ、デス、カラ」

それを聞いたエミリアが少し恨めしそうに此方を見つめてくるが、NT-Xは軽くスルーした。

「まあそれでも、だ。怖がらせてしまった事には代わりは無い。と、言う訳で、これはお詫びの印だ」

そう言ってシロウが手渡してきたのは、何かのチケットだった。

NT-Xが何だろうとそれを手にとって眺めていると、シロウの隣にいたアルトが説明してくれた。

「それは……コスチュームの交換チケットですね。うちの製品しか対称になってはいませんが、これをショップの店員に買い物の時に渡せば、一着タダで貰えるという物です」

だって、とNT-Xがエミリアにチケットを見せると、彼女は案の定チケットを見て目を輝かせた。

……まったくこの子は……

げんきんな奴、と彼が呆れていると、「それとこれもだ」と言っ、シロウが何かを手渡してきた。

それは一振りの大剣と、一对の双剣。そして2枚のディスクだった。

……って、これは……

それらを見た瞬間に、NT-Xは驚きで目を見開く。それを見たシロウがフツと微笑みながら口を開いた。

「そう。エクスカリバーと干将・莫耶だ。この二枚のディスクには、最後の模擬戦で私たちが使った技がインプットされている。勿論、エクスカリバーと干将・莫耶は先程のレプリカだが」

性能は保証しよう、と彼は付け加えた。

「エ、デモ……イイ、ン、デス、カ？コン、ナノ、モラ、ツテ、モ？」

そう疑問を呟くNT・Xそれを聞いたシロウは首を縦に振ってからこう言った。

「勿論。元々は此方の都合でここまで来て貰ったのに、データも上々の物を取らしてくれたのだ。少し報酬に箔をつけても上は文句を言えまいよ」

シロウがそう言い終わったのを見て、アルトが声を掛けた。

「シロウ。名残惜しいですが、そろそろ時間です」

それを聞いたシロウは「そうだな」と頷いてから、NT・Xとエミリアに向き直ってこう言った。

「それではこれでお別れだ。縁があればまた会えよう。今日は本当に助かった。礼を言う」

そう言って頭を下げるシロウ。

それに対してNT・Xは、いやいやと手を振ってこう返す。

「コチ、ラ、コソ、イイ、ケイ、ケン、ニ、ナリ、マシ、タ。アリ、ガト、ウ、ゴ、ザイ、マス」

そう言ってNT・Xも頭を下げる。

暫らくしてからどちらからとも無く笑い出してから、二人は二人はお互いの手を取った。

「それでは、また」

「エエ、マタ」

そう言ってから、マイシップの中へと入っていくNT-X。それを見たエミリアも、NT-Xが渡してくれたチケットを手に、シロウとアルトに深々と頭を下げた後へと続いた。

ベルもエミリアと同じ様に頭を下げた後からマイシップの中へと入っていく。

程無くしてから、マイシップは中へと浮き上がり空へと上っていった。

研究所前の離発着場に残されたアルトとシロウは、NT-X達が乗ったマイシップが見えなくなるまで、空を見つめていた。

「トイウ、コトガ、アツタン、デスヨ」
時間軸は戻って再びクラッド6のカフェ。
NT-Xが話し終えた頃にはエミリアも立ち直っており、話し終えたNT-Xに、こう言った。

「そういえば、あの後はおっさんの依頼でモトウブに行っちゃったから、結局あのチケット使ってないのよねー……………何時使おうかしら、これ」

そうやってあのチケットを手でヒラヒラさせるエミリア。

それを聞いたリイナが丁度いいやと言わんばかりにエミリアにこう言った。

「そしたらさ、これ食べ終わったら買い物に行こうよ！あたい達、まだこっちに来てから日が浅いから、何処に何があるのかわからなくってさ」

そう言って笑うリイナに、エミリアはすぐOKを出すと、NT-Xに向かってこう言った。

「そういう訳だから、さっきのミッションの報告書よろしく！ちゃんとお土産も買ってくるからさー！」

お願い！、というエミリアに苦笑しながら手でOKを出すNT-X。それを見たエミリアは勢い良く目の前の夕飯を片付け始めた。

そんなエミリアを微笑ましいと思いながら、リマ夫妻とベルと顔を見合わせて苦笑するNT-X。

それから彼はゆっくりと自分の手を見た。

其処にあるのはいつもと変わらない自分の手だったが、今の彼には其処に大切な物があるかのような目でそれを見つめていた。

・
・
・
・
・
ええ、また。

また、会いましょう。

如何だったでしょうか？

何度も書き直したので、グダグダになってしまったかもしれませんが、それでも楽しんでくれたら幸いです。

・・・気が付いたら丸々一ヶ月以上経っていた事に驚愕しました。因みに今回出てきた“RS”ですが、これは今回だけのネタシステムなので、今後は出てこない・・かも。

さて、いよいよ次から3章に入っていきます。

多分結構あっさり終わってしまうかもしれませんが。

なにせプロット見てみたら、大体1話とちょっと位しか無いんですもの。

とりあえずちゃんと中身があるように頑張ります。

それではまた次回。

イラストく悪夢とトマトジュースとハ（主にクラウチの）頭の痛くなる話【（前書

やっところさ二章突入です。

でもまだインターミッションです。

それでは本編をどうぞ。

イラつく悪夢とトマトジュースと「（主にクラウチの）頭の痛くなる話」

目の前には果てしなく荒野が広がっている。

その中で戦っている二体の巨人。

一体は三色の白を基調として、頭部の赤い水晶体から二本の角を生やして、胸のダクトがバイクのインテークのように背部のランドセルに直結されている。

目は黄色く二つ光り、その背にはシンプルなバックパックと二本の懐中電灯のような物が取り付けられていた。

全体的に未来的なフォルムだ。

既にその手には武器は無く、今は近くに刺さっていた、日本刀型の武器を手に入れている。

対するもう一体は白と黒を基調とした体を持っていた。

額の黒い水晶体から生えている4本の角は、外側の二本は白く、内側の二本は黄色い。

その目は緑色に二つ光り、その背には機械的な羽と共に、4つの白いキャノン砲と二振りの大剣を携えている。

しかし、その顔の左側には、まるで何かで切られたような裂傷があり、左目からは、カメラのレンズが剥き出しになっている。

体の所々は、壊れて砕けて、その傷を鈍色の装甲板で無理矢理塞がれている。

此方は対峙している巨人と比べると、何処と無く落ち武者の亡霊をイメージさせるような風貌だ。

その両手と、背中にマウントされている大剣にいたっては、まるで人でも切ったかのように赤黒い何かがベッタリとこびり付いている。

二体はその身体のスラスタを全て使い、細かい機動と最高速による高機動戦闘を交互に繰り返しながら戦っていた。

そのまま40分ほど切り結んでいただろうか。

突如として二体はそれぞれ構えを取り、その場に留まった。

そのまま2〜3分ほど両者は固まっていたが、突如としてお互いに突っ込み、その手に持った剣で相手を切りつけた。

砂塵が舞う。

そして舞い上がった砂塵が全て落ちた時、その場に立っていたのは

・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・」

セットしておいた目覚ましの音と共に、NT-Xは目を覚ました。
あ、いや、この場合、彼は一応ロボットなので、起動したと言った
ほうが正しいのだろうか。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・・・嫌な夢を見た・・・・・・・・・・

先程の夢が一体何なのかは分からないが、少なくとも彼はその夢を
“嫌な夢”として認識していた。

基本的に汗をかかないNT-Xも、この時は妙な不快感を全身に感
じていた。

まるで見えない薄いゴムが全身に張り付いているような感覚がする。

ふと顔を下にやると、ベルの顔が見えた。

どうやら何時の間にか入り込んできていたらしい。

フツと笑ってから、彼女を起こさないようにゆっくりとベッドから
出る。

そのまま軽く朝食を取った後、書置きを残してから、彼は珍しく一
人でフリーミッションへ向かった。

・・・・・・・・・・その身に剣呑な雰囲気纏って・・・・・・・・・・

彼がフリーミッションから帰ってくると、突然通信端末に連絡が入った。

彼が誰だろうと思って出てみると、相手はクラウドだった。

口調からして、エミリアが何かしたらしいが・・・どうしたのだろうか？

NT-Xがそんな疑問を頭の中で呟いているのもお構い無しに、クラウドは『さつさと来い』とだけ言って、通信を切ってしまった。通信がほぼい一方的に切られてから、NT-Xは軽く溜息を吐いた。自業自得とはいえ、こっちは仕事帰りなのだからもう少しゆっくりさせても・・・そう思っても相手は一応自分の上司であるし、それなりに恩もある。

再び今度は周囲にも聞こえる位の音量で溜息を吐いた。

・・・でもまあ、何時までもうだうだしてちゃダメか。

少しの間、その場で佇んでいたNT-Xだったが、その内色々と諦めて素直にクラウドの所へと行く事にした。

・・・その身にベッタリと付いている“あるもの”をそのままにして。

クラウドはその日、珍しく朝っぱらから真面目な顔をしてオフィス

にある自身の席に座っていた。

普段の彼を知る者が今の彼を見れば、おそらく「あれ？変な物でも食った？」とか「あれ？おかしいな・・・俺、まだ夢の中なのか。クラウチがあんな真面目な顔で座っているわけが無い」とか「珍しいな、クラウチ。お前が真面目に仕事をしているとは・・・」
「・・・何かあったのか？」等と言ってくるだろう。

というかわれた。（無論その連中には後でたっぷりと仕事を押し付けることで仕返しさせてもらうが）

で、何故彼が今こんな風に真面目な顔でいるかというと、それは遡る事今日の朝方のことになる。

時刻は朝の7時前後。

始業時間の9時の二時間前ではあるが、基本的に会社だけは真面目にやっているクラウチは、もう既に目を覚まして朝食を食べている真っ最中だった。

そして丁度メインも食べ終わり、後はカップの中のコーヒーだけとなったところで、

ピピピッ。ピピピッ。ピピピッ。

突然、通信が入ってきた。

「・・・あ？一体誰だ、こんな朝っぱらから・・・」

これでもし通信相手がエミリアだったら、あいつ後で精神的にボコってやる。

そう心に決めながらクラウチは通信に出た。すると・・・

「・・・はいもしも『ぐううら』 ああううううぢいぢいぢいああああ
あああんんんん！！！！！！』 ってうおおっ!？」

・・・すると出た途端に、通信相手はクラウチの名前を、涙声で叫んできた。

瞬間怯んで通信機から顔を遠ざけるクラウチ。その影響でコーヒールが一滴だけ床に零れてしまったが、クラウチは以外な人物からの通信だった為、そちらに意識を向けてしまいさほど気にしてはいなかった。

『ぐらううぢぢあああん！！！！まぢぢだーが、まぢぢだーがああああ！！！！』

「もしかしてお前ベルか!? オイ、一体どうした!? NT-Xがどうかしたのか!? 後俺の名前はグラウヂじゃねえぞ!？」

なんと彼に通信を入れてきたのはベルだった。

興奮している上に泣きながら喋っている為濁音がちよつと凄い事になってているが、クラウチはとりあえず自分の名前に関係してだけツッコミを入れてから、彼女の用件を聞くことにした。

どうやらNT-Xがどうかしたらしい。

もしかしてどつかぶつ壊れたのか? などと考えながら、クラウチはとりあえず彼女を落ち着かせてから話を促した。

すると出てきたのはこんな話だった。

「・・・・・・ハア? 野郎が自分の部屋にいねえだあ?」

「そうなんですよ!! それも書置きも何も置かずに!! 今までこんな事無かったんですよ!? 一体どうし・・・ハッ! まさかエミリアさんと一緒に私に内緒で綾瀬に行ったのでは・・・・・・おの

れエミリアさん！！抜け駆けなんてずるいです！！！そもそもパートナーだか何だか知りませんが、そっちがそれならこっちは正妻です！何せ一緒に住んでいて、炊事洗濯お掃除まで！まるで妻のように献身的にマスターを支えているのですから！！クラウチさんもそう思いますよね！？そう思うって言うてくたさい！！むしろ言え！！！！」

「……………おい……………とりあえず真面目に落ち着け……………そもそもエミリアもまだ部屋に居る筈だ。何なら今からオフィスに行って呼び出すか？きつとすげー文句グチグチ言いながら出てくると思うぞ」

クラウチは、とりあえずいい感じに暴走し始めたベルを落ち着かせることにした。

だって、あのまま放置していたら、何か壮大な昼ドラ的展開に巻き込まれそうだったんだもの。

そんなことを考えながら、クラウチはベルに向かってこう言った。

「まあ、とにかく、だ。エミリアがどつかいったんならともかく、ウチの稼ぎ頭の一人が行方不明になってるってんなら仕方がねえ。まだ始業時間まで時間はあるが、とりあえず俺は今からオフィスに行つて、奴の動向を探ってみる。お前さんは……………そうだな……………とりあえず適当な奴何人が捕まえて、奴の目撃者探せ。もしも心配ならエミリアもついでに叩き起こしてこい」

それを聞いたベルは『分かりました！』と言って通信を切った。それを苦笑しながら見ていたクラウチは、通信を切ると真面目な顔になって考え事を始めた。

やがて考えが纏まったのか、クラウチはカップの中のコーヒーを一気に呑み込むと、いつものお気に入りのコートを着て、オフィスへ

と向かった。

カップの中のコーヒーは、少し温ぬるくなっていた。

それから一時間半後、つまり現在。

クラウドはオフィスで情報の整理中に、NT-Xが単身フリーミッションに向かったという事を突き止めていた。

……珍しいな……

クラウドはそう考えていた。

基本的にNT-Xは自主的には一人でミッションへ向かうことはまず無い。

あったとしても、それはミッションの内容が、一人のほうが効率がいい、とかそういった明確な理由がある時だけである。

そこらへんは、付き合いの短いクラウドでももう分かっていた。

だと言うのに、今回彼が選んだミッションはただの討伐ミッションだ。

何でも先日彼らが行ってきたモトウブのクラウドッグ地方にある自然保護区内に、原生生物が大量発生したらしくその討伐に行ったらしい。

が、こういったミッションは、人数が多ければ多いほど効率は良くなる。

なのに単身でこれに向かったという事はどついう事なのだろうか？
ハア……とクラウドは溜息を吐いた。

NT-Xに関しては考えれば考えるほど分からない事だらけだ、と
考えて。

例えば突然、あんな変な二文字ずつ区切るような喋り方から、四文字ずつ区切るようになっただけとはいえ、ある程度マシになった言語能力。

普通のキャストにしては、むしろマシナリーに近いとも思えるような特異な内部構造。

過剰とも言えるほどのセンサーの数と、それらの高い性能。

・・・そしてキャストには絶対に付いていない様な特殊な装備。

何時作られたのか？誰が作ったのか？そして何の目的で彼を生み出したのか？

・・・そんな考えが頭の中をグルグルと回る。

流石にこのままではマズイ。

そう考えたクラウチは少し頭を振ってから、今の時刻を見るために空間ディスプレイの端っこにある時計に目を移す。

表示されていた時間は、8時59分。始業一分前だった。

・・・流石にそろそろ仕事の準備始めねーとマズイか・・・

そう考えたクラウチは、気付け代わりに一杯やるかと思いつつ席を立とうとする。

すると入り口の方から此方へ走ってくる小柄な人影が二つほど見えた。

それを見たクラウチは、先程の考えを一端保留にして再び席へと戻る。

・・・さて、何を言ってくるかな？このクソガキは？・・・

そう思いながらいつも通りのスタイルで席に踏ん反り返るクラウチ。

そのまま此方へと向かってきた二人の人影
エミリアとベ
ルは、少し息を整えてから、ややあつて喋り始めた。

・・・・・・・・・・・・・・・・因みにこの後、クラウドは二人の話を聞
いているうちに頭が痛くなってきた。

理由は二人の話の内容にあったのだが・・・・・・・・そこらへんはま
た後で説明するとしてよう。

さて、フリーミッションから帰ってきたNT-Xは、クラウドに言
われたと通りに“さっさと”オフィスへと向かった。
いつもであれば、道具の整理などをする所だが、今回はいつもと違
い、一刻も早くクラウドに報告しなければならぬ事があったから
だ。

シューイイイイン

そんな音と共に、自動ドアが開く。

NT-Xはそのまま駆け足で中に入ってクラウチの元へと向かった。

「・・・ん？おう、やっと来やがった・・・って・・・」

クラウチが此方に気付き、声を上げようとする。

が、その言葉は最後まで出てくることは無く、彼はそのまま顔を引きつらせた。

その様子を不審に思ったNT-Xが顔を周囲へと向けると、その場にいた全員が（エミリアやベル含めて）皆一様に同じ様な表情を浮かべて此方を見ている。

一体如何したのだろうか？

NT-Xがそう疑問に思っていると、自身がここに呼ばれたのである原因と思われる少女が皆の思いを代弁するかのように声を出した。

「あ、あなた・・・その格好・・・」

「・・・？格好？」

そう言われて、NT-Xは自身の姿を見る。

そのままある程度チェックしてから、彼はこう言った。

「・・・ドコカ、モンダイ、デモ？」

「あり過ぎるに決まってるでしょうがあああああああ！！！！！！！！！！」

あっけらかんと疑問を口にしたNT-Xに対して、とうとうエミリアが吼えた。

それはそうだろう。

今のNT-Xの格好は、普通の彼からは考えられないほどおかしな物だったのだから。

彼が今着ている服は、ラッピーの着ぐるみ。

しかも少し手加えられていて、何処と無くサンドラッピーっぽく
なっている。

……まあ、これだけでも突っ込み所はあるが、それだけ
だったらまだ許容範囲だろう。

問題は彼のその服にベツタリと付いている物だった。

それは赤い液体だった。

見ればその赤い液体は体中に飛び散ってシミを作っており、若干異
臭もする。

どうやら少し粘度があるらしく、所々に木葉や木の枝がくっ付いて
いた。

よく見れば手には小さな物が握られており、それも真っ赤に染まっ
ていた。

「何で………なんでよ………」

そう言いながらエミリアが崩れ落ちた。

そのまま彼女はNT-Xに喉が枯れるのではないかと思われるよう
な勢いで叫んだ。

「なんで………なんで………」

.....若干名その事を残念に思っているような表情を見せたのがいたが、スルーする事にする。

「デ、クラウチ、サン。ドンナ、ヨウケン、デスカ？」

そう言つてクラウチに向き直るNT-X。

問いかけられたクラウチはハツとして、NT-Xの問い掛けに対応した。

「お、おお。実はそのちっちゃな嬢ちゃんが、朝っぱらからお前がないと大騒ぎしてな。一応書置きだけでも残しておけっつー注意と.....」

そう言つて、デスクのコンソールを操作してとある画面を出す。

「新しい依頼だ」

そこに映し出されていたのは、なんだかよく分からないみよ ちきりんな装置と、“亜空間研究”とデカデカと書かれた文字だった。

「今回は亜空間研究の主導社のインヘルト社から直接ウチに廻された仕事だ。依頼内容はその研究施設から逃げ出した原生生物の討伐」

そう言つて此方へと視線を向けるクラウチ。

その表情を見るに、この依頼は以前の借金の回収のような物とは違い、かなり真面目な物だということが分かる。

「フリーミッションの直ぐ後で悪いが、やると言つんであれば、今すぐここに書いてある指定された場所まで行つてくれ。メンバーは

誰でも構わん……行つてくれるな？」

「……ワカリ、マシタ」

そう言つてNT-Xはクラウチの問い掛けに肯定の意を示す。それからNT-Xは、ふと気になった事を彼に聞いてみた。

「トコロデ……」

「ん？どした？」

「……ナゼ、エミリア、ハ、ソコデ、フテクサ、レテ、イル、ノ、デシヨウ、カ？」

そう言つてNT-Xは顔を横に向ける。

そこにはエミリアが“ツーン”という擬音が聞こえるような顔をして突っ立っていた。

それを見たクラウチは「ああ」といつてこつ言つた。

「その年頃特有の一種の中二病発言しやがったから注意したらそう
なつただけだ」

「あ・た・し・は、中二病なんかじゃありませんー！！！！」

「うるせえ、アホ。“亜空間発生実験つてヤバイ”だの“旧文明人が
グラールを乗っ取るうとしている”だのと戯言行つてる暇があんなら
コイツ^{NT-X}について行つて、デカイ依頼の一つや二つでも成功させ
て来い。そしたら少しは認めてやるよ」

そう言つてクラウチは「ほら、早くいつたいつた」と言つて、早く

行けというジェスチャーを此方に向かって行う。

それを見たエミリアは頭にきたのか、「じゃ、あたし先にマイシツプ行ってるね!」と言って、早足で先に行ってしまった。

それを見ていたNT-Xは少しの間呆気に取られていたが、溜息を一つしてからベルにトニオとリイナを呼んで来るように言うと、クラウチに一枚のデータディスクを渡した。

「……? 何だこれ?」

クラウチがそう言いながらディスクを手取る。

そんなクラウチに対して、NT-Xはこう言った。

「センジツ、ノ、カーシユ、ゾク、ノ、シユウゲキ、ジケン、ノ、サイニ、クロイ、フクノ、オトコガ、モツテ、イツタ、モノニ、ツイテノ、チヨウサ、ケツカ、デス。サキホド、ノ、フリー、ミッシヨン、ノサイニ、ツイデニ、シラベテ、キマシタ」

それを聞いたクラウチは、目を見開く。

つまりこのキャストは、先程のフリーミッションを口実にして、独自に調査してきたのだ。

クラウチはNT-Xを呼び止めて詳しい事を聞こうとしたが、その時には彼は既にオフィスを出て行った後だった。

その事に気付いて、クラウチは溜息を吐く。

「……一応持ってきてくれたのだから少しは見ねえとマズイ、か。」

暫らくの間ボーっとしていたクラウチだったが、ふとそんな事を考えて、ディスクを自身のデスクのスロットに挿入する。

そんな大した事は書いてないだろう。

そう思いながら中身を読み進めていくクラウチだったが、終盤に近づくとつれて、その顔はだんだんと険しい物に変わっていく。そして最後の一文を読み終えた瞬間、彼は顔に手をやって椅子の背もたれに思いつきりよっかかった。

「……………こりゃあ、あの馬鹿娘エヒミアの言ってる事を馬鹿に出来なくなつたかもしれんな……………」

不意にクラウチの声からそんな呟きがもれる。

NT-Xの持ってきたデータ。

その最後の一文には、こんなまとめの一文が書かれていた。

以上の事から鑑みるに、この“大地神様”と呼ばれる存在である、赤い下敷きのような物体の中にあつた意識と、あの襲撃者達を纏めていた黒い男は、“旧文明人”なる存在である確立は0%ではないと考えられる。

と。

クラウチは自身の頭痛の種がまた一つ増えたような気がした。

如何でしたでしょうか？

どうも雑炊です。

中間テストのど真ん中でこんなモン書いてていいのかと妹から言われましたが、勿論大丈夫じゃない。大問題だ。

と言うわけで三章突入です。

とりあえずアスターク戦は少し飛ばします。

とは言ってもダイジエストみたいな感じで描写はしますが。

とにかく次回も主人公が（ほぼ一人だけで）頑張りますのでお楽しみに。

因みに今回主人公が着てた服はこの作品オリジナルですのでゲーム中にはありません。あしからず。

それではまた次回。

落ち込む少女と緊急事態と「ガトリング」

(前書き)

何か結局前回の投稿から1ヶ月経ってますね……本当にすいませんでした。

本当はこの回で3章のメインを終わらせるつもりだったのですが、流石に長すぎたので2回に分けて投稿したいと思います。(淡々と書いてたら、何時の間にか2万字超えてたっていう事態に……)では本編をどうぞ。

落ち込む少女と緊急事態と【ガトリング】

前回のあらすじ

トマトジュース事件勃発。

インヘルト社 研究施設

「此処がインヘルト社か・・・流石に最先端の技術を持つてるだけあって随分豪華な構えしてんな」

クラッド6での、エミリアの遅れてきた中二病発言事件及びNT-Xトマトジュース塗れ事件の後、NT-Xとエミリアとリマ夫妻は、依頼の為にインヘルト社の支社の一つにある、とある海底研究施設に来ていた。

しかし・・・

「それはいいんだけど・・・」

そう言って、リイナが背後を振り返る。

「・・・さっきから、どうしてエミリアはあんなにへこんでるの?」

振り返ったリイナの視線の先。

そこではつい先程（とは言っても、あの事件から既に2〜3時間ほど時間が経っているのだが）周囲の人間に中二病としか取れない発言をぶちかましてしまったエミリアが、目に見える勢いで落ち込んでいた。

・・・心なしか、その背中には漫画のような青と黒の線が掛かっている様な気がする。

「うー・・・ミカ、何でそういう情報を予め教えといてくれないの・・・？」

『すみません・・・』

そう言って、ミカに文句（？）を言うエミリア。

ミカもどうやら真面目に伝えるのを忘れていたらしく本当に申し訳なさそうな表情をしている。

しかし、あの中二病発言事件の事からもわかる通り、今の彼女の姿や声を普通に見聞きすることが出来るのは、エミリアを除いてNT-Xだけである。つまり・・・

「・・・なんか、独り言ブツブツ呟いてるし・・・」

・・・つまり、今のエミリアとミカのやり取りも、今リイナが言ったとおり、普通の人にはただエミリアがブツブツ独り言を言っているようにしか見えないのだ。

・・・まさか“旧文明人と会話しています”等とは言えないので、唯一ミカの姿が見えるNT-Xも、ただただ黙るしかない。

・・・ゴメンエミリア。助けてやりたいけど、俺もこれ以上

いてよ……」

「……ソノ、バアイ、エミリア、ノ、シヨウ、ゴウガ、チ
ユウニ、ビヨウ、カラ、デンパ、ケイ、フシギ、チャン、ト、ナリ
マス、ガ、ヨロシイ、カ？」

「……ソノ、マハ、ナンダ？」
よろしくない、です……」

自身の称号が“中二病”から“電波系不思議ちゃん”となると聞いたエミリアは、一瞬、ほんの一瞬だけ何かを悩むような素振りを見せたが、結局溜息を吐いて、称号の変更を拒否した。

「……って言うか、あたしの称号って“中二病”確定なの……？」

「スクナク、トモ、クラウチ、サンノ、ナカデハ、ケツテイ、ダト、オモイ、マス」

「……最悪だわ……」

そう言いながらエミリアは頭を抱えて蹲った。

「マア……ソノ……ナンダ……イキロ」

「……とりあえず礼言つとくわよ……それにしても、
今回はミカが教えてくれなかったことが原因とはいえ、まずったな
あ……これでおっさんには完全に愛想尽かされちゃった

だろうし……」

そう言いながら、またしても溜息を吐くエミリア。

しかし放っておけば、先程言ったように仕事に支障が出ることは明白なので、NT-Xはとりあえずフォローを入れておく事にした。

「……マア、ダイジョウ、ブジャ、ナインデ、スカ？クラウチ、サン、ハ、アレハ、アレデ、エミリア、ノコトヲ、ケツコウ、キニ、カケテ、イルン、デ、スヨ？」

そんな彼のフォローを聞いたエミリアは、不安そうな表情で顔を上げた。

「……そう？そうかなあ？でもさ、おっさんから見たら、あん時のあたしってすごくヤバイ人にしか見えなかったよね……」

「……トリアエ、ズ、アノトキ、ノ、エミリア、ノ、ハツゲン、ハ、“オクレテ、キタ、チュウニ、ビョウ”、トイウ、コトニ、ナツテ、イマス、カラ、ダイジョウ、ブ、デショウ」

「それはそれでなんか嫌なんだけど……でも、旧文明人の事って放って置いたら大変な事になっちゃうよね……どうしたら信じてもらえるんだろ……」

そう言って今度は考え事を始めるエミリア。

……先程よりもある程度精神状態がポジティブな方向に向いているのは良い事のだが、それでまた動けなくなったら本末転倒である。

と、そこでどうやら痺れを切らしたのかトニオがこっちへと歩いて

きた。

彼が目線でNT-Xに「何やってるんだ？」と訴えかけてきたので、彼は首をしゃくってエミリアを示す。

そこにはエミリアがブツブツと何か言いながら考え込んでいるという、ある意味不気味な光景が広がっていた。

「……なんだからよくは分からねえが、何かミスしたってんなら仕事とかで取り返せばいいだろ。ルーキーが何を言っても最初は誰も取り合ってはくれない。信用があまり無いからな。けど、地道に努力して頑張り続けていけば、いずれ皆協力してくれるもんだぜ。だから多少の失敗でよくよすんなくて」

「……そうかな？頑張ってれば、皆も、おっさんも、信じてくれるようになるのかな……？」

トニオの言葉を聞いたエミリアが、顔を上げながら、何かを確かめるかのようにNT-Xに顔を向ける。

顔を向けられたNT-Xは、一瞬何を言えいいのか迷うが、程無くしてこう言った。

「……マア、ソコラ、ヘンハ、エミリア、ノ、ドリヨク、シダイ、デ、シヨウガ……タブン……エミリア、ダツタラ、ダイジヨ、ウブ、デシヨウ」

そう言いながら、うんうんと縦に振るNT-X。

それを見たエミリアは、少しジトツとした目で彼を見たが、直ぐに溜息を吐きながら、こう言った。

「……その間が気になるけど……そうだね。あんたがそう信じてくれるもんね。もう少し、頑張ってみる」

そんな彼女の言葉を聞いたトニオはにかつと笑う。

「そうそう、元気出していこうぜ。お前らなら信用なんて、直ぐに勝ち取れるだろ」

そういった後、トニオはこう続けた。

「元“ガーディアンズ教官”の、俺が保障してやるよ」

と。

それを聞いたエミリアが、驚いたように彼を見やる。

その目には戸惑いと、ごく少しではあるが敵意が感じられた。

「……………え？トニオ、ガーディアンズだったの？」

「まーな……………って、何だよ？そんなじろじろ見るなって。お前、本当はガーディアンズにでも入りたかったのか？」

トニオからそんな事を言われても、エミリアは黙って彼を見つめ続ける。

その目には、先程よりも幾分か敵意のような物が増している事にNT-Xは気付いた。

……………？どうしたんだ？クラウチさんに向けるような不満混じりの物でもないし、かといって原生生物に向けるような敵意とは何か違う……………以前、そのガーディアンズって所に、何かされたのか……………にしては何か……………？

エミリアの瞳の中に渦巻く複雑な感情にNT-Xは何かを感じたが、今一それが何なのか分からず、首を傾げた。エミリアに見られ続けているトニオも、どうして自分がこんなに見つめられ続けられるのか分からず困惑顔だ。

そんな状況になってどれ位が過ぎただろうか？

流石に何の進展も見せなかった事を見かねたのか、リイナが此方へと寄ってきた。

「さ、お喋りは此処までだよ。さっきまでの凹みっぷりじゃ、エミリアは依頼内容覚えてないだろうし、念の為、もう一回だけ説明するね」

そう言われたエミリアは、途端に顔を赤くして俯く。どうやら図星らしい。

そんな彼女の様子を微笑ましいとは思いながらも、リイナは話を続ける。

「今、この施設内には実験用に捕らえられていた原生生物が相当数逃げちゃっているらしいの。その中でも“アスターク”ってヤツを全て討伐して欲しいんだってさ」

「アスターク？聞いた事が無い原生生物だな」

リイナの話聞いていたトニオが疑問の声を上げる。

「………というか、トニオさん。あんたさっき話聞いてたんじやないのか？何で今そんなこと聞くんだ？」

そんなNT-Xの心の声が聞こえる筈も無く、トニオは疑問顔のまま

まだ。

そんな彼の様子に苦笑しながらも、リイナが説明をする。

「何でも、三年前のあの事件の頃にSEEDの影響で生まれた新種らしいの。最近、グール各地でそういう新種の原生物が沢山発見されているみたい。あと、道中の原生物も出来る限り討伐してくれって事らしいよ」

そこまで話したリイナがエミリアに目を向けた。
つられてトニオとNT-Xも彼女に目を向ける。

その視線の先にいた少女は、何かを決意したような表情で、その場に佇んでいた。

「……うん、分かった。ちょっとでも認めてもらえるように……
……あたし、頑張らないと」

そんな彼女の決意を聞いたNT-Xは、少し何かを考えた後、彼女に向かってこう言った。

「……ハッキリ、スギテ、カラブラ、ナイ、ヨウニ、
キラ、ツケテ」

「人が“よし、やるぞ！”って決意を固めたときに変な事言わないでくれないかなあ!？」

そのままギヤーギヤーと騒ぎ立てる二人。（実際には騒ぐエミリアをNT-Xが宥めているだけだが）

そんな二人をトニオとリイナは微笑ましい物を見るかのように温かい目で見守っていた。

「で、さっき話に出てきてた“アスターク”ってのはたぶん……
……」

「アレ、ノコト、デスヨネ」

インヘルト社の中にいる原生生物を片っ端から根絶やs……
ゲフンゲフン……討伐しながら奥に進んだ四人の視線の先には、
黄色い甲殻に赤い目と巨大な爪の生えた二本の腕を持った、NT-
Xの1.5倍ほどの大きさのする、何だか虫の……という
かなんとなーく蝉の様な感じのする生物がいた。

おそらくトニオの言う通り、あれがアスタークなのだろう。
幸いと言つべきなのかどうかは分からないが、向こうはまだNT-
X達4人にはまだ気付いていないようだった。

「……さて、どうするか……あの見た目からすると、
殆ど確実に戦闘スタイルは近接格闘系っぽいが……」

「……少なくとも正面から当たったらどうなるか分からないよ

ね・・・」

「・・・トリアエ、ズ、ワタシガ、ライフル、デ、ネラツテ、ミマスカ？」

「それで気付かれてこっちに向かって来られたら、それはそれで困るような気がするんだけど。っていうか、あんなのに狙われたら、あたし骨折くらいじゃ済まなそうだわ・・・」

とりあえず4人は作戦タイムに入る事にした。

トニオとリイナは言わずもがな、NT-Xとエミリアも最近は密度の濃い戦闘をこなしてきたので、そんじょそこの原生生物如きに負ける気は無いが、それでも相手は一応新種の生物という未知の存在である。

“いつも通りで行けば大丈夫”などと気を抜いて、それで手痛い反撃を受けてしまったては本末転倒だ。

という理由から開始された作戦タイムではあつたが・・・

「・・・ヨク、カンガ、エテ、ミタ、ラ」

「ん？どした？」

「・・・コノママ、アレヲ、ホオツテ、オイタラ、ヤバイ、コトニ、ナル、ノデハ？」

そう言いながら、NT-Xがアスタークの方へと指を向ける。

何だろうと思つて彼を除いた三人が指の先へと目を向けるとそこには

ガリツガリツゴリツゴリツ

「
」

そんな音を立てながら、壁に自身の腕の爪を擦り付けて、一見上機嫌に爪砥ぎをしているアスタークの姿があった。

よく見れば、爪が擦り付けられた所は、結構削れて内部構造が見えたりとかで、色々と偉い事になっている。

よく見れば奥の壁の何ヶ所かにも、同じ様な後があった。

「……よし、作戦タイムは終了だ。このまま放って置いたら、インヘルト社の壁がそこ等中あいつらの爪砥ぎ痕だらけになっちまう。そんな事になる前に、見つけ次第で見敵必殺。サーチアンドDESTロイの方向で行くぞ。異論は無いな？」

トニオのその言葉にエミリアとリイナは頷く。

NT-Xに至っては、既に右手でライフルを、左手でエクスカリバーを持って何時でもOKという状態になっていた。

「うし、準備OKみたいだな……それじゃ……」

彼が言い終わる前に、NT-Xの手にあったライフルが火を吹く。ライフルから打ち出された弾はそのままアスタークへと向かっていき

ガンツ!!

という音と共に、その硬そうな甲殻へと着弾した。

何事かとアスタークが此方を向くが、その頃にはNT-Xは背部に展開したブースターを使い、一気に間合いを詰め終わったところであつた。

NT-Xがその勢いのまま、左手のエクスカリバーで斜めに切り上げる。

しかしどうやら踏み込みが少しだけ浅かったのか、切り上げられたエクスカリバーは、アスタークの胴体に切れ目を入れるだけに留まつた。

それを確認したNT-Xは周囲に聞こえるか聞こえないかの音量で小さく舌打ちをする。

そこで、やっと咄嗟の事で呆気に取られていたアスタークが再び動き始めた。

彼はゆっくりと自慢の腕を振り上げ、丁度自分の頭上まで来たところで両掌を合わし、まるでハンマーの様に振り下ろす。

それを見たNT-Xは、咄嗟に背面のブースターだけではなく、両足や肩などからも小型のスラスターやバーニアを展開し、バレルロールの要領でその場を離れた。

NT-Xがその場を離れてから一瞬遅れてアスタークの両腕がその場に振り下ろされる。

が、既に振り下ろされた腕の下に獲物はおらず、アスタークは首を傾げる。

その隙を突いて、エクスカリバーを右手に持ち替えたNT-Xが、アスタークの右腕の関節部分に剣を突き刺してそのまま切り払う。結果としてアスタークの右腕は、おそらく肘と思われる所からバツサリと分断された。

しかし切られた方も黙ってはいない。

アスタークは残された左腕を大きく振るって、NT-Xを吹き飛ばそうとした。しかし・・・

「頼むつて言おうとしたんだがな……まあ、奇襲には成功してるから……」

そんな声が自身の左腕から聞こえ、アスタークは驚いてそこへと目を向けようとした。

が、

「お咎め無しにしてやるか!!」

そんな気合の籠もった声と共に、アスタークの胸部を鋭い爪の斬撃が襲った。

いくら分厚い甲殻を持つアスタークとはいえ、至近距離から強い一撃を食らえば、衝撃で流石に怯む。

案の定アスタークは怯んで後ろへと二歩下がる。しかも、

「隙あり!!」

そんな声と共に、今度はカードによる光の斬撃が襲ってきた。

もろにそれを受け、堪らず後方へと下がるが、それすら予期していたかのようなタイミングで、

「数撃ちや当たる!!」

という声と共に、ゾンデの一撃が飛んでくる。

しかしアスタークは元々電気系統の攻撃に対しては耐性が在ったため、これに対してはあまり気にせず、アスタークは近くにいたトニオへと反撃しようと左腕を振るう。

が、流石にそんな単調な攻撃は読めていたのか軽々と空中へと飛び

上がって回避するトニオ。

「アマリ、ワスレテ、ホシク、ナイノ、デスガ」

ふと、左腕を限界まで振ったときに、懐からそんな声がした。アスタークが疑問に思い、声のした方へと目を向ける。が、次の瞬間、

ザシュツ！！

という音と共に、アスタークは全身に力が入らなくなった。そのまま目を自身の懐にいたNT-Xへと向ける。

目を向けられた彼は、先程自身が入れた切れ目にエクスカリバーを押し込んでいた。

そのままアスタークを切り捨てるNT-X。

ズズウウン……………

そんな音を立てながら、アスタークは地面へと倒れ伏す。

「……………よし、倒せた！」

エミリアが声を上げる。

とはいえ、その表情はあまり優れていない。

……………あまり活躍できなかったから不満なのか、それともいきなり襲撃してほぼ一方的に倒してしまったから、スッキリしないのか……………

しかし、構ってはいられない。

実はNT-Xの頭部センサーは、少し離れた所から先程の爪砥ぎの音を先程から拾っていたのだ。
しかも複数。

それだけなら良かったのだが、それ以外にも、壁にパンチを打ち込む音や、飛び跳ねてそこから中に体当たりしまくる音。

拳句の果てには何か硬い物をボリボリ食べる音まで聞こえるのだから、NT-Xの心中は穏やかな物ではなかった。

「リイナ、サン」

「ん？NT-X、どうしたんだい？」

「アノ・・・サキホド、ノ・・・エツト・・・アスタークのこと？」ソウ。ソノ、アスター、クニ、ツイテ、ナノデス、ガ、クライ、アント、カラ、ナンビキ、ニゲダシ、タカ、キイテハ、イマセン、カ？」

「え、ちょっと待っててね？」

そう言つてリイナは携帯端末から今回の依頼内容のデータを呼び出す。

暫らく画面と睨めっこしていた彼女だったが、どうやら探していた情報が見つかったのか、ややあつて口を開いた。

「・・・うん、と。逃げ出したアスタークの数に8匹・・・あ、今一匹倒したから、残り7匹ね。今の所、このエリアの周辺にしか固まってないみたいだけど・・・どうかしたの？」

「・・・イエ・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・少なくとも今の情報からこれだけは分かった。このままもたもたしていたら、このエリア一体がアレの爪砥ぎ痕と、食いカスと、凹んだり歪んだりしてオブジェのような形になった壁だらけになる！！

「・・・・・・・・イソギ、マシヨウ、ナルベク」

「ん？おお、そうだな。とりあえずさっさと終わらせて、帰ってゆつくりするか！」

そう言いながら、早足で奥へと向かうNT・Xとトニオ。
その二人の後を、リィナとエミリアが少し急いで追っかけていった。

「こ、れ、で・・・ラストオー!!」

そんなエミリアの叫びと共に、彼女の手の中のセイバーが最後のアスタークに止めを入れる。

止めを刺されたアスタークは、断末魔の叫びを上げながらフロアの床へと倒れ伏す。

それを確認したトニオが口を開いた。

「うっし、これで逃げ出しちゃった原生生物は、あらかた片付いた感じだな」

「・・・デスガ・・・」

そう言ってNT-Xが周囲に顔を向ける。

「・・・ナリヤミ、マセンネ、ケイホウ・・・」

彼の言う通り、未だにインヘルト社の研究施設内には、警報が鳴り響いていた。

今までの攻防によって、逃げ出した原生生物は、今トニオが言った通り、あらかた片付いた筈だと言つのに……………

……………何か不手際でも起きたか？

NT-Xがそう考えて首を傾げる。

そのとき、彼の聴覚センサーが正面から誰かが此方へと走ってくるような音を拾った。

おそらくインヘルト社の社員、または研究員だろうと思い、音のした方へと顔を向ける。

「ああ！！リトルウイングの方々ですね！！良かった、お待ちしていたんですよ！！」

案の定此方へと駆けて来たのは、インヘルト社の制服を着た職員だった。

「良かったって……依頼にあつた原生生物の鎮圧は、もう大体終わってたけど？」

職員の言葉を疑問に思ったリイナが、疑問を口にする。

すると職員は、突如表情を申し訳なさそうな物へと変えて、こんな事を言った。

「それがですね……先程から、此方でもこの事態の收拾に当たる為に、原生生物の鎮圧用にマシナリーを動かしていたのですが……「シズカニ」えっ？」

彼の言葉を、突然NT-Xが遮った。

何事かと呆気に取られる一同を横目に、彼はそのまま空中へと飛び

上がり、一気に職員の後方の通路の途中にある曲がり角まで跳んで行き、

ブウンツッ！！

と、エクスカリバーを振るう。
すると、

ドオン！

という音と共に、曲がり角から小規模な爆風が巻き起こる。

一同が何事かとNT-Xの元へと駆け寄ると、そこには綺麗にはいかないまでも、正中線ではぼ真つ二つになった“GSM-05Bボーマルタ”の物と思われる残骸が一つ転がっていた。

それを確認する暇も無く、NT-Xは両手に干将と莫耶を転送すると、そのまま通路の奥へと突っ込んでいく。

すると彼の進行上から、一発のミサイルが飛んできた。

それを見たNT-Xは、身体を少し捻って回避しつつしっかりとミサイルを切り捨てる。

切り捨てられたミサイルがその場で爆発したのを確認したNT-Xは、正面にいるそのミサイルを撃ってきたと思われる物に干将・莫耶を投げつけた。

投げつけられた干将と莫耶はそのまま“ミサイルを撃ってきた物”に突き刺さり、その機能を停止させた。

それを見たNT-Xは、対象がちゃんと機能停止しているかを確認してから、二本の剣を引っこ抜く。

「おい！大丈夫か・・・って、コイツは！？」

後ろから追いかけてきたトニオが声を掛けてくるが、彼が今倒した

物を見て驚愕の声を上げる。

「シーカー」だと！？何で施設の警備を任されてるマシンリーを破壊したんだよ！？さっきの残骸も、ありゃ「ボーマルタ」だろ？！」

トニオが今言った通り、今NT-Xが破壊した二体は、どちらもこのインヘルト社の施設警備の為に配備されている筈のマシンリーだったのだ。

施設を守る為に稼働している筈のそれらを破壊したNT-Xの意図が解らず、思わずトニオは声を荒げる。

それをきいたNT-Xは何かを言おうとしたが、直ぐにセンサーに何かが発知されたのか、武器を構えて正面に向き直る。

すると彼らの正面から、先程NT-Xが破壊したボーマルタやシーカーと同じ、施設の警備マシンリーが大挙して此方に向かってきた。が、そのどれもこれも様子がおかしく、どのマシンリーも何処と無くNT-Xやトニオ、下手をすれば職員の男すらも排除しようとしている様な雰囲気を出している。

と、それらの集団の中の一体が突如彼らに向かってミサイルを放ってきた。

それを見たNT-Xは咄嗟に右手に持っていた干将を地面に突き刺してから、右手を握った状態で前に向けた。

すると、突如彼の右手首が下にずれたかと思うと、そのまま腕が開き、そこから一門のガトリング砲が出てきた。

そのまま彼はそのガトリングから弾をぶちまける。発射された弾は、そのまま飛んできたミサイルを蜂の巣にして爆散させるに留まらず、そのまま後ろに居たマシンリーの内の数体をズタズタにした。

NT-Xはそのまま腕をゆっくりと左右へと振っていく。

それから少し経ってから、NT-Xの頭に、`right arm`

empty』という音声が鳴り、ガトリングが弾切れになった事を知らせる。

その直後に、『radiate』という音声が鳴り、『15, 14, 13.....』と、カウントダウンが始まる。

そんな自信の右腕から出てきたガトリング砲を見ながら、NT-Xはポツリと呟いた。

「.....ナニ?コレ?」

「いや、わからねーのかよ!?!」

トニオから勢いよくツッコミが飛ぶ。

しかしそうは言われても、当の本人はハッキリ言ってこんな物仕込んで覚えは無い。

もしやと思つて左腕も同じ様にすると、此方も同じ様なプロセスで同じ物が出てきた。

.....え?いや、マジこれ何なの?

もしやエミリアの仕業か!?などと思つて、後から来た彼女に顔を向けるが、目を向けられた方も彼の今の両腕を見て、かなり驚いた表情をしている。という事はシロだろう。

とりあえず出てきてしまった物はしょうがないので、NT-Xはとりあえずヘッドギアのコンソールに、ガトリングの詳細な情報を表示して、どんな物なのかを調べる事にした。

「……とりあえず詳細を見た感想は「なんじゃこりゃ……?」という物であった。

連続で撃てる時間は、片方120秒。1秒20発で、単純合計2400発撃てる事になる。

で、その後の放熱に15秒。弾の充填に15秒。合計30秒のインターバルを挟む事で再び撃てる仕様になっていた。

え？弾は何処から充填されるのかって？秘密です。

「とりあえず手数が増えたことは喜ぶべきなのだろうが……NT-Xの胸中は、なんだかなあという感じだった。

「とりあえず、NT-Xのその腕に関しては置いておくとして……職員さん。なんで警備用のマシナリーがあたい達を襲ってきたの?」

リイナが、職員に対して今の事態の説明を求めた。

それを聞いた職員はハツとして事情を説明し始める。

「あ、はい。実はこれが先程皆さんを“お待ちしていた”といった理由なんですよ……先程、鎮圧用にマシナリーを動かしたと言いましたよね?」

「ああ、そういやそんな事言ってたな」

「お恥ずかしい事に、今度はそちらが全て暴走し始めてしまったのです……」

そう言っつて、職員の男は顔を俯けた。

「マシナリーの暴走だあ？原因は何だよ?」

職員の名の言葉を聞いて、トニオが疑問の声を上げる。
そんな彼の質問に対し、男は顔をトニオの方に向けて答えた。

「現在調査中ですが、まだ詳しい事は何も……」

それを聞いて、トニオ夫妻は溜息を吐いた。

まあ、まさかの原生生物を討伐した直後に今度は警備用マシナリーの暴走である。

溜息の一つや二つ吐きたくなるという物である。

と、そんなときである。

「んー……マシナリーが暴走ねえ……あの、職員さん。今動かしてるマシナリーって、どんな種類のがあったんですか？」

と、今まで黙っていたエミリアが呟き、男に質問した。

いきなり話を振られた男は、一瞬戸惑った素振りを見せたが、直ぐに元に戻って質問に答える。

「え？ええつと……基本的にGRM系の多脚型に、小型密集系の物が殆どです。あとは……ああ、グリナ・ビートが数機だけですな」

「その多機種が一齐に、かあ……あの、もしかしてそいつらの何かリーダー的な存在って居ませんか？グリナ・ビートよりもおつきいやつ」

「は、はい。最新鋭の“レオル・バディア”が数ブロック隣の所で試験稼働しています……」

それを聞いたエミリアは、合点がいった様な表情になった。

「あ、やっぱり？たぶんだと思いますけど、そいつの制御装置が壊れてるんだと思います。推測ですけど、そこから飛ぶ混線命令が原因で、全マシナリーに影響が出てるんじゃないですか？」

そう言いながら、彼女はNT-Xにチラリと目をやった。

それを見たNT-Xは、直ぐにヘッドギアに手を伸ばし、解析用のサーチャーを起動させて、周囲を調べる。
すると……

「ウワツ！？ナンジャ、コリヤ?!」

突如サーチシステムを波形タイプの変更した瞬間に、彼の視界は黄緑色の線で埋め尽くされた。

しかもそれらは無数に絡み合っており、そこかしこでノイズが暴れまわっている。

明らかに命令を伝える為の電波が混線しまくっている事が分かった。

「ね？当たってたでしょ？」

NT-Xの様子を見て、エミリアが嬉しそうに彼に声を掛ける。

どうやら自身の推測が当たっていたので嬉しかったらしい。

NT-Xはそんな彼女に対して、首を上下に振る事で答える。

職員の名もそんな彼らの様子を見て納得がいったらしく、「な、なるほど！」と呟いた。

「……………」

しかし、そんなエミリアをトニオは不思議そうな顔で見つめていた。暫らくしてから、彼はややあつて口を開いた。

「・・・お前、そういう専門なのか？この前の時も、カーシュ族の目印とかを直ぐに理解してたよな」

「それよりも“レオル・バディア”ってのを倒せば終わるって分かっただから早く止めよう！」

「・・・まあ、そりゃそうだがよ・・・許可がなけりゃ奥には立ち入れねえよ」

エミリアの言葉に、トニオはこう返した。

確かに此処から先は、インヘルト社にとつては重要な研究施設があるブロックなので、彼らのような部外者は本来、今トニオが言ったとおり、特別な許可が無ければ入れない。

つまり、そんな許可が出ていない現在、進む事はできない、ということだ。

しかしそんな心配は杞憂だったようである。

「そ、そんな、とんでもない！この先はグラール中の悲願でもある、亜空間発生装置の開発が行われている場所です。なんとか、鎮圧をお願いしたく・・・え、ちょっと待って？」はい？」

男の言葉を遮って、エミリアが疑問を口にする。

「亜空間発生装置・・・？この地下で開発をしているの？」

「は、はい。ですから、今この施設を放棄するわけにはいかないの

です。緊急事態ということ、この先への入場許可は取ってあります。マシナリーの鎮圧、お願いできないでしょうか？」

そう言つて此方を見つめてくる男を見て、トニオとリイナはNT・Xに、目で「どうする？」と尋ねてきた。

それを見たNT・Xは、顎に手を当てて少し考える。

「……契約の範囲外ではあるが、今此処で恩を売っておけば、後々何かで頼れそうだな……上手くいけば、報酬のアップも出来るだろうし、亜空間研究ではどんな事をしているのか見られるから、旧文明人への対策も練れるかもしれないし、それに……」

そう思いながら、彼はエミリアを見る。

目を向けられたエミリアは、少し困惑しているようだ。

そんな彼女を見てNT・Xは苦笑を一つこぼす。（勿論表情は変わつてはいない）

「……それにクラウチさんに、エミリアを認めさせるチャンスかもしれない。」

そのまま少し考え込むように顎に手を当てていたNT・Xだったが、やがて職員の男の顔を見てこう告げた。

「……ケイヤク、ガイデス、ガ、コチラ、モ、アマリ、シヨウモウ、シテハ、イマセン、カラ、ベツニ、ダイジョウ、ブデシヨウ。レオル・バディア、ノ、イル、ブロック、マデノ、ミチヲ、オシエテ、クダサイ」

つまりはマシナリーの鎮圧という追加依頼を受ける、と言つことだ。

それを聞いた男の表情はにわかにもろくなつた。

「ありがとうございます！レオル・バディアのいるブロックまでは、この先の道をまっすぐ行つた後、一定の間隔で標識が出ていますので、それに従つて進んで行けば直ぐに到着できると思われます。途中で、貯水プールが何箇所ありますが、付近のスイッチを使えば全て凍らせて、その上を歩く事が出来るようになっていきます。あと、マシナリーがこの様子だと、要所要所に配置されているトラップも暴走している可能性がありますので、十分に注意してください」

それではお願いします！と言って、男は向こう側へと走つていった。おそらく別の場所から、マシナリーの暴走を止めに行つたのだろう。それを見送つた後、NT-Xはこう言つた。

「…………ソレジャ、イキマス、カ。サツサト、オワラセ、テ、ゴハン、モ、タバタイ、デスシ」

「…………だからなんでこういう時に、そんな気の抜けるような事言つかなあ…………？」

歩き出したNT-Xの後を、エミリアが苦笑しながら追いかける。それを見たトニオ夫妻も、同じ様に苦笑しながら駆け出した。

何時の間にか、NT-Xの腕から出てきたガトリングについては、

全員追及することを忘れていた。

落ち込む少女と緊急事態と「ガトリング」

(後書き)

如何でしたでしょうか？

どうも雑炊です。

前書きでも言った通りに、今回は3章の前編です。

……後半少し無理矢理すぎたかな？

でも気にしません。してられません。

……だつてまだまだ課題は出てくるのだもの……
プロジェクトの仕事だつてしなきゃいけないし……
ストまでもう3週間切ってるし……
……まあ、そんな大変な状況で小説書いてる私も私ですが(笑

で、今回始めて出てきた、NT-Xの腕からガトリング砲。

イメージとしては、トルネードガンダム(分かる人いるかな?)の
ガトリングの展開方法を上下逆にしたみたいな感じですよ。

決してNT-1ではありません。

混線命令の波形も、オシロスコープの波形の物凄くぐちゃぐちゃに
なった物をイメージしてくれるとありがたいです。

因みに今後もウチの子はこんな感じで内蔵武器やシステムが増えて
いく予定です。

で、もしも「こんなのが見てみたい」と言うのがあれば、感想に
も書いてくだされば、どんどん搭載していこうと思います。

え?そんなに入れて大丈夫なのかって?

ダイジョウブです。困るのはウチの子(NT-X)だけですからww

ではまた次回。

亜空間研究とUFOロボと【戦闘兵器】

『亜空間研究は、このような所で行われているのですね……』

先程のブロックから少し奥に進むと、周囲には中にライトグリーンの液体が流れている透明なパイプ（？）が何本も壁に設置されている通路に出たところで、突然ミカがこんな事を言った。

「ちよつとミカ。今はト二オとリイナが居るんだから、出てくるタイミングは気をつけてよ？」

そんな彼女をエミリアが小さな声で注意する。

確かに、今この場にリマ夫妻がいなければ、エミリアとNT-Xも普通に受け答えできただろう。

しかし今この場には二人が居るのだ。

下手に受け答えをすれば、面倒臭い事になるのは確実である。

……しかも此処は先程のミカのセリフからも分かるように、インヘルト社の“亜空間研究”の研究ブロックなのだ。

監視カメラの一つや二つ在ってもなんらおかしくは無い。

それこそ、マイクの一つや二つ、それにくっ付いてもおかしくな
んて無いのだ。

故に下手な受け答えをして、ミカが存在が奴さんにバレたら、最悪の場合、エミリアはミカ共々中二病患者扱いから、実験台（又は実験サンプル）という凄まじくやばい扱いにされてしまう。

………まあ、無いとは思うが。

ただ、彼女もそこら辺は流石に分かっているのか、『はい、わかっています』と小声で返した。

「ならいいけど………それにしても、亜空間開発さえなければ全部解決なんだし、ここにある機械全部壊しちゃえば終わりなんじゃない？」

ミカの返事を聞いた後、エミリアが突然こんな事を言い始めた。

……まあ、確かに彼女も言う事は一理ある。

あの中二病末期患者の狙いが旧文明人の復活で、尚且つその手段の鍵となる物が、あの紅い下敷きと亜空間開発に使われている技術ならば、此処で装置を破壊すれば確かにあの男の目論見は崩れる。崩れるのだが………

「……ソナ、コト、シタラ、シヨウゴウ、ガ、チュウニ、ビヨウ、カンジャ、カラ、ハン、ザイ、シャヘト、ランク、アップ、シマスガ？」

「そんなこたあわかってるわよ！………っかランクアップって何！？中二病ってランクアップすると犯罪者になんの！？」

「ホカニモ、“イタイ、ヒト”ヤ、“ザンネン、ナヒト”、“ダメ、ニンゲン”、“ゴク、ツブシ”ガ、アリマスガ？」

あつげらかんと返すNT-Xに、エミリアはげんなりとする。

そのまま彼女はこんな事を呟いた。

「……第一そんなことしたら、おっさんに怒られそうだし………何か、もっと他の手を考えないと………うううううううう、問題を目の前にして何も出来ないって、歯痒いなあ………」

……怒られるだけでは済まないのでは？

そんなことを考えたNT-Xだったが、言ってもややこしい事になるだけなので、彼は黙って彼女の言葉を聞いておく事にした。

「…………でも、確かにこの状況は歯痒いよなあ……………」

そう考えながら、彼は廊下の壁にくっ付いているパイプに目をやった。

パイプは見た感じでは、今のNT-Xなら少し小突くだけでも簡単に破壊できそうだった。

「…………だからこそ、何だか歯痒かった。」

「…………なんて考えても、どうしようもないんだよなあ。」

そう思つて、NT-Xは心の中で溜息を吐く。

エミリアもおんなじ事を考えてたようで、同じ様に彼女も溜息を吐いた。

そんな彼らの様子を見ていたミカは、そんな二人を心配したのか、こう言った。

『ですが、おそらく現状ではそこまで考えなくても大丈夫でしょう』

「え？どういふ事？」

ミカの言葉を疑問に思ったエミリアが彼女に問いかける。

それはNT-Xも同じだったようで、彼も声には出さなかったが、「どういふ事だ？」という感じの視線をミカに向けた。

『元々、亜空間自体は無数に存在する物であり、旧文明人の存在する亜空間“マガハラ”に通じる確立は、限りなく“0”に近いので

『す

そんな彼女の説明を聞いたNT-Xは「成程」と、（実際には何も変わってはいないが）納得したような表情を作った。

詰まる所、此処で言う亜空間とは、SFでいう“ワームホール”や“ワープ空間”を通った先にある、異次元などといった“別の空間”、又はグラーレル星系外にある“別の惑星”の事を指すのだろう。そう考えれば、『限りなく“0”に近い』という彼女の言葉も頷ける。

……しかし、あのもしあの男が旧文明人であったとして、そのことを知らない筈がない。

それはつまり……………

「……………デモ、ソレツテ、ソノ、クウカン、ノ、ザヒヨウ、サエ、ワカレバ、ジユウニ、イキキ、スルコト、ガ、カノウ、トイウコト、デスヨネ？」

それを聞いたミカは、少し驚いたような表情をした後、顔を俯けてこう言った。

『……………はい。その通りです。ただ、“マガハラ”へと亜空間を繋げる場合は、座標ではなく、とある“鍵”が必要になります。それが揃ってしまつと、状況は一変してしまつのです』

「……………“鍵”、ねえ……………」

ミカの説明を聞いて、エミリアがポツリと呟く。
とその次の瞬間、

「オイ、何ゴチャゴチャ言ってるんだ！急がないと置いて行くぞ！」

そんなトニオの怒鳴り声が聞こえてきた。

見ればトニオとリィナの二人は、とつくのとうに先へと進んでおり、もう次のブロックへと繋がる扉の前にいる。

「……どうやら長く立ち止まり過ぎたようだ。」

そう考えたNT-Xとエミリアの二人はこれ以上怒鳴られては適わないと急いで二人の方へ駆けて行った。

「……え〜と……たぶん此処だよね？さっきの人が話してた貯水プールって」

暴走したマシナリー達を出会い頭に破壊しながら先へと進んでいくと、階段の先が水で溢れている妙なブロックに辿り着いた。

ざっと見たところ、その深さは5〜10Mくらいはありそうだ。

おそらくエミリアが今言った通り、此処がその貯水プールなのだろう。

「たぶんそうだね。で、アレがこのプールの水を凍らせる為のスイッチの筈何だけど……」

「……もの見事にフェンスで囲まれて近付けなくなってるな」

エミリアの言葉を肯定しつつ、リイナがスイッチを指差す。

しかし肝心のスイッチは、フェンスに囲まれて手出しが出来ない状態となっていた。

まあ、詰まる所コレが何を示しているかというと

「!!! シッ!」

何かに気付いたNT-Xが振り向きざまにエクスカリバーを投擲する。

投擲されたエクスカリバーはそのまま目標へと飛んでいき、

ザンツ!!

という音と共に、ボーマルタ目標の頭(?)に突き刺さった。

エクスカリバーはどうやらボーマルタのメインコンピュータを正確に貫いていたらしく、一瞬たった後、ボーマルタは爆炎に包まれた。どうやら機密保持の為の自爆システムが作動したらしい。

が、それに構う暇も無く、上空から次々と暴走したマシンナー達が降下して4人の前にズラリと並んだ。

明らかにそれらの目はNT-X達を捉えており、彼らがマシンナー達にとって排除すべき存在だという事を教えてくれている。

「……ヤッパリ、ワナッポイ、デスネ」

そう言いながら、NT-Xは掌からアンカー付きのワイヤーを射出して、エクスカリバーの持ち手にその先を器用に絡ませた後手元に戻した。

「……………個人的にはあんたのその新機能アンカー付きワイヤーの方が驚きなんだけど……………いつの間に使えるようになったの？それ？」

「……………サア？」

「だからその間は一体何なの……………」

そう返しながらも、エミリアは左手に転送したハンドガンを使って今NT-Xが破壊したポーマルタの直ぐ隣にいたもう一体のポーマルタのカメラを打ち抜き、もう片方の手で持ったセイバーで切りかかる。

同時にトニオとリイナが彼女の援護に入り、彼女の周りにいた他のマシナリーを破壊する。

しかし上空から降ってくるマシナリーの量は増えていっても減る様子はまだ見られない。

それを見て流石に振ってくるマシナリーを鬱陶しく思ったのか、NT-Xは両腕からガトリングを展開し、頭部のバルカンと一緒に上空へと弾をブチ撒けた！

ズガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガツ！！！！

そんな音を立てながら、上空から降下してきたマシナリー達が、まるでミキサーに掛けられたかのように一気にバラバラになっていく。同時に彼が上空へと弾をバラ撒いている間にも、既に降下してきていたマシナリーたちは、リマ夫妻とエミリアの活躍によって、ドン

ドンとその数を減らしていった。
そして……………

ヴルルルルル……………

Right, Left arm and Head vulc
an empty. Radiate 15, 14, 13……………
……………

そんな音声がNT-Xの頭部に響き渡る頃には、周囲の敵は一掃され、同時について先程までスイッチの周りを覆っていたフェンスも消えていた。

……………ああ、疲れた……………

そんな事を考えながら、NT-Xはガトリング砲と頭部のバルカン砲を収納した。

因みに以前から無意識に使っていたが、この頭部バルカンも、放熱と弾のチャージに掛かる時間は、この腕のガトリング砲と同じらしい。ただ、弾数の方は圧倒的に此方の方が少ないが。

「うっし、これでこの先に進む為のスイッチが押せるな……………
……………しっかし、結構な量だったな……………数えただけでも10体はいたんじゃないか？」

そう呟きながら、トニオがチラと、先程自分達が入ってきた扉の前に山となっているマシナリーの残骸へと目を向ける。

塵も積もれば山となる……………とはよく言ったもので、其処に積み上げられた残骸の殆どは、先程NT-Xがバラバラにした物であったりする。

「…………チナミニ、セイカクナ、カズハ、トニオサン、タチガ、
タオシタ、ノガ、9タイ、ワタシガ、ゲキツイ、シタモノガ、13
タイ、デス」

「…………い、以外と居たんだね…………というか、数えてたのか
い？」

「ホウコク、シヨ、カクトキ、ニ、ヒツヨウ、ニ、ナリマス」

「…………あ、そう…………案外と大変なんだね、そっちも」

「シゴト、デスカラ」

リイナの言葉にそう返しながら、NT-Xは件のスイッチの近くま
で行き、戸惑う事無くスイッチを押した。

すると周囲にあるダクトと見られる所から、突然『シュウシュウ』
と音が鳴り出した。

同時に階段の下から『ピキピキ』という音が聞こえてくる。

何事かと一同が下を覗き込むと、つい先程まで階段の下に溢れてい
た水が、端の方から段々と凍っていくではないか！

そのまま、あれよあれよと言う間に、下の大きな水溜りは完全に凍
ってしまったい、ちよつと表面が凸凹しているが、まるでアイススケー
トのリンクのような姿へと変わっていた。

「うわ…………スゴ…………」

思わずエミリアがそう呟く。

しかし呆けている暇は無い。

このまま此処に居ても埒が明かないし、第一見とれていてまた暴走
したマシナリーの一団に襲われまじたなんて事になったら、今度は

目も当てられない。

とりあえず本当に大丈夫か、まずNT-Xが先行して確かめて、その後エミリアとトニオとリイナが続くという事で話はついてはいるが………

………本当に、大丈夫かな？

なんてことをNT-Xが思ってしまうのも無理は無かった。

何せ、一見完全に凍っているように見えるものの、さきほどNT-Xがコッソリと頭部のセンサーを動体感知モードにして調べた結果、どうやらちゃんと凍っているのは表面から僅か2M程度だけで、それ以下の部分は完全に液体のままという結果が出たからだ。

……まあ、確かに貯水庫の水を流石に全部凍らせるのは問題があるのだろう。

……だとしても、下手にこの上で暴れてしまえば、一気に氷が割れて、下の凍っていない部分へと一気にドボンという事も十二分にあり得る。

………よしっ。

とにかく先に進まなければ問題は解決しない

そう考

えたNT-Xは、意を決して氷の上へと足を踏み出した。

と、次の瞬間

ミシッミシッミシッミシッミシッミシッミシッミシッミシッミシッミシッミ

シミシミシミシミシミ！！！！！

という音が彼の足元から聞こえてきた。

瞬間、（別段いつもと変わり無いが）顔を真っ青にしてその場を飛びのくNT-X。

そのまま氷は暫らく不吉な音を鳴らし続けていたが、その音も段々と消えていった。

不穏な音がやっと鳴り終わったと同時に、トニオはNT-Xに向かって、イイ笑顔のままこう言った。

「お前一番最後に来い」

「……リヨウカイ、シマシタ……」

「……誰だって巻き添えを食うのは嫌なのである。

しかもその原因が身内なら尚更。」

「え〜・・・と。たぶんこの部屋だよな。その・・・レオル・バディア”っていうのが居るのって”

「うん。端末にダウンロードされた地図を見る限りでは、その筈だよ”

その後、此方を目の敵にして襲い掛かってきたマシナリーの一団を殲滅しつつ、目標のブロックへと進んでいたNT-X達一行。

その道中、狭い一本道の通路の向こう側から此方を轢き殺さんとしてくる電撃発生装置付きのローラーと遭遇し、追いかけられる事2回。

最初とは違う貯水庫で凍った水の上にNT-Xが乗って、不吉な音がした回数2回。

此処までに殲滅してきたマシナリー及び原生物の数。合計50匹（体？）。

で、そんなこんなでやっとこさその“レオル・バディア”がいると思われる部屋の前まで辿り着いたわけなのだが……………

「……………ナンカ、モノスゴイ、オトガ、シマス、ネ」

「ああ、なんか馬鹿デカイなんかが動き回ってるような音がしやがんな……………」

そう。

今、NT-Xとトニオが呟いた通り、扉の向こうからは、何か巨大な物が足踏みしながら動き回っているような音がしているのだ。

はっきり言って不吉な事この上ない。

「……でも、この中にいる奴を倒さないと、この騒動は収束しねえわけだし……行くしかないか」

そんなトニオの呟きを聞いて、エミリアが覚悟を決めたような顔になる。

NT-Xはそんな彼女を見て、少し確認するように、彼女に声を掛けた。

「……コワイ？」

そんな彼の問いかけに対して、エミリアは少し引き攣った笑みをしながらこう返した。

「ま、まだちょっと怖いかな……でも、此处まで来たんだもん。逃げたりなんかしないよ」

「……ワカッタ」

そう言うと、NT-Xは少し頷きながら、彼女の頭に手を置いて撫でながらこう言った。

「ソレジャ、ハリキリ、スギテ、コロソ、ダリ、シナイ、ヨウニ」

「あんた本当に一体あたしを何だと思ってる!？」

「? エミリア」

「~~~~~あああああああもう!!!っーかさっきのセリフって、似たような事此処に来た時に言わなかったけ!？」

「シラン。ソラミミ、ジャ？」

「言ってた。ぜったい言ってた!!!」

「オイコラ馬鹿共!この状況下で兄弟喧嘩なんてやってんじゃねえ!!!!!!!」

「兄弟喧嘩じゃないわよ!」

「・・・ケンカ、ツテ、イエルソ、デスカネ、コレ？」

「うつせえ!!ほら、さっさと行くぞ!」

そう言うてから、扉の中へと入っていくトニオ。

「あ、ちょっとトニオ、待ちなよ！」

そう言つてトニオの後に続くリイナ。

その後から

「……じゃ、いごつかNT-X。頼りにしてるからね！」

「オウ！」

エミリアとNT-Xが軽口を叩きながら続いた。

「デ、コレガ、“レオル・バディア”、ト……オモツタ、ヨリ、オオキイ、デスネ」

「ただ、結構分かりやすい形してるから、どう攻めればいいのか分か

り易いのは助かるね」

NT-Xが思わず呟くと、それにリイナが軽口を返す。が、その“レオル・バディア”は、本当にそんな感じだった。4つの砲門が取り付けられた円盤に、計4本の足が取り付けられており、体の大きさも、NT-Xの20〜30倍くらいはありそうだが、今リイナが言ったとおり、その巨体を支えているのは明らかに前述の4本の足だけだ。配置の関係からして、どう考えても一本が壊れたら、まるで足が一本無い4つ足テーブルのように倒れるように思える。

「悠長なこと言ってる場合か！来たぞ！」

そんなトニオの警告が飛ぶと同時に、レオル・バディアはその円盤の本体上部から、幾つかの小さな球体をNT-X達へと飛ばしてきた。

とっさにNT-Xが頭部バルカンで迎撃すると、青い煙を出しながら、それらは爆発した。

どうやら爆弾の一種のようだ。

それを確認したNT-Xは、背中にブースターを展開して円盤よりも上へと飛び上がると、

ジャカッ

という音と共に右手をガトリングに変形させて、先程の爆弾の発射口と思われるところを攻撃し始めた。

ズダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ

そんな音が鳴るたびに、レオル・バディアは円盤の上部から黒煙を

上げる。

そのうち右手の弾が切れたので、それを確認した後、直ぐに左からもガトリングを出現させて攻撃を続行するNT-X。偶にレオル・バディアも負けじと筒の上にプロペラを取り付けたような、空中に滞空するタイプの爆弾を出してきた。

が、しかしそれも頭部バルカンで難無く打ち落とし、NT-Xは攻撃を続けた。

ふと、そんなレオル・バディアを攻撃し続けていた彼の聴覚センサーに、誰かの声が聞こえてきた。

弾をばら撒きながらも顔をそちらの方へと向けると、そこに居たのはバディアの足の内の一本をエミリアとリイナと共に攻撃しているトニオだった。

どうやら何かを叫んでいるらしいが、距離が離れ過ぎているのと、レオル・バディアからの攻撃による音が煩過ぎて、中々聞こえない。一応センサーの感度を最大にすれば、聞き取れない事も無かったが、その場合、今度は逆に煩過ぎてこっちが動けなくなりかねない。

止むを得ず、NT-Xは両腕のガトリングと頭部バルカンの弾が切れたのを見計らって、トニオたちの居る所まで降りていった。

さて、此处で視点をエミリア達の方に戻そう。

NT-Xが空へと飛び上がってから、三人はまず足の内の一つを破壊することを当面の目標にする事とした。

NT-Xが上空で大暴れしてくれている為、然程此方へと爆弾等といった攻撃は来ないものの、まだ安心は出来ない。

レオル・バディアの足は、その巨体を支えているとだけあって、中に一人は入れるのではないのだろうかと思うくらいデカイ。

こんな物に蹴っ飛ばされたり、乗っかられた場合、幾らシールドラインを装備してしようとタダで済むという保証は無い。

しかも、まだ発射する気配は無いが、コイツには大型のビーム砲まで付いているのだ。

もしも直撃してしまつたら……その結果は想像に難くない。故に、まずはある程度格闘戦の腕がたつトニオ、そして長年彼のパートナーを勤め、同時に彼と同等の戦闘経験を持つリイナが、クローとハンドガン、そしてダガーとカードを織り交ぜたコンビネーション主体の近々中距離戦を。で、ある程度テクニクの心得があるエミリアがその二人の全面的なバックアップを担当しながら、一番近い所にある足を重点的に攻撃し、相手のバランスを崩す事にした。

「ガツキイーン!!」

「クソツ！結構硬いな！」

戦闘が始まつてある程度してから、思わずトニオがその足の装甲のあまりの堅牢さに、悪態を吐く。

「キーンキーン！」

「うわっ！カードはともかくダガーが全然通らない！？硬いなんてモンじゃないよコレ!?!」

リイナも自身の武器が余り有効打を与えられてない事に対し、驚きの声を上げる。というか、カードに至っては、通らない、と言うよりかは“弾かれています”のだが……

「ちよっ!?二人とも大丈夫!?!」

エミリアも、苦戦している二人に心配そうな声を上げる。

彼女も二人の防御力と攻撃力を上げたり、レスタによる体力の回復などといったサポートに回っているが、実力不足の所為か、二人の戦闘にサポートが少々追いつけていないうえ、テクニックを使う時に一々棒立ちになってしまっている。

今の所彼女はターゲットにはされてはいないらしく、攻撃はもっぱら上空のNT-Xと、足の近くに居るリマ夫妻に向いてはいるが、この調子では攻撃が行くのも時間の問題だろう。

不意にエミリアの視界の隅に、今だに上空に滞空しつつ、レオル・バディアの本体上部に銃撃を浴びせ続けているNT-Xの姿が目に入った。

彼はレオル・バディアからの攻撃を、体の各部にあるスラスタ等を器用に使いながら、宙返りやローリングをして攻撃を回避しつつ、避け切れなかった物は頭部バルカンを使って打ち落としていた。

………凄い………!

思わずエミリアの脳裏にそんな言葉が浮かぶ。
同時にこんな疑問も彼女は抱いた。

………なんでアイツの攻撃は通ってるんだろう？

自分達が攻撃している足が強固過ぎるだけなのだろうか？、とも思ったが、それにしても景気よく黒煙が上がり過ぎている。

と、そんな事を考えていると、彼が下へと降りてきた。

両腕から煙が上がっているということは、おそらく弾切れになったのだろう。

まかり間違っても『故障した』等とは行ってもらいたくはないけど、

………

そう考えながら、エミリアはNT-Xの近くへと駆けて行った。

同時にリマ夫妻も彼の方へと向かっていく。
作戦の練り直しだ。

NT-Xが下へと降りてきた所で、一行は一時作戦タイムに入る事にした。

幸いにもNT-Xが上で暴れまわってくれたお蔭で、敵はそちらの修復に専念しているらしく、攻撃をしてくる気配が無い。

「つーか何なんだよあの装甲の硬さは！ありえねえだろ！？」

作戦タイムに入るや否や、トニオが開口一番にこんな事を言い出した。

よく事情が分かっているNT-Xは首を傾げるが、エミリアとリイナは腕を組んでうんうんと頷いている。

「……………そんなに硬かったのかな？」

そう思いながら、彼はレオル・バディアの足を見やる。確かに、一見堅牢そうには見えるが……………

「……………ノ、ワリニハ、スキマガ、オオク、アリマ、センカ？」

……………そう。今、NT-Xが言った通りその足には所々に装甲の繋ぎ目のような隙間が結構見受けられるのだ。ならば其処を狙えば良いのではないのか？

- Xはそれを三人に伝えようとする。そう考えたNT
が、

「……………俺たちも、最初はそう思っただよ」

だがな と続けられた彼の言葉に、NT-Xは先程の意見を口から出さずに呑み込んだ。

「 だがな、隙間をクローで切ってみたら、今度はあの野郎足の真ん中からフォトンで出来たプロペラを出してきて、それで攻撃してきたんだよ」

……………はい？

「……………ハンド、ガンヤ、カード、デハ？」

「やってみたけれども、上手い事当たる前に足を動かされて、全部外れたよ」

……………えーっと……………

「テク、ニック……………」

「……………全部、弾かれましたよーだ……………」

……………それってつまり……………

「……………ハツポウ、テツマリ、デスカ？」

要するに、あの足に対して、彼らは打つ手が無い、という事になる。何じゃそりゃあ、と頭に手を当てる天を仰ぐNT-X。

しかしトニオは「それでもないぜ？」というと、NT-Xに向かってこう言った。

「NT-X。ちょっとやってみてほしい事があるんだが」

後に彼は、この瞬間、NT-Xは妙に背筋が寒くなつたと語った。

周囲の人間達から“レオル・バディア”と呼ばれているそれは、先程自らが迎撃していた、“自分達によく似た存在”と、先程から足元で小さな攻防（と言っても、殆ど自身が攻勢の一方的な物であったが）を繰り返していた、所謂“人間”と呼ばれる存在が、話し合おうのをやめて再び行動を起こした事を感じた。それに対応して、それも、まだ完全には修復が終わっていないものの、一応使う事のできる本体上部のナパームと滞空機雷をいつでも撃てるようにセットする。

『さて、どう出てくる？』

そう呟くかのように、それは幾つかの状況をメインコンピュータ内でシミュレートしつつ、メインカメラの感度を最大にして相手の動きを窺った。

.....?

すると彼らは突如として、“自分達によく似た存在”を中心にして、まるで のようにフォーメーションを組んだ。

これを見て、それは彼らの行動を怪訝に思った。

彼が行っていた幾つかのシミュレーションの中では、彼らがフォーメーションを組む事はあっても、それは先程のように、“自分達によく似た存在”だけが空中に上がってから残った三人だけの物が殆どだったからだ。

一体何をするつもりなのか？
そのまま数瞬の時間が流れる。

と、次の瞬間！

ガッ！！

ンキヤノンを発射する。

が、銃弾の主はそれを事前に察知したのか、床の構造材を一瞬で長方形の板状に切ってから、それを左の掌に吸いつけて正面へと翳し、膨大な圧縮フォトンの奔流を防御した。

どうやらそれなりに厚く切り取られていたようで、フォトンキヤノンが撃ち終わった後には、熱でかなり溶けてはいるが、いまだに原形を保っている構造材と、その裏に隠れていた無傷のNT-Xが存在していた。

それを確認したそれは、自身の上部で暴れ続けている三人の人間を振り落とす事も兼ねて、自慢の回転攻撃を“自分達によく似た存在”へとお見舞いしてやろうと、脚部からフォトンローターを展開する。

……それが今、自身の対峙している三人と一体の狙いだと知らずに。

・・・・・・・・・・来た！

レオル・バディアがその特徴的な足の全てから、ビームローターを出したのを見て、NT-Xは計画通りに事が運んだのを内心でほくそ笑んだ。

先程彼がトニオから頼まれごとの内容は要約するところだ。

『自分達を、比較的装甲が薄いと思われる奴の上部まで投げ飛ばせ。そんでお前はあいつの足にあるあのプロペラを破壊してくれ』

・・・・・・・・・・簡単に言ってくれるよなあ・・・・・・・・・・

実際問題（認めたくないが）今回のチームで一番攻撃力、防御力等が一番高いのは、確かに自分だ。

ただ、それでも殆どの武器が通用しないようなのに、どうやって立ち向かえというのか？

あの時はその場の雰囲気で承諾してしまっただが、よくよく考えてみれば、これって結構マズイのではないのだろうか？

・・・・・・・・・・が、引き受けてしまった以上何とかするしかない。

とりあえずトニオの『足の真ん中からフォトンで出来たプロペラを出す』という言葉からして、おそらくあの足は何処かが開くのだからと思っただけだが・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・此処まで露骨に開くかね・・・・・・・・・・（汗）

しかも見れば開いた所には、光る球体　　おそらくフォトンリア

クターと思われる　　が入っている事からして、装甲があそこだけ厚かったのも頷ける。

「サテ……ドウヤツテ、コワソ、ツカナー」

思わずおどけた声が口から出る。

すると次の瞬間、それを聞いてか聞かずか（おそらく前者だが）、レオル・バディアは足のローターを使って空中に浮かんだかと思うと、自身も回転させながら、NT-Xを轢殺さんと突撃してきた。咄嗟にブースターで空中へと逃れて、そのままガトリングで反撃しようとするNT-X。しかし……

……クソツ！このまま撃つたら確実に三人に当たるか！

そう。

相手の上にはエミリアと、トニオ、そしてリイナが乗っかっている上に、レオル・バディア自体も回転している為、そのまま弾をばら撒けば、三人に当たる可能性が高いのだ。

武器をライフルに換えて狙い撃ちしようとしても、回転しながらまるでピンボールのように動いている為、此方も三人を誤射してしまう可能性がある。

おそらくこの間ラーニングした“エクスカリバー 約束された勝利の剣”を使えば、あの足の一本ぐらいは切り落とせそうな物だが、その場合はバランスが崩れて、上に居る三人が投げ出される可能性がある。

それでただ投げ出されるだけなら問題は無いのだが、切り落としたときの破片かなんかにぶつかったり等で豪いことになってしましました。なんていう事になったら、本当に目も当てられない。

……ならば……

そう内心で呟きながら、NT-Xはブースターを噴かしてレオル・バディアへと向かっていく。
そして……………

『システム、起動。エクストリームサーバー、アクセス。動力、エターナルサイクラーVer?、再起動開始。アークジェネレーター、出力30%まで上昇。エネルギーバイパス、右腕部直結。ナノトランサー、データ一時変更』

そんな音が彼の頭の中に鳴り響いた。

同時に彼の視界にとある文字が浮かび上がる。

『^{ハール}片眼の英雄を使用しますか？

Y/N』

．．．．．そりゃ、勿論．．．．．

「イエス、デ」

そう呟いた瞬間、彼の右腕が突如変形し始める。まず、腕が突如肘から肥大化し始める。

次に肥大化した肘から、杭打ち機のシリンダーのような物が出てくる。

そのまま腕が突如展開して、その下から無数の放熱板のようなフィンが出てきて、シューシューという音を立てて、発光し始める。

最後に拳が腕の中に引っ込んだかと思うと、其処から引っ込んだ拳の代わりに十字の槍の刃のような物が出てきた。

と、同時に『可変完了。対称へ固定してください』という音声
が、ヘッドギア内部に響く。

NT-Xはそれを聞いた瞬間、今だ回転を続けるレオル・バディア
の中心へと右腕を突き付ける。

そして、右腕に何時の間にか展開していた固定用アームで、標準を
固定した。

『打てます』

そんな声が響く。

それを聞いたNT-Xは、いまだに回転を続けているレオル・バデ
ィアに対して、少し笑いながら、

「さあ、地獄で悪魔がお待ちかねだ」

そう呟いて、
片眼ハールの英雄を発射した。

打ち出された杭は、そのままレオル・バディアのボディーを貫いて、その巨体に大穴を開けた。

そのまま少しの間、レオル・バディアは回転を続けていたが、やがて力尽きたかのようにその機能を停止させた。

NT-Xの右腕は、いつの間にか、元に戻っていた。

「うっ、うっ……目が、回る……」

レオル・バディアが機能停止して、NT-Xの右腕が、戦神又は全知全能の神の異名を持つ武器から元に戻って暫らくした後、エミリアがフラフラしながらその残骸から地面に降り立った。若干顔色も悪い事から、本当にきつかったらしい。

逆にトニオとリイナは慣れているのか、（それでも最初は少しフラフラしていたが）今はピンピンしながら周囲の検証をしている。

因みにNT-Xは、今回の暴走の原因解明の為に、半ば無理矢理レオル・バディアのメインシステムにアクセスしている。

そのまま少しの間目を廻していたエミリアだったが、暫らくしてようやく意識がハッキリしてきたのか、

「……でも、何とかなつたみたい……あゝ、危なかつたあゝ……」

そう言つて、その場にへたり込んだ。

と、そこへリマ夫妻が近寄つてきた。

「お疲れ様、エミリア。警報も止まつたみたいだし、これで終わりたいだね」

「だな。それにしてもエミリア。NT-Xには負けるが、本当に頑張つたじゃねえか。この間とは、気迫が違つたぜ」

どうやら二人ともエミリアを褒めにきたらしい。

まあ、実際エミリアは二人の補助だけではなく、ハンドガンによる脚部への攻撃や、（今回描写されてはいないが）上部へとブン投げられた後は、レオル・バディアが回転し始めるまで、まるでこれまでの鬱憤を晴らすかのように、テクニックやセイバー、ハンドガン

やミラージュブラストなどで大暴れしていたのだから、二人に褒められても、なんらおかしい所は無い。

「え・・・・・・・・そ、そう？あかし、少しは頑張れたかな・・・・？」

ただ、褒められた本人は慣れていないのか戸惑い気味だが。

そんな彼女に対して、リイナがこう言った。

「当たり前じゃないか。それに、エミリアの補助があつたからこそ、アタイ達はあそこまで戦えた訳だし、それにエミリアが、レオル・バディアの上であれだけ大暴れしてなかつたら、きつとNT-Xも、一撃であれを倒すのは無理だったと思うよ？」

「・・・・・・・・うん。そう言ってもらえると、嬉しい・・・・・・・・けど、正直まだまだ、かな？」

そう言つて再び自信なさ気に俯くエミリアのせなかを、トニオが「そう卑屈になんなくて。ほら、堂々と胸を張れ！」といつて叩く。叩かれたエミリアも、それで元気が出てきたのか、笑顔になって背をピンと伸ばした。

そんな二人を微笑ましく思いながら見ていたリイナが、ふと、此方に近づく人影に気が付く。

・・・・・・・・あれ？あの人、確かニュースで見た事が・・・・・・・・

リイナがそう思っている間に、その人物は此方へと近づいてくるなり、深々と頭を下げてきた。

「リトルウィングの皆さん。この度は、本当にありがとうございませした。先程、此方でも全マシナリーの停止を確認しました」

彼に気付いたエミリアと、トニオ、そしてリイナは、彼の突然の行動に戸惑う。

そんな三人の状態を気にせず、彼は顔を上げた。

まるでどこぞの軍の将校のような服を着ており、肌は白く、その顔には深く皺が刻まれ、髪や蓄えられている髭も、老人らしく白い。

しかしその顔からは、圧倒的な威厳とカリスマが感じられた。

その彼の顔を見た瞬間、リイナが声を上げる。

「……もしかして、インヘルト社代表の“ナツメ・シュウ”さん！？」

彼女の言葉を聞いて、彼女達に頭を下げた人物 “イ

ンヘルト社代表取締役” ナツメ・シュウはニツコリと微笑んだ。

「はい、その通りです。以後、お見知りおきを」

「……代表が直々にお礼に来るとは……なんつーか、驚きだな」

トニオが思わずぼろっとこんな事を漏らす。

それを聞いて、ナツメは笑顔のまま、彼に言葉を返した。

「グラールの希望が詰まっている、といっても過言ではない施設ですからね、此処は」

そういつてから、彼は再び真面目な顔になって頭を下げながら、こう言った。

「皆さんの迅速な対応が無ければ、装置等が損傷し、亜空間研究に

致命的な遅延が生じたかもしれない。改めて、感謝いたします」

それを聞いたエミリアが、慌てて手を振って言葉を返す。

「い、いえ、そこまで丁寧にされても………。そ、それにしても、インヘルト社の中で、亜空間の研究をしてるって言うのは意外だったかなあ。あれだけ騒がれてる計画だし、もっと誰も近寄れない場所で作ってる物だと思ってた」

いつの間にか敬語ではなくなっているエミリアだったが、今現在それを注意する人物は他の事に集中している為、その口調のまま彼女は話題を転換した。

そんな彼女の言葉に、ナツメは口元に笑みを浮かべて答えた。

「これでも警備は嚴重な方なのですが、今回に限っては、その『嚴重さ』が仇となってしまいました」

本当にお恥ずかしい事です、続けて言った彼に、今度はトニオが問いかける。

「亜空間や、その研究の事については、俺は良く知らねえんだが………。実際はどんなことしてんだ？」

「この研究施設には、前に見つかったレリクスや、その他のレリクスから発見された、旧文明の遺産が集められています。はっきり言うてしまうと亜空間は、旧文明に既に発見されていたテクノロジーなんですよ。つまるところ、亜空間研究とは、旧文明テクノロジーの研究でもあるのですよ」

そこまで聞いたところで、エミリアがおずおずと手を挙げて再び問

いかける。

「……あの……そんな重大な話、あたし達なんか聞いてちゃつて良かったんですか？」

それを聞いた瞬間、ナツメ代表は「はははっ」と笑ってから「公式にも発表していただきますからね」と言ってから、途端に真面目な顔になつて周囲を見渡しながらこう言つた。

「……SEEDの脅威を乗り越えたグラールには、今、未来を託す子供達がたくさんいるのです。その子供達の為にも、現在グラールが直面している資源枯渇問題への対処法は、なんとしても見つけなければなりません」

そう言いながら、一通り見渡した後、真剣な目で正面からエミリア達を見つめるナツメ代表。

そんな彼の言葉を聞いて数瞬の後に、トニオがポツリとこんな事を呟く。

「……まあ、確かに資源の枯渇はかなりヤベエ問題だしな……それを解決する糸口が、その亜空間研究にあるってんなら、この大袈裟っぷりにも納得はいくな」

そう言つてから、かれはフツと笑つて、

「代表さん、貴重な講話、ありがとうよ。その亜空間研究つての……無事、成功すると良いな」

と言つた。

それを聞いたナツメ代表も、「ありがとうございます」「と、再び

頭を下げて、感謝の意を示す。

「・・・それじゃ、仕事も済んだし、あたい達はこれで」

彼が頭を上げてから、リイナがこういつて、撤収する旨をエミリアとト二オに伝えた。

見れば、時計は既に午後の5時を指し示しており、当初予定されていた時間から、既に3時間が過ぎていた。

「おう、そうだな。それにこのままだと、帰り着く頃には夕飯時を過ぎて、夜食時になっちまうな。それじゃ、さっさと帰るか！・・・っと、エミリア。NT-Xの奴を呼んできてくれ。置いて行ったら、豪いことになりそうだからな」

そう言つて、リイナと一緒にマイシップへと一足先に戻つていくト二オ。

それを見送りながら、エミリアはいまだにレオル・バディアのメイシステムへとアクセスしているNT-Xへと近づいていった。

「NT-X、こっちは話終わったよ。早く帰って夕飯食べに行こーよー」

NT-Xの近くまで来たエミリアは、彼の姿を見つけると、彼に声を掛けた。

見れば彼はまだ何かしているらしく、レオル・バディアのコアに手を当て続けている。

「……………手を当て続けている？」

「おかしいな？」とエミリアは疑問に思った。

メインシステムにアクセスするだけならば、携帯端末でも十分な筈なのに……………それに、彼が自分の掛けた声に、何の反応も示さない、という事も、彼女は気になった。

「……………普段の彼なら、少しおどけて何か言うくらいはする筈なのに……………」

「……………何か、様子がおかしい？」

そんな考えが頭を過ぎり、不安になったエミリアは、再びNT-Xに声を掛けようとする。

しかし、その言葉はミカの突然の言葉によって、呑み込まれる事になった。

『エミリア、気をつけてください』

「……………え？ミカ？どうかしたの？」

『……上手く言い表せないのですが……今の彼からは、何か、奇妙な感じがします』

「奇妙な感じ？」

それって一体なんなの？

彼女がミカにそう言おうとした、次の瞬間。

『ARMSシステム、起動。対象、“レオル・バディア”。システムコネクト。実装完了まで残り、10……』

突如として、そんな声が、彼女の耳に聞こえてきた。

一体何事かとエミリアは周囲を見渡すも、周囲にはNT-Xと彼女そしてミカしかいない。

しかしその間にも、カウントダウンらしき物は続いていき

『・・・3・・・2・・・1・・・0。実装完了。ダウンロード開始』

とうとう0になる。

と次の瞬間、

シューウウウウウウ

という、ナノトランサーから何かを取り出されるような音と共に、NT-Xの左腕に小さな盾のような物がくっつく。

それはまるで、レオル・バディアを模したかのようになっており。あの特徴的な足や。胴体部分の砲門までそっくりに作られていた。

突然の事に、エミリアとミカは、暫し呆然としてしまう。

そんな二人を現実に引き戻したのは、彼女らを現在進行形で驚かせている、

「・・・？フタリトモ、ドウカシタ？」

NT-Xその人だった。

機械人形は、此処で新たな
いた 力を思い出し、更に強くなった。
しかし、その『ココロ』は未だ不完全のまま……

亜空間研究とUFOロボと【戦闘兵器】（後書き）

いかがでしたでしょうか？
どうも、雑炊です。

すみません。高々前回の後半の修正するだけだったのに、してる途中でどんどんシーン追加してしまって、気付いたら、前回の投稿よりも、一ヶ月とちょっと経っていました……。しかも、何か所々強引になっているような気さえするし……。本当にすみませんでした。

因みに今回出てきたNT-Xの新必殺技(?)は、イメージとしては、『ビッグオー』の“サドンインパクト”と、『ダイ・ガード』の“ノットパニッシャー”を、足して2で割ったような感じですよ。あと、名前の由来は、NT-Xの変身体(笑)の見た目を思い出してくれれば良いかと……。駄目ですかね？

とりあえず次回は、今回のお話のインターミッションです。
あの少年も復活しますのでお楽しみに。
それではまた次回。

闇の胎動と少年と【機械の奇妙な夢】（前書き）

今回はインターミッションです。

それでは本編をどうぞ。

闇の胎動と少年と【機械の奇妙な夢】

男は、内心少々驚いていた。

自身の悲願となるある計画の要とも言つべき亜空間研究。

その実験中に、下等な原生生物の脱走や木偶人形マシナリーの暴走という事態に、彼は内心ぶつくさと文句を吐きながら、それでも今此処で計画の進行を滞らせるわけにはいかない、と、この事態の收拾に当たっていた。

その最中である。

ふと、彼が研究所のコントロールセンターで、とあるカメラの映像を目にした時、彼の心の内に、形容し難いざわめきが起こった。

それはとある民間軍事会社の一団が、暴走した木偶人形どもを破壊しながら奥の部屋へと進んでいく物を、監視カメラの内の数台が捉えたものだった。

普段の彼であれば、そんな物には目もくれなかつただらう。

しかしそこにとある人物が映し出された途端、彼の目は、そのモニターに釘付けになった。

それは青を基調として、所々に赤い部分がある、一見すると何処にでも居る様なキャストにしか見えない存在 一週

間近く前に、彼がとある“消え行く存在”と“それらに作られた存在”が混合している村へとレッドタブレットを回収しに行った際に交戦し、妙な力で、彼を空の彼方へと吹っ飛ばした、あの機械人形だった。

……如何いう事だ？何故あの忌々しい機械人形が此処にいる？

居ても立っても居られなくなった男は、コントロールルームでの仕

事がある程度自分で片付けた後、部下に任せ、彼らが向かっているであろう最深部の“レオル・バディア”のいる部屋へと足早に向かった。

男が最深部へと辿り着いた時、どうやら運悪く全ては終わっていたらしい。

レオル・バディアには、目を疑うほど巨大な風穴が開けられており、彼が来たのとは別の通路の方からは、先日遭遇したあの小娘の喚き散らす声と、あの機械人形がそれを宥める声が段々と遠ざかっていくのが聞こえていた。

………チツ！

男は心の中で、盛大に舌打ちをした。

追いかけて行って顔の一つでも見てやろうと思ったが、自分はこの二人には顔が割れてしまっているし、下手に遭遇すれば、あの機械人形がどんな手に出るか分からない。

………せめてこの体が仮初の物ではなく、本来の物であったならば、あんな機械人形に遅れなぞ取らないものを………！

………しかし、何時までもこうしている訳には行かない。

仕方なくコントロールルームへと、戻ろうと、男が踵を返そうとしたその時だった。

「おお、来ていたのか」

この仮初の体の本来の持ち主の父親が此方に気付いた。

男は再び心の中で舌打ちをする。

ハッキリ言って返答するのも億劫だが、一応今はまだ“本来の自分自身としての活動”以外では、この体の本来の持ち主の振りをしていなければならないので、彼はいつも演技している通りに返答した。

「ああ、父さん……今の人達は？」

「今回研究所の警備を依頼した民間軍事会社、“リトルウイング”の皆さんだよ。マシナリーの暴走を止めてくれたんだ」

それを聞いた瞬間、男は心の内で暗い笑みを浮かべた。

「“リトルウイング”……………」

もう一度彼はその名を呟く。

少々大人気無いかも知れないが、彼は次の標的を、其処へと決めた。

「あゝあゝ……止められちゃったかあ」

インヘルト社の研究施設から少し離れた海底。
其処にそれは居た。

「もうちょっと暴れてくれたら、面白い事になりそうだったんだけど……まあ、いいか」

それはたった一体のクマのぬいぐるみだった。分かりやすく言うと、
テディベアだった。

……いや、それをただの“テディベア”というのはおかしい
のかも知れない。

テディベアは、こんな海の底だというのに、一切濡れている様には
思えなかった。

よくよく見てみると、テディベアは、下に置いてある携帯端末から
映し出されているようだ。

「……久しぶりに、懐かしい物も見れたし」

そう言いながら、立体映像であるテディベアは、ゆっくりと首だけを研究施設の方に向ける。

「・・・次に君に会えるのは何時になるかな？」

ねえ・・・

.....

「.....!!!」

マイシップの中で休憩していたNT-Xは、突如として悪寒に襲われ、今まで自分達が居た、インヘルト社の研究施設の方を向いた。

「……なんだ!?今の悪寒!?一瞬だけど、脊髄に冷却スプレーが直接掛けられたような気分になったぞ!？」

珍しく、震えが止まらない。

別に寒い訳でもないのに。

「……というか、ロボットなのに震えが止まらないってどういう事なのだろうか？」

「? NT-X、どうかしたの?」

此方の様子に気付いたエミリアが、心配そうに声を掛けてきた。

その手には、先程までNT-Xの腕にくっ付いていた、あの“レオル・バディア”そっくりの盾何だか何なんだか解らない武器が抱えられていた。

あの後、マイシップに着いてから、自己メンテの為に腕から取り外しておいたのだが、どうやらそのメンテ中に少し解析していたらしい。

「……イヤ、ナンデモナイ。シンパイ、シテクレテ、アリガト」

そう言っつて、NT-Xは座っていた椅子から立ち上がった。

「……で?コイツは一体何なんだNT-X?エミリアの話からして、明らかにお前が作り出したような感じしかないんだが?」

そう言っつて、今度はトニオがその“レオル・バディア”そっくりの武器を指差しながら、近づいてきた。

それを聞いたNT-Xは、バツが悪そうに頬をかく。

「……実際彼にも分からないのだ。」

彼からしてみれば、レオル・バディアが暴走した原因を調べている

内に、意識がフツと何処かへ飛んでいつてしまい、気付いたら自分の腕にコレがくっ付いていたのだから、むしろコレが一体何なのか聞きたいのは、こっちの方だと言い出したくなっていた。

「ハイハイ、トニオもそこまでにしてあげて。心なしかNT-X泣いてるように見えるから。とりあえず、さ。これ、話を聞く限り元々NT-Xが作ったつばいんでしょ？ だったらもう一度装備して、NT-X自身が調べてみれば、何か分かるんじゃないかな？」

トニオに質問されてから暫らく、NT-Xが何を言うでもなく、ただオロオロしていると、これまで黙っていたリイナが、彼に助け舟を入れた。

彼女の言葉を聞いたトニオも、「それもそうか」と呟いてNT-Xを見る。

「と、いうわけだ。いっちょ頼むぜ」

「……いや、なんじゃそら……」

そう内心で悪態を吐きつつも、『リイナの言葉には一理ある』と考えたNT-Xはエミリアに向き直り、彼女が抱えていた“レオル・バディア”そっくりの武器を彼女から返してもらい、通常のシールドと同じ様に左腕に装備しようとする。

すると……

ガシャッ

プシュ

ウイーン

という音が、突然彼の左腕からリズム良く鳴った。

突然響いたその音にNT-Xは勿論、その場にいた全員は、驚いて一斉に彼の左腕へと目を向ける。

・・・そして一斉に固まった。

特にNT-Xに至っては、もしも口があったならば顎が外れるくらいに口をあんぐりと開けていただろう。

簡単に言ってしまうえば、それほどまでに今の彼の左腕は衝撃的な事になっていたという事なのだ。

簡単に説明すると、彼の左腕は中程の装甲が一部開き、それはそれはメカメカしい・・・ならぬ“コードコードしい”・・・というかもうコードの塊としか言えないような、辛うじて何かと保持アームと解る様な、何かそんな微妙な物が、まるで彼らに「やあ！」と言っているかのように顔を覗かせていたのだ。

・・・どんなに肝が据わっているような人物でも流石にこれはドン引く。

そんなイヤーな沈黙が数瞬あった後に、そのコードの塊が、件の武器に引っ付く。

すると、突如NT-Xの左腕の展開されていた装甲が、突如形を変えてコードの塊と、その武器との接合部分を覆った。

形を変えた装甲は、その後もゆっくりと見た目を変えていき、5秒ほど経つと、先程までコードの塊でしかなかった保持アームは、今やしっかりと装甲に包まれた立派な物へと姿を変えていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ナンジャコリヤ？」

そんなNT-Xの呟きに言葉を返す物は、今の所居なかった。

……とりあえずはこの訳のわからん武器の解析をしよう。いつまでも現実逃避なんてしてたら、先に進まないし……

先程の呟きから暫らくして、NT-Xはこんな事を心の中で呟き、
渋々ながらも解析を始めた。

ハッキリ言つて、彼も今のエミリアやリマ夫妻のように現実逃避し
たかつたが、それをやったが最後、この状況の收拾が着かなくなる
のは明白だった為、NT-Xは飛びそうになる意識をグツと持ち応
えさせ、ともすれば薄れ掛ける意識を何とか引き止めつつ、武器の
解析を始める事にした。

ヘッドギアへと手を伸ばし、モードを施設などへとハッキングをす
る時の特殊使用へと変更。

そのままハッキングをする時の要領で、武器の解析を開始
しようとした時だった。

ピーーーーー

突然そんな音が鳴って、解析がストップする。
一体何が起こったのかとNT-Xは驚くが、そんな彼の視界に、突然こんなメッセージが映し出された。

『システムエラー』

このプログラムは現在応答しておりません

作業を続行する場合は、一度コンピュータを再起動させてください

YES/NO

』

……え？

思いもよらない事態に、NT-Xは思わず脱力してしまった。

そんな彼の様子を見たエミリアが、先程とは違い、驚いたように声を掛けてきた。

どうやら現実逃避はやめたらしい。

「ちょ、今度はどうしたの？急に脱力なんかしちゃって」

「・・・ウン、チョット、ネ」

そう言いながら、NT-Xは再び目の前のメッセージに向き直る。（
実際はヘッドギア内部に直接映し出されているので、目をメッセージの方へと向けたただけだ）

とにかくこんなメッセージが出てしまった以上は、再起動させなければおそらく作業は再開されないだろう事が安易に分かる。

仕方なく、彼はヘッドギアのコンピュータを再起動させるため、『YES』を選択した。

と次の瞬間、『ブーン』と言う音と共に、視界が突然ブラックアウト

する。

そして次の瞬間、彼の目の前には赤と青と緑と黄色が均等に組み合わせられた、旗のようなマークと、

WindowsXP

という、おそらくヘッドギアに入っているOSの名前と思われる物が映し出された。

・・・・・・・・・・・・・・・・つて、WindowsXPだ
とおおおお！？

思わずあっさりと流しそうになるも、NT-XはすぐにOSの名前に驚愕した。

何せ“WindowsXP”といえば・・・・・・・・・・もう読者の皆様には説明する必要は無いと思われるので、説明は割愛させていただきます。どうか説明する意味はあるのだろうか？

閑話休題

さて、自身のヘッドギアに入っていたOSに少なからず動揺したNT-Xではあったものの、間もなく「今は関係の無い事だ」と割り切って、再び本来の目的である解析を再開した。

・・・・とは言っても、解析自体にはそこまで時間は掛からず、約2分程度で解析は終了した。

同時に彼のヘッドギア内部のモニターに、“レオル・バディア”そっくりの武器の解析結果が映し出された。

・・・・・・・・のだが、ハッキリ言って、明らかに専門的過ぎる用語がガツリと並んでおり、それなりに分かる人が見ない限りは、おそらく単なる単語の羅列にしか見えないだろう。

一応独自のデータベースを自身の頭の中に持っているNT-Xも、その中の半分くらいまでは何を言っているのかは解ったが、後の半分はチンプンカンプンだった様だ。

とりあえずNT-Xが理解できた事を要約すると以下のようなになる。

『武器名：レオルライザー』

“レオル・バディア”のデータから作られた、一部以外はそっくりの武器。

複数の武器がこれ一つに複合搭載されており、基本的にはシールドと言う扱いで使用されるが、使用者の意思によって可変し、レーザーキャノン、グレネードランチャー、ウィップ、スライサーとして運用する事が可能となる。

尚、ウィップ状態で頭上で回転させると、アームがヘリコプターのローターの役割を果たして空中へと滞空させる事が可能となる。

尚ウィップ及びスライサー時に刃となる各アームの先端には小型のエネルギージェネレータを完備しており、低威力ながら光弾を発射する事も可能”』

.....うわぁ.....

これを見た瞬間、NT-Xは思わず頬を引き攣らせた。

一応クバラ製の武器で『レオル・ヴァリアント』なる物があるが、アレはあくまで唯のグレネードランチャーに過ぎない。

だと言うのに今自分が装備しているコレはまさかの“複合兵装”.....しかも攻撃面でも防御面でもあまり隙が無い.....チートにも程がある。

モチーフになっている物は同じ筈なのに、この違いは一体何処から

来るのだろうか？

閑話休題

とにかく今の自分の腕の状況と、先程エミリアが持っていたのになんら反応しなかった事からして、この武器は自分にしか使えない

つまり専用兵装と言う事がわかる。

それを理解した瞬間、NT-Xは思いつきり頭を抱えなくなった。一体こんな物、どうやって説明しろと言うのか？、と。

おそらくエミリアの事だから、報告書には間違いなくこの武器の事を書くだろう。

たぶん、『気が付いたら何時の間にかNT-Xが持っていました』みたいな感じで。

………いつその事、今回の報告書は自分で書きゃおうかな？

ふと、そんな事が頭に浮かんだ。

確かにそれなら少し自分の負担が増えるだけで、簡単にこの武器の事を隠蔽できる。

エミリアも今回はかなり消耗しているだろうし、きっと喜んで代わってくれるだろう。

………いや、駄目だな。エミリアの事だから、気が抜けた頃にチエルシーさん辺りにぼろっと漏らすかも……

ありそうで怖い。

と言うか絶対に漏らす。

エミリア自身は口が軽いと言うわけではないが……なんと言うか、彼女はチエルシーにだけは例外で何でも話してしまうような気がする

るのだ。

「……なんか今失礼な事考えなかった？」

「イヤ、ベツニ」

「本当？」

「ウン」

「……ま、いいわ」

突然横合いから不機嫌な目つきのエミリアにNT-Xは睨まれた。どうやら何かを感じ取ったらしい。

NT-Xは思わず即答してしまったが、何とか誤魔化せたようだ。

「……で？解析の方は終わったのか？まさかよく分かりませんでした
した　　なんて事はねえよな？」

と今度はトニオに問いかけられた。

確かに解析は終わっているが、ハッキリ言ってコレを全部口頭で説明するのが面倒臭い。

そう考えたNT-Xは、自身の携帯端末に解析結果の要約した物をコピーし、三人に見せる事にした。

因みにヘッドギアからケーブルを取り出し、携帯端末に接続して結果をコピーするNT-Xの姿を見て、エミリアは人知れず、「また新しいシステムが増えてる……」と、溜息を吐いたそう。

「……複合兵装とは、またエライもんが出てきたな……」

「レオル・バディア”そつくりの武器” “レオルライザー”のデータを見たトニオの第一声が、コレであった。

「たしか、クバラの“サイバーテック社”が、今開発研究に躍起になつてるタイプの武器だよな……」

「ああ。しかもあつちのは2種類が限界なのに対して、こっちは5〜6種類も搭載されてる……連中に見せたら、血眼になってコレを欲しがるだろうな……」

そう言うってから、溜息を吐くりマ夫妻。

一方エミリアは、クバラの名前が出たときに嘗てのトラウマを思い出したのか、隅でプルプル震えていた。若干涙目になっている。

「……一瞬『カワイイ』及び『もつと苛めてみたい』と思ったのは秘密だ。」

「というか本当に実行したら、例えロボットであろうと、唯の変態で

ある。

「……トリアエズ、コレ、ドウシタラ、イイデスカネ？」

ちよつと怪しげな思考になってしまった自分の頭を誤魔化すように、NT-Xは二人に質問した。

実際問題、マイシップがクラッド6に到着するまで、残り後5分も無い。

もしもコレを持ったままオフィスに行けば、また面倒臭い事になる事は明白である。

二人とも少しの間考え事をするかのようにウンウン唸っていたが、やがてリイナが何かを思いついたのか、顔を上げた。

「……よし。しょうがないからコレでいこう。NT-X。この武器に関しては、とりあえずアンタが管理しな。幸い使えるのはどうやらアンタだけっぽいし、もしも“それなんだ？”って質問されたとしても、“拾った”とでも言えば、大丈夫でしょ。その代わり実戦で使うときは、注意して使う事。良いね？」

それを聞いてNT-Xは、暫し思考の海に入る。

「……確かに彼女の言う事には一理ある。第一俺にしか使えないんだつたら、他の誰が持つても意味ないし。最悪の場合は共有倉庫の奥深くにでも封印してしまえば大丈夫か。別に盗む奴なんていないだろうし……」

「……ワカリマシタ。ソウシマス」

「ん、よろしいー！」

そう言つて彼女は笑つた。

それを見たNT-Xとトニオもつられて笑う。(NT-Xは表情を一切変えてはいないが)

その内ある程度笑つた所で、マイシップ内にクラッド6に到着した事を告げるメッセージが鳴り響く。

と、同時にマイシップの通信装置が起動した。

連絡してきたのは以外にも、チエルシーだった。

『・・・？ドシタノー？NT-X、何で驚いてるノカシラー？』

「ア・・・イエ・・・ココサイキン、ハ、コウイウトキ、レンラク、シテクルノ、クラウチサン、ダケデシタ、カラ。チョット、イガイニ、オモツチャツテ」

そんな彼の言葉を聞いたチエルシーも、意外そうな顔をしてこう言つた。

「アラー・・・NT-X、ナンダカ前よりもお喋り上手になつてないカシラー？」

「？ ソウデスカ？」

そう言われて、首を傾げるNT-X。

それを聞いたトニオが、ハツとした様に声を上げる。

「そつだ！！なんかヘンだと思つたら、NT-X、お前前よりも喋れるようになってるじゃねーか！！？一体どうした！？」

「そつだよ！！今のセリフだって、前は“ソウ、デスカ？”って一々切つてたのに、今一息で言えてたよね！？」

ト二才の声につられたように、リイナも大きな声を発した。そしてそのまま彼女はいまだに隅っこで震えていたエミリアに、「エミリアもそう思うでしょ!？」と云って、会話のキラーパスを廻す。ただ、パスを回された方はそれ所ではなかったらしく、「え?ええええええええええとおおおお・・・?」と云って慌ててしまっていた。

そんな一連の流れを見ていたNT-Xは、一言こつ呟いた。

「・・・・・・・・ナニ?コノカオス?」

NT-X。起動して少し経つが、いまだに若干、自分が騒動の中心になると中々気付けなかった。

あの後、いつまでもこのままではいけない、と考えたNT-Xが、チエルシーに何故連絡してきたのかを問うと、どうやらNT-Xとエミリアの二人をクラウチが呼んでいるから、その事を伝えようとしていたらしい。

聞けば、結構前にインヘルト社から直接彼に連絡が入り、その直後に突然彼は上機嫌になってしまい、そのまま何人かを呼んで酒を飲み始めてしまったらしい。

で、本来ならば彼が此方へと連絡するところを、代理として彼女が引き受けた、という事だった。

それを聞いた瞬間、リマ夫妻は呆れ顔になり、エミリアは憤慨し、NT-Xは「ああ、あの人らしいな」と、何処か納得したらしい。そんなこんなでリマ夫妻と別れた後、二人が何処に言ったかという
と……………

「……………うわ、もうこの時点でチヨット酒臭い……………うわ……………
あやし入りたくないわ……………」

「ガマンシヨウ、ネ？」

はい、この時点で分かった人もいるかと思うが、二人はリトルウィングのオフィスの前にいた。

オフィスとクラッド6のリトルウィング側のエントランスは、分厚い自動ドアで仕切られているのだが、どうやら隙間から漏れているらしく、ドアの前は微かにアルコール臭がした。

「・・・イコウカ？ドウセ、コレイジヨウ、メンドウナ、コトハ、オキナイデシヨ」

「だといいんだけどなあ・・・覚悟決めるしかないかあ・・・」

そう言つて二人はドアを開けた。

すると部屋の中からは先程とは比べ物にならないほどのアルコール臭が二人を襲う。

思わずNT-Xは臭気センサーを咄嗟に切り、エミリアは鼻を押さえる。

見れば酔いつぶれたのか、床には何人も転がって鼾をかいており、それらをチエルシーが看病していると言う事態になっていた。

・・・よくよく見てみると、バスクやクノーまで転がっている。

おそらくは巻き込まれたのだらうと思うが・・・その手には缶ビールのアキカンやワインの空き瓶が握られていた。

・・・まさか自分から参加したんじゃないよな？

NT-Xがそんな事を考えている内に、エミリアは一刻も早くこの部屋から出たいのか、いつの間にか床に転がっている物言わぬ屍泥酔した大人たちを掻き分けて、一番奥のクラウチの所まで歩いていつていた。

慌てて彼もエミリアの後を追う。

「……何人が踏んでしまったのは秘密だ。」

「……おっさん。来たよー……」

「おう！帰ったか！！」

案の定クラウチも酔っていた。

が、どうやら自分達を待っていてくれたらしく、周りとは比べるとそこまで酔ってはいない様だった。

「……それでもデスクには2本ほど缶ビールの缶が転がっていたが。」

「うわっ、やっぱりおっさんも酒臭い……わりにはあんまり酔ってないじゃん。どうしたの？」

「馬鹿！お前らを待ってたんだよ。お蔭で缶ビール2本しか飲めてねえ……と、そんな事は良いんだ」

「……缶ビール2本も飲めれば十分じゃないのか？と思ってはいけない。」

大人だつて飲みたい時には子供みたいにガブガブ飲みたくなる物なのだ。

そんなあほな事をNT-Xが考えていると、クラウチはエミリアとNT-Xの方へ顔を向けてこう言った。

「お前ら、よく頑張ったな。マシナリーが暴走したつて連絡が入ったからよ、一時はどうなるかと思っただが……まさか新人のお前らが解決してくれるとは思っててもみなかったぜ。特にエミリア、お前よく頑張ったな、俺お前が足ひっぱってんじゃねえだろうかと内心ヒヤヒヤしてたが、お前の機転のお陰で原因がわかったつて報告

があつた時本当にびっくりしたぜ。NT-Xからの先行報告じゃ、レオル・バディア相手にも大活躍だったらしいじゃねえか。本当に、よく頑張った」

それを聞いて、エミリアは一瞬ポカンとする。

それを見たNT-Xは、思わず声には出さなかったが、内心笑ってしまった。

一方エミリアの方は、まだ褒められた事に実感が湧いていないようだ。

意識していないのだろうが、口から「え？」と声が漏れている。

「なにぼけーっとしてんだ？俺はお前を褒めてるんだぞ。ちょっとエミリアこっちこい」

そう言つて、エミリアを手招きするクラウチ。

エミリアはまだ状況がよく分かっていないのか、少しおたおたしていたが、流石に見かねたNT-Xに押しってもらつて、やっと動いた。そんな彼女にクラウチは手を出させると、「ホレ」と言つて、彼女の手にお金を乗せた。

「え？何、コレ？」

そう言つて自分の手の上に乗せられたものを見るエミリア。

そんな彼女にクラウチはこう告げた。

「ボーナスだよ、お前のせつかく頑張つたのに御褒美の一つでもなきや、やつてられんだろ？」

お前の分は、ベルに渡しといたぞー、と言つて彼はNT-Xにも向き直る。

NT-Xはそんな彼に軽く会釈してからエミリアを見た。
最初は呆然としていたその顔も、今は段々と喜びが浮かんでき
てくる。

そして、

「あつありがとう・・・」

小さい声だけれども、しっかりとそう口にした。

それを聞いたクラウチは、再び口元に笑みを浮かべるところ言った。

「良いんだよ、それぐらいは。今回のお前の働きには十分に妥当
でもんだ。それにな、まだ誰にも言っちゃいねえが、実はインヘル
ト社の代表が、わざわざ此処リトルウイングに追加報酬をくれたんだ。もうこっち
はウハウハつてもんだぜ！」

そう言ってガハハと笑うクラウチ。

・・・しかしそれを聞いた瞬間に、NT-Xは言いよつの無い不安
を感じた。

しかしそれも一瞬の事で、次の瞬間チエルシーから投げ掛けられた
言葉で、彼の頭は一杯になった。

「ア、そういえば、あのカーシユ族の子、さっき目を覚まして、今
はベルちゃんと一緒ニ、NT-Xの部屋にいるワヨー」

・・・ハア!?

「ナ、ナンデデスカ!？」

「ナー、ベルちゃん曰く、『こんな所に居たら駄目になっちゃいま
す!』だそうヨー?」

「エエエエエエ、エエエエエエ!?」

ナンジャソリヤアアア!と、叫びながら、NT-Xは猛ダツシユで自室へと向かった。

エミリアも一寸遅れた後、慌てて彼を追いかけようとする。

と、扉の前で彼女は止まった。

そして振り返ってクラウチに一言。

「おっさん!」

「……んあ?どした?」

クラウチがそう言うと、エミリアはにしと笑ってこう言った。

「ボーナス、ありがとう!」

それを聞いたクラウチは少しの間ポカンとしていたが、その内苦笑しながらこう言った。

「……二度も言わなくなっただって分かってるよ……ほれ、NT-Xの奴行っちゃったぞ?」

そう言われたエミリアは再び慌ててNT-Xを追いかけ始めた。

オフィスに残されたクラウチは、飲みなおそうと考えて、実はまだ飲んではいなかったデスクの上の缶ビールの内の一本を開けてぐいっと飲む。

以外にも、さつき飲んだ時よりも酒が美味くなっているような気が、クラウチにはした。

さて、此方は慌てて自室へと戻ってきたNT-Xだったのだが・・・

ガツガツモリモリパクパクシャクシャクボリボリムシヤムシヤガツ
ガツゴクゴク・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あ、マスター。お帰りなさい！」

「（ガツガツモグモグ・・・・・・・・ゴクン）おう！お邪魔してるぞ！」

・・・・・・・・そこではあの少年が、ベルが作った大量の料理に舌鼓を打っているという奇妙な光景が展開されており、後から追いついてきたエミリア共々、NT-Xはしばし入り口で呆然としてしまった。

「？ マスター？どうかしましたか？」

「・・・・・・・・ナンデモナイ。タダイマ、ベル」

「え〜・・・とおじやまします・・・」

そのまま立っているのもどうかと思い、NT-Xとエミリアは中へと入っていった。

少年はそんな二人に目もくれずに、料理を食べ続けている。

「・・・・・・・・」

ガツガツガツガツ・・・・・・・・

「・・・ネエ、キミ」

ガツガツガツガツ・・・ゴクン「ん？なんだ？」

「・・・・・・・・ゴハン、オイシイカイ？」

「うん！―すっごくおいしいぞ！―ロボットさんも食べるか！？」

「・・・ジャア、ソウシヨウ、カナ・・・ベル、ワルイケド、ワタシノブン、モ、チヨウダイ。エミリアハ、ドウスル？」

「へ！？・・・あゝ・・・じゃあ、私にもちょうだい、ベル」

「わかりました！！」

そう言つて、厨房へと向かうベル。

その間も、少年はずっとご飯を食べ続けていた・・・

「デ、キミノコトニ、ツイテナンダ、ケドモ」

少し遅い夕食を食べ終わった後、NT-Xは少年と少し話をするため、場所を自室からカフェへと移していた。

「…………… けっしてプリンを食べに来たわけではない。」

「それよりも、このプリンっていうの美味しいな！！もっと食べた
い！！！」

「…………… けっして、プリンで餌付けしようとしている訳でもない。」

「アゝ…………… ワカッタカラ、トリアエズ、ナマエヲ、オシエテネ。
スイマセーン！プリン아트、10コグライ、ツイカデー！」

そう言つて、プリンの追加を頼むNT-X。無論疲れて部屋で待つ
ているエミリアとベルの分はもう確保してある。

とりあえず、その後追加のプリンが来て、その全てを少年が食べ終
わつた後、彼は満足したのかやっとな此方の質問に答えてくれた。

「人の名前を聞くときは、自分の名前を先に言わなきゃ駄目だって、
旅人さん言つてたぞ」

「…………… 名前を聞く前に。こんな事を言われたが。」

とりあえず名前を教えあつた結果、彼の名前は“ユート・ユン・ユ
ンカース”ということが分かつた。

それが分かつた後、ついぞと言わんばかりに、NT-Xは彼に村が
襲撃された時のことを聞いた。

しかし出てきた答えは、彼が集めた情報と、ほぼ同じ物ばかりで、
然程有益とは言えないような物ばかりだったが。

質問が終わつてから暫らくして、ユートはNT-Xにこんな事を言
つてきた。

「へふいふふは」

「クチノプリン、ヲクツテカラ、シャベリナサイ。OK?」

・・・追加で頼んだプリンを食べながら。

モゴモゴモゴ・・・ゴクン「NT-Xは強いんだな」

「・・・?ソレハ、ドウモ・・・」

「どうやったら、そんなに強くなれるんだ?」

こんな事を。

・・・・・・ふむ・・・どうやったら、か。

意外と中々に難しい問題だった。

単純に強くなりたいならば、戦闘訓練等をして、実力という物をつければ良い。

・・・とは言っても、NT-Xはロボットなので、基本はカタログスペックなのだが。

「お兄は、強くなるには死にふれるっていった。死にふれることで強くなれるって。ぼくは、それがわからない・・・」

・・・てことは、単純に強くなるって意味じゃない・・・面倒臭い・・・

つまり最初の戦闘訓練等をする事で強くなる、というわけではない、という事だ。

しかし・・・

「・・・ソノ、“オニイ”、トイウヒトハ、オシエテ、クレナイノ？」

そう、教えてくれる人がいるのなら、何故その人に教えて貰わないのか。もしかしたらその人が教えてくれないだけというのもあるが・・・

そこまで考えたところで、彼は次のユートの言葉を聞いて後悔した。

「お兄は、大地神さまのところへいった」

「・・・ゴメン」

・・・つまりは死んだのか・・・悪い事を聞いたなあ・・・

未だに心は不完全な為、そこまでNT・Xは罪悪感を感じる事は無かったが、それでも“悪い事を聞いた”くらいは思う。咄嗟に彼は謝罪の言葉を口にした。

・・・それにしても、さっきの言葉から鑑みるにユートの言っている強さとはつまり

「・・・ココロノ、ツヨサ、カ」

「・・・？心の、強さ？」「ソウ」

そう言いながら、NT・Xは手元のグラスの中に入っている水を口から体内へと取り込んだ。

「シニフレル」……ワカラナクハ、ナイ」

「っ！！本当か！？それなら教えて欲しい！死ってどんなものだ？死の先には何があるんだ！？」

そう言いながら、ズイッとテーブルを挟んで座っているNT-Xの目の前まで身体を乗り出してくるユート。

そんな彼に対して、NT-Xは一言、こう呟いた。

「……ナニモ、ナイ」

と。

「……？？？ なにも……ない？それって、どういう事だ？全然分からないぞ？」

そう言って頭を抱えるユートに対して、NT-Xはなおも淡淡と言いつける。

「ナイ。ナニモナイ。シンダラ、ソレマデ。ゴカンモ、キオクモ、イタミモ、クルシミモ、ヨロコビモ、タノシミモ、ジブンジシン、スラ、カンゼンニ、ナクナル」

「……？うん……分かるようで、分からない……自分自身が無くなる……？」

そう言ってなおもウンウン唸っているユートの肩に手を掛けながら、彼は立ち上がった。

「アトハ、シユクダイネ？」

そう言いながら。

「しゅく・・・だい？それって如何いう事だ？ちょっと待ってくれ
NT-X！全然分かんないぞ」

「ワカレ」

「分かれって言われても・・・！」

そんな風に騒ぎながら、二人はカフェから出て行った。

因みに今の時刻は午後11時。

カフェに入ったのは午後8時。

どんだけプリン食べていたんだというツッコミは無しの方向で。

あの後、結局夜も遅いということ、ユートはN-T-Xの自室に泊まる事になった。
で、その夜の事である。

???

『ニューヨーク第28地区152号地産業廃棄物集積所にて、人質立てこもり事件発生』

・・・・・・・・・・・・・・・・なんだ？通信音声？

『犯人は一人。強盗殺人事件犯行後、逃走。現在犯人は銃を携行し、逃走中偶然遭遇した少年一人を人質に取り産業廃棄物集積所に逃げ込んだ模様。既にSWATの隊員二名が銃で撃たれて殉職している。繰り返す。ニューヨーク・・・』

・・・・・・・・・・・・・・・・今日はいつもと違うのか？まるで映画を見ているみたいだ・・・

ふと、彼は目の前の車の中を見た。

車を運転していたのは、赤みがかった黒髪に、赤い瞳の目をした、白人に近い黄色人種のような肌を持った、顔の整った若い男だった。

間もなくその車は産業廃棄物集積所まで辿り着いたようだ。見れば周りでは何人もの特殊スーツに身を包んだ隊員達が、通信機片手に怒鳴りあっている。

少し離れた所には、人質となっている少年の親であろう男女が、おそらく捜査官と思われる中年の男に食って掛かっていた。

その会話を聞くに、どうやら少年の名前はディックというらしい。

男はそんな人達を横目に、スタスタと此処の指揮をしていると思われる男達のところまで一直線に歩いていくと、懐から警察手帳のよ

うな物を取り出してこう言った。

「統合軍特別保安捜査官のジン・アスカです。現状は？」

それを聞いた瞬間に、指揮をしていた二人の男の表情が明るくなると、次の瞬間、彼らは一斉に敬礼した。

「統合軍保安課で警部をやっている、ユアン・ジェイスンです」

「同じく、保安課で警部の補佐をしています、キース・ウッドマンです。御尊は聞き及んでおります」

「・・・どうやら此処へ来た男　ジン・アスカは、彼らにとつては有名な人物らしい。」

明らかに彼よりも年齢が上と思われる、ユアンという男も含めて、敬礼をしている男達の目には彼を尊敬するような色が浮かんでいる。それを見たジンは手で「止める」とジェスチャーすると、再びこう言った。

「・・・現状は？」

それを聞いたユアンとキースは慌てて彼を先導しながら現状を話し始めた。

「犯人は交渉に応じる様子もありません！既にSWATの隊員が二人やられてしまいました」

「通信にて聞き及んでいます。このような状況でなんです、お悔やみ申し上げます・・・犯人の携行している銃の種類は？」

「近年、統合軍の火星交流部隊にて正式採用予定の無反動式ハンドガンの試作品です。ですが威力は従来の物と比べ物にはなりません。おそらく旧暦の対戦車砲並みの威力がある物と思われれます」

「犯人がそれをどうやって手に入れたか分かりますか？」

「おそらく裏ルートオークションで手に入れたのでしょう。調べてみたところ、試作品の内の一個が盗まれていた事がわかりました」

「そうですか・・・ありがとうございます」

何処までも淡々とした口調で二人に対応し続けるジン。ただ、その手が握り締めすぎて震えている事から、冷血漢ではないのかもしれない。

「この先で立て籠もっています」

暫らく歩くと、目的の地点の付近についたらしい。

二人が立ち止まった。

それを確認するや否や、ジンは駆け出した。

近くに居た隊員が彼に注意を促そうとするも、おそらく犯人が撃つて来たであろう弾が近くに着弾し、恐ろしさに「ヒッ」と言って、身を竦めた。

それに目もくれず、駆け出したジンは走りながら右手で銃のような物を持つと、すばやく廃棄物の山を登っていく。

暫らく行くと、少年を小脇に抱えて銃を構えて積み上げられた廃棄物の上に立つ男がいた。

見たところ、まだ成人もしてないくらいに若い。

おそらく若者ゆえの面白半分での犯行だったのだろう。

落ち着きの無い様子からして、もう人を二人も殺してしまった事が

本来であれば彼は今日非番で、今頃は妻と一緒に市内観光を楽しめている所だったのだ。

・・・だというのにコレである。

ハッキリ言って人質がいなければ、今すぐに犯人の顔を顔の形が変わるまでボコボコにしてやりたいが、そうもいかない。

・・・まあいい。厄介事には慣れてるほうだ。

そう思い、再び彼は喋りだす。

「ディック・・・だね？」

少年に対して。

名前を呼ばれた少年は一時的に泣くのを止めた。その時を逃さずに、彼は語り掛け続ける。

「アウ・・・」

「おじさんは統合軍のおまわりさんだ。このショックガンは、絶対に君に当たらずにその怖いお兄さんに当てられる」

「何だと、コラア！！！」

「ギヤアア！！」

ジンの言葉を聞いた男が再び騒ぎ出した。

同時に少年も再び泣き出す。

それを見て、ジンは再び舌打ちを一つしながら、説得を続ける。

「ただし・・・君が動けば君に当たる確立は0ではなくなる。怖い

お兄さんは痺れるだけで済むが、君に当たるとどうなるか分からない。……だから絶対に動かずに大人しくしていて欲しい」

「ア……アウ……アウアウ！」

相変わらず淡々と事実だけを述べるジン。

しかし少年はやはり怖いのか、再び泣き出してしまふ。

それでもジンは淡々と言葉を掛け続ける。

「大丈夫だ。勇気を持って……」

「アアア!!!」

が、泣き止まない。

再び舌打ちを一つすると、ジンは今度は彼の名前を呼び始めた。

「ディック、勇気を出すんだ」

「アアア!!!」

泣き止まない。

仕方なく、彼は大声を上げる事にした。

「ディック!!!聞くんた!!!」

「ア……」

泣き止んだ。

これ幸いとばかりに声を掛け続ける。

「一番大切な人の事を思い出せ！勇気が湧いてくるぞ！」

「いちばん・・・すきなひと・・・？」

「そつだ！考えてみる！」

そこまで行った所で、男は業を煮やしたのか銃を少年に突きつけて叫んだ。

「今すぐそこから消えろおっさん！！消えねえとこの書きぶち殺やれるものならやってみろ」「す・・・？」

しかしその言葉は、他ならぬジン自身によって遮られた。

彼はそのまま言葉を続ける。

「その代わりにその子に少しでも怪我をさせてみる・・・俺が思いつく限りの苦しみを全てお前にくれてやった後、永遠にその苦しみから抜け出せない体にしてやる。死ぬ事すら許さん」

最初とうって変わらない淡々とした口調　しかしその言葉の一つ一つには先程までは無かった迫力があり、彼が本気だと言つ事を感じさせた。

思わず男は口から「ヒッ」と言つ声を漏らす。

そのときだった

「・・・さん・・・うさん・・・お母さん・・・お父さん・・・」

不意に声がした。

声の主は少年だった。

それを聞いた瞬間。ジンは再び彼に語りかける。

「そつだ、いいぞディック・・・その調子だ」

その声が励みになったのか、少年は先程よりもハッキリと声を出す。

「お父さん、お母さん、お父さん、お母さん、お父さん、お母さん」

「・・・又ツ・・・グオオオオオオオオオオ!!!」

しかしその言葉が彼に刺激を与えてしまったのか、男は銃の引き金に指をかけ、少年に向けて引こうとする！

と、次の瞬間！

ヴォウン!!!

そんな音と共に、ジンの持っていた銃から光線が飛び出る。打ち出された光線は、そのまま男の眉間に当たり男を気絶させた。が、次の瞬間男の身体はバランスを崩し、少年を廃棄物の上から落としてしまう！

・・・・・・・・・・チイツ!

それを見た瞬間に、再び本日何度目か分からない舌打ちを一つして、ジンは彼を追って廃棄物の山を駆け下りる。

そして空中で彼をキャッチすると、そのままジンは少年を抱えたまま、受身を取って地面に降りた。

「身柄、確保!」

そんな声が上から響く。
どうやら終わったようだ。

「偉かったぞ、ディック」

そう言つて、ジンは少年に笑いかけた。
それはもしかしたら、彼が今日始めて見せる笑顔だったのかもしれない。

そんな彼の笑顔を見て、少年も笑った。

「ディック!!」

暫らくすると、彼の父親と母親と思える男性と女性が駆け寄ってきた。

「おお、ディック!!」

「無事だったのね！良かった、本当に良かった!!」

そのまま親子はお互いを抱きしめあつて無事を確かめ合う。

「もう離さないぞディック！そうとも！地球が終わったつて、お前を離したりするものか!!」

ふと、父親が言ったその言葉が、ジンの耳には残った。

昔自分もそんな事を親から言われていたのだろうか………
そんな考えが頭を過ぎる。

彼はそんな考えを振り切るように、頭を振ると、先程指揮をとっていた、ユアンとキースの所まで歩いていった。

これから、現場検証や、この土地の所有者への今回の事件に関する説明 つまり仕事がある。

「……これじゃ、休日は返上かな……シャルには悪い事をしたな……何かお土産でも買って行くか……とりあえずあのアホ上司には残業代でもたかるか……」

そう考えながら、彼は上着を脱いでから肩に掛け、そのまま歩いて行った。

「……頭の中で、妻にはどんなお土産を買えば良いか考えながら。」

此処まで見ていた“彼”はとある事に気付いていた。しかしその理由が分からない。

しかし、その仮設はおそらく当たっているのだろう。不意に彼の口から、言葉が漏れた。

「これは……」

そして一度口を噤んでから、再び彼は呟いた。

「これは……」

俺の記憶じゃ、無い」

彼がそう呟いた、次の瞬間、彼の周りの景色が一気にビデオの早送りのように、進み始めた。

そして何時の間にか、空には夕日が浮かんでいた。

闇の胎動と少年と【機械の奇妙な夢】（後書き）

如何でしたでしょうか？

どうも、雑炊です。

今回はあえて色々詰め込んでみましたが……まさか18000字超えるとは思いませんでした。因みに最後のあの部分はとある漫画のワンシーンを土台にしています。

……分かる人、いるかな？

次回も夢から始まります。

もしかしたら、NT-Xが一体どんな存在なのか少しばらすかもしれません。

ではまた次回。

番外編其の3と夢の続きと【機械人形の苦悩】（前書き）

注意!!!：今回はかなりハードな表現があるかもしれませんが。

R - 18までは行かないと思いますが、そういうのが嫌いな読者の方は、夢の続きの最初の方と、最後のシーン以外は飛ばして読む事をお勧めします。

忠告はしましたよね？

よろしいですね？

では、本編をどうぞ。

番外編其の3と夢の続きと【機械人形の苦悩】

．．．．．この夢、まだ続いてるのか．．．．．

奇妙な夢は続いていた。

自分ではない人間の記憶を覗く．．．．．それは以外にも罪悪感と言った物は湧いては来ず、どちらかというところ、ドラマや映画のワンシーンを見ている様な感じだった。

．．．ふと．．．視界の隅に、彼　　ジンが映った。

どうやら現場検証が終わって暇らしく、彼はボーっと先程まで自分が大捕り物をしていた廃棄物の山を見つめていた。

「地球が終わったって、お前を離したりするものか．．．．．
．．．か．．．．．」

ふと、彼がそんな言葉を呟く。

さっきのディックという少年の父親が言っていた言葉だ。

その言葉を呟きながら、彼は今何を思っているのか．．．．

「よお。現場検証終わったんだろ？だったら早くそこ退いてくれ．．
．．．．．つたく、こんな所で騒ぎなんぞ起こしやがってよお．．．．．お
蔭で今日一日の仕事がパーだ」

ふと、そんな声が聞こえて、彼は声の方へと顔を向けた。

そこに居たのは、クレーン車に乗っている、此処の作業員と思われる人物だった。

ジンがその場を避けると、彼はクレーン車を器用に動かして廃棄物

の山の前まで来ると、クレーンを動かして徐に廃棄物の山から幾ばくかの量を掴んで近くまで持ってきた。すると彼は、直ぐに車から降りて、クレーンが掴んだ廃棄物を見ている。

「・・・何をしているんですか？」

彼の行動を疑問に思ったジンが、彼に質問した。すると作業員の男は、目だけをジンの方に向けて説明する。

「ああ、プレスにかける前に、まだ使える物が無いか確かめてるんだよ。例えば鉄製品なんかは、形がちゃんと残ってれば、そのままジャンク屋に売れるし、板材だったらこつちでカットすれば、業者に直接売れるしね。最近出回ってる、お手伝いロボットとかのジヤンクだったら、使えそうな部分は保管しといてリサイクルに回すんだよ。どれもそこそこの金になる」

そう言いながら、クレーンが掴んでいる廃棄物を一通り見てから、「やっぱり中々良いのはねえわな」と男は呟いた。

そしてクレーン車の運転席の直ぐ後ろに設置されているコンテナへと廃棄物を全て入れると、また新しい廃棄物をクレーンに掴ませながら、運転席から降りて、再び吟味し始める。

ふと、ジンの目に、廃棄物の中で何かが蠢いているのが見えた。

・・・

「すみません。ちょっと降ろしてくれませんか？」

咄嗟に、彼はその言葉を口に出していた。

作業員の男は「んあ？」と疑問の声を上げたが、ジンがクレーンに

掴まれている廃棄物のある一点を指差しているの、彼もその先を見ると、やっとジンが何故降ろしてくれと言ったのかが分かったらしい。

直ぐにクレーンを操作して廃棄物を下ろすと、ジンと一緒に、その蠢いている物を引っ張り出すために、周囲のゴミを退かし始めた。

「つついしょお！・・・つと・・・コイツかな？」

「お？なんだい捜査官さん。見つけたかい？」

暫らくすると、ジンがゴミを退かす手を止め、そこから何かを引っ張り出した。

作業員の男も手を止めて、彼の方へと近づいていく。

「ええ、たぶんコイツだと思いますよ」

ほら、と言って、ジンは自分の腕で抱えていた物を男に見せる。

それは二足歩行で、子供の背丈くらいの大きさの、一体のお手伝いロボットだった。

内部が何処か壊れて廃棄されたのか、腕が取れかけていたりする点を除けば、見た目だけは綺麗だった。

「まだ動きますね。直せば何とか・・・」

そうジンが作業員の男に言うと、男は「あゝ・・・これは駄目だな・・・」と言って、首を振った。

「コイツは今から大体10年前位に始めて出回った、ハウスキーパーロボットの“ガレオン”だ。今じゃもう旧式だからあんまりパーツは出回ってないだろうし・・・見たところ使えそうな部

品も無いな・・・こりゃ、心苦しいがプレスにかけるしかないな・・・」

男はそう言いながら、ジンの手からガレオンを受け取ると、そのままコンテナの方へと歩いていこうとした。その時だった。

「・・・？」

ふと、ガレオンがジンの服を掴んでいる事に、二人は気が付いた。ガレオンのアイカメラは、ジンの顔を見続けている。

・・・と、ジンの心に、何か形容しがたい感情が生まれた。

それは、哀れみだったのか、それともそれ以外の何かか・・・

そんな感情が生まれると同時に、彼の頭に“妻へお土産を何か買っていく”という言葉が彼の頭に思い浮かんだ。

・・・お土産・・・

そう、無意識に心の中で呟く。

「ん？どつした捜査官さん？」

「あ……………あの……………」

「うん？」

「コイツ……………私に譲ってくれませんか？」

「……………はあ？」

気が付いた時には、彼は無意識に作業員の男にこんな事を言っていた。

我ながら酔狂な事だ、と自嘲する。

そんなジンの申し出を聞いた男は少し考えてから、こう言った。

「……………まあ、こつちもお仕事が増えないで済むから、厄介払いと考えりゃ、別に痛くも痒くもないか……………まあ、どうせガラクタだし、かまわねえよ」

そう言いながら、男は手をジンの方へと差し出した。

「１ドルで良いよ。こつちも商売なんでね。タダでやる訳にはいかないんだ」

「構いませんよ」

そう言いながら、ジンは財布から１ドル硬貨を取り出して、男に渡した。

その後、男が持って来てくれた毛布にガレオンを包んで、腕で抱えて、ジンは産業廃棄物集積所の外れに駐車しておいた、自分の車へ

と歩いていた。
その時である。

ピピピピ・ピピピピ・ピピピピ

自身の持っていた携帯電話から、呼び出し音が鳴る。

今この時間で彼に掛けて来る人間など彼には一人しか心当たりが無い訳で……

……はあ。

内心「怒ってるんだろうな」等と思いながら、電話に出る。

「……もしもs『あー！！！！やっと繋がった！！！！』……シヤルか。何だ？どうした？」

『どうしたじゃないよ！！いきなり“仕事だ”って言ったかと思ったら、いきなり部屋から飛び出して、そのまま一度も連絡くれないなんて！一体如何いっつもりさ！？』

やっぱり怒ってた。

そう思いながら、溜息を一つ。

……まあ、今回の事に関しては、全面的にこっちが悪かったという気持ちもあるので、あえて反論はしない。

「安心しろ。その件については全面的にこっちが悪かったと思ってる。その代わりと言っては何だが、御土産を貰った」

『何に安心しろって言うのさ……絶対にこの口調の時って、あんまり自分が悪いと思ってるじゃないよね……って、御土産を“貰った”』

「買ったの間違いじゃなくて？」

「……………お金はちゃんと出したから……………一応買った……のか？」

『何で疑問系なの……………？……………まあいいや。それで、幾ら位使ったの？』

「１ドル」

『安っ！ちよっ、本当にそのお土産って大丈夫なやつ！？』

「安心しろ。大丈夫だから」

そう言いながら、ジンはガレオンを抱えていた腕に力を入れて、グツとそれ……………いや、彼を抱きしめながら、こう言った。

「……………きつと、お前も気に入ると思う」

そう言うと、電話の向こうで自分の妻の溜息が聞えた。

それから数瞬の後に、彼女はどこか呆れた様な声で、こう呟いた。

『しょうがないなあ……………それじゃ帰ってくる時に、何か美味しい物でも買ってきてよ。高くなくて良いから……………あ、それと、ちゃんと甘いもの買ってきてよ！…』

「分かった分かった、今すぐ帰るよ」

そう、苦笑しながら言うと、妻は『本当に頼むよ！？』と言いながら、通信を切った。

ジンはそれを確認すると、こちらも“切るボタン”を押してから、携帯をしまつと、ガレオンを抱いたまま、静かにこう言った。ちよつと何処かで聞いた事のあるような事を。

「例え、世界が終わつたつて……お前さんを意地でも離したりはしないぞ……」

その言葉を聞いた瞬間に、“彼”の視界は、一気に洗濯機にぶち込まれたかのように回転しだし、次の瞬間には

「……何故そんな不満そうな感じを出しているんだお前は……
……せっかく私が親切に、お前が最後まで気に掛けていた人物の
内の一人の、『あの後』の記録を見せてやったと言っのに……」
以前、彼の夢に出てきた“アイツ”が、彼の目の前に突っ立っ
た。

ソイツは、よくよく見てみると、水色の半透明な体をしていた。
シルエットこそ人間だが、全てが半透明な為、その表情を窺い知る
事は出来ない。

ブー・ブー・ブー

ふと、ブザーの様な音が耳に聞えてきた。

それを聞くと、その半透明は、手元に空間パネルを呼び出して、ブ
ザーの原因を調べる。

ややあって、彼(?)はその半透明な顔を、分かり易いくらいに歪
めてこう言った。

「チツ。Hu-05が限界になったか。全く一体何処のどいつだ？
生物学上女の方が、男よりも生きる力が強くて頑丈等と言った馬鹿
は。これでもう28回目だぞ？能力的にはほぼ同等か、それ以下の
パラメータしか持たないHu-06や、02の方が、壊れかけた回
数は少ないと言うのに……つと、Be-03も駄目になっ
たか……だが、アイツには体の各機能の超強化改造と、ナノブ
ラストの強化コントロールをしておいた筈だが……とと、ダ
イヤルが全開になっている？しまった、失敗したなあ……これ

・・・

ドスッ！ドスッ！ドスッ！ドスッ！ドスッ！

『『があうつ！？』』

彼らの体に、その針を勢い良く突き刺した。

首に、股関節に、背中の中真ん中に、胸に。

そして彼らの体に、何か得体の知れない液体を流し込んでいく。

次の瞬間、『シユウウウウ』と言う音と共に、傷だらけの彼らの体は、元の綺麗な物へと戻っていつていた。

しかしその度に、二人は尋常ではない苦悶の声を上げている。

目から涙を滝のように流し、口からは涎をひっきりなしに振りまいている。

その瞬間、“彼”は二人が何故あそこまで傷を治されるだけで苦しんでいるのか、やっと気付いた。

あれは治されているのではない。

無理矢理再生させられているのだ、と。

切れた筋肉を無理矢理繋ぎ合わせられ、裂けた皮膚を無理矢理覆い隠され、折れた骨を勝手に再構築される。

そして再び、二人は先程の暴力の嵐の中へと叩き込まれるのだろう。

どんな生物でも、異常な再生能力を持つてしまうと、体がそれに耐え切れなくなり、自ら崩壊してしまう事がある。

昔ゲームでもあったゾンビゲームの代表作とも言える物に出てくるゾンビが確かそんな設定だった筈、と“彼”はどこかぼんやりとした頭で、そう考えた。

そんな事を考えている間にも、彼らの苦しみは続いていた。

と、次の瞬間、女性が涙を流しながらこう訴える。

いつそもう殺してくれ、と。

しかし半透明は、それを見て、くだらない、と言わんばかりに鼻を鳴らすと、次のモニターへと目を移す。

その後も、概ねそんな感じだった。

被験者は老若男女を問わず、果ては赤ん坊から、今にも死にそうな老人まで。

明らかに非人道的、というレベルを超えた、実験の数々。

被験者はその度に、自身の体を限界まで破壊されて、また再びあの液体を流し込まれて強制的に再生させられ、また再び実験を施される。

ナノプラストを無理矢理暴走させられ、もう元が何であったか分からないくらいに、ぐちゃぐちゃな化け物と化したビースト。

精神力ともいえるエネルギーを、無理矢理抽出させられて、限界以上の威力を持ったテクニックを無理矢理発動させられるニューマン。体を一回、完全にバラバラにさせられた後、徹底的に調べられ、もう一度組み上げられた後、今度は徹底的な改造を施されるキャスト。身体データを取られてから、怪しげな薬品で体を徹底的に改造させられるヒューマン。

e t c e t c e t c

そのあまりにも酷過ぎる事件の数々に、“彼”は目を背けたくなくなる。目を背けられない。

どうやって、目は閉じないし、顔も目線も動かない。

その内、半透明がこちらの様子に気付いた。

「……ん？ああ、すまん、退屈な物を見させてしまった。さっさとお前の体を作るとしよう」

そう言って、半透明は“彼”を小脇に抱えて、歩き始めた。

・・・・・・・・・・・・・・・・ん？小脇に抱えて？

ハツとして、自分の体を見ようとするが、出来ない。

そうやって四苦八苦している間に、半透明はこちらの様子を見て、こう言った。

「無理な事はしようとするな。お前はまた、脳と、間に合わせに作ったカメラアイしかないのだ」

・・・・・・・・・・・・・・・・は？

一瞬で彼の思考は停止した。

そのまま何をする訳でもなく、ただ呆然とする。

その間にも、半透明は歩を進めて行き・・・・・・・・

「着いたぞ」

なにやら手術台の様な物の前で止まった。

半透明は、“彼”を台の脇の棚の様な物の上に乗つけると、台の上に寝かされている者の方へと、視線を向けさせてくれた。

そこに居たのは・・・・・・・・

・・・・・・・・俺？

そう、そこに居たのは青を基調として、所々に赤い部分のある、何処かで見たとようなアーマーに身を包んだ、一体のキャストの男性が居た。

ただ、その首から上は、肌の色以外は人間となんら変わらない形をしていたが。

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・んう？」

と、目の目の人物が、目を覚ました。

彼はしばらくの間ぼんやりとしていたが、やがて自身の置かれている状況が分かると、困惑した顔になった。

「目が覚めたか、S a - 0 1」

半透明が彼に語りかける。

それを聞いたキャストの男性は、怪訝な顔になって、反論する。

「悪いが、俺の名前はS a - 0 1じゃない。マルスだ。マルス・レファイド」

しかしそれを聞いた半透明は、興味無さげにこう言う。

「此処では固体名称など、何の意味も持たん。・・・・・・・・特にお前にはな」

「・・・・・・・・何？」

怪訝そうに眉を寄せる男性　　マルスには見抜きもせず、半透

明は言葉を続ける。

「マルス・レファイド・・・・・・・・グラール星系では、イルミナスの野望を、英雄“イーサン・ウェーバー”達と共に叩き潰すも、直後に有名になる事を面倒臭がつて逃亡。現在はフリーの傭兵として、各地を転々とする毎日を送る、言わば“隠れた英雄”・・・・・・・・」

「

「……へえ、よく知ってるな」

マルスは口から賞賛の声を出す。

……しかしその目には、警戒の色が強く浮き出していた。

……そしてその直後に、彼が警戒の色をその目に浮き出させた原因となる悪い予感は当たってしまっ。

「ああ………だから………」

お前のその経歴と現状は、すばらしく利用できる」

次の瞬間、マルスの四肢は拘束され、首も大型の金具で固定されてしまっ。

「っ！何のつもりだ!？」

「何、簡単な話だ。お前自身には、もつと強力な体を与えてやる。代わりと言っては何だが、今の体は……………」

そう言つて、半透明は、“彼”にポンと手を置く。

「こいつにくれてやつてくれ。因みに拒否権は無い」

そう言いながら、半透明は、その手にビームの剣を取り出す。

…………おそらく首を切り落とす気だ。

マルスは必死に抵抗するも、拘束は思った以上に強く、抜ける気配を見せない。

そのまま暫く必死に抵抗しようとしていたが、その内諦めたのだから。

何かを呟き始めた。

「…………イーサン、カレン、ヒューガ、カーツ、ライア、ルウ、ヴィヴィアン……………」

…………それは名前だった。おそらく親しかった者の名前だろう。

半透明はそれに頼着もせずゆっくりと近づいていく。

そして……………」

「それと…………ルミア…………約束守れそうにな……いい加減に五月蠅いのだが」

ヒュツという音と共に、ビームサーベルが振り降ろされた。

そして、同時に何かゴロンと床に転がり落ちた

同時に“彼”は声にならない叫びを、上げた。

「!!!!!!!!!!!!!!」

」

少し前にベルが買ってきた、アナログ時計だ。
時刻は朝の4時半。

次に隣のベッドを見る。

そこでは、先日結局止まったユートが大口開けて、ガーゴリーを
かいて寝ている。

その隣では、エミリアが若干寝苦しそうに顔を顰めながら寝てい
て、ベルはそんな彼女の腰に抱きついて、若干涎を垂らしながら寝てい
る。

どうやら、今の叫びで起きたのは誰も居なさそうだ。

………よかった、起こさなくて。

ホッと一安心といった風に溜息を一つ。

しかし、その直後に、先程見た光景が、脳裏に甦って来る。

度を越えた人体実験の数々。

自分に良く似たキャストの男性 マルス。

そして半透明と、切り落とされた

そこまで考えて、彼は頭を振って誤魔化した。

それでも、圧倒的な不快感と、咽喉に込み上げてきた嘔吐感は消え
ることが無い。

「………イーサン、カレン、ヒューガ、カーツ、ライア、ル
ウ、ヴィヴィアン………ルミア」

ふと、彼 マルスが最後に言っていた、名前を呟く。

その中には、以前クバラシテイのSE・RA・PH社に仕事に行っ

た際に聞いた名前もあった。

……つまり彼は、元々この世界の住人で……

そう心の中で呟きながら、彼は自分の手を見る。

「……コノカラダノ、ホンライノ、モチヌシ……」

今度は口で呟く。

まるで何かを確かめるかのように。

「……」

そのまま少しの間、NT-Xは自分の手を握ったり開いたりを繰り返していたが、ふと、とある事に気付く。

もしも、先程呟いた名前の人間じゃなくてもそうだが、あのマルスという人と親しかった人に会ってしまった時、自分は如何対応すればいいのか？と。

「……」

……いつそ開き直って、「すみません。あなたの親しい人の体を奪ってしまいました」とでも言うか？……却下。なんて事言うんだって話になる。

……しらをきる……いざという時出来るか？俺に？……もういつそ堂々としちゃおうか？

そんな考えがグルグルと頭の中に浮かんでは消え、浮かんでは消えていく。

ふと、時計を見ると、今は午前6時。

ざっと1時間半考え事をしてきた事になる。

ベッドの上を見ると、そろそろベルが起き出しそうだ。

基本的にNT-Xの朝は馬鹿じゃないのか？と思うくらいに早い。

大体午前5時半頃から6時の間にはいつも起きていて、朝食を自力で作って食べている。

もちろんベルの分も、その場で一緒に作ってしまったているのだが、彼女はそれが気に入らないらしい。

曰く、「主人に朝食を作って貰っているメイドって何なのですか！？」だそうなの。

言われた時には、「んなむちゃくちゃなもう」と、NT-Xは内心思ったものだ。

その騒動の次の日から、彼女はなんとかしてNT-Xよりも早く起きようと努力している。

のだが、元々彼の場合は、起きる時間などよっぽど体が損傷しないか、今回のように悪夢か何かで目覚めない限りは、自分でコントロールできてしまうので、やろうと思えば午前3時にだって起きれてしまうのだが。

閑話休題

ただ、そんな見る者からすれば無駄な努力としか言えない様な努力もあいまって、最近彼女は6時くらいになると、確実に起きれる様にはなってきた。

今も隣でグース力寝ている金髪少女とは、全然違うのだ。

因みにエミリアの平均起床時刻は、余程の事が無い限りは、7時をきる事は無い。

そんな事を思い出しながら、NT-Xはゆっくりと立ち上がると、台所へと向かった。

とりあえず、あの夢記憶の事に関しては後回しにする事にして、今は毎

朝恒例となつてきている、あの台詞を聞くために、朝食を作るのだ。いつもパンが置いてあるバスケットと冷蔵庫を覗いてみると、ユートが昨日あれだけ食ったにもかかわらず、幸いにしてパンや牛乳やその他少量の野菜類と乳製品に関しては無事だった為、今日の朝食は簡単な物ではあるが、サンドイッチが作れそうだ。ベッドの上を見ると、ベルがもぞもぞと動いているのが見える。そろそろ起き出す頃だ。

パンを切り、軽く新機能として付いていた、“ハンドライター（文字通り掌や指先から火が出る機能）”で表面を炙り、その後スライズしたチーズや野菜などをそれで挟む。

後はマグカップに牛乳を入れて、朝食の準備は終了。

一応エミリアとユートの分も用意してはあるが、たぶんエミリアは起きない為、ラップをかけて置く。

その内、ベッドのある方から、誰かが起きてくる音がしたので、NT-Xは其方に顔を向けた。

以外にも最初に起きてきたのはユートだった。

寝る時に外したのか、バンドナは付けてはおらず、髪の毛が下ろされている。

が、それと中性的な顔つきが相まって、まるで少女のように可愛い。

きつと女装すれば物凄く似合うだろう。

世の中の一部の人間には、とても人気が出そうだ。

……しかし、そんなあほな事を考えている事を悟られないように、NT-Xは至って普通に彼に声を掛けた。

「オハヨウ、ユート」

「おう……おはよう……？ NT-X。これ、何だ？」

「サンドイッチ。アサゴハン、ダカラ、サツサト、タベチャイナ」

そう言つと、ユートは今迄寝ぼけ眼だったのが嘘の様に元気になつて、席に着き、サンドイッチを食べ始めた。途中慌てて食べたので咽喉に詰めたのだらう。必死になつてカップの中の牛乳を飲んでいたので、それから30秒後。

「ごちそう様でしたー!!」

「ハイ、オソマツサマ、デシタ」

あつという間に朝食を全てたいらげてしまった。これにはNT-Xもちよつと驚いたが、自分自身、50秒もかからずに、全部食べてしまった事に気が付いて、何も言おうとはしなかつた。

それから、ユートは寢床までバンダナを取りに行き、再び付けてから戻ってきた。

と、一緒に、どうやらベルも起きてきたらしい。

寝ぼけ眼で少しの間、彼女はNT-Xを見ていたが、やがて目を大きく見開いて口を広げると、こつ口にした。

「あー！！！！！！！！マスターにまた朝ごはん作ってもらっちゃったあああああ！！！！！！！！」orz

そのままガツクリと床に手をつくベル。

それを聞いて、NT-Xは「ああ、また今日も一日始まったなあ」と、しみじみ思い、慣れていないユートは、びっくりして、目を見開いている。

エミリアは、いまだにベッドの上で気持ち良さそうに眠っていた。

番外編其の3と夢の続きと【機械人形の苦悩】（後書き）

如何でしたでしょうか？

どうも、雑炊です。

今回と次回は番外編です。

一応あんまり繋がってはいないので、前編・後編という形は取りません。

さて、真ん中を見た方には分かるかもしれませんが、此処で主人公がどんな存在であるのかを知るシーンを、また一つ書かせていただきましたが………流石にやり過ぎましたかね？

もしそう思う方が居たら、真にすみませんでした。

あまりにもそういう苦情が多かった場合は、もしかしたら、もっと暈した方に書き換えるかもしれません。

因みに此処。一応フラグです。

マルスさんはまた後で出します。

ただ、姿形はかなり変わってしまったているかも………

で、今回は基本ギャグとほのぼの+ちよっとバトルと、通常運行に

戻ります。

とりあえず、「今回後味悪いな」と思った方も、次回はそんな事が無いと思います。

それではまた次回。

番外編其の4とコラボと【何気ない機械人形の謎】（前書き）

今回は恐れ多くも“オンドウル侍”先生の作品である“PHANTASY STAR GANTZ”とのコラボです。

……オリジナルの方みたいに、カッコ良く描けてる自信ありませんが……

番外編其の4とコラボと【何気ない機械人形の謎】

「んじゃ、エミリア、NT-X。そいつの案内よろしくな」^{ユート}

「イヤ（いや）、イミ、ワカンナイシ（意味分かんないし）！！
！！！！」

「……さて、いきなり何が起きているのか分からない読者も多い事だろう。

簡潔に説明すると、『朝起きてクラウドの所に行ったら、ユートがリトルウィングに入社することが確定していた』のだ。

「……まあ、賢明な判断だ、と最初はNT-Xも思った。

話に聞くとところによると、カーシュ族は、今はもう別の場所へと集落を移動してしまったらしい。

その場所は、保護区に勤めている人でも分からないらしく、それならば、長い間気絶していたユートも分からないだろうという事で、場所が正確に分かるまでは、^{リトルウィング}此処で働くという処置に落ち着いたらしい。

まあ、あんな原生物蔓延る樹海の中を、カーシュ族の集落という目標は在れども、何処にあるかという当ても無く歩き回れば、間違はなく遭難してDEAD ENDなのは目に見えているので、妥当といえは妥当な判断だろう。

因みにこの案はクラウドが考えたらしい。

「……それを聞いた瞬間に、エミリアが「嘘お!？」と叫んで、クラウドに怒られていたが……まあ、さしたる問題ではない。それよりも問題なのは……」

「そういえば、ユート。お前さん、^{クラウド}此処の中がどうなってるのか分

かってるか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・？わかんないぞ？」

という会話から、繋がった、

「そりゃ丁度良い。NT-X、エミリア。今日どうせお前ら仕事無いだろ。暇潰し序でに、コイツにクラッド6の中を案内してやれ」

「・・・・・・・・ハア？」

という事態だろう。

「デ、アンナイスル、コトニナツタ、ノデスガ・・・・・・・・」

「ハイハイ、よく考えてみたら、アンタも居住区とココエントランス付近以外よく分かりませんってオチでしょ。分かってるわよ。ちゃんとあたしが案内してあげるから」

「・・・・・・・・メンモクナイ・・・・・・・・」

「？ 如何したNT-X？何でそんなに落ち込んでるんだ？」

「イヤ・・・・・・・・キシナクテ、イイ」

と、いう訳で、今回はNT-Xは役立たずという事が確定してしま
った。

基本戦闘や仕事では頼りになるが、こういった平時での出来事に関
してはまるつきりダメダメになる人物・・・・・・・・NT-Xは
今この時だけ、その典型的な例と化していた。

「まず、ここが“スポーツエリア”。まあ、簡単に言うと、運動場
ね」

エミリアがまず初めに連れて来てくれたのは、居住区から一番近い

ブロックにある、スポーツエリアだった。入り口近くにあった地図を見ると、成程流石“スポーツ”と名が付くだけあって、様々な運動機械のある大規模なジムや、それぞれで用途の違うホールが多数存在している。

「……なあ、エミリア。この“バトルホール”っていうのは一体なんだ？もしかして此処に行けば戦えるのか？」

ふと、地図を見ていたユートからそんな疑問がエミリアに投げかけられる。

それを聞いたエミリアは、「ああ、それ？」と言ってから、彼に簡単に説明しだした。

「簡単に言っちゃうと、同意を持った人と、模擬戦が出来るってホールなの。ほら、クワッシュの下ここって、リトルウィングがあるから、傭兵とかが一杯居るでしょ？そういう人達が、普段鍛えている自分の腕を確かめる為に、誰かを誘って、そこで自由に模擬戦するんだ。たぶん、今なら誰かやってるんじゃないかな？」

「本当か！？すっごく行ってみたいぞ！」

そう言っただけ目をキラキラさせるユートを見ながら、エミリアは苦笑を一つ漏らすと、NT-Xに同意を取るために声を掛けた。

「……だって。どうする？」

「インジャナイ、カナ？ドウセ、キョウハヒマ、ダシ」

「オツケー。んじゃ、しゅっぱーっ！」

「おー!!」

そう言いながら、ユートとエミリアの二人は、バトルホールへと歩を進め始めた。

その後姿を見ながら、NT-Xは苦笑を一つ漏らすと、ゆっくりと二人の後を追いかけて始めた。

クラッド6スポーツエリア　バトルホール前

ズガン！ギョオオン！！ガキツ！！ギャリギャリギャリ！！！！！！！！！！

「おっやってるやってる」

バトルホールの前まで来て、エミリアの上げた第一声がこれだった。ホールの中では、彼女の言う通り、今まさに模擬戦の真最中なのだろう。

激しい戦闘音が聞こえてくる。

見れば、キヤストと思われる若干白紫色の肌を持つ女性と、黒い髪に黒っぽい瞳で、その身になんだかウェットスーツらしき、銀色のリングがあちこちに付いた、アニメとかマンガのコスプレのようにもみえる服を着たヒューマンの男性が戦っていた。

男性は、相手の出方を伺いつつ、左手に持った、特異な形状の・・・ハンドガン・・・だろうか？それで大型のチェインソーのようなソードを振りかぶりながら、自身へと肉迫するキヤストの女性を迎撃する。

ギョオオーン！！

というこれまた特異な音と共に、空色に近い色の光の弾丸が、その銃口から発射された。

それを見たキヤストの女性は咄嗟にソードを縦一文字に振り下ろした。

すると男性の持つハンドガンから放たれた光弾は、物の見事にその刃に当たって真っ二つに切り捨てられ、二つともあらぬ方向へと飛んでいった。

それを見て盛大に頬を引き攣らせる男性。

それはそうだろう。

おそらくあんな事されたら、誰でもあんな表情にはなると思う。

しかし、当の本人は、そんな事を考えている場合ではなかった。

キヤストの女性は、彼が頬を引き攣らせたホンの一瞬を突いて、武器をツインセイバーの中では最上位の武器に数えられる、“タイラントスパーダ”に変更すると、一気に彼に突っ込む。

それを見た男性も一瞬で表情を元に戻し、手に持っていたハンドガンをしまうと、右手に持っていた日本刀に良く似たソード並の大きさを持つセイバーをハンドガンの変わりに呼び出して彼女を迎撃し

た。

ガキキキキキキキイン!!!!!!!!!!!!!!

そのまま二人はお互いが自身の射程距離に入るや否や、一気に何度も切り結ぶ。

10、20・・・もしかしたらもつと沢山打ち合っているのかも知れない。

そのまま二人はお互いに有効打を与えられないまま、何度も相手に切りかかっては弾かれて反撃され、それを弾き返してはまた相手に切りかかるという、一種の無限ループのような事を延々と続けた。

・・・しかし、限界という物はある。

段々とはあるが、その内男性の方が押され始めた。考えられる事としては、おそらく武器の差なのだろう。

見たところ、全体的な能力に関してはほぼ同じか、男性の方が高い様にNT-Xには見えた。

実際、頭部センサーを使って、二人のデータを取ってみた所、キャストの女性よりも、男性の方が全体の能力値は頭一つ分秀でている。・・・まあ、解析を続けている途中で、何故か彼の着ているあの黒いスーツから、微弱なエネルギー反応が出ていて、それが彼自身にテクニクの“シフト”や“デバンド”を使った時のような作用を生み出している事が分かったのだが・・・今はあまり関係の無い事とする。

ともかく、単純なデータの値だけならば、男性が押されるという事は、(一概には言い難いものではあるが)まず有り得ない。・・・だというのに、彼は押されている。

そういつた身体能力に関する事情だけを分かっている者からしてみれば、首を傾げる様な事態ではあったが、ある程度戦闘に関して色々と分かっているNT-Xのような人からすれば、意外とその理由は簡単に見つかった。

先程も行った通り、例えば身体能力が頭一つ分どころかが秀でていたとしても、それはあくまで身体能力にだけ限定した場合での話である。

今回の場合は、それにプラスして、彼らが使っている装備、そして戦法もある種の不確定要素としてそこに入ってきて来るので、結果として身体能力が高い者が自分よりも身体能力が劣る者に圧倒されるというのは別になんらおかしい物ではない。

ここまで考えて、NT-Xの頭の中には、次のような推論が浮かんだ。

・・・その内容としては、おそらくではあるが、あの男性は、あのツインセイバーの様な使い方に慣れていないんじゃないか？という物である。

実際問題、先程片手にハンドガンを持って、もう片手にはセイバーを持って戦っていた時よりも、若干ではあるが、左手の手首の返しなどが遅い。

キャストの女性も、その事に気付いたのだろう。

一見先程とは変わらない様に見えるが、若干攻撃が、男性の左側へと集中し始めた。

・・・が、次の瞬間、男性はニヤリと笑みを浮かべると、瞬間的に左手の武器を先程持っていたハンドガンとはまた違ったタイプの物へと変更し、至近距離から女性へと発射した。

咄嗟に出て来たソレを見て、女性は顔を驚愕に歪めると、咄嗟に距離を取ろうとする。

が、男性のハンドガンから発射されたのは先程の様なフォトンで構築された光弾ではなく、細身のワイヤーのような物だった。ワイヤーは、そのまま女性に巻きつくと、武器ごと彼女の身体を拘束してしまう。

必死に女性はもがいて戒めから脱出しようとするも、男性がそれを見逃すワケも無く、次の瞬間、女性は首元にセイバーを当てられていた。

・・・・・・・・ブラフか。

ポツリと、NT-Xは心の中でそう呟いた。

わざと不利となる事を演じる・・・・・・・・ある程度実力のある者ならば、可能ではあるテクニクだ。ただリスクが大きい為、基本的に自分から率先してするような事は基本的に無い。

やるとすれば、相手の手の内が殆ど分かっているか、かなりの余裕がある時だけだ。

そのまま二人の間に沈黙が落ちる。

女性はそのまま暫らくの間、如何にかしてその状況を覆そうと、逆転の一手を探して目だけをそこかしこへと動かしていた。しかしその内諦めたのか、俯いてこう言う。

「・・・・・・・・参りました・・・・・・・・」

と。

尚、今の攻防は、ざっと数えて、約3〜4分程。

壁に掛かっているタイマーを見ると、7分54秒を示していた。

「……うつわー……。相変わらずスツゴ……。あたし、途中で二人がツインセイバーで戦い始めたくらいから、目でよく追えなかったんですけど……。ユート。見えた？」

「う……。ううん。ぼくも、今二人がどうやって戦ってたのか、よく見えなかったぞ……。？NT-X、分かったか？」

ホールで今行われていた攻防を見てから、最初に口火を切ったのはエミリアだった。

続けてユートも口を開く。

今のセリフの通り、どうやら今の攻防は、まだあまりちゃんと目が慣れていなかった二人では、よく分からなかったようで、二人とも一緒に見ていたNT-Xに、疑問に満ちた眼差しを向ける。

対するNT-Xは、元からあいつた攻防を自分でもよくしている上に、最近アイカメラに新しく“ハイスピードカメラモード”なるモードが追加されていた為、二人がどんな攻防をしたのかピンからキリまで理解していた。

二人の疑問に対して、NT-Xは軽く首肯した後、簡単にどんな事をしていたのか、説明する事にした。
・・・とは言っても、先程自分の見た事を淡々と口にしただけだったが。

しかしそれでも二人には驚愕に値する物だったらしく、話を聞き終わると、二人は揃ってポカンとしていた。

「あれ？エミリアじゃないか？珍しいな、お前が此処に来るなんて」

NT-Xから説明を受けた後、ポカンとしていたエミリアは不意に声を掛けられて、振り向いた。

一緒にユートとNT-Xもそちらへと顔を向ける。

そして其処に立っている人物の顔を見た瞬間、思わずユートは「あと、声を漏らした。」

其処に立っていたのは、先程までホールの中で変わったスーツを着てキャストの女性と戦っていた、あのヒューマンの男性だった。

先程とは格好が違い、今はスーツではなくフロンティアウイングを着ていたので、一瞬分りかねたが、幸い服の色があまり変わってはいなかったなので直ぐに気付く事ができた。

「あ、アダム」

エミリアが男性を見て、彼にそう声を掛ける。

アダムと呼ばれた男性は、そんな彼女に人懐っこい笑みを浮かべた

後、NT-Xとユートを視界に入れて、驚いたように目を見開いた。

「……珍しい。あの人嫌いのエミリアが、自分と同年代の男子と自分よりも大きなキャストと一緒にいるよ……明日は雨でも降るのかな？」

「地味に酷いわね！？つか人嫌いって何よ！？あたしそんな風に思われてたの！？」

「少なくとも、俺は俺やクラウチさんとかチエルシーさん以外に、お前と親しく話しているやつを見た事が無いんだが？」

そうアダムから言われたエミリアは、はて？、と少し考え込む。

「……すると、成程確かに自分がここまで誰かと物怖じしないで話せるようになったのは、考えてみればNT-Xがココクラウチのに来てからで、それ以前は確かにこんな風に誰かと話した事は、あまり……というか、殆ど無い事に、彼女は気が付いた。

「……あれ？あたしって、意外と暗い奴？」

知りたくなかった新事実である。

慌てて助けを求めるようにNT-Xとユートに顔を向けるが、二人ともこつちを見ても、頭の上に『？』を浮かべるだけである。

少しだけ考えれば分かる事なのだが、彼らは以前のエミリアがどんな女の子だったかなど、知る筈も無い。

しかし知りたくなかった新事実を知ってしまったって軽いパニックになっているエミリアはその事に気付かず、二人に視線を送り続けるのみである。

結果的にあまりにも力オスな空間が形成されてしまった。

金髪の少女が、独特の民族衣装を着て頭にバンダナを巻いた少年と、青を基調として所々が赤い身体を持つキャストに、延々とガンをつけ続ける。

本人達はそんな事微塵も感じてはいないが、傍から見ればエミリアがNT-Xとユートに一方的に喧嘩を売っていると思われるもおかしくは無い。

「……こりゃめんどくさい事になっちゃったな……
どうするか……」

計らずしもこんな状況を作り出してしまったアダムは、先程の模擬戦の疲れも相まって、内心少々まいってしまっていた。

それでも一応自身が原因であるので、何とかしようと思えば考えを廻らせる。

と、其処へ、

「おろ？何やってんの？」

ある意味救世主と成り得る人から、彼らに声が掛けられた。
打開策

突然此方に（当の本人はそんな事は微塵も思っていないのだが）睨みを利かせてきたエミリアの扱いを如何しようかと頭を悩ませていたNT-Xは、突然聞えてきた声の方に顔を向けた。

……あ、さっきの女だ。

顔を向けた先 其処に居たのは、先程アダムと息も吐かせぬ攻防を繰り広げ、^{手札の}僅差で押し負けた、あのキャストの女性だった。

「リリイ」

アダムが彼女をそう呼ぶ。

彼女はそれを聞いてから、「はいリリイさんですよー」とおどけて呟くと、なんとも奇妙な状況になっているエミリアとNT-X達を見てから、暫くボーっとした後、アダムに向けてこう言った。

「おいアダムっちゃん。一体これどういう状況か教えてちょよ」

「……あゝ……まあ、何だ？……ちょっとした事から生まれた、惨状？」

「オケ、理解できない」

「だよなあ……」と、アダムがため息を一つ吐いて、肩を落とす。その間も、エミリアはこちらを睨んできているまんまだ。いい加減NT-Xも、若干ウンザリしてきている。

見ればユートなんぞ欠伸を噛み殺している真つ最中だった。
それでもエミリアは睨むのを止めない。

「……………いつそ荒療治ではあるが、首根っこ引つつかんで上下に振ってやるのか？」

そうすれば、いつものエミリアに戻るかも、と考えたNT-Xは、
それを実行に移そうと彼女の方へ歩き出そうとした。
……………そう、歩き出そうとしたのだ。

だが、それよりも早くエミリアの背後に立った人物によって、その
行動は躊躇される事となった。

「えい」

ギョッ

「むじっ!?!」

エミリアの背後に立った人物……………それはリリイだった。

彼女はエミリアの背後に音も無く忍び寄ると、次の瞬間彼女を抱き

かかえてしまった。

これには流石のNT-Xも啞然とするしかない。
見ればユートも同じ感じた。

一方のアダムは、『ああ、またか』と言わんばかりの顔をして、苦笑いを一つ零した。

「えいつ。このこの〜」

コチヨ、コチヨコチヨ、コチヨコチヨコチヨコチヨコチヨコチヨ

「うひゃっ!?!うひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ!?!ちよっ、やめっ、
まっ!?!うひゃひゃひゃひゃひゃ!?!」

「ほれほれ〜此処がいいのかな〜?」

コチヨコチヨコチヨコチヨ

「ちよっ、いい加減にやめ、うわひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ!?!」

そして始まるエミリアに対する“撥る”と言う名の拷問。

至近距離から抱きかかえられて、撥られているエミリアは、くすぐったいやら身動き取れなくて苦しいやらで、もう何がなんだか分からなくなっていた。

・・・そんな光景を見つめる男性陣＋ は、「なんだかなあ・・・」
と言う感じになっていた。

・・・少なくとも、暇な事は間違いが無い。

そんな空気を打破する為かは分からないが、突然アダムが「あ」と、
呟いたかと思うと、NT-Xとユートの方を振り向くと、思い出し
たかのようにこう言った。

「そういえば、まだ自己紹介をしてなかったな。“アダム・マクス
ウェル”。たぶんそっちと同じで、“リトルウィング”所属の傭兵
だ。よろしくな」

それを聞いて一瞬の間隔を空けた後、今度はNT-Xがそれに返す。

「NT-X。リトルウィング、シヨゾク、ノ・・・・・・・・ヨウヘ
イ？デス？」

「・・・なんで疑問形なんだ？」

「・・・ナントナク？」

「だから何故疑問形・・・・・・・・」

そんな事言われても、NT・Xもどう返して良いか分からず、途方に暮れるだけであった。

実際問題、自分でも何故疑問形にしたのか分かってないし。

とりあえずこのまま問答を続けていても何も変わらないので、NT・Xは次にユートを紹介する事にした。

「コノコハ、ユート・ユン・ユンカース……ダヨネ？フルネーム、アツテル？」

が、肝心な所でユートのフルネームがあやふやになってしまい、結局締まらない。

そんな彼に対し、ユートは気にした様子も無く、「おう！」と言って、あつている事を肯定する。

しかしそれを聞いてNT・Xがホツとしようとしたのもつかの間に、ユートはアダムに喋り掛けていた。

「お兄さん、すごく強いんだな！！」

「ん？まあな……ただ、たぶん単純な強さだけだったら……」

そう言いながら、アダムはいまだにエミリアにじゃれ付いている、リリィを指差してこう言った。

「たぶん、あいつの方が、俺の倍くらいは強いぞ？」

……は？

それを聞いたユートとNT・Xは、目を丸くして驚く。

そりゃあ、そうだろう。

何せさつきまで、アダムとあのリリイという女性のキャストは、模擬戦とはいえ互角に戦えていたし、尚且つ彼は彼女に僅差とはいえ勝っているのだから。

そんなふうに、驚愕と疑問がごちゃ混ぜになった二人の顔（厳密に言うとNT-Xは表情が変わっていないので、その雰囲気）を見て、アダムは「あ」と言ってから、慌てて付け足す。

「あ、単純な強さって言うのは、俺があのスーツを着けてない時の事ね。実は俺の知り合いの技術者が、変態技術に定評のあるクバラシティの会社で働いてて、そんでもって、とある漫画の熱心なファンなんだよ。その漫画に、あのスーツそっくりの“身体能力強化スーツ”が出てくるんだ。あれは、そいつがその漫画に出てくるスーツを実際に再現しようとして、作ったやつなんだよ。だから、基本的な身体能力や実力がリリイ以下の俺でも、ギリギリとはいえ彼女に勝てたんだ」

……成程。サーチした時のあの変な反応は、そういう事か。

アダムの説明を聞いて、NT-Xは納得したように首を動かす。ユートも「ふーん……」と言ってはいるが……その顔から、あんまり理解できていない事は容易に想像できる。

まあ、それも仕方無い事だろう。そもそもアダムの言っている、“身体能力強化スーツ”は、彼の話から察するにまず間違いなく彼の知り合いによる趣味の産物……簡単に言つと、文字通り“世界に一つだけの品”なのだろう。

これからもしかすると、量産される可能性も、無きにしも非ずだが、其処まで考えて、NT-Xは、はたとある事に気付き、同時に本当

にそうなのか疑問を持った。

それは、依然彼もあの変態の巣窟に行った事があるからこそその、思考だったのだが、彼はその事に気付かずに、その疑問を口にする。

「……アノ、ソノシリアイノ、ヒトカラ、ワタサレタ、ノツテ、ソノスーツダケ、デスカ？」

「え？いや、さっき使ってた武器も、その漫画に出てくるやつを、再現した物だけど……なんで分かったんだ？」

「……イヤ、ダツテ、クバラデスヨネ？アノヘンタイノ、ソウツデス、ヨネ？」

「……ああ……そういう事が……君も行ったのな。あそこ」

「……ハイ……」

途端に遠い目になって、虚空を見つめるNT-Xとアダム。

この反応を見ると、どうやらアダムも嘗てあの変態達の被害にあっただらしい。

「……大変、だったんだな……」

「……マア、ゲンミツニ、イウト、ヒガイニアッタ、ノハ、エミリアダケ、デスケド」

「……ああ、そのフォローか……目に浮かぶようだ……
……因みにその時は何処の会社に行ったんだ？」

「SE・RA・PHシャデ」もついい、みなまで言うな、大体分かった、よりもよつてあそこか」・・・ハイ」

「・・・上に立つ人物はまともなだけだなあ、あそこ・・・それを一気にマイナスにする勢いで、下があればだからなあ・・・」

「・・・みんな、イイヒトたち、デハ、アルンデスガ・・・」

「何か情熱を別のベクトルに向けてるんだよなあ・・・」

「・・・ハア・・・」

そう言いながら、二人はほぼ同時に溜息を吐いた。同時にがっしりと握手をどちらからともなく交わす。

「・・・お前とは、いい酒飲めそうだ」

「ロボットナノデ、ノンデモ、ヨエマセンガ、ツキアウクライナラ」

「ああ、その時は頼むよ」

「・・・なにやら、妙なシンパシーを感じてしまったらしく、今日が初対面だと言うのに、一気に意気投合している。

まあ、別の世界とはいえ、一応この世界も含めると二人とも主人k

「そこお（ソコ）！！メタ発言禁止い！！」「プゲラア！！??」

「・・・二人とも、今何やったんだ？」

「ユート、キニスルナ」

「ああ、お前はまだ此方に来ない方が良い」

「………？まあいいや………それよりも、アダム、
って言ったか？頼みがあるんだ！」

一通りのメタ展開を終えて、その一連の動きを不思議そうな目で見ていたユートが、アダムを真正面に見据えてからこう言った。
さっきの変な悲鳴？気にはしていない。

まあ、それは置いて、一応年上のアダムを呼び捨てにした事をNT-Xは咎めようとするが、それはアダム自身に止められた。そうしてから、アダムはユートに向き直ると、こう聞き返した。

「で、頼みって言うのは？」

「ぼくと戦って欲しい」

直球である。

小難しい言い回しも、遠まわしに暈す事も一切無し。
なんともユートらしい頼み方であった。

それを受けて、アダムは一瞬目を丸くするも、直ぐに真面目な顔になって、彼に問いかける。

「……その理由は？」

「……ぼくは、強くなりたい。少なくとも、アイツに勝てるぐらい」

それを聞いた瞬間、アダムが「アイツ？」と疑問の声を上げる。
それを聞いたNT-Xは、補足説明を入れる。

「チヨットマエニ、シゼンホゴク、デオコツタ、カーシユゾクノ、シユウラク、シユウゲキ、ジケン、ノ、シユハント、オモワレル、オトコノ、コトデス。ハナシヲ、キクカギリ、デハ、チヨクセツ、タタカツタワケ、デハナイ、ヨウデスガ、タタカツテイル、スガタダケハ、トオメナガラ、ミテイタ、ヨウデ」

「・・・成程。つまりそいつに勝つ為には、今よりももっと強くならなきゃいけない・・・その為に、色々な人と戦って、実力ををつけたい・・・そんな所か」

「ああ、そうだ。でもそれだけじゃない」

そう言うてから、ユートは眉根に皺を寄せてこう言った。

「お兄は、強くなるには死にふれろっていった。でも、教えてくれる前に、お兄は土神様のところにいつちゃった・・・それでこの間、NT-Xにも聞いてみたんだ。でも、NT-Xも“死んだら何も無くなる”としか言うてくれないし、後は宿題って言うて、他の事は教えてくれない・・・」

「・・・つまり、模擬戦序でに、俺にその答えを教えて欲しいって事か・・・」

そう言いながら、NT-Xを見るアダム。

その目は、「教えてもいいのか?」という確認の意味が見て取れた。その意を汲み取った上で、NT-Xは考える。

「・・・まあ、宿題、とは言ったけど、どうやって解けとは指定してなかったからなあ・・・」

「……………モギセン、シタトシテ、マンガイチ、ユート
ガ、カテレバ、オシエテアゲテ、モ、イイデス」

「……………え？良いのか？」

「シユクダイ、トハイイマシタ、ガ、トキカタハ、シテイシテ、マ
セン」

「……………案外と生徒思いだな」

「ダレガセイト、オモイデスカ」

「照れるなって」

「ベツニ、テレテマセン」

「ハイハイ」

そんな感じで談笑してから、アダムはユートに向き直って、談笑中
の朗らかな表情を引き締め、真面目な顔になってこう言った。

「……よし、ユートその申し出、受け入れた。ただ、“宿題”の答えに関しては、俺に勝つてから、もう一度聞いてくれ。ヒントくらは教えてやるよ」

「本当か！？わかった！今すぐやりにいこう！！」

そう言いながら、ユートは急いでホールへと走って行く。余程嬉しかったのだろう。

アダムが模擬戦の申し入れを受け入れた瞬間から、目は誰が見ても分かるくらいにキラキラしていたし、心なしか、雰囲気の方もさつきより生き生きしている様に見える。

それがどっちの意味で嬉しかったのかは………まあ、微妙に分かりにくいが。

「……で、元気な少年は先に行ってしまった訳んだけど……お前は如何する？」

あっという間にホールの入り口まで走り去ってしまったユートを呆然と見送った後、アダムはNT-Xに尋ねる。

するとNT-Xは、先程から忘れ去られているエミリアとリリィの方を向いてから、こう呟いた。

「……フタリガ、トテモシンパイ、ナノデ、トウブン、ココラヘンデ、アソンデマス」

「……？ 少し気になる言葉があったような気がするが……」

まあいいか。じゃあ、二人を頼むよ」

「ガッテン」

そう言いながら、NT-Xは胸を叩いた。

そんな彼に、アダムは苦笑を一つ漏らすと、直ぐにユートの後を追って、ホールの入り口まで走って行く。

それを見送った後、NT-Xはエミリアとリリイの方へと振り返った。

見れば、エミリアは先程よりも落ち着いて……いなかっただい、先程と比べれば、幾らかマシにはなっているが、さっきのアドレスからずっと擦られ続けていたらしく、顔を真っ赤にして、荒い息を吐いている。

オマケに彼女を後ろから抱えているリリイも、なんか様子がおかしい。

具体的には、エミリアと同じぐらいに息が荒い。

……うわ……関わりたくない……

思わずそう思ってしまったNT-Xを誰が責められようか。

10分後

「うう……結局勝てなかったぞ……」

「いや、中々良いセンだったぞ？ 実際問題、後半に入ってきてから、何度か途中でヒヤツとさせられたしな」

ホールの入り口から、スポーツエリアのエントランスへと続く廊下を、アダムとユートは揃って歩いていった。

模擬戦の結果は、大方の予想を裏切る事無くアダムの勝利に終わった。

ところが意外な事に、今彼が言ったように、ユートはかなり微妙ではあるが、要所所でアダムに追い継いでいたのだ。

それが、彼がアダムの戦闘スタイルに慣れたからなのか、それとも元から持っていた天性のセンスによる物かは不明だが。

実際、敗北の原因も、あまり目立った有効打を当てられない事に焦ったユートが一気に勝負を決めようとした所を突かれただけだし。

「あ、それと宿題の答えは自分で何とかしてくれ。予め決められていた事だからな」

「ああ、分かった。頑張るぞ」

「その意気だ……つと、エントランスに到着したもののNT・Xは居ないか……」

二人が先程NT・X達と別れたエントランスに到着すると、其処にはNT・Xの姿はなかった。

一通り辺りを見回してみるが、それっぽい人影は見つからない。

「……？ みんな、どこいったんだ？」

思わずユートが呟く。

それに対して、アダムは至って冷静に返した。

「別れる前に、『こちらへんで遊んでいる』って言ったからな……
きつと、エリア内のどっかの施設でなんかやってるんだろ……
……とりあえず、風漬しに探してみるか」

そう言いながら、アダムはまずスポーツエリア内に在る、“ジムブ
ロック”へと足を踏み入れていった。

その後を、ユートも追いかける。

クラッド6スポーツエリア ジムブロック

文字通り、スポーツジムのブロックである。

辺りを見渡せば、ルームランナーやらバーベルやらといった運動器具が所狭しと並んでいた。

見た感じでは意外と人も多く、全体の半分以上を誰かが使っているようだった。

ユートは始めて踏み入れたジムの光景に驚いて目を瞬かせている。身体もウズウズしていて、目もキラキラ光らせている様に見えることから、きつと片っ端から試してみたくて仕方が無いのだろう。

アダムはそんな彼の様子を見て、子供っぽいなと思うと同時に、とても微笑ましく感じた。

まあ、ユートは子供といっても差し支えない年齢ではあるので、歳相応の反応と言う方が正解なのだが。

と、そんな事を内心で思っていたアダムの視界の隅に、ふと、見慣れた足がチラツと入った。

その足は若干白紫色の肌をしており、彼の良く知る人物に酷似していた。

……というか、その奥を良く見ると、ルームランナーが二台稼動しており、その上では良く一人はさっき知り合ったばかりだが、見知った二人が、まるで張り合うかのように走り込みをしていた。

片方には金髪で桃色の変形学生服のような服を着た少女 エミリアが、必死の形相で走っている。

その顔には『絶対に負けてたまるか！』という意味がハッキリと浮き出ており、彼女がどれだけ必死で走っているのかを物語っている。

一方、もう片方の、青を基調としたボディーのキャスト NT

- Xはそんな彼女の必死な姿なぞ何処吹く風か。

表情が変わっていないので分かり難いが、その雰囲気からかなり余裕で走っているという事がありありと伝わってくる。

両者を比較してみると、片やフルマラソンの真っ最中。

片や、軽いジョギング程度の運動という感じで、両者の差がありありと浮かんでいた。

因みにどちらもルームランナーのスピードレベルはMAX。

この場合、それでも余裕で走れているNT-Xが凄いのか、それともそんな彼にギリギリ付いて行けているエミリアの方が凄いのか・・・アダムとユートは、そんなどうでもいい事に、一瞬氣を取られる。

と、NT-Xが此方に気付いた。

体勢を変えて、所謂背面走りの状態になって、此方に振り返る。

それでもペースが一行に変わらないのは、もう凄過ぎるというしかない。

「ア、オワリマシタ？」

至って軽い口調で話しかけてくるNT-X。

その声や口調を見る限りでは、息を一つも乱していない事が分かる。隣のエミリアなんかもう限界近そうなのに。

そんな事を二人が思った瞬間。

・・・あ、こけた。

案の定限界に至ったらしいエミリアは、その場で盛大にズッコケ、ルームランナーに流されるままにして、地面に放り出された。

ヒューヒューという呼吸音が聞こえる事から、まだ死んではいないらしい。

汗びっしょりになって、身体をガクガク震わせ、ぐったりと床に転

がるその様は、不思議な事に何処か哀愁を感じさせた。

そんな彼女を見たNT-Xは、ルームランナーのコンソールをコントロールし、それを止めると、序でと言わんばかりにエミリアがつい先程まで使っていた物の電源も落とす。

そのまま彼はエミリアに近づくと、徐に彼女を小脇に抱える。

と、同時に近くのベンチに転がっていたリリイも同じ様にエミリアとは反対側に抱えた。

「・・・どうしたの？」

思わずアダムがNT-Xに質問する。

見ればユートも同じ様な心境らしく、不思議そうな目で彼を見ていた。

NT-Xはそんな二人に苦笑のような物を漏らすと一言、

とだけ言って、ジムの出口まで歩いていった。
その後を慌てて追いかけるアダムとユート。
チラと視界に入れた時計は、既に12時半を指し示していた。

クラッド6 グルメエリア

簡単に言ってしまうえば、レストラン街である。

クラッド6もリゾートコロニーである以上、顧客のニーズに応える
為にこういった所が必要となってくる。

無論、先程のスポーツエリアにも、ちよつと距離はあるが、ちゃん
と食堂の様な所が完備されている。

・・・とはいえ、其処にあるメニューは、どれもジャンクフード等
といった物ばかりな為、ちゃんと空腹を満たすとすると、少し物足

りない。

そんな訳で、NT-X一行は、ここに昼食を摂りに来ていた。

「……………え？いつものカフェじゃダメなのかって？」

エミリア曰く、「せっかくの休みなのだし、クラッド6案内も兼ねているのだから、偶にはこういった所でゴハンを食べたい」だそう
な。

「……………でも、結局ファミレスなのね……………」

「リリイうつさい。良いじゃんファミレス。早々ハズレ無いんだし」

リリイのボヤキに、エミリアが返す。

驚くべき事に、この二人はあの短時間でお互いを名前で呼び合うくらいに仲良くなっていた。

何でも、ルームランナーの屈辱的な意味で、妙な友情を感じたらしい。

それで良いのか16歳、等と突っ込んではいけない。

因みにエミリア曰く、今度彼女の部屋に遊びに行くらしい。

そんな彼女達が今食べているのは、リリイが“コルトバスターキ定食”。

エミリアが“ラッピーの竜田揚げ定食”である。

聞いた瞬間に、NT-Xは常日頃からフリーミッションでボコボコにしているあの二匹の事を思い出し、なんとも微妙な気分になった。美味いらしいのだが……………なんだかなあという感じだった。

そんな彼が食べているのは“醤油ラーメン”。

まさかの定番品である。

しかも美味い。

「……………いい。何か色々、頭痛くなってきたから……………」

ガタツ「エミリア、頭痛いのか？大丈夫か？」

「あ……………大丈夫だから。別に病気とかじゃないから。だからユートは食器持ってグラタン食べながら立つんじゃないやありません……………」

「……………つーか座りなさい」

そう言いながら、エミリアは頭を抱えて俯く。
そんなエミリアを心配そうな目で見ながら、ユートも席に着いた。
因みにNT-Xが食べだしてから完食するまでに掛かった時間は、
僅か3分。

普通はエミリアの反応の方が正しいのだが……………

「ツッコミ役も大変ね……………あ、すみません！この“季節
のフルーツパフェ”って言うの、3つ下さ〜い！」

……………とまあ、今暢気に追加でデザートを頼んだリリイに至っては、
たったの7分で完食しているので、その事を良く知っているアダムは、
一切その事に突っ込んだりはしなかった。

因みにユートは『この二人はそういう人なんだ』と納得した為、
特に何も言わなかった。

「……………というか、リリイまだ食べるの？」

「え？まだ腹5分目だけど？」

「……………ねえ、アダム。この場合、私の方が間違ってるの？そこ

んところってどうなの?。」

「安心しろ。この場合はお前が一番正しい」

そう言いながらも、アダムは箒薙麦を嚼むのを止めない。

どうやら、とつくに色々と諦めていたらしい。

周囲にまともな味方が居ない事に改めて気付いたエミリアは、テーブルに突っ伏した。

「っていつか、今思ったんだけど・・・」

と、そのとき。フルーツパフェを食べながらリリイが不意に思い出したかのように呟いた。

それを聞いた彼女を除いた全員が、頭の上に“?”を浮かべる。

そして、次の瞬間彼女が口にした言葉によって、一気に“!”に変わった。

・・・ たった一体を除いて。

「NT・Xって、どっやってゴハン食べてるの？」

「あ！それあたしも思ってた！！」

「でしょでしょ？」

「は？お前らそれってどっいう……って、ああ、そっいう事か。確かに不思議だわな」

「？ 皆何言ってるんだ？NT・Xはふつうにゴハンを食べてた
る………あれ？“ふつう”に食べて………？……
……あれ？」

「………」

俄に騒がしくなるテーブルの上。

エミリアは以前から思っていたその疑問に、これ幸いと乗っかり、疑問を口にしたリイは仲間が居た事に、少なからずホツとしながらも、再度確認を取るかのように彼女に言葉を返す。

アダムは二人の言っていた事に一瞬疑問を持った後、次の瞬間問題の人物の顔を見て何かを納得し、ユートは一度彼女らの疑問に答えを返すも、直後に不可解な点に気が付いて悩みだした。

残っていたNT-Xは、未だに頭の上に“？”を浮かべたままだつたが。

と、そんな彼にエミリアはその疑問が何故出て来たのかを伝える為、口を開く。

「いや、アンタって、いつもご飯食べる時って、そのメット着けっ放しじゃん。口元のマスクすら取らないし。なのに、何でかご飯食べれてるから、どっという理屈なのかなってさ」

それを聞いた瞬間、NT-Xに電流のような衝撃が走った。

………ついに来たか………！

いつか言われるだろうと思っていた事がついに来てしまった事で、NT-Xは説明に困窮する。

………いや、最初は彼も、『食事の時にはこのメットとマスク邪魔だろう』と思い、取った事はあったのだ。

しかしいざ取ってみると、其処にあったのは剥き出しとなっている、物凄くメタリックな“人間の頭蓋骨”だったのだ。

しかも頭の部分にある隙間からは、脳みそがその顔をひょっこりと

覗かせているし、よりもよって、目の部分にはカメラアイから放たれる緑色の光が灯っており、中々にホラーである。

．．．．．こんなもん丸出しにして飯なんぞ食べるか！！見た目的にも、周囲の人の精神状態的にも！！

瞬間的にそう考えて、『メット着けっ放しても、何とかなるのでは？』と考えた彼は、その後試しに着けたまま食事してみたのだが．．．．．意外な事に、普通に食事が出来てしまった。

物理法則とか、色々と無視しすぎだろうと最初は自分の事ながら呆れてしまったのだが、以降は『まあ、食べれるなら別に如何でも良いか』と考えて、特に考えないようにしてきたのだが．．．．．

．．．．．よりもよって、今ここで来ますか．．．．．！？

もしも、もしもの話ではあるが、ここがこんな公共の場でなければ、彼もメットを外して事情を説明しただろう。

．．．．．ドン引きされる可能性MAXではあるが。

しかし、今ここはファミレスという、公共の場。

しかも、クラッド6のメインとも言えるリゾートエリアに近い事もあって、家族連れや恋人連れが比較的多い。

もし、こんな所でメットを外してそんな物を見せるとしよう。

一瞬で阿鼻叫喚の地獄絵図である。

子供は泣き出し、カップルは逃げ惑い、それなりに腕に自身のある者は武器を取り出して威嚇を始める事は、容易に想像できる。

．．．．．さあ、如何する？

上手い説明が見つからず、唸って“困っています”という事をアピ

ールするも、それで事態が進展する訳ではない。
その内彼は仕方無く……

「……………ワカラネ」

すっ呆ける事にした。

「ワカラネ」……って……自分の事なのに分かってなかったのか？」

「ハイ。トクニイママデ、ソシナコト、ダレカニ、シツモンサレタ、コト、アリマセン、デシタカラ」

アダムの問題に、淡々と答えるNT・X。
それを聞いて、今度はユートがこう質問してきた。

「なあなあ、そしたらNT・Xはどうやって食べてたんだ？さっきも、ふつうに食べてたろ？」

「ドウヤツテッテ……………」

そんな事言われても…………と、NT・Xは再び言葉に詰まる。
実際問題、他の皆と同じ様に食べてたのだから、説明のしようが無い。

と、其処に、

「カキ氷・ジャッゴシロップ掛けでございます」

という言葉と共に、店員が先程彼の頼んだデザートを持ってきた。それを見た瞬間、これ幸いとばかりにNT・Xは手を挙げてそれを受け取ると、スプーンを使って口に運んだ。

あ、と誰かが呟くと同時に、周囲の視線が彼の口元に集中する。

・・・なんか4人以上から見られている気がしたが、NT・Xは華麗にスルーする事にした。

・・・・・・食べ難いなあ・・・

が、流石の彼でも自身の口元に視線が向けられると、少し気恥ずかしさも感じた。

その事に内心苦笑しながらも、彼はスプーンの上の氷を口に含む。氷からは、ブルーハワイのような味がした。

・・・・・・？

同時に周囲からの視線に、ハッキリとした驚愕が感じられる。

何事かと周りを見渡すと、その場にいた全員が、驚愕の表情を浮かべていた。

・・・・・・何気に他の座席や店員の内の数名も此方を向いている。

と、次の瞬間。

『消えた————!!!!????』

「……? “キ”?’

『……』

「ナ、ナニガ（笑）、ダアアアアア！！！！！！ツテグオオオオオオオオオオオオ！！！！！！」

「んーと………こういう時、ドンマイって言った方がいいのか？」

………続かない。

番外編其の4とコラボと【何気ない機械人形の謎】（後書き）

グダグダになってきたのでここらで切ります。
続きません。

とりあえず読者の皆様に土下座して謝罪を。

こんだけ更新伸ばしておいて、こんなグダグダな話になってしまっ
て申し訳ございませんでした……

しかも前回あれだけ“ギャグとほのぼの”とか言ってた割にはあん
まり出来てないし……（汗）

特にオンドウル侍先生には、コラボ要請受けてからこれだけ遅くな
ってしまつた上に、アダムの影が薄くなつてしまつた事に関して、
本当に申し訳ございませんでした（超滝汗）

内心「怒られるかも」と震えております……

気を取り直して、少し解説入れますと、今回恐れ多くもコラボとし
て登場して頂きました“PSG”シリーズ主人公のアダムは、オリ
ジナルの方とは違い、

“もしも彼がPS世界に生きる普通の人として暮らしていたら”
という事をイメージして描写させて頂きました。

……私の実力が低すぎて、こんな事になってしまいました！
改めて先駆者の皆さんと自分の実力差が目に見えます……

オリキャラのリリィは、実はモデルがいます。

……とは言つても、友人のマイキャラなんですけれども……

聞いてみたら快くOKしてくれたので、今回出させていただきました。

・・・こんなに影薄くなるとは思っていませんでしたが。

と、いう訳で、次回は、ちゃんとお話進めます！！真面目に申し訳ありませんでした！！

買い物と社長との顔合わせと【襲撃】（前書き）

最新話です。

遅れてすみませんでした・・・

それでは本編をどうぞ。

買い物と社長との顔合わせと【襲撃】

「おっ買いつ物 おっ買いつ物 おっ買いつ物」

「フウー フウー フウー フウー」(ヤケクソ)

「……楽しそうだな、二人とも」

「……ああ、そうだなユート……俺のこの両手に大量の荷物が無ければな!!!!」

NT-Xのそんな心の叫びに気付かないまま、エミリアは次のお店に入って、物を物色していく。

それに続いて、ユートも店の中へと入っていく。その後姿を見ながら、NT-Xは荷物を抱えながら、決して浅くは無い溜息を吐いた。

さて、いきなり何がどうしてこんな事になっているのか分からない方も居ると思うので簡単にこれまでの経緯を説明しよう。

色々あったあの“クラッド6案内ツアー”から二日。

その日は珍しく依頼も無く、書類仕事も全て終わらせていたNT-Xとエミリア、そしてユートの3人は、朝っぱらからクラウチに呼び出され、事実上の休暇を言い渡されていた。

まあ、休暇、となってはいるが、一応依頼とかが舞い込んできた場合、そちらの対応をする事になっているので、“異常に長い休憩時間”といってしまった方が正しいといえる。

それは兎も角として、一気にやる事が無くなってしまった3人は、

一度NT-Xの部屋に集まって、今日の予定を一から組み直す事にした。

その際に、エミリアが未だに以前貰ったボーナス（という名のお小遣い）を使っていない事が発覚。

そのまま彼女の「それじゃ丁度良いから、ショッピングにいこう！」という鶴の一声で、あれよあれよといってる間に話はトントン拍子に進んでいき、その結果

「……………ハア」

この様にNT-Xだけが、“荷物持ち”という役目をやらされて、悲惨な状況になっているのだった。

因みに荷物の量は、もう既に必要最低限の物しか入れていない筈のナノトランサーに入り切らないほどの量になっている。

……………一体これだけの量をどうするつもりなんだろうか？

彼が、そう思って再び溜息を吐こうとした、その時だった。

「おまたせー！！いやー良い買い物できたわー！！」

「…………エミリア。このリストバンドって、どう使うんだ？手首に嵌めるのは分かるんだけど……………」

そう言いながら、エミリアとユートが店から出てきた。

「……何故かエミリアは、全長30cmくらいの“カクワネ”の縫い包みを持っていたが。

それを見た瞬間、NT-Xの顔が強張る。

「……また荷物増えるの!? 勘弁してよ!

口には出さずに、心の中でそう叫ぶ。

事実彼の手を抱えられている荷物の量は、積み重ね上げられ過ぎて、もう人一人分くらいの高さとなっている。

「……この場合、それでもバランスを一切崩さずに抱えてられる彼が凄いのか、それともそんな彼を一切気にせずに買い物を続けるエミリアが凄いのか……」

そんな事を気にせずに、エミリアはNT-Xの目の前に、その縫い包みを差し出して、こう言った。

「これ、あなたにあげる!!! いつもお世話になっちゃってるしね!

「……ハ?」

いわれた事が一瞬理解できずに固まるNT-X。

そして2、3拍ほど間を空けてからゆっくりと言葉の意味を理解しながら、

「……アー……アリガト、ウ?」

と、言葉を発する事に成功した。

それを聞いたエミリアは笑顔のまま「どういたしまして!」と言っ

て、カクワネの縫い包みをNT-Xの腕の開いている隙間に押し込むと、未だリストバンドの使い方が解らず四苦八苦しているユートの方へと向かっていった。

「・・・・・・・・・・」

目を、縫い包みの方へと移す。

つぶらな瞳と目があった。

サッと目線をエミリア達の方へと逸らす。

・・・・・・・・・・あれ？何で俺縫い包みに気圧されてんの？

そんなあほな事を考えている内に、エミリアとユートが、リストバンドの説明を終えたのか此方へと向かってくる。

そんな彼らを見て、NT-Xは思い切って、こんな事を聞いてみる事にした。

「・・・・・・・・アノ、エミリア」

「ん？なにー？」

「・・・アト、ナンカシヨ、ミルノ？」

「あ、もうポータス殆ど残ってないから、そろそろ帰るわよ？荷物、ありがとね」

それを聞いた瞬間、NT-Xの身体に歓喜が電気信号のように駆け巡った。

やっとこの大量の荷物から開放される。

そんな言葉が、彼の頭の中で大量に乱舞した。

「・・・NT-X、大丈夫か？なんか、足が震えてるぞ？」

「ダイジョウブ。トクニモンダイ、ナイ」

「・・・喜びすぎて、体が震えてしまったが。」

何は兎も角、これでNT-Xにとって半ば何かの修行の様になっていたシヨッピングも終わりである。

後は、自室に戻ってからゆっくりするだけ・・・

「あ、NT-X。後でその荷物配るの手伝ってよ。大丈夫！あたし達なら直ぐに終わらせられるから！」

「・・・とはいかないようだ。」

と、此処で今の彼女の言葉に疑問を持ったのが、ユートがエミリアに問い掛けた。

「？ 配るって、これ、全部誰かにあげるのか？」

「そう！一応今までお世話になった人達に、お中元みたいな感じだね。えーと、これがチェルシーで、これがトニオ、リイナにはこれでアダムにはこっちの漫画のセットで、それから」

そついいながら、エミリアは積んであった荷物をそれぞれ誰に渡す物なのか説明していく。

無論、それを抱えているNT-Xの事は御構い無しで。

・・・・・・・・・・何時になったら帰れるのかなー・・・・・・・・・・

いまだに続くエミリアの荷物を誰にあげるのかという説明を聞きながら、NT-Xはぼんやりとそんな事を思ったのだそつな。

それから約2時間後

クラッド6メインエントランス カフェ

「アア・・・・・・・・ツカレタ・・・・・・・・」

「お疲れー。いやーマジで助かったわー。ユートも手伝ってくれてありがとね」

「おうー！」

プレゼントという名の荷物を全て・・・・・・・・いや、厳密には一つだ

け、エミリアが「恥ずかしいから」という理由で個人的に渡しに行つて、結局肝心の渡す人物が珍しく席を空けていた為渡せなかった一個、以外の物を全て渡し終わった後、3人は遅い昼食を取る為にカフェへと足を運んでいた。

あのとんでもない量の荷物を長時間（とは言っても2、3時間程度だが）持っていたNT-Xは、意外と負荷が掛かってしまった脚部関節をメンテしながらサンドイッチを頬張り、エミリアも彼と同じ物を頼んで、今はもう食べ終わっている。

因みにユートはプリンを10個くらい頼んで今最後の一個に手を伸ばしたところだ。

・・・昼食にプリンという異様なチョイスに、エミリアとNT-Xが眼を丸くしたのはご愛嬌である。

「・・・・・・・・ところで・・・」

と、ここで件の少年が最後の一掬いを口に運ぼうとしたところで中断し、エミリアにこう問いかけた。

「結局、その小さいのは、誰にあげるつもりだったんだ？」

そう言いながら、彼はエミリアが持っている、少しだけ彼女の掌に納まり切らないくらいのも、若干他より高級感漂うその箱を指さした。

「うえ？あ、えっと、これは、そのー（ゴニョゴニョ）」

聞かれた瞬間に、彼女は答えを返そうとして、恥ずかしいのか肝心な部分を言い淀む。

そんな彼女の様子を見て、その微笑まじさに内心で若干苦笑を漏らしたNT-Xは、少し助け舟でも出してあげようとして、声を出さうとした。

その瞬間、だった。

ビー！ビー！ビー！

突然の、警報。

瞬間NT-Xは意識を切り替える。

9割方終わっていた脚部のメンテもそこに、直ぐに左腕にレオルライザーを展開。

シールドモードに変形させた後に右手をガトリングに可変させ、カフェの出口まで向かっていく。

それから数瞬遅れて、エミリアとユートも直ぐに戦闘準備をして、彼に続く。

……ただし、エミリアは少々気が動転してしまっていたのか、その左手にあの大事な小箱を抱えたままだった。

『リトルウイング全社員に連絡。非常事態発生デス！クラッド6メ
インエントランス、リトルウイング管轄区画に、武装集団が進入し
まシタ！』

そんなチエルシーによるアナウンスが聞こえてくると、NT-X
がカフェの入り口から出て、エントランスのど真ん中で密集隊形に
なって武器を構えている一団を視認するのは、ほぼ同時だった。

瞬間的にNT-Xはレオルライザーをウィップモードに変形させ、
背面ブースターを前回にして一気にその集団の中央まで突っ込む。

一番カフェに近い所で構えていた数名が此方に気付くが、時既に遅
く、哀れ彼らは呻き声一つ上げる事すら許されず、青い砲弾もどき
に跳ね飛ばされ、意識を刈り取られた。

他の連中が、仲間が跳ね飛ばされた事に気付き、慌てて武器を彼に
向けようとするが、

ブオオオオオオオン！！！！

という、フォトンで構成されたウィップが上げる独特な音と共に、
手の中を武器を全て弾き飛ばされ、もしくは破壊されて呆然とする。

無論、そんな間抜けな襲撃者イケニエを、彼が見逃す筈バケモノは無い。
NT-Xはレオルライザーをウィップモードからシールドモードへと戻すと、

「フン又オアア!!!」

という叫び声と共に、どこぞの青いスーツと青いメットを着て、中央に星のマークの付いた丸い盾を持った、自由の国のヒーローよろしくそれをブン投げた。

ズガガゴズガゴズガガゴゴ!!!!!!!

投擲されたレオルライザーは、回転しながら面白いように襲撃者達を昏倒していく。

そしてNT-Xが戻ってきたそれをタイミング良く手に戻した時には、彼の周囲に立っているのは彼やエミリア達を除いて、誰一人としていなかった。

.....終わった、かな？

否、まだ油断は出来ない。

そう考えて、彼は頭を振った。

こつという襲撃の場合、これで終わり、と見せ掛けておいて、第2、第3のグループが居たりする物なのだ。

シューイイイイン.....

.....ほら、こんな風に。

溜息を吐きながら、バックステップでNT-Xはエミリア達の許へと戻った。

同時に、再び武器を持った一団が、エントランスへと転送されてくる。

そこまで来て、NT-Xは襲撃者の一団が以前カーシュ族の村を襲撃した連中と同じ様に自身を喪失しているような状態になっている事に気が付いた。

同時に、その一団の持つ武器の中の、射撃武器の銃口の先が、9割方エミリアに向いている、という事も。

確認を取るように、エミリアの近くに浮いていたミカに確認を取るように視線を向ける。

……因みに描写されてはいなかったが、ショッピング中は彼女も結構楽しんでいたらしい。

エミリアがしょっちゅう周囲の客に気取られないように彼女に話しかけていたのは、傍から見ると結構シユールな画だった。

因みに彼女が最も食いついていたのは、食料品売り場のお惣菜とか、スイーツ等。

他にも珍しい食材とか、特価品とか。

特にモヤシのようなのがパック1個モノメイトの10分の1程度の値段で売っていたのを見た際には、言葉にならない位に衝撃を受けていたようだった。

あと、本屋の前を偶々通り掛った時に、『お母さん倶楽部』と『奥さんの友：夫と墓の下までも仲良く暮らす為には』なる雑誌を見つめて5分間程動かなくなったりもしていた。

閑話休題

NT-Xの視線に気付いたのか、ミカが彼の方を向き、軽く首肯す

る。

どうやらビンゴらしい。

つまりは、あの中二病末期患者の刺客嫌がらせという事。

何処までも期待通りの結果に呆れて彼は溜息を吐いた。

だが、それを隙と見たのかどうかは解らないが、その瞬間、相手は一斉に彼らに向かって銃弾を放つ。

ドキュウンドキュウン！！バラバラバラバラ！！ズドオンズドオン！！

「キヤアツ！！」「うわっ！！」

NT-Xのやや後ろに居た二人が、その弾幕に驚いて声を上げる。が、同時に身体を動かして弾幕を避けつつ、エミリアはゾンデで。ユートはロングボウから矢を射って反撃している事から、実際の所、そこまで驚いている訳では無さそうだ。

むしろ驚いたのは、襲撃者達の方だろう。

なんせ、自分達の攻撃に驚いて叫んだと思ったら、次の瞬間には容赦一切無しで自分達に攻撃を浴びせているのだから。

実際問題、既に二人の攻撃によって、半分くらいは戦闘不能になっている。

残った半分が、手分けして二人を倒そうとするが……

「チエイ」

というかなり気の抜けた声と共に、次の瞬間全員天井付近まで吹っ飛ばされた。

無論やったのはNT-Xである。

その両手は、超巨大な冷凍マグロによって塞がっている事から、たぶんそれで吹っ飛ばしたのだろう。

……あまりにも間抜けな絵面ではあるが。

かくして、いきなり襲撃してきた（おそらく標的がエミリアである）不審な集団は、全て鎮圧される事となった。

アナウンスが流れてから、実に8分足らずの出来事であった。

「ま、こんなもんでしょ。おつかれー」

「オツカレー」

「？ “オツカレー”？何だそれ？カレーの一種か？」

「……え？ユート……それ、マジで言ってる？」

襲撃者の増援があるかどうか警戒しながら、三人はリトルウィングのオフィスの前に武器を持ったまま集まった。

三人とも息を乱してすらいない。

どこるかエミリアに至っては、もう気を抜いて武器を構えてすらいない。

3分後

「……なあ。もう、来ないんじゃないか？」

「……ソウッポイ」

「……ねえ、そろそろカフェに戻らない？よく考えてみたら、ア
ンタまだお昼全部食べてないじゃない。ユートはプリン後一口残し
たまんまでしょ？」

「……ア」

「ああ！そうだった！！NT-X、もう戻っても良いよな？」

「……ウン。モウ、ナイッポイカラ、モドッテモ、イイヨ」

「わかった！！何かあったら直ぐに呼んでくれ！！エミリア、行こ
う！！」

そう言いながら、ユートはエミリアの手を取って、カフェまで一直
線に走っていく。

「え！？ちょちょ、ちょっと待って！！NT-X、助け……
って、キャアアアアア！！」

「……とんでもない勢いで。

その勢いたるや、どこぞの漫画の如く砂埃を上げながら、まるで『
ピュー！』という効果音でも聞こえそうだった。

「……って、というか、エミリアが走る勢いだけで、凄いス

5分後（襲撃者達はシツカリと他の社員が荒縄でグルグル巻きにしてあります）

「・・・さて、壁の補修も終わった事だし、改めて自己紹介させてもらうわね。ウルスラ・ローラン。服飾デザイナー兼・・・」

そう言いながら彼女　ウルスラは、リトルウイングのオフィスに目を向けて、続けてこう言った。

「・・・あそこ、リトルウイングの最高責任者・・・まあ、簡単に言うと、“社長”ね。ついでに言うと、此处、クラブ6の“艦長”も“スカイクラッド社”から任されているわ」

最後の一つは、私も余計だと思っけどね、と、言うてから、彼女は軽く笑った。

そんな軽い仕草すら色っぽく見えるくらいの美人さんである。

見た所、20代後半から30代前半と推測できるが、その肌には微小な小皺一つ無い。

と、そこまで考えた所で、NT-Xは自身がまだ名乗ってすらいな
い事に気付き、慌てて頭を下げた。

「リトル、ウイング、ショゾクノ、ネティクスNT-Xデス。ジコ、ショウカ
イガ、オクレテ、シツレイ、シマシタ。ソレト、アトシマツ、ヨ、
テツダツテ、イタダキ、アリガトウ、ゴザイマシタ」

そういうと、ウルスラは苦笑しながら彼にこう告げる。

「そこまで堅くならなくっても大丈夫よ。実際、壁の修理は殆どあ
なたが終わらせたような物じゃない。……まあ、いきなり腹
から工具箱を出してきたのには驚いたけど」

「ナガシテクレル、ト、ウレシイデス」

「分かったわ……ちょっとだけ、腑に落ちないけど」

そう言いながら、少しジト目になって彼女はNT-Xを睨む。

そんなウルスラに対して、NT-Xは斜め上の空間を見つめながら、
「ピューピュー」と、口笛を失敗したような音を出していた。

……まかり間違っても、一社員が自分の会社の社長にするような
態度ではない。

だが、突っ込んではいけない。

何せそんな事を言い始めたら、クラウチに対するエミリアの態度と
か、それ以外にも色々とそれに付随する問題が沸き上がってきて、
飽和してしまう。

「……これだけ見ると、意外とこの会社、上下関係が確りして
ないのかもしれない。」

と、その時だった。

シューイイーン……

「……あ……やっと終わったぜえ……まったくワレリーの
野郎……何が“利子があっても高すぎねえ!?”だ、まったく……
……つてえ、何があつたあ!?”」

という、愚痴と困惑に満ちた叫び声が、背後から聞こえてきた。

振り返って見ると、そこには珍しくゲツソリとした表情のクラウチ
が、オフィスの入り口近くに纏めて縛られて転がされていた襲撃者
達を見て、驚いているのが見えた。

「……愚痴の内容からすると、以前“金を貸している”という名
目で自分達に探しに行かせた、あの“ワレリー・ココフ”との間で、
何か一悶着あつたのだろう。」

そんな彼を見たNT-Xはこれ幸い、というかのように、手元にあ
つた小箱だった物を持って、彼に先程あつた事を報告しようとしに
行こうとした。

「ア、クラウチサン。チョット……」

周囲に気付く事無く、ウルスラはクラウチに対する尋問（？）を続けていく。

「で？今まで何処に居やがったのかしら？今更ノコノコと出てきて」

「い、いや、まで。俺は俺でちゃんと仕事してたぞ？具体的には依頼人からの苦情整理とか、依頼の受付とか、報酬に関する問い合わせの整理とか」

「……………ワレリーのやつに、お金貸してたそうねえ？」

「いや、確かに貸したがよ、それとこれとは話が「さっきまで、それに対する対応してたのよね？具体的には、今日それしか仕事してないんじゃないの」！！何故それを……………つて、あ」

しまった、とでも言わんばかりにクラウチが表情を間抜けな物にする。

それを見た瞬間、ウルスラは笑みを一層深くして

「……結局、あんまり仕事してないじゃないの!!!!!!」

ズガゴオ!!!!!!

「ぺんぢゅらむんっ!!!!!!???」

物凄い勢いで、クラウチのレバーにブローを繰り出しつつ、上空まで力チ上げた。

クラウチは綺麗な放物線を描きながら天井近くまで飛んで行き

ドサッ

という音を立てて、床に沈んだ。

「又……グ……ゴオ……」

訂正、まだ意識は失ってはいなかった。
ただ、今にも飛びそうである。

「まったく……給料分くらいはまともに働きなさい」

……いえ、ウルスラさん。意外とその人、普段から真面目に仕事してますよ? そう見えないだけであって。

……等といえる訳も無く、NT-Xはただただ殴り飛ばされたクラウチに無言で合掌した。

そんな彼に、ウルスラは先の幽鬼のような表情から一変して普段の

状態に戻り、こつ問いかける。

「そういえば、あなたさっきコイツに用がありそうな雰囲気だったけど……」

そう言われて、NT-Xは、自身の目的を思い出した。ちよつと恐怖で飛んではいたが。

「ア、ハイ」

そう言いながら、クラウチの前まで歩いていき

「クラウチサン」

「グ……な、なんだ……?」

「エミリアから、プレゼントです」

その手にあった、彼女からの贈り物と思われる小箱を、その手に渡した。

「……………おい、なんで真つ二つになってんだ？中身無事なんだろうな？コレ」

「……………カクニン、オネガイシマス」

「おい！」

手渡した物がモノだったので、締まらなかったが。

「……………まあ、チェーンが真つ二つになっただけで、メインの飾りは無事だから……直しゃ使えるだろ」

「……………(ホッ)」

恐る恐るプレゼントの中身を検めて見ると、今クラウチが言った通り、チェーン部分以外は何とか原形を留めてくれていた。どうやらペンダントのようだ。

「あら、綺麗なペンダント。クラウチに似合ったら奇跡ね」

「オイコラテメエウルスラ。喧嘩売ってんのか。喜んで買ってやるぞ？」

「フタリトモ、ココデアバレ、ヨウトシナイデ、クダサイ」

今にも武器を手に持って暴れだそうとする二人を宥めつつ、NT-

Xはチェーンの部分を何とかしようと、工具箱を取り出して調べ始める。

「……ふーん・複数の金具を組み合わせてる一般的なタイプか……各パーツに切れ目が入ってるから、断面の奴を取り外してから、その隣の奴を切れ目から開いて、それでもう一回繋げるか……」

「……とりあえず、この箱はもう捨てて良いか？」

と、そこでクラウチが、手に持った箱をチラつかせる。

「ア、モウイイデスヨ」

実際問題、ブツは今此处で自身が持っているので、箱自体は別段捨てても問題は無い。

そう考えたNT-Xは至って普通にGOサインを出した。

それを聞いて、クラウチは手近なゴミ箱まで、それを捨てに行こうとする。

その時だった。

シューイイーン

という音と共に、エミリアとユートがカフェから出てきた。

同時にエミリアの目が一杯に開かれる。

その視線の先にあるのは……箱を持ってゴミ箱まで向かおうとしていたクラウチと、工具箱を腹から出してチェーンを修理しているNT-X。

.....あ、マズイ。絶対なんか誤解してる。

そう、NT-Xが思ったの持つ束の間。

「.....バ.....」

「.....バ？」

「……………なあ、ウルスラ。今回、俺なんか悪い事したか？」

「……………少なくとも、今のプレゼントの一軒に関しては、何もしてないわね……………あ、襲撃に関するレポート纏めて、明日までに私に提出しといて。管理体制の見直しも視野に入れとかないと……………」

「……………へ？襲撃？もしかしてこいつらが、か？」

「……………一応仕事していて事態を把握できてないあなたでも、こいつらを尋問するなりなんなりして情報を引き出す事くらい出来るでしょう。寧ろ得意よね？昔やってたんだし」

「……………チツ……………わあつたよ……………だが、今は新しくウチに来た依頼の事で、手が一杯だから……………出来れば、尋問の時間も考慮して明後日まで伸ばしてくれないか」

「うーん……………まあ、それくらいなら許容範囲内ね。分かったわ。そしたら私は当分社長室の方に居るから、何かあったら呼んで頂戴」

「了解だ……………他にはなんかあるか？」

「……………それじゃ、彼らにもレポート纏めて提出するように言って」

おいて。特にあの子には、序に始末書の制作も言い渡しておいて」

「ああ、分かった……って待て。始末書？一体何やったんだ？アイツ？」

「えー……っと……まあ簡単に言うなら……“不可抗力による壁の破壊”、かしら？」

「……いや、本当にあいつ何やったんだ？」

三人が去った後、二人はこんな会話を交わしたそうなの。

買い物と社長との顔合わせと【襲撃】（後書き）

如何でしたでしょうか？
どうも雑炊です。

とりあえず何故こんなに遅れたかというところ、実はこの話を書く前に先にアルテラ戦を書いてしまっていて、書き終わった後でこころ辺の話が無い事に気が付き、急いで書き上げましたが・・・結果がこんな感じですよ。

まあ、現実問題文化祭や校外見学や日本語検定の勉強等で忙しかったのも理由の一つではあるのですが。

で、今回はちょっと原作と改変してみました・・・如何でしたでしょうか？

特にオンドウル侍先生には、再び頭を下げなければ・・・またチラツとだけ、アダムさんの名前使っちゃったし・・・

で、あとはウルスラさんが初登場。

まあ、見せ場殆ど無しで終わってしまいましたか・・・ごめんなさい。

そして襲撃者連中乙。

因みに本作のエミリアは意外と強いです。

まあ、ゲーム自体でも、レベル等は主人公と同じなので・・・これ位強くて良いかな、と。
ユートも同じ感じですよ。

そして次回は、あの子が登場します。

・・・ただ、今回の話の影響もあるので、少し書き直すため、またちよつと遅れるかもしれません（汗

それでも、今月中には4章終わらせようとは思っています。

（ただなあ・・・中間テストがなあ・・・レポートがなあ・・・）

それではまた次回。

不安な知らせとぶち抜かれるシャッターと【不機嫌オーラ全開少女】（前書き）

中間テスト終了!!!

と、言うことで最新話投稿しました。

……って、もう12月もド頭ですね……遅れてしまいました
みません。

それでは本編をどうぞ

不安な知らせとぶち抜かれるシャッターと【不機嫌オーラ全開少女】

「……我ながら悪趣味な」

吐き捨てるようにソレは呟いた。

その周囲に広がるは、まさに地獄絵図。

白髪に近い銀髪で、中二病末期患者のような黒い服を着た青年の物言わぬ骸が転がっていた。

しかもその数はたった一つではない。

それこそ、秋の森や山の中に落ちている枯葉の如く、何百、何千、何万と地面に転がっており、酷い所はもう山と化していたり、その山と山が繋がって山脈の様になっていたりと、とにかく膨大な数の骸がそこには存在していた。

553

しかし、奇妙な事にその骸は全て同じ格好で同じ顔である。

比喩でもなんでもなく、一寸たりとも変わっている所が見られない。

ソレはそんな奇妙な光景を最後にぐるっと見渡した後に、こう呟いた。

「……シミュレータ。ケース35742314987終了」

次の瞬間、ソレが居た空間に突如輝が入ったかと思うと、すぐさま空色の欠片になって、空間が散っていった。

それは一種幻想的な風景でもあり・・・同時に、まるで世界が終わっていくかのような恐怖と、若干の物寂しさが感じられる光景でもあった。

その光景を、ソレは一切の感情を込めずにただ見つめ続ける。

暫らくすると、周囲の空間はつい先程までの地獄絵図から、元の六角形のパネルが幾つも組み合わせられて出来た地面の、一種幻想的にも言えるホールに戻った。

「・・・・・・・・ハア・・・」

それを見ながら、ソレはらしくも無く溜息を吐いた。
理由は簡単。

要は、模擬戦の内容がマンネリになってきてしまったのだ。

先程はそのストレス解消も兼ねて、少し前にとある個体から送られてきたデータの中で、その個体が最も梃子摺った存在のデータを使って、自分一人対そのデータの対象×1000という状況下での戦闘をおこなっていた。

・・・・・・・・が、何の事は無い。

確かに相手はかなりの力を持っていたが、元々の素体自体が人間となんら変わらなかったため、特に苦戦する事も無く戦闘が終了してしまっただ。

その事が更にソレのストレスを増長させる。

そのうちソレは「このまま何もしていないよりは幾分マシ」と考えて、ソレはデータベースにもっと使えそうなデータが無いか、メインコンピュータにアクセスする事にした。

無論、未だに更新の連絡は入ってきていない為、データベースの中

身の全ては過去に一度以上閲覧した物である。

・・・・・・・・・・・・・・・・やはり、無い、か。

探し始めてからどれくらい経ったのだろうか？

時間という概念が既に限りなく磨耗しているソレにとっては、特に気にする事ではないが、それでもかなりの時間が経っていると感じられるほどの時間、ソレはデータベースの中を探し続けていた。

そして最後の一つを閲覧すると同時に、ソレは落胆と共に深い溜息を吐いた。

暇潰しができるような物は、何一つ見つからなかった。

「・・・・・・・・・・」

そのうちソレは、もう色々諦めて寝る事にした。

新たな端末を作って、データの回収に行かせようとも思ったが、今の所新しい“世界”は見つかってはいないし、模擬戦をやるうにも興が乗らない。

サンプルを使つて実験でもしてみようとも考えたが、それは後々の後始末が面倒臭いので却下。

・・・・・・・・やる事が、無い。

データの整理は勝手に行なわれるし、自身の体のメンテナンスも、ちよつと前に終わらせている。

本格的にやる事が無かった。

ピピピピピピピピピピピピピピピピ

と、そんな時である。

リズムミカルな音と共に、メインコンピュータがソレが待ちわびて止まないその音を発した。瞬間的にソレはまどろみ掛けた意識を覚醒させ、メインコンピュータへとアクセスする。

送られてきた情報は………新たな模擬戦に使えるような、戦闘データ。

彼が今の所最も楽しみにしている物であった。

………!!

直ぐにシミュレータを起動させて、そのデータを組み込み、同時に今まで使用したデータの中から選りすぐった物を入力する。程無くして、模擬戦は始まった。

人、機械、獣、虫、化物………ありとあらゆる存在が、一斉にソレに向かって襲い掛かっていく。

その光景を見ながら、ソレは内心で満面の笑みを浮かべていた。

………ただし、かなり凄絶な物を。

「………今度は楽しめそうだ」

襲い掛かってきた大軍の中で一番最初に自身の間合いに入ってきた、4脚の機械を切り捨てながら、ソレはポツリとそう呟いた。

先程まで自身の心の中に溜まっていたストレスがどんどん消えていくような感覚を、ソレは感じた。

・・・・・・凄いなあ・・・

一方所変わって、此方はグラールは“ニューデイズ”のサグラキ保護区を突き進んでいるNT-X一行。

周囲にはコレでもかと言うほどにデカイ、桜の木　　ならぬサグラキが所狭しと生えている。

しかも花満開。

道には花弁が舞い踊り、それらは木々の枝と枝の間から差し込む木

・・・後ろには良い感じに地獄絵図が広がっているのだろうが、その事を指摘するような強者は、今此処にはいなかった。

さて、此処で彼らが何故此処に居るかの説明をせねばなるまい。と、いうのもそもその原因は、皆さんお馴染み・・・というわけではないが、あのインヘルト社が、此処、“ニューデイズ”にある“グール教団”所有の実験施設に程近い所で、亜空間発生実験をする事が決定したのだ。

で、無論その為の警備依頼というのも様々な所に打診されており、その中の一つにリトルウィングがあった。

前回の話の最後で、クラウチが会話の中に出した“新しくウチに来た依頼”というのがこれだ。

で、何故このメンバーでこの依頼に当たる事になったかということ、理由は一つ。

“四人以外に暇な奴が珍しく居ない”

・・・要は、『暇なら働け』という事である。

実際、四人は実験日、タイミングバッチリで暇だったのでアツサリとこの依頼を受けることになった。

・・・若干名、「せっかく休みだったのに」、と文句を垂れる少女とPMが居たが。

まあ、仕事なんだからしょうがないというNT-Xの説得もあり、結局素直について来たが。

で、肝心の実験当日である。

巨大な鏝のような装置がニューデイズの上空遙かで傘を開く。同時に八つの支点を元にして、青い輪郭が空に展開された。亜空間実験の要である、“ゲート”の形成である。

当初はその派手な見た目に皆一時的ではあるが眼を奪われていた。が、突如騒がしくなるインヘルト社から来た実験担当者達。

不審に思ったNT-Xが軽く問い質してみると、どうやら実験開始と同時に周辺の原生生物達が突如として凶暴化し出したとの事。

そして、それを聞いた瞬間に鳴り響くコール音。

案の定相手はクラウチで、彼曰く、「グラール教団の研究施設に原生生物が進入。その結果、そこに置いてあった実験装置がかなりヤバイから、今すぐ対応しろ」との事。

現状一番動けて、同時に近い位置にいるのは、リトルウィングから来させられていたNT-X達だけらしい。

珍しく彼が焦っている事から、状況はかなり切迫していると考えたNT-Xは二つ返事でそれを了承すると、エミリア達への説明も程々に、実験施設目指して一気に駆けて行く。

で、その結果冒頭のような状況となっているのであった。

暫らく走っていると、分かれ道に出た。

ただ、片方の道はドアで区切りがしてあったが。

……さて、どちらに進もうか？

NT-X個人としては、明らかに怪しい、人の手が加えられている

事がバレバレのドアのある方よりも、反対側の特に手を加えられていない方を歩きたい。
のだが……………

「ねえ！こっちの方が近道っばいよ？」

とって、エミリアがドアの近くまで行ってしまった。

……………いや、ちょっと待ってよ……………

口には出さず、頭を抱えて表現するも、彼女には伝わらなかったようだ。

見れば反対の道には、ユートが立っている。

「ん……………？なんか、こっちの方が近道な気がするぞ……………」

「エミリア、ユートノホウ、イクヨ」

「何でよ！？」

……………いや、多数決的な意味で、ね……………？あと、こ
ういう時って動物的感に頼る方が実は確実なんだよ……………

「デ、ジジツ、チカミチダッタ、ト」

「ユート君、凄いです！！エミリアさん、ダメダメです！！」

「おー！ベル、ありがとう！」

「いや、さり気無くあたしを貶めてる所に誰か突っ込んでよ！？」

そう言われても、事実エミリアが選んでいた道を行くと、閉じ込められた上に原生生物が大量投入という鬼畜の所業甚だしい罠が仕掛けられていたのだから、フォローのしようがない。

エミリア、乙。

で。

「……………トリアエズ、コノ、バカデカイ、オヤシキ、ツポイノガ、グラール、キョウダン、ノ、ケンキュウシセツ……………ト」

「うん。そうなんだけど……………なんか、思ってたよりも大き過ぎない？」

「……………入り口って、何処にあるんだ？どっちを見ても、壁しかないぞ？」

やっとこさ研究施設に着いてみれば、そこにあっただのはかなり巨大な神社の如き巨大施設。

“教団”、と名乗っているだけあるから、それなりに宗教っぽいデザインをしているんだろうな、と思っていたNT-Xも、これには面食らってしまった。

・・・まあ、聞いた話によると、巨大な原生生物の研究や、そういったのが暴れだした時の為に、大型の戦闘兵器も幾つか配備されている、という事だから、むしろこれ位大きい方が普通なのかもしれないが。

「・・・ベル。チズ」

「あ、はい。ちょっと待ってて下さいね。・・・え」と・・・」

とりあえずこのまま呆けていてもマズイ。

そう考えたNT-Xは、ベルに予め渡しておいたマップデータで入り口を探すように指示を出す。

マップデータを広げたベルは、少しの間マップと睨めっこをしていたが、やがて目的の場所を見つけたのか、喜色満面の笑みでNT-Xに報告した。

「あ、ありましたよ！丁度、此処から向こうの方へ歩いてった所に、資材搬入口があります！」

ほら、あっち！と言ってベルが指差した方向に顔を向けるNT-X達3人。

その眼に飛び込んで来たのは

大体、500 600mくらい離れた所にポツンと見える、小さなシャッターと、そこまで果てしなく続く壁と換気口だった。

「……………つて、遠っ！！」

思わずエミリアが叫ぶ。
確かに遠い。

全力で走っていけば、それなりに早く着けるかもしれないが、生身であるエミリアとユートでは、辿り着いた時にはもうバテテそうだ。つか、そもそもこんな状況では、“電源が入ってないから開きません”なんて戯けた自体もありそうである。

試しにNT-Xが他に無いのかとベルに聞くと、彼女は困った顔になりながら、「残っているのは正面玄関と、反対側のほうにある非常口だけです……」との事。

聞いた瞬間にエミリアとNT-Xは、この施設の構造をデザインした人間を殴り殺してやりたくなったが、それをなんとか鋼の精神で

呑み込み、直ぐに意識を“あそこを利用する以外に中に入る方法を考える事に切り替える。

……が、何も思い浮かばない。

結局、「早く行かないと、中がめちゃくちゃになっちゃうんじゃないか？」という言葉により、二人は諦めて資材搬入口から入ることを選択した。

「で、辿り着いたけど……やっぱり、電気は通ってないか……と、なるとやっぱり……」

「……壊す、しかないですよねえ……たぶん非常時という事ですから、原生生物が壊した、という事にはできるとおもいます」

「……？壊すと、何か困る事でもあるのか？」

「……あ……えつと……まあ、会社の信用の問題っていうかなんて言うか……ベル、パス!!!」

「え？え？えええ！？」

そんな漫才を横目に、NT-Xは淡々と資材搬入口に下りているシヤッターを調べ続けていた。

電源は先程エミリアが言った通りに、通電していない。

ギョオオオーン!!!

砲門から閃光が迸り、ビームが放たれる。そのまま直進していったビームの奔流は、シャッターに直撃した。直撃の瞬間、その衝撃で周囲を白っぽい煙が満たす。ただ、熱は一切関知できなかったので、どうやら地面の土埃が巻き上げられただけのようだ。

.....これなら.....!!?

NT-Xがそう思ったのも束の間。

周囲に充満した煙が晴れた時、其処にあったのは直撃部分が赤熱化しているとはいえ、未だに形を残したままのシャッターだった。

「うええ!? 何よこのシャッター!? 今のに耐えられるとか、一体どんな材質使ってるのよ!？」

信じられぬ光景に、思わずエミリアが叫ぶ。

ユートとベルも、彼女ほどではないが、かなり驚いているようで、目を見開いてポカンと口を開けている。

しかし、NT-Xはそんな三人の状況なぞ知ったこっちゃ無いとでもいう風に、既に次の動作に移っていた。

レオルライザーをしまい、右手の全エネルギーバイパスを開放。次に右腕を腰溜めに構えながら、後ろへと持ってくる。

『システム、起動。エクストリームサーバー、アクセス。動力、エターナルサイクラーVer?、再起動開始。アークジェネレーター、出力30%まで上昇。エネルギーバイパス、右腕部直結。ナノトラ

ンサー、データ一時変更』

突然、そんな音声アナウンスが頭の中で響き渡る。彼がこれを聞くのは、実に二回目の事だ。

「サンニントモ、デキルダケ、サガツテロ!!!ドナルカ、ワカ
ツタモン、ジャナイゾ!!!」

咄嗟にエミリア達に向かつてこう警告の声を上げるNT-X。
そりゃあそうだろう。何せ前は“レオル・バディア”に止めを刺
すだけだったし、そもそも此処まで近い距離にエミリア、トニオ、
そしてリイナは居なかったのだから。

しかし、今回はあの時とは違って、三人が対象の上、では無く真横
に居るのだ。

もし、衝撃が其処までの物ではなかったとしても、ぶっ壊せた時の
破片が三人を襲う可能性が高い。

シールドラインの恩恵で其処までのダメージを受けないとは思うが、
用心に越した事は無い。

『片眼^{ハール}の英雄を使用しますか? Y/N』

視界にそんな文字が浮かび上がる。

それを見た瞬間、NT-Xは叫ぶように選択した。

「イエス、ダ!!!」

そう言った瞬間、彼の右腕はあの時の巨大な杭打ち機 “片
眼^{ハール}の英雄”へと変貌を遂げた。

NT-Xはそのまま叩きつける様に固定アームをシャッターへと設
置。

横目で三人がキッチンと避難しているかどうかチェックする。
どうやら三人とも離れてくれた様……

「NT-X!!その腕一体なんだ!?すごく大きいな!!」

……訂正。馬鹿が一名直ぐ真横に居た。

よく見るとベルとエミリアが離れた所から彼に対して何か叫んでいる……というか、怒鳴ってる。

「……ハナレテロ、ツテ、イッタヨネ?」

「?だから離れたぞ?」

「……ナンデ、ココニイルノ」

「え?だから離れたじゃないか、あそこから」

「……ダカラツテ、コッチニキテ、ドウスルノ!!!
?????」

ユートの素っ頓狂な答えに、普段だったら心の中で言うような事を、思わず口に出してしまうNT-X。

しかし、言われた当の本人は、何故そんな事を言われたのか解っていないさそうだ。

つか、キョトンとした顔をしている時点で確定である。

絶対解つてない。

見れば先程まで彼に対して何か言っていたエミリアとベルも、今は諦めたような顔でげんなりしている。

「……………ハア……………」

思わずNT-Xは、溜息を吐いた。

おそらく、今から離れるといっても、こんなに眼をキラキラさせて自分を見ているような状態では、聞いてはくれないだろう。

そう考え、ユートにこう警告する。

「……………ケガ、スルナヨ」

「おう！！まかせろ！！」

……………何に對してのまかせろだよ。まったく……………

思いながらも、正面に向き直る。

『打てます』

そう、声が響いた。

ユートの方も準備万端らしく、ロングボウをまるで盾のように構えている。

エミリア達も、大丈夫そうだ。

その事を確認したNT-Xは、気合を入れて、高らかに咆哮を上げた。

無い。

杭を元に戻す。

同時に“片眼ハールの英雄”の後部から、放熱の為か蒸気のような物が立ち上る。

煙が段々と晴れてくる。

横を見ると、ユートが“子供がすごい物を見たような時の笑顔”を浮かべていた。

正面には、『中央に大きな丸い穴が綺麗に開いた』シャッターが。離れた所には、ベルとエミリアが、引き攣った表情をしながら此方を呆然と見ていた。

……意外と、威力が……いや。貫通力があり過ぎたな。

大きく開いた穴を見ながら、NT-Xはぼんやりとそう思った。

穴の大きさは、直径大体200Rpほど。

これならば、普通に通り抜けられそうだ。

そうも考えたNT-Xは、“片眼ハールの英雄”を元の右腕に戻して、シャッターに近付く。

打ち抜かれた時にバリの様なものが出来るということもなかったようだ。

至って安全に通れそうである。

「エミリア、ベル、ユート。イクヨ」

そう言つて、彼はズンズンと奥へ進んでいった。

その後を一步遅れて、ユートが。

その後を慌ててベルとエミリアが追いかけていった。

実験開始から、実に20分後の事であった。

施設内に4人が入ってから暫らくすると、再びNT-Xの通信機が鳴った。

相手はクラウチ。

直ぐにNT-Xが出る。

『おお、周りの感じからすると、もう施設内には入ったみてえだな
！！！！思ってたより早くて安心したぜ』

「ツイサツキ、ハイツタ、バツカリ、デスケド、ネ」

苦笑しながら、NT-Xがそう答える。

そんな彼にクラウチは「それでもだよ」と言いながら笑いかける。
が、直ぐにその表情が真面目な物へと変わった。

それを見て、直ぐに4人も表情を引き締める。

ややあつて、クラウチが口を開いた。

『……思ったより状況は切迫していやがる。既に、その施設にあるやつ以外の実験装置の約2割が、大破。残っているやつの中でも、残る6割が何らかのダメージを食らって動作不全に陥ってる。無事なのは……そこにある4基だけだ』

「え、マジ!? ちょ、ちょっと待って!! 此処以外のところも、ちゃんと護衛が居た筈だよな!？」

クラウチの言葉に驚いたエミリアが、そう叫び声を上げる。

それを聞いたクラウチは、表情を歪めながら苦々しくこつ吐き捨てた。

『……例えどんなに護衛の質が良くっても、数の暴力で押されたら、流石に守りきれねえよ。それに、そこらのザコだけじゃなくて、中型から大型の原生生物まで凶暴化しだしてるらしい。それに……』

「……それに?」

突然、クラウチが言い難そうに口を閉ざした。

不審に思ったコートが先を促す。

すると、クラウチは、少しの溜息を混じらせながらその事実を口にした。

『……どういつ理由かは解らんが……どうやら、原生生

物の凶暴化の混乱に乗じて、何者かが装置を襲撃しているらしい』
と。

「はあ！？襲撃してるって……なんでそんな事してる奴がいのよ！！」

『俺にんな事言うな！！……っ！か、俺も詳しい事までは聞いてないからよく解らん。とりあえず、お前らが今から防衛に向かう装置の所にも、そいつが出てくる可能性が高い。一応、気をつけておけ』

エミリアが上げた叫びに対して、クラウチが叫び返す。

どうやら彼がこっちに連絡したのは、本当に忠告と現状報告の為だけらしい。

しかし……

……おい、なんだか段々雲行きが変になってきたぞ……

NT-Xは、彼の言うその“襲撃者”というのに、無性に嫌な予感を感じていた。

こういう時、自分のこう言った予感が悪い意味で当たってしまう事が分かっていたNT-Xは、今回ばかりはそれが外れてくれる事を、内心願うばかりであった。

『あ、それと』

「……？マダ、ナニカ？」

『ああ、いや。そこまでの事じゃないから安心しろ。つーかむしろお前らにとつては嬉しい情報だ』

「……………」

思わず顔を見合わせる4人。

さっきの気分を暗くするような情報から一転、今度は嬉しい情報とは……………」

……………もしかして、援軍でも来たか？

そう考えて、クラウチを見るNT-X。

そんな彼の様子を見たクラウチは、その口元に笑みを浮かべてこう言った。

『お、NT-Xは流石に気付いたか。ま、簡単に言やあ援軍……………とつと言つよりか、この場合はお前らの方が援軍って言った方が良いかもな』

「……………クラウチ。どういふことだか、ぜんぜんわからないぞ……………」

「悪いけどあたしも……………ベルは？」

「私もさっぱりです……………つーか、クラウチさん、何でマスターとそんなに親密そう（ブツブツブツ……………」

どうやら、NT-X以外の面々は、まだイマイチ良く分かっていないようだ。

それを見て、NT-Xが簡潔に結果だけを言う。

「ツマリ、ワタシたち、ヨリモマエ、ニ、ココノ、ボウエイニ、ア
タツテイタ、ヒトガ、イルツテ、イウコト」

『ま、そういう事だ。しかもお前ら、聞いて驚けよ。何せ防衛に当
たっていたのはあの有名な・・・』

そこまで彼が言った瞬間、NT-Xは途轍もない悪寒に襲われた。
具体的に言えば、これ以上彼に何か言わせちゃ不味い様な、そんな
感覚である。

とにかくなんとかしてもクラウドにそれ以上言わせてはならない！！
そう考えた彼は、すぐさまクラウドを止めようと口を開
いた。

「クラ『ガーディアンスのエリートさんらしいぜ？今もたった一人
で装置の防衛に当たっていて、未だに装置の損耗は0らしい』・・・

・・・」

が、どうやら遅かったようだ。
そして次の瞬間。

彼の後方にいるとある一名から、とんでもない不機嫌オーラがぶち
まけられる。

・・・・・・最悪だ。

ゆっくりと振り向く。そこには・・・

「……………で？」

……………そこには案の定、ものすつごく嫌そうな表情をした少女が一人、此方を睨みつけるようにして立っていた。

上手い事、NT-Xの立ち位置の所為で、その表情はクラウチから隠れていたらしい。

この状況を作り出した当の本人は、『おう、それだけだ。んじゃ、頑張ってくれよ。くれぐれも、怪我なんかするんじゃないぞ！』と
いって、通信を切ってしまった。

直後、なんとも言えない空間が、エミリアを中心に形成される。

「……………」

……………

「…………ト、トリアエズ…………ソウチノボウエ、イニ、ムカオウ
？」

「…………うん」…………お、おう。分かったぞ「…………そ、そう
ですね！早く終わらせちゃいましょう！」

そう言葉を交わして、再び走り出す4人。

しかし、装置に辿り着くまでの道中、彼らの間に会話という物は一

切無く、その事でロボットである筈のNT・Xの胃が、若干キリキリと痛むような感覚に陥ったのは・・・完全に余談である。

如何でしたでしょうか？
どうも雑炊です。

まずはちょっとした謝罪を。

……前回、11月中には終わらせるとか言っというて、結局1
2月突入してしまった申し訳ありませんでした。
とりあえず、中間テストも終わり、実験レポートも一番ヤバイ所を
越えたので、これからはもうちょっと投稿の感覚が早く……な
るといいなあ……（オイ

とりあえずパソコンが妹に奪われるという事が無いのを祈るばかり
です。

と、言うわけで今回も伏線張らせて頂きました。
具体的に言うと、本作オリジナルの敵が次回出てくる、その伏線で
す。

一応NT-X関係の敵になると思います。

で、今回はようやく彼女の登場。

……本当は今回出そうかと思っていたのですが、尺の問題で
次回まで登場はお預けにさせて頂きました。ボス戦も然りです。
ただ、今回はボス2連戦みたいな感じになると思うので、意外と長
くなるかも……ならないか。私だし。

とりあえず、オリジナル敵との戦闘シーンを只今書いたり書き直し
たりを繰り返しております。

なので次の投稿は・・・来週中になれば良いな（オイ

という訳で、また次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0374r/>

ファンタシースター【それゆけ機械人形】

2011年12月4日00時49分発行